

新書太閤記

第六分冊

吉川英治

青空文庫

官兵衛救出

秀吉ひでよし おもむの赴おもむいている中国陣。

光秀みつひでの活躍かつやくしている丹波方面たんばの戦線。

また、包囲長攻のまま年を越した伊丹いたみの陣。

信長の事業はいま、こう三方面に展開されている。中国も伊丹も依然、膠着こうちやく状態と化している。やや活潑かつぱくにうごいているのは、丹波方面だけだった。

そう三方面から日々ここへ蒐あつまつて来る文書、報告なども夥おびただしい。もちろん参謀さんぼう、祐筆ゆうひつなどの部屋を通つて一応は整理され、

緊要なものだけが信長の眼に供された。

その中から、佐久間信盛のぶもりの一通が見出された。非常に気に入らない顔色でそれを読み捨てた。

読み反古ほごの始末は蘭丸らんまるがする。

(……なにが、御意ぎよいに召さなかつたのか)

と、怪しんでいたので、その反古ほごをあとでそつと披ひらいてみた。

べつに信長の気色に触れるようなことも書いてはない。ただそれには、伊丹へ帰陣の途中、竹中半兵衛を訪うて、かねてのお申し附けを催促しておいたという報告だけしか読まれなかった。

もつとも、微細に、その辞句の裏を読めば、信盛がいおうとしているところは、べつに深く酌くめないこともない。

意外にも半兵衛儀は、まだ御おん申し附もうけの事を、実行して
りません。使者たるそれがし落度とも相成る事、厳きびしく督とく
促くいたしおきました。大事の御命、仕損じてはと、小心に
も自身手をくだすつもりと見えました。近日に御命を果しま
しょう。それがしにとつても重々、迷惑、伏して御寛仁を仰
ぎます。

こういつたようなものである。この辞句の裏には何よりも信盛
が自己の罪のみを汲きゆう々と怖れて弁解している気もちが出てい
る。いやそれ以外には何もないといつてもいい。

(それが御機嫌に逆さからつたものであろう)

蘭丸にもその程度にしか考えられなかった。——けれど信長が

この書面を憎んで、信盛という人間に対しての認識を一変していったことは、やがての後に事実となつてあらわれるまで、信長以外誰も信盛の肚^{はら}を理解することは難しかった。

ただ、その一端として、窺^{うかが}われ得ないこともなかったといえる一事は、信盛から右のような通告に接しても、信長はその時、半兵衛重治の違命と怠慢^あに向つては、べつに激怒する容子^{ようす}もないし、その後も不問のまま敢^あえて自分からは督促していないことだった。しかしまた、信長のそういう複雑な氣の変わり方を、竹中半兵衛とても、知ろうはずはなかった。

半兵衛はともかく、侍^{かしず}いて看護^{みとり}しているおゆうや家臣たちは、「何とかなされずばなるまいが……」

と、案じ合い、なお何日になつても、その問題を処決する容子ようすもない半兵衛の心を読みかねて、

「どう遊ばすおつもりか」

と、無言のうちに胸をいためていたことは一ひと通りでなかつた。そのうちに一月も過ぎた。

二月も半ばとなつた。

梅が咲く。——南禅寺の山門あたりにも、この草庵の軒ば近くにも。

日ましに陽ざしも暖かになつて来たが、半兵衛の病やまいは、やはり軽くなかつた。氣き丈しようではあり、むさくるしいのが嫌いなので、どんな朝でも、病室は清掃させ、そして浄きよらかな朝の間の陽ざし

を浴^あみに、縁近い南の端に默然と疲れるまで坐っているのが、朝々の習慣のようだった。

彼女はそこへ、茶を汲んでゆく。病中の一樂はその茶碗からたちのぼる湯氣^{ゆげ}の虹を朝陽のなかに眩^{まばゆ}く見ることだった。

「けさほどは、お顔色も大変良いようにお見うけいたしますが」「そうだろう」

茶碗を抱いていた細い手のひとつを、わが頬へやって撫でまわしながら、半兵衛は、

「わしにも春が来たらしいよ。たいへんいい。この二、三日は、わけて気分がいい」

と、笑ってみせた。

顔いろもよし、気分もこの二、三日は、わけて快いという。そういう今朝の兄をながめて、おゆうは無上に欣うれしかった。しかし、またふと、淋しくもあつた。

なぜならば、

（所詮しよせん、根治するとまでは、おうけあいいたしかねる）

と、これはいつか、そつと医者から戒告かいこくされていたことばである。

何かにつけて、それがすぐ胸をかすめるからであつた。

けれど彼女は、ひとりこうきめている。——不治の病と医者にいわれながらも癒なおったひとの例はいくらでもある。自分の真心と、不断の看護みとりをもつて、きつとこの兄を、もういちど健康にしてみ

せる。

いまは、そもじの御つとめ、それ唯ひとつと、丹精たんせいくれぐれたのみ入いり候そろ

とは、ついきのうも、播磨はりまの陣から彼女の許へ来た消息に見える秀吉のことばだった。

「お兄上さま。このぶんで御快方にむかえば、さくらの咲く頃には、きつとお床上げができましょう」

「ゆう……」

「はい」

「心労をかけたな。おまえにも」

「なんの……。またにわかに改まって、お兄上さまが、何を仰つ

しやるかと思えば」

「は、は、は」

病者の笑いには力がない。半兵衛は愛しげな眼を凝らして、

「兄きょうだい妹であるがために、却って日ごろは、ありがたいという

ことばすらいったためしはないが、何か、改まって、今朝は礼を云いたくなつた。……これも気分がよいせいであろう」

「それなら欣うれしゅうございますが」

「顧かえりみれば、もう十年の余になるな、菩提山ぼだいさんの城を去つて、故

郷栗原山の山中にかくれた時から」

「月日のはやさ。ふり顧かえつてみると、何もかも夢のようでございます
ます」

「すでにその頃から、山中人のわしの側にあつて、朝夕の炊^{かし}ぎ、身のまわりから藥の世話まで、みなそなたがしてくれていた。思えば長いあいだの苦勞を」

「いいえ、それもわずかの間でした。お兄上さまは、あの頃からよく、わしの病は癒^{なお}るまいと仰つしやつていましたが、それがたちまち御快方に向うと、秀吉さまの帷^{いばく}幕に参じて、姉川の戦^{いくさ}、長篠^{ながし}の戦い、さては越前へ、大坂へ、また伊勢路へと、御合戦のやむ間もない年々を、あんなお元氣にお過し遊ばしたではございませんか」

「そうだったなあ。……この軀^{からだ}でよくも耐えたと思うこともあつた」

「——ですから、こんども御養生ひとつ、きつと癒ります。もとのお体になるにきまつております」

「死にたくはない」

「そんなことがあるものではございません」

「——生きていたい。生きてこの激しい世のなかの落着くさまを見とどけたい。また、かりそめならぬ主従の縁にむすばれた秀吉様の将来をも……ああ、からださえ丈夫ならば微力のかぎりお扶^{たす}けて参りたい」

「どうぞ、そうして下さいませ」

「……だが」

と、半兵衛はふと声を落して、

「どうにもならないものが人間の天寿^{てんじゆ}だ。いかにせん、こればかりは」

無念そうに呟^{つぶや}いた。その眸を見て、おゆうは、はっと胸をつかれた。なにか、兄はひそかに独り期しているのではあるまいかと。南禅寺の鐘はのどかに午^{ひる}をつげている。戦国とはいえ、梅が咲けば、梅に杖をひく人影も見え、梅が散れば、梅に啼^なくうぐいの声もする。

快^よいほうとはいいいながら、夜に入ると、春もまだ二月、草庵^{そうあん}の燈^{とも}は、半兵衛の咳^せき入^いる声に、寒々と揺れた。

ためにおゆうは幾たびか、夜半にも起きて、兄の背をさすり明かした。——ほかに家来もいるが、半兵衛は、

「彼らは一朝自分が戦場にのぞんだとき、自分の馬前を駈ける人々。病骨の背かなどさすらせては勿^{もつ}体^{たい}ない」

と気がねして、どうしても、家来の手にはそういうことをさせないのである。

その夜も、彼女は起きて、なおも兄の背をさすったり、台所へ通つて、薬を煎^{せん}じたりしていたが、ふと、板戸の外で、

——ぱりッ

と、垣根の古竹を踏み折るような音につづいて、何かひそかに囁^{ささや}きあう声でしたので、ぎよつと耳を澄ましていた。

「……お、燈^{とも}火^{しび}がもれています。お待ちなさい。誰か起きておりましたよう」

外の人声は、やがて軒下に寄つて来た。そして軽く、雨戸をたたく。

「誰じゃ？」

「おゆう様ですか。熊太郎でございます。伊丹いたみへ参つた栗原熊太郎たろう、いま戻つて参りました」

「おお。歸つて来ましたか。——お兄上さま、熊太郎が歸つて参りました」

弾はずんだ声で、彼女はこう奥の兄へ告げ、それから水屋の戸を引きあけた。

ひとりと思いのほか、三名の人影が星明りを塞ふさいでいた。熊太郎は手を出して、おゆうから桶を借りうけ、ほかの二名を誘つて、

井戸のそばへ行つた。

「……誰方どなたであろう？」

彼女はそこに佇たっていた。熊太郎というのは、半兵衛が栗原山に閑居していた頃から召使の童子どうじとして年来側近く育てて来た家来である。その頃は小熊と称していたが、いまはもう三十がらみの見事なさむらいとなっている。

その熊太郎が、釣瓶つるべを汲みあげては桶へ水をそそぎ落すと、他の二名は、手足の泥や袂たもとの血など洗い落している容子ようすであつた。

兄の半兵衛に命じられて、深夜ながら取り急いで、おゆうは小書院に明りを燈ともしたり、火桶ひおけへ火を入れたり、客の褥しとねをそろえたりし始めた。

兄のことばによると、

「熊太郎の伴つれて来た客のひとりには、きつと黒田官兵衛どのだろう」

とのことに、彼女もすくなくならず驚いた。去年から伊丹城の中に囚とらわれて監禁かんきんされているとか、荒木の同類になつて立て籠こもつたとか、いろいろ沙汰されている問題の人だからである。

公おおやけのことについては、まして機密な軍事にかかわる問題などは、日頃から家人にも一切何も語らない半兵衛であるので、おゆうにしても、栗原熊太郎が、去年以来、いったい何処へ何しに行つて、長い間ここへ歸つて来ないでいたか——その目的などもまるで知らないのであつた。

「ゆう。わしの胸どうふく服を」

病間では、半兵衛が起き出て、衣服をかえていた。

案じられるが——おゆうは兄の性格として、どんなに病の篤あついときでも、ひとたび床を出て客に接するには、いつもそうある習慣を知っているので、

「はい」

と、胸服をそのうしろから羽は織おらせた。

病髪を撫で、口を嗽すすぎ終えて、半兵衛が小書院へ姿を運んで行くと、家来の熊太郎と他の客ふたりは、すでに席について、物静あるじかに主を待っていた。

「おうッ」

ひとりの客がすぐいえば、半兵衛も情感のこもった声で、

「やあ、御無事で」

と、答えながら、ひたと坐つて、互いに手を取り合はんばかりだつた。

「案じていたが」

「なんの、このとおりだ」

「――が、よくこそ」

「お身にも、心配をかけたそうな。その段、申しわけない」

「ともあれ、再会を得たのは、まことに天佑てんゆう、めでたい。半兵

衛にとつても、近頃のよろこび」

「いや、御主君や、尊公のお力によるものだ。忘れはおかぬ」

ふたりの歡び合っている様は、傍はたで見ている眼も熱くなつて来るほどだった。——もう改めていうまでもなく、今宵のひとり伊丹城から脱出して来た黒田官兵衛孝高よしたかだったのである。

ところで、最初から沈黙を守っているもう一名の年かきな武士は、ふたりの感激を妨さまたげまいとさし控えているふうだったが、やがて官兵衛孝高にひきあわされて、こう名乗り出た。

「初めてお目にかかる気はいたしませぬ。てまえも羽柴家の一士で、いつも陣中ではおすがたを遠く見ておりました。——が平常はお味方の中にいることも少ない隠密組おんみつぐみに籍をおいておりますので、或いはそちらではお覚えがないかも知れませぬ。蜂須賀彦はちすかひ右衛門こえもんの甥おいにあたる者で、渡辺わたなべ天蔵てんぞうと申します。以後はお見

知りおきのほどを」

半兵衛は、膝を打って、

「やあ、渡辺天蔵どのとは、あなただったか。かねがねよくおうわさは聞いていた。……そういわれれば、どこかで一、二度は、お見かけしたこともあるような」

その間へ、家来の熊太郎が、末席からこう話をつないだ。

「実はゆくりなくも、伊丹の城中で、同じ目的の下に入り込んでいた天蔵どのと、城内櫓^{やぐら}下^{した}の獄舎^{ひとや}の前で出会ったのでございました」

すると、天蔵も、

「いやまったく、偶然といおうか、神の御加護と云いましょうか、

図^はらずも、こちらの熊太郎どのと出会ったため、あの重囲の中
ら、辛^{から}くも官兵衛どのの身を救出することができました。もし、
拙者ひとりか、熊太郎どのお一人だったら、或いは途中で、斬り
死にしていたかも知れませんか」

相^{あい}顧^{かへり}みて、莞^{かん}爾^じとした。

ここにおいて、事情はあらかた明らかになっているが、なお云
い足すならば、黒田官兵衛の救出については、秀吉のほうでも、
今日までさまざまな苦心を重ねていたものであった。

或る時は、人を派して、荒木村重に彼の身の引き渡しを乞い、
或る時は、村重の信ずる僧侶を入れてそれとなく説かせてみたり、
手段をつくしたが、頑^{がん}として、官兵衛の身は返されない。

この上は——と最後の手段を命じられたのが、渡辺天蔵であった。天変、兵変、火変、何か城内に虚きよの起る機会を待つて、獄中の官兵衛を助け出せ——といいつけられたものである。

天蔵は城内に忍びこんで、その機会を待つていた。——と、つい二、三日前の夜、何か祝い事でもあつたらしく、荒木村重の一族と将士は大広間に、また士卒にも残らず酒が振舞われた。折ふしその晩は、月もなく風もない暗い夜なので、

(こよいこそ)

と決行を計つて、かねて目をつけておいた櫓やぐら下したの大牢おおろうの外へ這いよつてゆくと、そこに番人とも見えぬ男が、やはり自分のように忍びよつて、しきりに牢内を窺うかがっている。

怪しんで、初めは、もちろん油断せずに、測り合^はつていたが、
 どうやら城方の者でないらしいので、名をあかし合^はつてみると、

（自分は、竹中半兵衛の家来、栗原熊太郎）

と、先もいい、彼も、

（羽柴筑前守様のしのびの者）

と名乗ったばかりか、ここへ来た目的もまったく一つだと知れたので、互いに協力し始め、牢窓^{ろうまど}を破壊して、中なる官兵衛孝^よ高^{した}を助け出すと、闇にまぎれて、城壁をこえ、石垣^{すべ}を迂り降り、水門口の小舟をひろつて、濠^{ほり}を渡つて逃げて来たものであつた。

——つぶさにそうした経路や苦心を聞いて、半兵衛は、

「熊太郎に、無理に命じたものの、成るか成らぬか、十中八、九

までは、^{むずか}難しい望みと案じていたが——かく成就したことは、まったく神明の御加護とただありがたく思われる。……して、その以後の数日は、どうして過し、どうしてこれまで^{たど}辿りついたか」と、なおも熊太郎に向つてたずねた。

「さればです——」

と、熊太郎は功を誇るような顔もせず、^{かしこ}畏まつて、

「割りあいに、城外までは、難なく脱出しましたが、それからの方が難儀でした。諸所の木戸や柵に^{さく}荒木勢が野営しているのです。ために、幾度か取り囲まれて、時には敵の刀槍の中で、ちりぢりに分れかけたりしましたが、ようやく斬り破り斬り破り逃げおわせたものの、その間に、官兵衛様には、左の足の膝がしらへ、

一太刀うけておいでになり、跛行^{びっこ}をひいて駈けるため、遠走りはできません。やむなく、農家を叩いて、納屋に寝たり、夜は這い出て、道ばたの堂にやすんだりして、やっと京都まで参りました」と語り終るとすぐ、後から官兵衛自身が云い足した。

「なに、そうまでせずと、城を遠巻きにしておる織田軍の中へ逃げこめば、もつと楽に救われたろうが——城中で荒木村重からたびたび聞かされたことばによると——信長公にはこの官兵衛をいたく猜疑^{さいぎ}しておられるとか。——村重はそれを頻りにいつて、自分に加担^{かたん}しろ、信長とはそんな人なのだ——と度々口説^{くど}きおったが、自分として彼らの詭弁^{きべん}と一笑に附しても正直、かくまでの事情とも御存じなく、お疑いをかけられるとは、いささか心外でな

いこともない。……で、わざと寄手のお味方へ救いを乞うことを避けて、この京都までやって来た。何はともあれ、貴公の顔も見たいと思って」

彼はさびし気に微笑した。半兵衛も、黙然、うなずいた。

聞きたいこと、語りたいこと、互いに相尽すと、夜は白みかけていた。おゆうはもう朝の雑炊ぞうすいを台所たで炊いていた。

死し後ごの花見はなみ

語り明かした面はみな疲れておもていた。朝餉あさげをすますと人々は少し眠りをとった。そしてふたたび覚さめてからの話である。

「時に」

と、竹中半兵衛は、孝高^{よしたか}へこう計った。

「ちと遽^{にわ}かだが、それがしは今日ここを立つて、美濃^{みの}の国^{くに}許^{もと}へ
まかり越え、その足ですぐ安土^{あづち}へ伺い、信長公の御処分をうけよ
うと思う。——貴公のことは、自分からよろしく披露申しておけ
ば、これより直ちに播州へ下られては如何^{いかが}か？」

「もとより拙者も、一日たりと安閑としている気はないが……。しかし」

と、官兵衛孝高は怪しむように、半兵衛の面^{おもて}を見まもった。

「まだ病中のお体で、急に旅へ立たれなどして、どうあろうな。
お国許へとあれば、行く先に心配はないが」

「いや、きよう限り、病褥とこをあげて起きるつもりです。病やまいに負けていては限りきもなし、気分もここ数日来ずつと快よい」

「――が、病の仕上げは、そこが大事と、よくいうこと。いかなる急用がありか知らぬが、もう少し忪こらえてここに療養しておられてはどうか」

「心のうちでは、この春と共に、もつと早く病間を出たいと念じていたのですが、実は、貴公の安否が分るまでと、心待ちに、旁《かたがた》、身の養生をもきようまで長引かせていたところ
です。かく御無事を見とどけたうえは、それに懸る気残りもなし、同時に、安土城へ伺つて、御処分を待たねばならぬ科とがもござれば、きようこそ病褥とこあげの吉日、ここでお別れ申すことにする」

「安土の御処分をうけねばならぬ科とがとは？ ……それは一体何事かな」

「まだ、おはなし申してないが、実は……」

と、半兵衛は初めて、去年から信長の命を拒み、今日まで敢あて「違背の罪を冒して来た事情」を彼にはなした。

官兵衛孝高は愕おどろいた。何もかも初耳であつた。自分の行動がそれほどまで信長に疑われていたことも。また、その嫌疑けんぎのために、わが子の松寿丸しょうじゅまるへ打首の嚴命が出ていたことなども——まったく夢想もしていないいらしかった。

「……そうだったか」

と、唸うめきのなかに、孝高はふと信長に対して、冷ひややかな感情の

空虚^{うつろ}を覺えた。單身、伊丹城へ入つて、九死の中から一生をひろつて歸つて来たようなこの苦心も——それは歸するところ誰のためか。そう思うことをどうしようもない。

また、その反動には秀吉の深情や、半兵衛の友情に、^{まぶたなか}瞼の中を焦^やかれるような涙をもたずにいられなかつた。

「——では、安土へ行くと仰^{えつ}せあるは、信長公に謁^{えつ}して、その罪を自首する思し召^ごですか」

「さよう。かねてから期^ごしていたこと。——併せて、貴公のご潔白も申しあげるつもりです」

「かたじけないが、何で、この官兵衛の子のために、貴公を罪の座へすえられよう。その儀なれば、黒田官兵衛自身、安土へ参上

して、一切を申しひらく。あなたは、ここにおいで下さい」

「いや、君命を拒こばんで今日に至った罪はそれがしにある。御身の知ったことではない。……ただ貴公に委いしよく嘱しておきたいことは、播磨はりまの御陣にある秀吉様の傍そばにあつて、この上とも、良い輔佐ほさとなつていただきたいことしかない。——罪を得るも、まぬがるも、いずれにせよ、この病身、世に長い半兵衛とも思われねば、どうかくれぐれもお身に頼んでおく。一刻も早く、播磨へ下つていただきたい」

頼むように、半兵衛は友へ向つて、両手をつかえた。

病人とはいふが、その病人の決心である。まして熟慮に欠けることのない半兵衛重治しげはるでもあつた。云い出しては、断じてひか

ない。

ついに、官兵衛孝高^{よしたか}も、

「それほどまでに仰せあるなら——」

と、彼の意に従わざるを得なかった。

その日。

友は東西に袂^{たもと}を別つた。

官兵衛孝高は、すなわち渡辺天蔵をつれて、播磨の陣へ。

また、竹中半兵衛は病軀をおして、国許^{もと}の美濃不破郡^{みのふわごおり}へ。——

供には栗原熊太郎一名をつれたきりで、余の者も、妹のおゆうも草庵にのこして立つてしまった。

その兄の立つのを、おゆうは南禅寺の門前で泣きながら見送つ

た。もうふたたび帰つて来ない兄と思うて泣くのであつた。共に
見送つていた僧侶たちが、

「果敢^{はか}なきおなげき」

と、しまいには倒れかかる彼女を抱きかかえるようにして山門
のうちへかくれた。

半兵衛とても、おそらくは同じ思いを——いやより以上悲痛な
ものを抱いていたにちがいない。

急に調えた黒鹿毛^{くろかげ}の鞍も古びて佗^{わび}しげな背にゆられながら、蹴^け
^{あげ}上までかかると、思い出したように、彼は手綱^{たづな}をとめて、

「熊太郎」

と、馬の口輪をのぞき下ろした。

「——云いわすれたことがある。一筆ここで認めるゆえ、ちよつと走り戻つて、ゆうに手渡してくれい」

と、いった。

懷紙を出して、馬上のまま彼は何か走り書した。それを文結ふみむすびにして、

「わしは、ぼつぼつ先へ行つてゐるぞ。あとから来い」

と、熊太郎に促うながした。

熊太郎は、それを預かると、畏かしこまつてすぐあとへ駈けて行つた。

半兵衛はもういちど南禅寺の境内を見下ろしていたが、

「——ああ、誤らした。自分の踏んで来た道には、毛頭もうとう悔いはないが、妹には、女の道を」

と、愁しゆうぜん然、口のうちでつぶやきながら、駒の歩むにまかせて行つた。

さむらいの道は一筋だ。かつて栗原山を下りて以来、目ざして来たこの道にくるいはない、悔恨はない。たとえ今日、人生を終るまでも。

けれど彼として——いや兄として、たえず心ぐるしく思われて来たことは、妹のゆうが秀吉の側室にいることだった。それは自然といえは極めて自然なうちにそうなって来た運命ともいえるが、彼の潔白がゆるさないのである。また、兄としての責任感にもたえず責められてならないのだった。女の道をえらぶ大事な頃を自分の側においておきながら——と。

しかしそれもはや十年のむかしに遡^{さかのぼ}る悔いである。罪は自分にあつて妹にはない。けれど自分のないのちはと、ひそかに妹のあとの半生をなお案じるのだつた。

所詮^{しよせん}は終生の榮華^{えいが}でもなし、女の不幸にきまつている。こと

に心ぐるしいのは死を賭^としている士道の純白にも何か一点の汚染^{しみ}がのこるような気がするのだつた。幾たびかこのことについては、主君におわびをして暇をもらおうか、妹に苦衷^{くちゆう}を打ち明けてどこかへ姿でもかくしてもらおうか、愚痴に迷つたこともあるかもしれないが、つい適当な機会もなく過して来たものだつた。

「……が、今は」

と、彼もきょうの出立を、帰らない旅としてるので、それが

妹にいえる気がした。あのいじらしい姿を見ては、やはり云いかねていたが、一筆歌に寄せていうことなら。

おそらく妹は歌の意をこころをすぐ酌くんでくれるだろう。そして自分のないのちは、兄のあとを弔とむらうことを口実にして、蔓草つるぐさの垣にも似ている閨門けいもんの花々の群れから脱のがれてくれるだろう。

「いまは何の心のこりもない」

この日の偽りない半兵衛の心境はそうであつた。遅々ちち、春の日は、まだ山科やましなあたり、陽は春うすずきもしていなかった。

所領地の不破へ帰り着くと、半兵衛重治は、その一日を祖先の展墓てんぼにすごし、また一刻ときを、菩提山ぼだいさんに佇たたずんで、

「あの山も、この河も」

と、なつかしげに故郷の天地と語っていた。

久しぶりの帰郷ではあったが、長居は気もちが許さない。――

今朝は起き出るとすぐ髪を結び、また病やまいのため滅多にしない湯浴ゆあみをもして、

「伊東半右衛門をよべ」

と、命じた。

菩提山の裾野にも、城中の樹々の間にも、鶯うぐいすの音がしげく聞える。また、どこかで小鼓こつづみも聞える。

「半右衛門にござりまするが」

白いふすまを背に、やがて豪骨ごうこつな老武士が手をつかえていた。

質子ちしの 目附兼傳役めつけんもりやくとして松寿丸に附けてある者だった。

「半右衛門か、寄れ」

眼でさし招いて、

「かねてそちだけには、詳しく告げてあるが、いよいよ質子ちしの於お松まつ（松寿丸のこと）どのを、安土へ伴つれねばならぬ日が参った。

今日にも打ち立つ所存しよぞん。急ではあるが、その方より附添つきその衆にも申し告げ、すぐお支度あるように伝えよ」

主人の苦衷くちゆうも事情も、よく弁わえている半右衛門ではあったが、

さすがに顔色をかえて、

「えッ。……では、どうしても於松様のお生命いのちは」

と、鬢びんにふるえを見せた。

半兵衛は、笑つて見せた。安心を与えるように、至極平静に、

「否。お首にはせぬ」

そしてなお云いたした。

「半兵衛の身にかえても、信長公のお怒りは解いてみせる。於松どのの父官兵衛には、はや伊丹を脱出して、播磨の御陣へ参加しておる。無言の潔白は示されたというものじゃ。——ただ残るものは君命を違背いはいしたわしの罪があるのみ」

半右衛門は黙然とそこを退さがつて彼方かなたの子ども部屋の方へ足を運んで行つた。近づくところでは鼓つづみの音だのきき々として騒ぐ少年の聲が賑やかにしていた。

松寿丸を中心に、舞の上手な幸徳こうとくという小坊主やら、家中の

少年たちが、鼓を打って戯れているのだった。

竹中家では、数年来預かつて来た松寿丸の身を、人質とも思われないほど優遇して来た。日常の教育、健康その他、わが子以上の愛育へ、より大きな責任感をも抱いて守り育てて来たものであった。

黒田家の方からは、井口兵助、大野九郎左衛門の二名が、附添って来たが、なお竹中家からも家臣伊東半右衛門をかしずけ、協力的にこの一子を珠のたま如く磨みがいていた。

そうした竹中半兵衛の好意の下に、きょうまでは、深い仔細も知らずに来た傳もりやく役たちも、いま半右衛門の口から、

「すぐお旅立ちの御用意を」

と、促されると、愕然、顔いろを失った。——秘されてはい
たものの薄々の事情は察していたからである。

「では、安土へ？」

と、傳役の井口兵助と大野九郎左衛門が、絶望的な顔を見あわ
せて嘆息するのを、半右衛門は、

「御心配には及ばぬ。たとえ安土へおつれ申そうと、主人重治様
の義心を固くお信じあつて、何事もおまかせあるがよろしゅうご
ざる」

と、しきりに慰めていた。

何も知らぬ松寿丸は、小坊主の幸徳や大勢の少年たちと、鼓を
打ったり舞ったり、きき々として遊びくるつていた。

松寿丸は、ことし十三歳。松千代とも、於松どのとも呼ばれている。

のちの黒田長政は、この少年だった。——他家の質子^{ちし}とはなつても、父孝高^{よしたか}の剛毅^{ごうき}と、戦国の骨太^{ほねぶと}な育成に生い立って、すこしもいじけた子となつてはいなかった。

「兵助、何だ。半右衛門が、何をいつたのか」

鼓をおいて、於松は、井口兵助のそばへ駈けて来た。もうひとりの傳役^{もりやく}、大野九郎左衛門と彼とが、顔見合わせたまま、何か、嘆息しているのを見て、子ども心にも、

（何か起ったか？）

と、心配を抱いてのことらしかった。

「いや、さして、ご心配なことではありません」

と、二家臣は、問わず語りにまず宥^{なだ}めて、

「すぐ旅立ちのお支度を遊ばして半兵衛重治様とともに、安土へおいでになるのです」

「たれが」

「和子^{わこ}様^{さま}が」

「わしも行くのだって。……あの安土へ」

「はい」

ぽろぽろと泣いて顔をそむける傳^{もり}役^{やく}の二人を、於^{おま}松^{まつ}は見ても

いなかった。聞くと共に、おどり上がらぬばかり手を打って、

「うれしい。ほんとか」

座敷の方へ駈けもどっていた。

そしてお相手の少年や、小坊主の幸徳などへ向つて、

「安土へゆくのだ。ここの殿とご一しよに、旅へ立つのじゃそう
な。——もう踊りは止めた、鼓もやめた。仕舞え仕舞え」

それから大声してまた、

「兵助、九郎左。衣裳はこれでよいのか」

と、身支度うながを促した。

そこへ伊東半右衛門が来て、

「湯浴みゆあをして、髪もきれいに束ねたばてさしあげるように——と、
殿からのお気づけでございます」

と、注意した。

二臣は、於松の君を、湯殿へ誘いざなつた。そして風呂に入れ、髪もきれいに結び直して、門出の晴着にと、竹中家から贈られた衣裳を着せてみると、肌着も小袖もすべて純白な死に装束しょうぞくであつた。

「——さてはやはり、半右衛門どのはなしは、われらを狂気させまいと、一時のなぐさめで、まことは信長公の面前で、お首になさるおつもりであろう」

ふたりは、そう解して、悲涙にくれたが、於松はすこしも頓とんち着やくなく、白装束を着て、その上に、それだけは華やかな赤地あかしに錦しきの陣羽織に、唐織からおりの袴はかまをはいた。

白い小袖の上に重ねた赤地錦が、いとど美しく見えた。また、

その紅顔の粧よそおいが、さらに二臣の涙をそそった。身ぎれいにする
と、二臣に連れられて、於松は、竹中半兵衛の部屋へ行つた。半
兵衛はすでに立つばかりに支度して、彼を待っていた。

立ち振舞——と称して、極く内輪うちわだけで、小酒もりが交わされ
た。

「御飯をたくさんに食べて行かれよ。馬でも、旅は腹のすくもの
と、半兵衛にいわれて、

「はい。ではもう一膳」

と、於松は元気に食事をすまし、飽くまで機嫌よく、家臣の泣
き顔などは、まったく眼もくれずに、

「さ。参りましょう」

と、二度も半兵衛を促した。

「行つて来るぞ」

半兵衛は、ようやく立つた。——立つて座中の一族や旧臣を沁^{しみ}みじみ々とおろしながら、

「あとは、頼むぞ」

と、いった。

後に思いあわせれば、あとは——といったこの短いことばの中に、彼の万感と、死後の委嘱^{いしよく}は、すべてこめられていたのであった。

姉川の戦いにも、またその以後も、殊^{しゆくん}勲のあるたびに竹中半

兵衛は信長から幾度となく、恩賞も授かっているし、目通りも得ている。

（秀吉から聞けば、そちは秀吉の臣たるのみでなく師とも仰がれておるそうだが、信長もおろそかには思わぬぞ）

とは、かつて、姉川の役に、半兵衛の殊勲が聞えたとき、直接、信長から彼にもたらししたことばだった。

——で、岐阜以来、登城も目通りも、直臣の格に扱われていた。いま安土の城へのぼって来た半兵衛しげはる重治は、側に、官兵衛孝高の嫡子ちやくしおまつ於松をひきよせ、病後——いや病中とて、疲労は面おもてにあられていたが、いつにない盛装をして、一步一步、鷹揚おうように御座ぎざ之間のある楼上へ通って行つた。

前夜、届けがあつたので、信長は待っていた。

半兵衛を見るとすぐ、

「めずらしや」

と、いい、機嫌うるわしく、

「よく見えた。もそつと、間近う寄れ。ゆるす、褥しとねをとれ。たれ

か半兵衛に敷物を与えい」

などと破格はかくな宥いたわり方で、なお遠く平伏したまま恐懼きようくしてい

る半兵衛の背へ、

「病やまいは、もう快よいのか。播磨はりまの長陣では、心身ともに疲れたこと

であろう。信長から診みせに遣つかわした医者のことばには、当分、戦

場は無理、少なくともお、一、二年は静養を要すると申していた

が……」

かくばかり臣下に対してやさしい言葉をかけた例は、ここ二、三年来、珍しいことであつた。半兵衛重治は、何か、欣うれしいとも悲しいともつかない戸惑とまどいを心におぼえた。

「勿体ないお宥いたわりです。戦いに参つては病軀、陣後に歸つては、碌ろくろく々御恩に浴すのみで、何ひとつ、御奉公らしいこともならぬこの病骨へ」

「いやいや、大事にしてもらわねば困る。第一には、筑前の力落しが思いやらるる」

「そう仰せ下されては、半兵衛、身の置きどころもございませぬ。本来、ここへ罷まかり出るさえ恐れある面おもてを冒おかして、今日、お目通り

をねがい出ましたのは、すでに去年——佐久間信盛どのをもつて、わたくしまでお沙汰を下しおられました、松寿丸どの打首の儀を、わたくし一存にて、今日まで」

云いかけると、

「待て待て」

信長は、遮さへぎつて、半兵衛のことばなど、耳にもおかず、その傍らに、半兵衛とならんで手をつかえている少年へ、

「それか。於松とは」

「……御意にございまする」

「ううむ、なるほどのう。官兵衛孝高に似て、童形どうぎようながら、どこか違ったところが見える。たのもしい少年。——半兵衛、こ

の上とも、愛^{いと}しんで与えるがよい」

「では。……於松どのの首は」

半兵衛は、胸をあげて、信長を凝視した。もし今なお、この少年を打首にせよと、信長が云い張った場合は、死を賭^として、その愚^{いさ}を諫め、その非を説破^{せつぱ}するの覚悟でこれへ来た彼であつたのである。

——が、信長には初めから微塵^{みじん}そんな気色^{けしき}がないばかりか、いま半兵衛から直視をうけると、突然、哄笑^{こうせう}して、自分から自分の愚^{おろそ}をかくしもせずこういった。

「そのことは、もう忘れてくれ。実は信長自身、あとではすぐ後悔^{くわい}しておつたのだ。なんと、わしは邪推^{おとこ}ぶかい漢^{おとこ}よ。筑前に対し

ても、官兵衛孝高に対しても間のわるいことではある。——しかしさすがは叡智えいちな半兵衛重治、よくぞ予の命を拒こばんで、於松を斬らずにおった。よくこそと、実はそちの処置を聞いて、胸なでよろしておったのである。——何をか、汝に罪ありと問おうや。罪は信長にある。ゆるせ、信長の至らなかつたことを」

頭こそ下げないが——手こそつかえないが——信長は正直にいて、はやくその問題から話を逸そらしたいような顔をした。

——けれど半兵衛重治は、信長のゆるしに、易々いとして、甘んじるふうはなかつた。

（忘れおけ。水に流そう）

信長はいったが、半兵衛は、むしろ歡よろこばない容子ようすを示して、

「一たん仰せ出された儀を、このまま有耶無耶に過しては、あとあとの御威令ごいれいにもかかわりましょう。父孝高の潔白と功に鑑みかんが、松寿丸の打首は免じるが、然るべきよう子としても証あかしを立てよ。また、この半兵衛が御命を違背いはいした罪も、同様、みずから寸功をたてて償つぐなうべし——と、かように御意下されば、これに越す君恩はございませぬ」

と、心底のものを吐露とろするように、ふたたび平伏して信長の公明な仁恕じんじょを仰いだ。

もとより信長の気もちも、そうありたかったことである。半兵衛はあらためて、信長からその寛大を得ると、

「ようお礼を申しあげなさい」

と、傍らの於松へささやいて、臣礼を訓え、そしてまた信長に向つては、

「両名とも、或いは、これが今^{こんじょう}生のおわかれとなるやもしれませぬ。弥栄^{いやさか}の御武運を祈りおります。今日は先もいそぎますれば、これでお暇を」

と、いった。信長は、解^げし難^{がた}い顔をして、

「今^{こんじょう}生のわかれとは異なことをいう。それでは重ねて予の意^{そむ}に反くというものではないか」

と仔細を追求した。

「決して——」

半兵衛は、顔を振って、傍らの於松の扮装^{いでたち}へ眼をそそぎなが

ら、

「ごらん下さい、この和子の身支度を。すぐここより父孝高のいはりま
る播磨の陣へ参つて、父に劣らぬ勲いさおを立てて、華々はなばなと生死の関か
頭んとうに、将来の命数をまかせる覚悟にござりまする」

「なに、では戦場へ行く気か」

「孝高よしたかも名ある武士、於松おまつもその人の子。ただ御寛仁ごかんじんにあま

えているも本意ではございますまい。——こう察して、半兵衛の
取り計らつたことでございます。ねがわくば、この少年の初陣ういじん
のために、ひと言、勇ましく働けと、お励ましを賜わるなれば、
どんなにありがたいことかわかりません」

「ううむ。……してそちは」

「病軀、何ほどの力も、お味方の足しとなるまいかに存ぜられませんが、ちようどよい折、於松を伴^つれて、ともども、歸陣の考えにございまする」

「よいのか。体のほうは」

「武門に生れて、しかもこのような秋^{とき}、暈^よのうえで死ぬるのは、何とも口惜しゅうございます。薬餌^{やくじ}に親しんでいても死ぬときには死なねばなりません」

「そうとは氣づかなんだ。それまでの覚悟とあれば……。そうだ、於松にも、初陣を祝つてやろう」

信長は、少年の眼をさしまねいて、手ずから備前兼定の脇^{わきざ}差^しを与えた。また家臣に命じて、勝栗^{かちぐり}土器^{かわらけ}をとりよせ、酌^く

み交^かわして、

「めでたい。曠^{はればれ}々とゆけ」

と、餞^{はなむ}別けした。

少年十三、決して、早くはない初陣である。於松は、きょうここへ登城する前夜、半兵衛からよく嗜^{たしな}みをうけていたので、敢えて驚きもしなければ、また特にはしやぎもしなかった。

しずかに、礼儀をして、半兵衛とともに君前を退つて行つた。

信長は楼上^{うん}の欄へ出て、その小さいすがたと半兵衛の影が城門を出てゆくまで見送つていた。

あくる朝、播磨へ向うべく、安土を早く立つた。京都を通つた。

南禅寺の屋根は蹴^{けあげ}上からその森を見下ろしただけで、遂に立ち寄

らなかつた。

半兵衛の心には、もう妹のことも国許くにもとのこともなかつた。あ
るはただ戦陣のことだけだつた。楽しみは、何事も、

（――死後の花見）

と期する百年の後にしかなかつた。

有馬ありまの湯ゆ

有馬ありまの温泉町ゆまちは暮れかけている。池之坊橘右衛門きつえもんの湯宿やどへ、い
ま、ふたりの武士がそつと入つた。

ひとりはただの旅すがた、ひとりはひどい跛行びつこである。衣服も

粗末、垢^{あか}じみているどころか、側に寄ると臭^{くさ}いほどだった。

「すぐ寢床をひとつ展^のべてくれい」

部屋にすわると、宿の者へ、ひとりがすぐいいつけた。——跛行の男は、すぐ身を横たえた。

「いたみますかな」

「……どうやら、熱を持って来たらしく、膝ぶしの傷口が、火でもあてているように感じられる。はて、残念な」

跛^{びつこ}行の男は、数日前、南禅寺の一庵で、竹中半兵衛とわかれて

来た官兵衛^{かんべえ}孝高^{よしたか}なのである。——あれまでは、檻^{ぼろ}樓を巻いてい

るだけで、苦痛も傷口の大きさなども、さして意に介してもいなかったが、播磨^{はりま}へと志して、数里、歩き出してみると、まったく

歩くにも耐え難いほどの激痛に襲われ出した。

伊丹城いたみじょうから脱出した晩、暗夜のなかで、何者とも知れぬ敵に

一太刀薙なぎられた左の脚の関節部だった。……そつと、檻ぼろをめぐつてみると、血膿ちうみをふくんだ傷口は大きく口をあいていた。柘榴くろたねの胚子のように白い骨が見えるほど深さもふかい。

「このまま、陣中へ行かれても、どうにも、お手当の仕方はありますまい。むしろ、日は遅れようとも、有馬の湯につかつて、しばし、御養生の上行かれては」

同行の渡辺天蔵が、しきりにすすめたのである。——考えてみると、身動きもままならぬ体を運んで途中、哨しょうかい戒かいのきびしい兵庫街道あたりで、再び荒木勢に捕まるなどは愚ぐな沙汰である。

こういう愚は決して勇氣ともいえまい。

「そうしよう」

官兵衛は、伴れのすすめをすぐ容れて、道をかえた。——それにしても、この有馬の温泉町へはいるには、細心な警戒を要した。何分にも、いたる処、荒木方の哨兵がいたり、木戸があつたりするからだ。

着いた翌る日である。

池之坊の門口へ、ひとりの町人が佇んで、宿の女をつかまえ、何か、世間ばなしをしている。

外から戻つて来た渡辺天蔵の耳に、ちらと、いやな言葉が入つた。女へ、町人が訊いているのである。

「……いや、たしかに、いるだろう。町の衆から聞いているよ。」

きのう黄^{たそがれ}昏^{びつこ}、跛行をひいた汚い客が泊ったと」

すれちがいに、天蔵の姿を、女は見ぬふりをして見送っていた。
着くとすぐ宿の主^{あるじ}へ、天蔵から口止めしてあるので、女は、答えに困ったものらしい。

天蔵は、部屋にはいると、蒲団の中の顔をのぞいて、

「どうです、昨夜、今朝と、まだ二度ほどの入浴では、効^きき目も
ありますまいが、すこしは楽になりましたか」

「む、む」

と、枕の上から振り向いて、

「だいぶ楽だ。温泉^ゆは効^きくものだな」

「せつかく、お楽になつたところを、酷^{むご}い氣がいたしますが、今夜はここを立たねばならぬかと存じますが」

「なに。……ああそうか。嗅^かぎつけて来たのだな」

「どうも、そんな氣^けぶりが」

「ぜひがない、いつでも立つ。決して、足手まといに考えてくれるな。いざとなれば、片脚ぐらいはなくても駈けるよ。ははははは」

障子の外に、人の氣はいがした。天蔵はすぐ向き直った。官兵衛は手をのばして、刀を蒲団の下へ抱き入れた。

「ごめん下さいまし……。さだめしご退屈でございましょう」

宿の召使である。茶盆と共に膝を入れ、すぐ茶を汲みながら、

世事ばなしを始めた。――が、ふたりとも、何か油断のならないものを、なお障子の蔭に感じていた。

「誰だ？ ……。まだ外に、誰かつぐなんでおるようではないか」
官兵衛は、ふいに、そう咎^{とが}めて宿の手代^{てだい}の顔いろを見た。

「はい、実は」

と、手代は、云い難^{にく}そうに、

「どうしても旦那さま方へ、会わせてくれというて、肯^きかないものでございますから」

そういつてから、障子の外の中縁へ首をさし出し、

「新七さん、おはいりよ。何をここへ来てから、もじもじしていなさるのじゃ」

と、いった。

さつき渡辺天蔵が門口で見かけた町人である。図々ずうずうしく来たなど天蔵は眼をかがやかした。しかし、案外な気がふとしなくなかった。というのは、

「はい。……ぶしつけに。……せつかくお休みのところへお邪魔しまして」

と、おずおず入って来たのをあらためて凝視すると、あながち荒木の部下が変装して来たというようなするどさは見えない。その道にかけては、多年、天蔵自身こそ本職であるから、いま一見すると、

（これは自分の勘ちがいであつた）

と感じ、すぐ疑心を訂正していた。

で、それを官兵衛にも気づかせるように至極気らくに、

「さあ、入るがいい。その方もこの宿で入湯中のものか」

「いえ、伊丹の御城下におりまする銀屋しろがねや新七という者でござ

います」

「なに、伊丹の者？」

「はい。かんざしこかなぐ釵や小金具などの、金銀の細工物さいくものをしておりますので」

「ふム……。して何ぞ、この方たちへ、細工物でも誂あつらえてくれと

でも申すのか」

「それもございますが」

と、軽く笑って、宿の召使へ、そつと包みらしいものを与えて

いた。そして耳のそばへ口をよせながら、

「お頼みだよ。いいかね」

とささやいた。

手代はうなずいて、すぐ立ち去った。いよいよ解げせない町人と、官兵衛はにらまえていたが、銀屋新七というその男には、少しも暗さが見えなかった。

「さあ、これでいい。どうぞお両ふたかた方も御安心くださいまし。もう人目はございせんから」

「いったい、そちは何者だ」

「さきほども申しあげました——伊丹の新七と申しまする」

「うそであろう」

「どうしてですか」

「そちのような町人に、何の縁故もない」

「いえ、大ありです。……場所が場所、人目もあるので、さきほどから不作法のみいたしておりますが、そちらにおいて遊ばすのは、播磨はりまの小寺政職おでらまさもと様の御家臣、官兵衛孝高よしたか様でございましたよう」

「なにッ」

天蔵が、刀をよせて、眼からくわつと殺意を放つと、新七は、初めて跳びあがるばかり驚いて、官兵衛の夜具のすその方へ逃げまわりながら、

「お、おゆるし下さい。い、いけなかったら、もう、な、なにも

申しません」

と平伏したまま、ふるえ抜いていた。

「いや、斬りはしない」

と天蔵は、無意識に出た自分の身構えを、自分で笑い消しながら、

「どうしてそれを知っているのか」

と、穏やかに訊ねた。

新七はしばらく口の渇き^{かわ}に口もきけない顔つきだったが、やがて横を向くと、懐^{ふところ}中をひらいて、肌の奥から一通の書面をやつと取り出した。

封をひらいて、読み下していた官兵衛の面^{おもて}には、驚きと、涙と

が、交錯こうさくしていた。

黒田家の臣、母里もり太兵衛たへえ、栗山善助、井上九郎の三名が連署れんしよの書面だったのである。

書面の内には――

殿、伊丹の城中に、御幽囚ごゆうしゆうをうけて以来、われわれ三名、い

かにしても、お救い申しあげんものと、早くから城下の一商人銀しろがねや

屋の奥にかくまわれ、機を伺うこと半歳、ついに目的を達し

て、城中のさる者に賄賂まいないを送り、村重むらしげ誕生祝いの夜、城内よ

り放火させ、お身近まで忍び入りましたところ、こはいかに、すでに獄舎は破れ、あたりは火ばかりで、おすがたは見あたりませ

ん。

さては、村重が手早く、お体を他所^{よそ}へ移し去ったものかと、一時は悲嘆絶望のあまり、三名刺し交^{ちが}えて死なんかとまでいたしましたが、その後、城内でもお行方をしきりに嚴探中と聞え、さては、無事に他へお逃^{のが}れあつたか、さすればわれわれの苦心もむなしからず——と、実は御武運の幸^{さち}を祝していたところでした。

折も折、昨夕、お姿を変えて、有馬の湯へひそかに御潜伏と、新七よりの情報に、狂喜雀躍^{きょうきじゃくやく}、すぐにもお宿へうかがい、お目通りをともしましたが、なおそこらは敵地に遠からぬ所、人目^{はばかり}の憚りもあり、かたがた、ふいにお愕^{おどろ}かせ奉るもいかかと弁^{わきま}え、わざと一応、かく書面仕^{つかまつ}りました。

つぶさなことはなお新七より直々じきじきお聴取りを仰ぎます。

というような文意であつた。

「新七とやら。……この書面によれば、母里もり、栗山、井上の三人は、わしが伊丹の城中に囚とらわれとなつたときから、そちの奥にかくれて、苦心をかさねていたようだが……今なお三名はそちの家に潜ひそんでおるのか」

「はい。たしかに、お城外しろそとへ無事にお逃げになつたことは知れましたが、なお、はつきり御生死をつきとめぬうちとはと」

「して、そちと、三人とは、どういう縁故から……？」

「母里太兵衛様には、てまえの妹が、御奉公中から嫁にゆくまで、

並ならぬお世話になっておりましたので」

「……ああ、知らなかった。家来三人が、よそながらわしの身を救い出しに来ていたとは」

「ここへお泊りと聞いて、お三人様とも、飛び立つように、すぐお目にかかりに行くかと仰っしゃいましたが、どうして、この有馬も油断はなりません。強^たつて、てまえがお止め申して、実は瀬ぶみに参ったわけでございまする」

「そうか。……いや、よく注意してくれた。ここもなかなか人目は多い。わしが宿を立つまでは、近づいてくれるなど伝えてくれい。脚の傷口も癒^いえきるまでには日数もかかるが、まず一時の痛みさえ歇^やんだら播磨へ立つつもりじゃ。ここ五、六日も湯に浸^{つか}

つて」

「では、帰りまして、そのようにお伝えいたしておきましょう。
しかし、よそながら御身边は、きつと、お守りしておりますゆえ、
まずまず、ここにおいでの間は、大事なものと、御安心あそば
して、ゆるりと御療治ごりようじなされますように」

新七はそう告げると、長居を避けてすぐ帰った。

すると次の日、池之坊の斜すじむか向いにある温泉宿ゆやどへ、三人づれの
旅商人が泊った。表二階の障子をたてた部屋の内から、一人はか
ならず外を見張っていた。

七、八日目頃である。黒田官兵衛は、渡辺天蔵を連れて、池之
坊の門口を出た。足の痛みもよほど快よくなつたとみえ、歩行にも

さほど跛行^{びつこ}をひいていない。町端れまで来ると、馬を雇った。そして官兵衛だけは馬の背にゆられ、六甲^{ふもと}の麓を右に望みながら兵庫路へさして行つた。

赤松の梢^{こずえ}に、山藤の花が垂れていた。道はひくい山陰^{やまかげ}をめぐつてゆく。ふと、官兵衛は馬をとめて、

「天蔵。この辺で休もうか。後の者が追つて来たらしい」

と、云いながら、もう鞍を降りかけた。

おうーい、おうーいと遠く呼ぶ声がしている。渡辺天蔵にも聞えていた。またその声の主^{ぬし}が何者かもわかつていた。

柔らかい春の陽を正面^{まとも}に、陽炎^{かげろう}も立ちそうな崖の山芝を背に、

官兵衛は、木の切株に腰かけていた。

わらわらと、そこへ喘ぎながら追いついて来た三名の旅人があ
る。どれもこれも、名乗り合わなければ知れないほど、顔も姿も
変っている。みな黒田家の家来で、みな官兵衛の若年からそばに
仕えて来た者たちではあるが――。

「おお」

「殿！」

官兵衛は、腰をあげて、突っ立った。――同時に、その足もと
へ、三名の家来は、ひとと、ひれ伏していた。

「……御無事なお姿を拝しまして」

母里太兵衛もりたへえ、井上九郎、栗山善助――そう三人のうちの誰かが
云ったが、嗚咽おえつをのんで、辛くもしぼり出した声なので、それは

低くふるえ、異様にかすれて、よく言葉の意味も聞きとれないほどだった。

しゆくしゆくと、三人はただ泣いていた。欣うれし泣なきである。男泣きである。戦場に立つては、鬼神きじんもひしぎ、家庭にあつては、平素でも、泣くことを知らないといわれている人々が、ほとんど、手放しで、慟どう哭こしていた。

「……………」

茫然ぼうぜん、官兵衛孝高よしたかも、いうべきことばを知らなかった。欣うれしくもありまたすまなくもある。子飼のこの者たちが、きようまで、陰にあつて、これほどまで自分の救出に苦心くしんしてくれていたということ——いまは眼まのあたりにある三名の変り果てた姿に

見たからである。

三名とも、各、たびあきゆうど旅商人に身を窶やつしていたが、その容貌ま

でを变えるため、母里太兵衛は、片かたびん鬢の毛を、焼ごてで焼いて、

わざと大きな禿はげをつくっていたし、栗山善助は前歯を数本欠き、

井上九郎は、元々、片眼を戦場でつぶしていた勇士だが、そのうえに、面に焼きあばたを作つて、ふた眼と見られない顔をしていた。

ぼうだ滂沱と、ふたすじの、白いものが、官兵衛の頬にもながれたと

き、少し離れて、街道を見まわしていた渡辺天蔵は、

「てまえは、お先に参ります。はや御身边も安心ですから、後よりごゆるりと」

と、告げて、先へ立ち去った。

官兵衛は、腰をおろして、さて三名にむかい、手をも取らないばかりにいった。

「よろこんでくれ、このとおり身はふたたび天日を仰ぐことができた。天まだ官兵衛を見すてたまわず、この官兵衛にも、なお世にあつて、なすべき事あれとのおいつけあつたものと深く思うておる。——伊丹の獄中にあるうちは、よもそち達が、城下にあつて、そのようにわが身のため、苦心していてくれておろうとはゆめ気づかなんだが……幸いに、秀吉どのから遣^{つか}わされた渡辺天蔵と、竹中どのから向けられた栗原熊太郎の兩人の手で救け出された。それもこれも、後に思いあわせれば、陰にあつて、そち達

が、あらゆる策を講じてくれたおかげであつた。手をつかえて礼ものべたい。どう謝してよいか、ことばも見出せぬ。ただただこの至らぬ主人に対してそちたちの忠節は辱かたじけないと申すしかない。――ただこの後は、天意によつて保ち得たこの余命を、いかに使うべきか、いかにそち達にも酬むくうべきか、それしか今は考えられぬぞ。ゆるせ、わしも泣かずにはおられん」

と、官兵衛は肱ひじを曲げて、その面おもてにあてると、ややしばし肩をふるわせて、共々に泣いていた。

剛骨な中には、柔弱な内よりも却かえつて、多くの涙をたたえているものとみえる。有馬路ありまじの真昼、往来の人もたえて、ただ山藤の香においのみが高かつた。

屍山血河しざんけつが

三木城は、今なお頑がんとして陥おちずにある。

この小さい一山城に、別所長治ながはる、長定ながさだの兄弟とその一族が
たて籠つて、こう長期に頑張り得ようとは誰にも予測できないこ
とであつた。

包囲ほうい長攻ちやうこうをうけてから足かけ三年。秀吉の軍勢に、城外を
遮断しやだんされ、糧道を断たたれ、完全な封鎖のうちに孤立化してから
も——すでに半年以上。

どうして喰っているのか。

どうやって生きているのか。

城兵のうごく影を見、元気な声を遠く聞きたび、秀吉方の寄手は、

「奇蹟？」

と、呆れるしかなかった。いや時には、何か不気味な感じすらうけないこともない。

なぐつても、叩いても、蹴つても、どう締めつけてもなお動いている生きものと闘っているような根氣こんき負けが、ともすると却つて寄手の方に生じて——それは著しく士氣を沮喪そそうせしめることがある。

「自分から焦躁あせりをみせてはならん。疲れてはならん」

全軍の上に立つ秀吉としては、ようやく倦み疲れやすくなつて
いる士氣に対して、細心な注意をしながら、しかもその細心をお
もてに現わすまいと自戒じかいしていた。

しかし、長陣の窺やつれと、苦慮の憔悴しょうすいは、唇のまわりの髭ひげに
も、落おち窪くぼんでいる眼にも蔽おほい得ないものがある。

「あきらかに誤算をした。いくら持ち支さえるとしても、こう長く
陥おちまいとは思わなかった」

彼は正直にそれを自分でも認めている。そして、戦争というも
のが、必ずしも兵数兵理だけでは割り切れないもののあることを、
今、痛切に学んだ。

糧道も断たたれ、水路も塞ふさがれ、外部ともまったく絶縁されてい

る城兵約三千五百が、餓死に瀕するのはまずこの一月中旬と見ていたのである。それが月の末になつても陥ちない。二月にかつても頑がんとしてゐる。いや三月に入り、今や四月というのに、何たることだ。城中の士氣はいよいよ旺さかなるものこそあれ、降伏して来るような氣けぶりもないではないか。

勿論、食はあるまい。城兵は牛馬を喰い木の根も草も喰い尽しているにきまつてゐる。――が、なお煌こうこう々たる士心の不屈さが、石垣一つ敵に渡さないでゐるのは、そうなればなるほど、べつにまたいよいよ熾烈しれつを加えてくる一心一体の闘志があるからにちがいない。

要するに、三木城の現在は、生命力のかたまりだ。これに対し

て糧道を塞ぎ水道を断つても、それが直ちに落城の極め手とはいわれぬ。いや却つて城兵の団結と情味とを外から強めさせてやるような觀をすら呈してくる。

過ぐる二月十一日の夜のごときは、そうした決死の城兵が約二千余り、死を決して志染川を徒渉し、秀吉の各陣所へ夜襲をかけて来たほどである。士氣の壮烈なることは、以て、察するに余りがある。

その晩の暗夜戦には、秀吉方もかなり手痛い損害をこうむった。城兵は曉になつて、将士三十五人、卒七百八十の戦死体を収めて、意気揚々と引きとつたが、寄手はそれに倍する死傷を与えられた。

——朝の陽が峰のうえに昇つたとき、志染川の畔も、そこここの

崖や谷間も、文字どおり屍山血河しざんけつがの慘状をえがいていた。

また、三月に入つては、こんなこともあつた。

別所長治の家老、後藤将監しょうげんの家来が約七十人ばかり、骨と

皮のようになって、ひよろひよろ降伏して来た。粥かゆなど喰わせて、

ともあれ陣中に捕虜としておいたところ、この捕虜は、やがて夜

半となると、俄然がぜん、行動を起して、忽ち寄手の一塞さいを占領し、武

器を奪い、火を放ち、追々勢いを加えて、あやうく平井山の秀吉

の本陣近くまで猛襲して来たものである。

もちろんこれは忽ち数倍する兵力で包围殲滅せんめつしてしまつたが、

その戦闘精神の強韌きやうじんなことと、士節の高い心根には、寄手の

将士も舌を巻いて歎服たんぷくし、死体はみな一つ一つ手厚く葬つて、

そこらの野辺の花など手向^{たむ}けられていた。

死にもの狂いな城兵の抵抗はこの程度には止まらない。

中村五郎忠^{ただしげ}滋は、別所家の侍だったが、寄手方の一将、谷^{たにだ}

大膳^{いぜん}とは以前から多少縁故があつたので、対陣のあいだにも、

時折、歌など書いて示して来た。

「ははあ、さては？」

と、大膳は、彼に二心あるものと読んだ。——で、ひそかに密者を忍ばせて、

「城中から裏切^{うらぎり}して、この方の人数を手引きするなら、落城の

後、羽柴様に願って、所領家名の安泰はもちろん、将来良きよう

に取り計らうが」

と、もちかけてみた。

果たして、中村は同心して来た。けれど万々、念を入れて、谷大膳は、ひとじち人質を要求した。

すると一夜、暗にまぎれて、

「これは、わが家の惣そうりようむすめ領娘、何とぞ、大事の終るまで、お手許に」

と、妙齡十六、七の眉目みめうるわしい処女おとめを、そつと城中から送つて来た。

「よし」

と、谷大膳は、以後、時期攻口など、万端ぬかりなく謀しめしあわせて、或る夜、尖兵せんぺい一千余人、中村五郎の手引のもとに、三木

川の対岸の崖からよじのぼり、首尾よく城壁のうちへ送りこんだ。

「火の手や揚がる？」

と、谷大膳を始め、寄手は固唾かたずをのんで合図を待っていた。——ところが、火の手はおろか、内からの裏切はおろか、却って、城門各所、ひしひしと守りかためて、遂に夜の明けるまで、寄手は一步も近づき得ずに終ってしまった。

しかも。——中村忠ただしげ滋の手引きで先に城中へ入った一千余の将士はとうとう一名も生きて帰って来なかつたのである。中に入るやいな、完封殲滅かんふうせんめつ、文字どおり血漿けつしょうの巨墳きよふんをそこに作ってしまったのであった。

「憎さも憎し！」

谷大膳は地だんだ踏んだ。秀吉の前へ出て、慚愧ざんき、詫わびることばも知らず、

「大切なお味方を一千も亡なくした罪、今さら申すことばもござい
ません。ねがわくば、大膳がこの首を刎はねて、以後の士氣をお奮ふる
い遊あそばしてください」

と、哭ないて云った。

「ばかを申せ」

秀吉は叱った。——この上にもまた、そちのような将を一人死
なしてどうする、というのである。とはいえ、苦にがりきるほかはな
く、

「人質の娘はどうした？」

と、たずねた。

大膳は答えていう。

「きよう三木川に引き出し、父の中村忠滋や城兵の遠見している
 まえで、はりつけ磔刑にしてくるる所存しよぞんです」

「磔刑に」

「……なお飽き足りはいたしませぬが」

「いや待て、まずい」

秀吉は、急にいいつけて、中村の惣領娘を、本陣へ呼びつけた。
 父から旨をいい含められて、これに來ているほどな処女おとめである。
 死ぬものと、清すがすが々しく覚悟をしているらしい。秀吉は殺すにしのびなかった。

——が、はたと睨みつけて、

「父の忠^{ただしげ}滋と肚をあわせて、わが兵をあざむいた憎い女子^{おなご}、首にして死骸は裏谷へ取り捨てろ」

と、近侍の者へいいつけた。

侍たちは、平井山の裏谷の上へ引つ立てて行つた。秀吉はあとで、

「城兵にとっては可憐^{かれん}な女子。そのいじらしき者を、三木川で磔刑にしては、一層、城兵の結^{けっ}束^{そく}と決死の氣を強めさせるようなものになる。人知れず処置したほうが得^{とく}策^{さく}であろう」

と、大膳や味方の将に、意中をはなしていたが、実は、その間に、側臣の堀尾茂助^{ほりおもすけ}をあとから裏谷へ追いかけて、その惣領

娘は、遠く戦場の外へ逃がしてやっていたのであった。

このことは、誰も知らなかったが、三木落城の後、丹波^{たんば}で捕われた中村五郎忠滋の前に、その惣領娘を呼んで、

「そちに与える」

秀吉からひき合わされたので人みな初めて彼の仁心を知ったのだった。中村忠滋が、以後、秀吉に随身を誓ったことはいうまでもない。

城中の結束のいかに強固なものを、秀吉は、前の中村の惣領娘のときにも、手きびしく示されたが、その後の小競^{こぜ}り合いにも、こんな一例があつた。

まだ、十四、五の少年である。

いつも敵方から寄手の柵さくへ奇襲して来るときは、その先頭に立つて、小つぶに似げない敏びん捷しょうな働きをし、

「またあのチビ助にしてやられた」

と味方の首を持ってゆかれる度に舌打ちしていたものだが、いつかそれが陣中の聞え者になつて、

「あれは、城將別所長治に仕えるもので、名は石井彦七、当年わずか十五歳だそうだ」

と、知れ渡っていた。

秀吉の小姓にも年少組がたくさんいる。うわさを聞いて、彼らは切齒せつしやくわん扼腕した。石田佐吉、加藤孫六、同じく虎之助、片桐助作など、

「こんど出て来たら」

と、待ちかまえていた。

もちろん秀吉のゆるしによる。そのうちに三木川の南口の柵さくへ
或る朝、敵の決死隊が朝討ちをしかけて来た。そのむらがる中に
チビ武者の奮戦ぶりが見えた。助作、虎之助、佐吉など、

「きょうこそ」

と、争つて駆けつけた。

秀吉は危ぶんで、

「子どもらを討たすな」

と、屈強な者にいいつけていたので、前後は大人おとなの鉄甲が囲んで
いた。すると、敵味方のあいだに力戦していたチビ武者の石井

彦七に向つて、誰か、遠矢を射たものがある。或いは、流れ矢であつたかもしれない。

ところが、矢は、何と、可憐なる彦七の鼻の下に中^{あた}つていた。もちろん、どうと仰向けに倒れた。そこへ、駈け寄つた小姓組の面々が、

「ここな、小僧めが」

憎さも憎しとばかり、折り重なつて、生^いけ捕^どりにして来た。

蹴ったり、引き摺^ずつたり、ようやく秀吉の前まで引つ立てて来たのを見ると、無残や、鼻の下に深く突き刺さつた矢はまだ抜けずにある。

余りに、幼いのと、その痛々しさに、秀吉が、

「待て待て、鼻の下の矢から先に抜いてやれ」

と、いった。

「心得て候」

と、一、二名の者が、矢に手をかけたが、やじり鑢は骨に引ツかかっているとみえて、彦七のからだに、足をふみかけて引っぱってみても、抜ければこそ。

彦七は、顔じゆう血になりながらも、黙って、それに任せていたが、さすがに苦痛にたえかねたとみえて、秀吉へ、

「おかりや飯屋の柱をおかし下さい。さもなくては抜けません」と、訴えた。

どうする気と、彦七の意にまかせてやると、彼は立って、陣屋

の柱に、自分の頭と胸いたを、縄でかたく縛ってもらった。そしていうには、

「鍛冶鋏かじばさみがありませんか。鍛冶鋏で矢をまっ直ぐに挟んで、一気にお抜き取りください」

といった。

これには、いわれた方が、やや顔の色を失ったが、彦七は、貧血も起さなかった。

この剛気を見ていた浅野長政は、秀吉に、

「ぜひ」

と、懇願こんがんして、助命を乞い、後に自分の家臣とした。

うら若い女性にも、まだ親の膝を離れたばかりな一少年にも、

これくらいな気魄きはくがあるとすれば——三木一城は取るに足らない小城としても——これは容易に陥ちるわけではない。

秀吉は、事ことごと々に驚異した。——一致した精神力の強さといつても、よもこれほどまでとは今日まで考えていなかった。

——こう城兵側の意気だけを語ると、いかにも寄手は、ただ受け身に、虚を衝かれてばかりいたようだが、秀吉の麾下きかにも、彼に劣らぬ若者はむらがつている。なんで、ひとり三木勢にばかり気を吐かせておこう。

小姓組にある脇坂隼人わきざかはやとは、当年十六。ここの陣中で、或る折秀吉が、

「たれか、この母衣ほろに望み手はないか。欲しくば与えるぞ」

と、一張の見事な赤い母衣を示して、諸士を見まわした。

金糸で山みち模様を縫い、赤地に白い輪交わちがいが染め出されている。

「目ざましき母衣ほろ」

とは思ったが、諸将もちよつと手が出なかった。なぜならば、華やかな母衣を負うことは、同じに、母衣に恥かしくないほどの、華やかな武勲を公約することになるからである。

「わたくしに、それを、拝領させてください」

そういつて出たのが、まだ十六の脇坂隼人わきざかはやとである。秀吉はふり向くと、

「欲しいか」

と、隼人の上へ、投げ与えてやった。

その後、城の西坂の戦いに、隼人は身に母衣をかけて、死闘奮戦した。小さい体の腰帯に、敵方のさむらいの首二つをくくりつけて引揚げて来た。

「よしよし。その紋も、そちにくれる」

輪交いの家紋をも秀吉からもらったのである。それに感奮して、また数日の後、城壁の下まで戦い迫って行つたが、こんどは敵方から襲った一弾に中つて、仰向けに倒れてしまった。

「やれ、無残」

と、すぐ味方の宇野伝十郎が、掻い抱いて、退こうとすると、嫌だ、退くのは嫌だ。何でもないッ」

と、急に隼人は腕の中でもがいて、伝十郎の手から離れてしまつた。

弾は兜の鉢の真ッ向こゝにあつたので、倒れたのは、一時眼が昏くらんだだけに過ぎなかつたのだ。

それにしても、脇坂隼人は伝十郎の手をもぎ離すと、傍らの岩に腰うちかけて、悠々、兜の緒おをむすび直し、さて落した槍を拾いとると、ふたたび真紅しんくの母衣ほろをひるがえして、敵の中へ駆け入つたという。なかなか見るも清々すがすがしいすがただった。

こういう者もあるし、また福島市松なども、この三木城攻めには、別所随一の剛勇と聞えた末石すえいし弥太郎を討つて、秀吉の感賞にあずかっている。

もつとも、市松もまだ弱冠、尋常では討てるわけの相手ではない。その日、末石弥太郎が傷てを負つて三木川の草むらに、水を掬すくつて休んでいたのを、いきなり屈かがみ寄つて、

「市松だッ、羽柴の家来、福島ッ——市松ッ」

と、早口に名のりかけながら不意に突きかけたものである。

名乗なのり——と、ひと口にいうが、一度や二度の合戦をふんだくらないでは、しかも相手が相当な敵と知る場合など、思いのまま名乗声の揚げられるものではない。

せつなに、口も渴かわき、舌の根ももつれ、なにをさげんだか、あとでは自分でもわからない——というのが、後々、一騎当千なつわものと呼ばれるようになった人々にしても、正直に述じゅっ懐かいす

るところである。

この時、市松は、一度敵の末石弥太郎に襟えりがみをつかまれて、すでに首を呈するところだったが、彼の郎党、星野なにがしという者が、そこをまた後ろから滅多斬りして、主従ふたりがかりでようやく弥太郎の首級しるしを獲たのであった。

このほか、大崎藤蔵とか、黄母衣組きぼろぐみの古田吉左衛門とか、蜂須賀彦右衛門の子家政とか、いちいち軍功をあげれば数かぎりもない働きは寄手の中にもあったのであるが——しかもなお頑として陥おちも揺るぎもしないのが別所一族のたて籠こもった三木城であった。

——こういうところへ、しばらく陣地を退ひいていた病軍師竹中重治は初陣ういじんの少年、黒田松寿丸しょうじゅまるを伴つれて戻つて来たのである。

った。

秋風 しゅうふう
平井山 ひらいやま

これよりも先に、秀吉は、渡辺天蔵の報告によつて、黒田官兵衛が無事に伊丹いたみの獄中から救い出されたことは聞いていた。

だが――

ここへ病中の竹中半兵衛が帰陣して来ようとは意外であつた。しかも、官兵衛のほうは、まだ帰陣してないのである。

「おう……」

と、その意外な面おもてをもつて、彼のすがたを迎えた秀吉は、

「どうして、ここへは？」

と、むしろ怪訝いぶからずにはいられなかつた。

長陣の飯屋はほとんど平常の住居のように住み古びていた。久しぶりにこの主従が対面したのはその一劃とばりの幕の中だつた。特に、半兵衛にも松寿丸にも床几しょうぎが与えられ、秀吉も床几よに倚よつていた。

半兵衛は、頭ずを垂れて、

「長陣の御労苦、いかばかりぞと、お案じしておりましたが、思いのほか、お元氣にわたらせられ、まずは欣うれしく存じます。半兵衛も、御仁慈のおかげをもつて、このところ御覧のごとく病も癒いえ、はやいかなる陣務にも耐え得べしと、自信もできましたれ

ば、おゆるしも待たず、ふたたび帰陣仕りました。——ただならぬ御苦戦の折、しばしなりと、勤めを欠き、何かと御用も怠っておりましたが、向後はお心安く思し召しくださりますように」

いつものように静かな沈重な物腰である。ふいに姿を見た初めにはすぐ病体が案じられたが、こうして話しているうちに、

（まったく快方に向ったものとみえる）

と、秀吉も心のうちでやや安堵あんどを抱いて来た。

一方、黒田官兵衛が、ここへ戻つて来たのは、それから三日目であつた。——官兵衛は、秀吉に会うと、男泣きに泣いて、

「このたびの難に当つて、初めてあなたの真情というものが、真底から相分つた。この厚恩こうおんは、死ぬまで忘れません」

と、いった。

また、竹中半兵衛に対しては、

「御友情のほど、骨こつずい髓いに徹するほど、ありがたく思います。お礼のことばもない。ただこの上は、幸いに、なお生きることを得た生命を、あらん限りまで、よく生き用いて、おこたえつかまつ仕るしかありません」

と、再三、礼をかさねた。

松寿丸を呼んで、半兵衛が、

「長らく、質子ちしとして、それがしの手許におあずかりしていましたが、いまはその要もなしと、信長公より御帰家のおゆるしの出た御子息、久しぶりに、御父子、御対面なされたがよい」

と、つつがなく、父の手へ、松寿丸を返すと、官兵衛孝高は、
子の大きくなつた身なりへ、ひと目向けたのみで、

「来たか」

と云い、また、その扮装いでたちを見遣つて、

「ここは、戦場、そちにとつては、一人前のさむらいに、成るか
成らぬかの初陣ういじんの場所、父のそばへ歸つたなどと思うなよ」

と、諭さとした。

秀吉にとって、両の腕ともたのむ二人が歸つて長らく堅氷けんぴよう
に閉じられていたような帷幕いばくも、ここ遽にわかに、何となく華はなやいで
来た。

彼の周囲、彼の帷幕のそうした空気は、すぐ全軍の士氣へ、微

妙な作用をもつて映る。

作戦、攻城は、急に活潑になった。城南城西の一塁一塁へ向つて、寄手の兵は間隙^{かんげき}を見ては攻めたてた。

五月になった。

雨季に入る。

ここは中国の山地なので、たださえ雨が多いため、道は滝津瀬^{たきつせ}と変じ、空壕^{からぼり}は濁水にあふれ、平井山の本陣の、その登り降りには、泥土に踏み込^{すべ}るなど、ここいささか快速を加えて来たかに見えた攻城も、ふたたび自然の力に阻^{はば}まれて、まったく膠着^{こうちやく}状態になつてしまった。

平井山の牙営^{がえい}から戦線四里にわたる寄手の支営を、黒田官兵衛

は、たえず陣輿じんごしに乗って、見廻みまわっていた。

片脚の傷口はついに有馬の湯でも癒いえきれなかった。終生の跛び行つこになりおわるらしいと彼自身も苦笑している。——で、兵卒に陣輿じんごしを担になわせ、それに乗って、戦闘中の指揮にもあたっていた。
「……あれを見ては」

と、竹中半兵衛も病苦を忘れて激務げきむを克服していた。奇なるかなこの帷幕いばくは。——と誰かがつぶやいた。秀吉の双壁そうへきとたのむ謀将勇将のふたりが二人とも、満足な体でなかった。一方は宿痾あの重い病軍師であり、一方は跛行の身を輿上に託して指揮奮戦にあたっている猛将官だった。

が、この二人が秀吉を扶たすけたことの尠すくなくなかつたことは、た

だその智謀だけのものではない。両者の悲壮なすがたを見るごとに、秀吉は崇高な感激と涙なきを得なかつた。ここに至つて、彼の帷幕いばくというものは、まったく一心一体になつていた。

ただこれあるがゆえに、攻城の士氣は弛ゆるまなかつた。そしてなお半歳もかかつたが、よく三木城の堅守けんしゅを陥し得たともいえると思う。

もし寄手の帷幕に、不壊ふえ一体たいの中心がなかつたら、恐らく三木城はついに陥ちなかつたかも知れない。そして、毛利の水軍が、包圍の一角を突破して、ここへ糧米ろうまいを入れるなり、或いは、備び中ちゅうから山野を越えて、急援に迫り、城兵と協力して、寄手の鉄環てっかんを粉碎し、羽柴筑前守秀吉なるものの名へ、ここで永遠の

終止符を与えて事は終つていたかもしれないのである。

だから秀吉も、時には、余りに俊敏しゅんびんな官兵衛の働きや、その機智に、出し抜かれなどすると、

(また、あのちんばめが)

と、戯れ半分に、その驚嘆を、悪口であらわしたりすることもあるが、内心はふかく尊敬し、信賴していたことは確かで、彼が祐筆ゆうひつに記録させておいたところを見ても、それを半兵衛重治と対照して、

竹中ハ総軍ヲ己レノ任トシ、アナガ強チニ小事ニ精シカラズ、クハ万自ヨロツ然ニ任セタリ。彼、先驅サキガケ、シンガリ殿ニアルトキハ、軍中何トナク

心ヲ安ンジタリ。

と称え^{たた}、また官兵衛に關しては、こういつている。

我等、播州^{バンシウ}へ入国ノ初ヨリ、朝暮、官兵衛ヲ側ニ置テ、ソ

ノ才智ヲ計リ見ルニ、我等モ及バヌ処アリ。事ノ決斷成リカ

ネ、息ノツマル程、工夫ニ悩ム折ナドモ、官兵衛ニ語ラヒ、

何トスルヤト問フニ、彼サシテ分^{フンベツ}別^{マド}ニ惑フ態モナク、ソレ

ハ箇様^{カヤウ}ニナスガヨロシクコレハ左様^{ツカマツ}ニ仕ルガ然ルベシナド、

立ち所ニ答へ、我等ガ兩三日昼夜力カリテ分別ナリ難キ事モ、

水ノ流ルル如ク決シテ少シモ過ツコトナシ^{アヤマ}、我等ガ及ビ難キ

臨機^{リンキ}応變^{オウヘン}ノ性^{タチ}ヲ得タルモノト云フベキカ。

これを見ても秀吉がいかに官兵衛半兵衛のふたりに嘆服し、ま

たその扶^{たす}けを徳としていたかが窺^{うかが}われる。

ところが。

その徳を大としていただけに、ここに秀吉の心へ、大きな傷手^{いたで}となることが起った。というのは——その年の雨季もすぎ、炎暑の夏もこえて、ようやく涼^{りようしゆう}秋の八月になりかけた頃、半兵衛重治の病がどつと重くなつて、もう今度は二度と、その病骨に、よろいぐそく^{やまい}鎧具足もまといまいと思われるような容体^{おちい}に陥つたことであつた。

「ああ、天もついに秀吉を見捨てたもうか。まだ若い英才半兵衛に、余命をかし給わぬか」

と嘆いて、飯屋の一囲いに、秀吉も共に閉じ籠つて、昼夜、看病に怠りなかったが、半兵衛の容子^{ようす}には、その夕べ、刻々と、危

険が迫っているように見られた。

鷹^{たかの}之尾、八幡山などの、敵の支^{しる}罫も、夕^{ゆう}靄^{もや}につつまれていた。

宵が迫る――

白い靄の中から、銃^こ声^{だま}が飮^のしていた。秀吉は、平井山の一角に佇^たみ^たずながら、

「また、あの跛^{びつこ}行^ぎどのが、余りに深入りせねばよいが」

と、敵へ迫って行つたまま、まだ帰つて来ない官兵衛^{よしたか}孝高^{かたか}を、案じていた。

あわただしい蹀^{せう}音が、その時、彼の横へ来て止まった。見ると、ぺたと、大地へ両手をついて、泣いている者がある。

「於松ではないか」

「はいッ」

官兵衛孝高の子、しょうじゅまる松寿丸は、半兵衛重治しげはるに伴われて、この平井山の味方へ初陣ういじんとして加わって以来、もう幾たびか戦場も駆け、生れて初めて、鉄砲槍の中も歩き、わずかな間に、見ちがえるほど、きじよう氣丈となり、骨太になり、また大人おとなびていた。

七日ほど前から、半兵衛の容態が急変したので、秀吉は於松おまつに向つて、

（誰が枕まくらもと許もとにいるよりは、そなたがいてやるのが病人にとつても欣うれしかろう。わしが看護みとりしてやりたいが、氣をつかつては、却つて病氣によくあるまい）

と、自分に代る丹精を彼に命じておいたのである。

於松にとつても、半兵衛は、数年薰育くんいくをうけた恩人、また生いのち命の親でもある。ここ昼夜その人の枕許に侍したまま具足も解かず、薬餌やくじの世話に精根を傾けていた。

——その黒田松寿丸が今、これへ駈けて来るなり大地へ泣き伏したのである。直感に秀吉は、はつと、胸を衝かれた。

「泣いていては分らぬ。於松何事か」

わざと、叱咤すると、

「おゆるし下さい」

と、於松は、籠手こてを曲げて、瞼まぶたを拭ぬぐいながら、

「重治様には、もうものいうお力も弱られ、お生命いのちは、こよいの夜半を持つまいとのこと。……どうぞ、戦いのお暇に、ちよつと、

お越しねがいとうございます」

「……危篤とな」

「は、はい」

「医師のことばか」

「さようでございます。——が半兵衛様御自身は、私に向つて、かならずとも、自分の容態をわが殿へも、陣中の人々へも、告げるなかれと、固く仰せられておりますが……。今^{こんじょう}生のお別れもはや間もないことなれば、ひと言、殿のお耳へ達しておいたほうがよからうと医師、御家土方の仰せのままに、急いで、これまで、お知らせに伺いました」

「そうか」

と、答えた時には、秀吉もすでに観念の眼を心にとじていた。

「於松。……そちはわしに代つて、しばしこれに立つておれ。やがて鷹之尾たかのおの戦場から、そちの父、官兵衛が引き揚げて来るであらうから」

「父は、鷹之尾に出て、戦つておりますか」

「むむ、例のごとく、輿こしにのつて指揮にあたつておる」

「——では、私の方から、鷹之尾に行つて、父に代つて、兵を指揮し、父を半兵衛様のお枕まくらべ辺へ呼びもどしてはいけないでしうか」

「よくいうた。——そちにその勇氣があるなら」

「行つて参ります」

と、すぐ起つて、

「半兵衛様の息のあるうち、父もひと目会いたいでしよう。口にこそ出さね、半兵衛様も、父の孝高よしたかに会いたいと思つているにちがいありません」

松寿丸は、健気けなげに、そういうと、身なりに較べては、大き過ぎて見える槍の柄えを横にかかえて、山すそへ、駈け下りて行つた。

秀吉は、その踵くびすを、反対のほうへ回めぐらして、途中から次第に歩速を大股に運んでいた。當中、幾棟にもわかれてゐる飯屋の一つに、燈火ともしびの影が漏もれていた。そこが竹中半兵衛の寝ている病棟で、折ふし、その屋根越しに宵の月が淡くのぼりかけていた。

枕許もとには秀吉から附けておいた医師もいる。竹中家の臣もいる。

ほんの板いたがこ囲いに過ぎない仮屋の藺いむしろ蕤のうえではあるが、白いふすま衾は厚くかさねられ、片隅には、職人図を描いた屏風びょうぶが一ひとはり張立てられてあつた。

「半兵衛……。わかるか。秀吉じゃ、筑前じゃ、どうだの、気分は」

そつと、側へ坐つて、枕の上の顔をさしのぞいた。

夕闇のせいか、半兵衛の面おもては、琅玕ろうかんのようにきれいだ。

——かくまで人は痩せるものかと、涙なきを得なかつた。

秀吉は、辛つらくなつた。見ているのが、どうにも、傷いたましい。

「医師」

「はい」

「……どうだなあ」

「……………」

医者は何とも答えないのである。もちろん時間の問題とその無言は答えているのだが——秀吉としてはなお、何とかならないものかと、云いたいのだった。

昏々^{こんこん}としていた病人は、そのとき微かに手をうごかした。秀吉の声が耳へとおつたらしく、うつすら^{ひとみ}眸をあけて、何か、近侍に意志を告げようとしていた。

「殿が、お見舞いに成らせられました。……殿が、お枕べに」

「……………」

うなずいて、なお、何かもどかしがる。——自分の身を抱き起

せと、命じるらしいのであつた。

「いかがでしょう」

医師をかえりみて、近侍が諮^{はか}ると、さあ、と医師も答えきれない顔した。

秀吉は半兵衛の意を覺^{さと}つて、

「なに、起きたいと。まあ、そうしておれ、そうしておれ」

と、子をあやすように宥^{なだ}めた。

半兵衛は、微かに、顔を振つて、さらに、近侍を叱つた。といつても、もとより大きな声も出ないが、とたんに、落ち窪んでいゝる眼にそれが見えたので、はつと一も二もなく、近侍は彼の命のまま、二人ほとして、板のような病人の半身をそつと抱え起した。

夜具で身のまわりを支えようとすると、半兵衛は、無用と、退けて、唇をかみしめながら、寢床のうえから徐々に身をずり降ろした。

それは、今、息もたえんとする病人にとつては、必死な努力にちがひなかつた。すさまじいばかりな懸命さである。凝視したまま——秀吉も医師も並居る家臣たちも、息をのんで見まもつてゐるしかない。

ようやく、寢床を離れること二尺ばかり、藺^{いむしろ}蕤^{るゐ}のうえに、半兵衛重治は、きちと坐つた。何たる肩の尖^{とが}り、膝の薄さ、また両手の細さ。女にも見まほしい姿だつた。

ひそかに、唇^{くち}をしめて、息^{ととの}を調えてゐるらしい。やがて、折れ

るように、ぺたと両手をつかえた。そして、

「はや、おわかれも、今夕こんせきにせまりました。……多年の御鴻ごこうお

恩、あらためて、お礼申しあげます」

と云い、またすこし間をおいて、

「散るも咲くも、死ぬも生まるるも、ふかく観じてみれば、宇宙

一円の中の、春秋の色相しきそうのみ。……おもしろの世かな。さよう

にも思われます。……殿には、御縁あつてかく御厚遇をうけまし

たが、顧かえりみるに、何の御奉公も仕らず、ただそのみが、臨終いまわの

心のこりにござります」

糸のような声であるが、ふしぎにすらすらと唇からもれて来る。

或る厳肅なる奇蹟に対する心地で、一同は、肅しゆくとして容かたちをあらた

めていた。わけて秀吉は、襟えりを正し、項うなじを垂れ、両手を膝にのせ
たまま、慎んでその一語一語も聞きもらすまいとしていた。

まさに、消えなんとする灯は、滅前あき、鮮せんらかな一閃の光りを放
つ。

いま、半兵衛のすがたは、その生命いのちは、あたかもそうした崇高
な一瞬に似ていた。

——必死に、彼はなお、この世に最期のことを、秀吉へ告げ
ようとし、そして云いつづけた。

「多事、これからの多事多端、世のうつり変りは、寔まことに、思いや
らるるばかりです。……大きな変革期かわりめのさかいにある今の日本。

……生きられるものなら、半兵衛ごときも、生きてそのゆくてを

見とどけたい。真実、左様に存じますれど……天寿、いかんともなし得ません」

次第に、ことばも明^{めい}晰^{せき}になってくる。生命力だけでものをいっているようだった。肉体そのものはさすがに時々大きく喘^{あえ}ぎ、肩を抑えては、次のことばまでの呼吸をやめていた。

「……が、殿。……あなた様こそは、かかる時代に、生れあわせ、また選ばれたるものぞと、御自身、思いにはなりませんか。……つらつら半兵衛が、見上げ奉るところでは、あなた様は、ゆめ、^{てんかびと}天下人たらんなどとは、野望しておいででない」

ここで、また、間をおいて、

「それが、今日までは、あなた様の御長所で特徴でもありました。

——失礼ながら、あなた様は、お草履取であるときは、お草履取の職分に万^{ばん}念^{ねん}をつくし、また、一士分の身であるときは一士分の職分に全能をつくし、決して、徒^{いた}らに上^あばかり見て足を浮かし、ているような妄想家ではおわさなかった。いまでも恐らくは、そのお心にたがいなく、いかにせば中国探^{たん}題^{だい}の職分を完^まうするか、いかにせばよく信長公の御^ご委^い嘱^{しよく}に最善な御満足をおこたえし得るか、またいかにせば目前の三木城を陥^{おと}し得るか——それに御専念のほか、また他事や一身の榮達などはお考えないものに相違^さございますまい」

「……………」

房中^{せき}は寂^{せき}として他に人はないようであつた。秀吉はふかく垂れ

た頭をあげることも身ゆるぎも、まったく忘れ果てたもののごとくじつと聞いていた。

「しかし……です。かかる時代を収拾しゅうしゅうする大器量は、かならず天のお選せんびによつて、どこかに用意されてあるものです。群雄天下にみち、各、この乱世の黎明れいめいを担になうもの、万民の塗炭とたんをすくうもの、われなり、われを措おいて、人はあらじと、自負し自尊し、ここに中原ちゅうげんの霸業はぎょうを争はつておりますが、すでに、偉材謙信は逝ゆき、甲山の信玄亡く、西国の雄元もと就なりは、おのれを知つて、子孫に守るを訓おしえて世を終え、そのほか浅井朝倉は当然の自滅をとげ、何人かよくこの大きくくりを成し遂げて、次代の国土に文化に万民をして心から簞食たんしこ壺漿しゅうしやうせしめるような大人物がお

りましょうか、残っておりましようや……指を折ってみるまでもないではございませぬか」

「……………」

秀吉は、そのとき、むくと面をおもてもたげた。——と、半兵衛の眼の窪くぼからも、らんとして、射るような光が彼の面へ向つて来た。

——いま死なんとする臨終のものの眼と、なおどこまで生きるか
しれない秀吉の眼とが、せつなに、葛藤かつとうした。無言のうちに、
射合ったのである。

「信長公。——右大臣家をさしおいて何をもうすかと、あなたは
心中に半兵衛のことばを御迷惑がつておられましよう。……そう
です、そのお心もちわかります。……けれど、信長公には信長

公でなくては能^{あた}わぬ使命をもつて、天意は充分に、公に振舞^おわせ
ておられます。現在の状態を打ち破るあの御威勢、今日までの百
難をふみこえられて来たあの御信念、それは徳川どのでも、あな
た様でも、よくなしうることはありません。信長公を措^おいて誰
か時代の混乱をここまで統率して来ることができましょう。……
さはいえ、それをもつて宇内^{うだい}のすべてが革^{あらた}まるとはいえないでし
よう。中国を征し、九州を略し、四国を治め、陸奥^{みちのく}を伐^うつとも、
そののみで、上朝廷^{かみ}を安んじ奉り、四民を和樂せしめ、しかも次
の文化の建設、世々の隆昌^{いしずえ}の礎^{いしずえ}がすえられるとはいえません。……
……いえませぬ」

時代が英雄を生み、英雄が時代を創^{つく}る。

また、破壊の英雄があり、建設の英雄もある。

天数人命、宇宙のふしぎな配置を、かりに天意とよぶならば、天意は、その時代に応じて英雄をつくり、その器量に應じて、任じる使命を、局きよくげん限げんしているようである。

春秋三国の史に照らして、またかつての日本の治乱興亡をかえりみて——半兵衛はふかくそう観じているらしい。歴史の実をもつて、現状の変を洞どう察さつし、また時局の底流を按あんじ、多年、身は秀吉的一幕下に置いては来たが、心は高く栗原山の山さん巔てんから日本中のうごきと、時代の帰趨きすうとを大観して——或る結論を、

(こうだ。こうなる)

と、かたく胸きょう奥おうに秘めていたものの如くである。

彼は信じている。

縁あつて、多年、自身が輔佐したこの主人こそ、いわゆる破壊の時代を承けて必然現われなければならない——次の人ではないかと。

明け暮れ、余りに側近くいて、時には、夫人の寧子と夫婦喧嘩をしたり、時には、愚にもつかないことを歡んだり、鬱いだり、馬鹿をいったり——風采ときてはまた、他家のどの主人と見較べても、優るとは思えない——御主君であるので、とかく、そう偉材な天質と観るものは、まず、羽柴家の家中でさえ、十人のうち一人とはないらしいが、竹中半兵衛は、この人に侍側し、この人のために半生を送ったことを、今とても、決して後悔してい

ないどころか、

(よくぞ、かかる御主君に)

と、結ばれた天縁に対して、大きなよろこびと、そして臨終いまわの間際までも、確乎しっかとした生きがいを感じているのであった。

(この殿が、かねて自分の信じているような役割をもち、また将来の大を成しとげてくれるなら、重治そのものの形骸けいがいは、ここにおいて事の中道に死すとも、決して、空むなしき生命を終ったものとはならない。——この君の精神こころをとおし、この殿の将来をとおし、自分の理想は、何らかの象かたちで世に行われよう。自分はこの喬き木ようぼくを大ならしめる根もとの肥料こえであつていい。ただこの喬木が、亭々ていてい、次代にそびえ、爛漫らんまん、この世を君が代の春とのど

かにする日があれば——わが願いは足れりといえる。ひとは天^{わかじ}死^にというかも知れないが、以て半兵衛重治は充分に瞑^{めい}すことができるというものである)

「……以上、申しあげたことのほか、もう……もういふべきことばは、何もございませぬ。どうぞ……殿。御自身をお大切にしてください。またとなき御自身であることを信じて、重治亡きのちも、一層、御勉強あそばして……」

——と、いったとき、半兵衛の胸は、朽木^{くちき}の折れるように、前へ曲つた。それを支えるべく、細い手を、畳へ落したが、手にも、すでにその力さえなく、がばと、^{むしろ}蕨^{むしろ}の上へ顔を俯^うつ伏せてしまつた。

顔と蕙のあいだから、とたんにぱつと、紅くれないの牡丹ぼたんが咲いたように、血しおが拡がった。もちろん吐いたのである。——秀吉はとびつくように、半兵衛のこうべを抱えた。なお、こんこんと流れるものが、自分の膝、胸へかかって汚れるのも意識せずに、

「重治ッ、重治ッ。わしを置いて。わ、わしを残して——そちひとりはや逝ゆくか。そちに別れて、この後の軍いくさに、秀吉は何としよう……重治ッ」

と、搔かき口説くどいて、秀吉は大声で泣いた。醜態といえは醜態ともいえるくらい、見栄みえも外聞もなく、おいおいと泣くのであつた。

——がくりと、その膝に、項うなじを折っている白い顔は、いまは主

君の胸に甘えて、

（否とよ。これからのあなたには、もうそんな憂いはありません）
と、微笑ほほえみながら、秀吉の繰言くりごとを、否定しているようであつた。

地下ちかなお奉公ほうこう

朝見た人も夕べはいず、夕べに見かけた人も晨あしたには死んでいる。
そうしたことが、べつに無常觀を誘うでもなく、日ごとに梢もみじから散つてゆく紅葉を見るように見られている戦場にあつて、どうして半兵衛重治の死だけが、こうもひどく秀吉を悲しませて熄やまないのだろうか。

余りな彼の嘆き方には、共にそこで哭^ないていた人々ですらあやしんだほどであるが——やがてようやく子どものムシが収まったようにわれに回^{かえ}ると、秀吉は、冷たくなつた半兵衛のからだを、自分の膝からそつと自分の手で白い衾^{ふすま}の上に寝かしてやりながら、なお生ける人へでもいうように呟^{つぶや}いていた。

「ひとの二倍三倍、長^{なが}寿^{いき}しても、やりきれない程な、大きな理想をもっていたのに、まだその望みの中道^{しよ}どころか、ないうちに……。死にたくなかつたろう……。わしにせよ、今迎えに来られても、山々、死にたくない……。う重治、いかばかり心残りの多かつたことであらうぞ。可^{あたら}惜、おぬしほどな才をこの世にもつて生れながら、その百分の一の思いも世に果さないでは、

死にたくないが当りまえじゃ」

何たる恋々の多い人か。またしても死骸に向つて愚痴である。掌てを合あわせて、念仏ひとついつてはやらないが、綿々と唧かこちごとは尽きない彼であつた。

「せつかく、蜀しよくに立つや、劉玄徳りゆうげんとくは、遺孤いこを孔明こうめいに託して逝いつた。孔明のかなしみは、食も忘れたほどだったという。——だが、わしとおぬしの間はあべこべだ。孔明に先立たれた劉備りゆうびにひとしい。——ああ、孔明に先立たれてとり残された劉備。考えてみても、落莫らくぼくたるものではないか。わしの落胆、わしのさびしさ、喩たとえるものもありはしない」

あわただしい物音が、そのときこの陣小屋の外に聞えた。松寿

丸の知らせを聞き、戦場から輿こしに乗って、えいえいと急がせて来た官兵衛である。

「なに、もうだめかッ。……間にあわなかったか」

さも、残念そうに、大声で辺りに応こたえながら、官兵衛は跛行びっこをひいて、ここへ入って来た。

そして、眼を赤くしたまま、枕許もとに坐っている秀吉の姿と、——今は一軀いっくの冷たいなきがらとなっている友、半兵衛重治のすがたとを見て、

「……う、うむ」

と、重く呻うめいたまま、身も心も、挫くじけたように、腰をついてしまった。

それなりである。官兵衛も秀吉もただ凝然ぎようぜんと一つものに眼を向け合つたまま、ものもいわず坐つていた。いつか室内は暮れて洞あなのように暗くなつていたが、燭ともを燈ともす者もなかった。死者の白ふすまい衾ふすまだけが谷底の雪みたいに見えていた。

「……官兵衛」

全身から嘆息をもらすように、秀吉の方からやがて一語ひとこといつた。

「惜しいのう。かねて、むずかしいとは、思つていたものの……」
官兵衛も、それに対して、多くをいえなかった。共に茫然たる面持ちで、

「ああ、分らないものですな。伊丹いたみの城とらに囚とらわれて、所詮しよせん、亡

いいのちと、諦^{あきら}めていたてまえは生きのび、だいぶ快^よい快^よいというていた重治どのが、あれからまだ半年も経たぬまに、こうなるうとは」

そこで、彼は気がついたように――

「これこれ、左右の方々、いつまで共に嘆き沈んでいたとて、どうなるうぞ。――燈^{とも}火^{もしび}をつけぬか。そして、重治どこの御遺骸^{きよ}を浄^{きよ}め、室^{はら}を掃^{はら}つて、安置せねばなるまい。いずれにせよ陣葬^{きよ}のこと、万端、充分には参らぬまでも――」

彼が、さしずを始めると、秀吉はいつのまにか、もうそこにいなかった。

ゆらぐ燭^{しよく}の光の中で、人々は寒々と働きはじめた。すると重治

の枕の下から、一通の遺書があらわれた。黒田官兵衛に宛てて死ぬ二日ほど前に認^{したた}めておいたものだった。

——仮に平井山の一部に、重治の遺骸を厚く葬^{ほうむ}つて、何やら、喪旗^{もぎ}にふく秋風もさびしく、氣落^{きお}ちのあとの疲れも出て、陣中ともしれば寂^{せき}寥^{りよう}にとられやすい真昼だった。

ひそとした陣幕の内を訪^とうて、黒田官兵衛は、一通の書を、秀吉に示していた。

「なに、半兵衛の遺書が、枕の下にあったと。……そちへ宛ててか」

秀吉は、促^{うなが}さるるまま、すぐ拡^{ひら}いて、読み下していたが、その

あいだ幾度となく、眼をあかくし、まぶた瞼を指で拭ぬぐい、ついにはしばらくおもて面をそらして、一気に読み終ることができなかつた。

ぼっ歿する二日前に、心友の官兵衛孝高よしたかへ宛てて認めたものではあるけれど、その書中のことばは、一行半句たりと、自分の望みや交友のことに触れているのではない。

冒頭からしまいで、すべてみなこれ主君秀吉の身にかかわることか、将来の経営について、憂いを述べ、ぜんしよ善処を託し、また日頃から脳裡にある経策けいさくをつまびらかに書き遺しているのだつた。

その一節には、

——たとへ身は化けして土中の白骨となるとも、殿にして微びちゆ

衷^うをわすれ給はず、おこころのうちに、ふとだにも御想起くだ

さるなれば、重治の魂魄^{こんぱく}は、いつなんどきたりとも、殿の
うつし身のうちに息吹^{いぶ}き奉り、草葉の蔭よりの御奉公も決して
かなはぬ事とは存じ申さず……

と、書いているところなども見える。——生きている間の忠勤
もなお足らずとし、若くして逝^ゆくこの世に恨みも思わず——白骨
となつてもなお奉公の道あることを信念して死を待ったかと、重
治の心根を思いやると、秀吉は哭^なかずにいられなかった。どう氣
を取り直しても、涙が出て仕方がなかった。

「殿。……そういつまでも、お嘆きなすっている時ではありません
まい。どうか、書中のほかの所へ眼を転じて、篤^{とく}とお考えを願わ

しゅうございます。——そこに半兵衛どのが、三木城攻略の極め手として、書きおかれた一策がございましょうが」

官兵衛が、やがて、強くいった。従来、ずいぶん秀吉に打ち込んできた官兵衛ではあるが、こんどのことについては、すこし秀吉の痴愚ちぐぼんじょう凡情な半面をあげすけに見せられて、少しあいその尽きた顔つきであつた。

重治はその遺書のうちに、

——三木落城もあと百日を出で間敷まじくは候も。

と、予言はしていた。けれど、ただ力ちから攻せめして兵を損じるこ

との不可なることを説いて、最後の一策を、味方のために、書き遺のこして逝いつたものである。

——敵方三木の城内で、もののよく分る人物といえ、やはり別所の家老、後藤將監ごとうしょうげん基国もとくにに如くしものはない。

自分のみるところでは、彼は大局の帰趨きすうも分らず盲戦もうせんに強がつているような暗将ではない。戦前、姫路の城で同坐して、幾たびか語りあつたこともあれば、自分とは浅いながら交友もあつた人といえよう。

別封に、彼へ宛てて、一書を認めてしたたおいたから、これを携えて、一度城中に彼を訪とい、彼、後藤基国をして、その主君別所長治によく利害を説かせ、大勢の帰するところを諭さとしたなら、長治とて、よも鬼神きしんではなし、かならず開悟かいご一転、城を開いて、和睦を乞うて来ようかと考えられる。

ただし、これを行ふには、潮時の測り^{はか}が肝要である。晩秋、地
 には枯葉捲^まいて、天には孤月寒く、そぞろ兵の胆心にも、父母や
 弟妹への思慕と郷愁の多感なる頃をもつて、最もよしとする。冬
 近きを思うにつけ、飢餓^{きが}に迫っている城兵はいよいよ悲壮な哀^{あい}
 腸^{よう}を抱いて死の近きを覚悟しているにちがいない。これへ徒ら^{いたず}
 に力攻を加えることは、むしろ彼らによい死場所と死出の道づれ
 を与えるに過ぎないことになる。ここしばしは、戦いもやめ、
 彼に静思のいとまを与えて然る後、それがしの書簡を送つて、懇^{ねんご}
 ろに、かつ真情をもつて、敵の城主と家老をお説きあれば、おそ
 くも年内には、落着を見ること疑いもない。

と、筆をすすめ、なお、

——成るか成らぬかなど、事に当るに先だつて、自身から疑うようなことで、事の成るはずはない。

とも書き添えて、その実行を信念づけることまで忘れていなかった。

にも関^{かか}わらず、幾分、成否を疑っているらしい秀吉の態^{さま}を見て、官兵衛孝高は、遺書に見えない点を云い添えた。

「実は、その策について、半兵衛どの生前にも、一、二度語られたことはありませんが、時機でない、なお早いとて、見合わせていたものです。殿のおゆるしさえあれば、いつなりと、それがしが使ひして、城中の後藤將監と会つて参りますが」

「いや、待て……」

秀吉は、首を振った。

「——この春だったか、浅野弥兵衛の縁組という手引きで、城中の一将に、その策を用いたことがある。ところが、いくら待っても、返辞がない。後に探ってみると、その者が主人の別所長治へ降伏をすすめたのを、将士が怒って、即座に斬りころされたということだった。——半兵衛の遺策も、それと似たりよったり、まあ同じ策ではないか。下手へたをしたら、寄手の弱味を知られるばかりで、得るところは何もない」

「いや半兵衛どのが、行うに機を測はかるが大事といっているのは、そのことでしょう。今なればと存じますが」

「しお時かな？」

「確^{かた}く信じまする」

「……………」

その時、陣幕^{とばり}の外で人声がした。聞き馴れている将士の声のほかに、どうも女らしい声もふと聞えた。

はからずも、この陣中へ秀吉をたずねて来た一女性は、亡き半兵衛の妹のおゆうであつた。

兄の危篤と、知らせをうけるやいな、彼女はすぐわずかな従者をつれて危険も思わず京都を立ち、

——せめて、ひと目でも、この世にあるお顔を。

と、ひたすら急いで来たのであつたが、女の脚ではあり、物^{ぶつ}騒^うな戦地に近づくほど、道も思うまま^{はかど}捗らず、とうとう兄の臨^い

終には間にあわなかつたものであつた。^{まわ}

「……おゆうであつたか」

秀吉が床^{しょうぎ}几の前に彼女のvari果てたといつてもいい——旅姿

とその面^{おもやつ}窶れをながめて——こう言葉をかけているとき、官兵

衛^{よしたか}孝高も小姓たちも、わざと側^{はず}を外して、幕の外へ出ていた。

「……………」

おゆうは、涙ばかり先立つて、いつまでも秀吉を仰ぎみられなかつた。旅寝のあいだにも、長い長い戦陣の留守のまも、夢にすら見て恋い描いていた人であるのに、ここに来ては側へも寄れない心地に打たれた。

「……聞いたか。半兵衛の死を」

「……聞きました」

「あきらめい。ぜひもない」

それが秀吉としても、精いつぱいの慰撫であつた。

——が、おゆうは、秀吉からそう優しくなぐさめられると、雪解きげのように、心もなだれて、一度にせぐりあげて来る涙と共に、よよと声を放つて、大地へ哭ないた。

「よせ、よせ。見つともない」

あわてて秀吉は床几を離れて、何とはなく、立ち上がってしまった。ここに人目はないにせよ、すぐ幕の外とぼりに近習きんじゆたちがいるので、家来の耳を気がねするふうなのである。

「ふたりして、半兵衛の墓へ詣ろう。おゆう、尾ついて来い」

秀吉は先に立って、陣屋の裏から山道をたどって、なお小高い一丘の上に登った。

一幹の松がうそ寒い晩秋の風に嘯^{うそぶ}いていた。その下に、土色もまだ新しい土まんじゅうが盛られてあり、一個の石が、墓標のかわりにすえられてある。

かつては、長陣の徒^{つれづれ}然に、この松の根がたへ薙^{むしろ}をしき、月を賞しながら、官兵衛、半兵衛、秀吉と鼎坐^{ていざ}して、古今を談じたこともある。

「……………」

おゆうは、草むらを見まわして手^た向^むける花をさがしていた。

そして、秀吉の次に、土まんじゅうへ向って、額^{ぬか}ずいた。

涙はもうこぼれなかった。人の命数を哭^なき悲しむには、余りに山上の自然は、宇宙の当然な理を、晩秋の草木をもつて訓^{おし}えてゐる。——秋去れば冬、冬去れば春——自然の中には何の悲嘆も涙のたねもない。

「殿さま……」

「何か」

「おねがいがございます。兄のお墓を前に折入って」

「そうか。……ウム、そうか」

「おわかりでございましょう……。おそらく、殿さまのお胸には」

「わかつてゐる」

「ゆうに、お暇をくださいまし。……おきき入れ下されば、兄も

どんなに地下でほつとすることかと存じまする」

「身は地下に埋もれても、魂魄こんぱくはなお奉公するといつて死んだほどの重治じや。その重治が生前から氣に痛やんでいたこととあるのに、どうしてこの秀吉とて反そむけよう。心のままにしたがいい」

「ありがとう存じまする。おゆるしを賜わるうえは、兄の遺命かたみどおり、兄の遺物を抱いて……」

「どこへ行くか」

「どこか、草深い里の尼院にんへでも」

またしても、涙にくれた。秀吉もあらぬ方を向いて立っていた。同じ自然の中には棲息せいそくしていても、やはり人はあくまで煩惱ぼんのうの外のものではあり得ないとみえる。

——散る紅葉もみじや啼なく小鳥、その清すがすが々しきには秀吉も学び得なかつた。

もみじ
紅葉を喰くう

秀吉からいとまも許された。亡あに兄の遺かたみ髪や小袖を持った。陣中に女の長居は無用。おゆうは次の日すぐ秀吉に、

「お別れ申します。くれぐれもお身を御大切に」
と、旅支度までして、最後の暇いとまご乞こいに出たが、

「まあ待て、もう二、三日、陣中にとどまっておれ」
と、ひきとめられた。

かけ離れた飯屋の一棟に、おゆうは幾日もぽつねんと、兄の遺髪をとむら吊っていた。四日五日と過ぎるのに、秀吉からは何の沙汰もなかった。

山には霜がおりて来た。時雨しぐれるたびに四山の木の葉はふり落されてゆく。——と、一夜、めずらしく月の冴さえた宵、

「おゆう様。お召しです」

小姓のひとりが、秀吉の使いとして、小屋をさしのぞき、

「こよいお出しゅったつ立の用意をあそばして、半兵衛様のお墓のある

山の上までお越しあれ——との仰せでした。……ええ、すぐにです」

と伝えて、使いの小姓も、先へ行ってしまった。

身支度といつても、かねて旅包みとしてある物のほかは何もない。あに亡兄の遺臣栗原熊太郎と、ほか二人ほど連れて、おゆうはやがて、墓山へ上つて行つた。

草も木も枯れて、山路のながめは、落莫らくぼくたるものだったが、その夜は、霜でもおりているように、月の光が白かつた。

黒い人影が、六ツ七ツ、秀吉のまわりに佇たたずんでいる。近習とみえ、おゆうの来たことを告げていた。中に、官兵衛孝高よしたからしい影も見えたが、おゆうがそこへ行き着いた時は、もう辺りに見えなかつた。

「おう、ゆうか。あれ以来、つい軍務に忙しくて、朝夕訪れもしてやらなかつたが、……山もめつきり寒くなつて来たし——心細

く思っていたらう」

秀吉はやさしい。総じて誰にでも女にはやさしい秀吉であるが、この際、やさしくいわれることは、却って、情けでない気がした。「これから先は、生涯独りで草深い里に住もうと、心に誓っておりますまいか、もうどこにいても、寂さびしいなどという心地はおこりませぬ」

彼女の答えを聞きながら秀吉はうなずき、うなずき、

「たのむ。半兵衛の後生をよう弔とむろうてやってくれい。いずこに住もうと、生あるうちには、また会う折があろうが」

と云い、そして、その人の墓のある松の下を振り向いて、

「おゆう、あれに用意させておいた。もうこれ限りき、そなたの妙たえ

な琴ことの音を聞く日もあるまい。……ずっと遠い以前、そなたは兄半兵衛ともなに伴ともなわれて、当時、織田どのに抗して一族たてこもつていた美濃の長亭軒ちやうていけんの城に臨み、琴を弾じて籠城ろうじやうの鬼となつていた将士の心をやわらげ、ついに城をひらいて降くだしたこともあった。——半兵衛の霊にも手向けたむけとなろう。秀吉も名残に聞きたい。……もしまた、その琴の音が、風のまに、ここから近い敵の三木城にまで聞えて、彼らのあら胆ぎもに、有情うじやうを思わせ、意味なき死を覚さとらせれば、これは大きなてがらだ。地下の半兵衛もどんなによろこぶことかしれぬ」

と、彼女をそこへ促うながした。それまでは、彼女も気がつかなくつたが、見ると、松の下に、薙むしろをのべ、その上に、一面の琴がおい

てある。

足かけ三年にわたる籠城に、さすが気節を以て、上方武者は浮ふ華かけいはく輕薄きんぱくのものと、一概に見下みくだしていた中国の将士も、いまは見
るかげもない姿を持ち合つて、

「討死は、きょうか、あすか。せめて餓うえ死にだけはしたくない」
と、ただそれだけを希望するに過ぎない窮極にまで墜おちこんで
いた。

——あさましい。

と、人のすがたには見ながらも、自分も死馬の骨を舐しゃぶり、野や鼠そを喰い、木の皮、草の根まで漁あさつた。

「この冬はもう、晷を煮、壁土を喰うしか、食うものはない」

窪くぼんだ眼と、窪んだ眼とが、おたがいを憐れみながら、なおこんなことをいつていた。——壁土を喰つてもなお、この冬を持ち越すつもりで気魄きはくだけは失っていないのである。小競り合こぜいでも、敵が寄せてくると、俄然、飢えもつかれも忘れはてて戦える。ところがこの半月余りは、いつこう寄手が襲かえつて来ない。これはどんな死にも狂いな目にあうより却かえつて城兵には辛かった。

日が暮れると、城中一帯、どすんと、沼の底へ落ちたように真つ暗になる。燈火ともしびなどは、一点たりと灯つかない。魚油も菜たね油もみんな食糧として舐め尽してしまつたのだ。朝夕は城中の冬木立へ群れる鴟もすだの雀だのという小禽こどりが、何よりもよい食物と兵

に狙われて捕られたため、近頃は鳥も知ってきたか、少しも城内の木には集まつて来ない。鴉からすを喰ったことはたいへんな数で、その鴉さえほとんど手に入るのが稀れになったほどである。

——がさつと、何か暗闇のなかで、鼬いたちの駈けるような物音がしても、哨兵しょうへいはすぐ、眼をひからせた。本能的に胃が胃液を滲しんしゅつ出でするため、その後では、きつと、

「腹が絞しぼられるように痛い」

と顔をしかめ合うのだった。

その晩は、月がよかった。だが、城兵は、

「ああ。——月は喰えない」
と唧かこった。

見張っている寨とりでや、城門の屋根に、わらわらと、落葉がこぼれてくる。ひとりの兵は、むしゃむしゃと紅葉もみじを喰っていた。

「うまいか」

ひとりの哨兵が聞くと、

「藁わらよりはましだよ」

と、また一つかみ拾って喰う。

だが、忽ち、こそばゆくなつたとみえ、しきりに咳せきをして、喰つただけの紅葉を吐き出していた。

「……あッ、御家老が」

誰か、突然、呟つぶやくと、みな気を緊しめ直なおして、槍の穂へ、確しかと、意志を示し直していた。——ひた、ひたと、ただ一人で、灯の気

のない本丸のほうから歩いて来る人影がある。別所家の家老、後藤将監しょうげん基国であつた。

「やあ、大儀だのう。ご苦労だのう。何も変つたことはないか」
「べつして異状はございません」

「そうか……」

と、将監は、片手に携えていた矢を示して、

「夕方、平井山の敵陣から、この矢を射こんで来た。矢文を負わせて。……それによると、羽柴の客将、黒田官兵衛孝高よしたかが、こよいわしに面談したいとかで、これへ訪れてくることになつてゐる」

「なに、官兵衛が、来ますと。——故主に反そむいて、織田の陣営に

奔^{はし}つた中国武士の面^{つら}よごし、参^{まゐ}つたら、なぶり殺^{ころ}しだ。ただはお
けん」

「いやいや、秀吉の使者として、あらかじめ、矢文で通告して来るものを、斬^きつてはならん。使者を殺^{ころ}すなかれ、これは兵家^{へいか}のあいだの約束だ」

「敵将でも、ほかの者ならともかく、官兵衛とあつては、肉^くを啖^{くら}つても飽^あきたらぬ気がします」

「敵に、肚^{はら}の底^{そこ}を、見^みすかされまいぞ。むしろ笑^{わら}つて迎^{むか}えろ、笑^{わら}つて——」

と、将監がなだめているとき、ふと、それは非常に遠く、また断続してではあるが、琴かと思われるような音が、人々の耳に聞

えて来た。

そのとき三木の城は、ふしぎな静寂に囚^{とら}われていた。墨のよう
な一色の夜の底には、呼吸する人の気もなく、空には
影なく形なく舞う落葉の声の不気味に翔^かけめぐって――。

「あッ？ ……。琴だ」

ひとりの兵が、突然、眼を宙へあげて呻^{うめ}いた。

じっと、立ち竦^{すく}み合っていたほかの兵も、その声につられて、

「おお、琴の音がする！ ……」

「琴の音だ！ ……」

と、さもさもなつかしいものにでも巡^{めぐ}り会^あったように、眼をほ
そめ、耳をすまして、聞き恍^とれていた。

ここばかりでなく、恐らくは、櫓やぐらの上でも、武者溜りでも、支罌のここかしこでも、一瞬ことごと悉く同じ思いに囚とらわれたのではなからうか。

矢かぜ、銃つつ音おと、雄叫おたけびに、明けては暮れ、暮れては明け、こ
こ三年のあいだというもの、まったく家なく身なく骨肉なく——
ただこの一城を中心に、飢えても傷きずついても、屈せず退ひかず、鬼
のごとく立て籠こもつて来たひたぶるな身に——ふと聞えてきた琴の
音は、卒そつぜん然と、この中の将士の心に、さまざまな思いを喚よび起
させた。

ふるさとは

こよひかぎりの命とも

知らでや人の

われを待つらむ

元弘の忠臣菊池武時たけときが、賊將少貳しょうに大友の軍に包圍されて、

最期の孤塁から家郷の妻を思い、一子武重たけしげに歌を託たくして、母の
許もとへ奔はしらせたというその辞世じせいを——いまの自分に思いあわせて、

思くちわず口誦くちずさんだ人たちもあろう。

流離した老母を思い、絶えて消息のない子や弟妹のことを思い
出した兵もあろう。いや、何も後顧こうこはないこの身ひとつとしてい
る兵にしても、石でない木でない有情うじようの心琴を揺すぶられて、
何とはない涙まなじりが眦まなからひとりでに垂れてくるのをみな、どうしよ
うもなかった。

「……………」

家老の後藤將監も、まさにそうした中の一人だったが、あたりの兵の顔に気づいて、はっと、醒めたように、まず自分の心ととり直し、次に、城門の将士たちへ向つて、わざと快活に、

「なに、寄手の陣地で、琴の音がすると。ばかなッ……。琴の音

がなんじや。いずれ柔弱な上方勢のことだ、長陣に倦んで、里の唄い女うためでもつかまえて来て戯れているものだろう。そんなものに

心を掻きみださるるなど、言語道断ごんごどうだん、もののふの鉄石心とは、

そんな脆いものじゃない。のう、そんな脆いものじやあるまい」

と、鼓舞しながら、すぐことばを続けて、各、われに返った顔へ、

「それよりは、持場もちば持場の守りを怠るな。この城じょうさい寨はちように、洪水の濁流を、じつと防いでいる堤と同じだ。堤は蜿蜒えんえんと長いが、寸土でも一尺でも、崩れたがさいご全部の破滅だ。——各むねはばの胸幅と胸幅をつなぎあつて死すともうごくな。三木の城は、誰その持場から破れて全城ついに陥おちたりなどといわれたら——貴さまたちの先祖はこの国の地下で哭なくぞ。貴さまたちの子孫はこの国のあるかぎり笑いものの汚名を負うぞ。いいか、たのむぞ」

さらに、将監が、こう励ましているときであつた。城下の坂下から、二、三の兵が駆けあがつて来るのが見えた。——あらかじめ矢文やぶみをもつて予告のあつた敵方の客将黒田官兵衛孝高よしたかが、い

ま輿こしにのつて、山下の柵門さくもんまで来た——という報しらせであつた。
官兵衛孝高は、輿こしの上で待つていた。

輿は木と藁わらと竹でつくられた軽いものである。屋根の蓋おおいもなく、
両側の腰も浅く、革紐かわひもを十文字綾あやに懸けて、わずかに身を支え
る程度にとどめ、輿上よじょうに坐いながら、大剣を揮ふるつて敵と戦闘する
に便べんならしめてある。

こういう構造なので、担にない棒は挿さし渡しでなく、前後べつべつ
に附ついている。それを士卒四人が、あと先に別れて担かつぎ、千軍万
馬の中をも、駈かけまわるのであつた。

——が、今夜の彼は、平和の使者である。官兵衛は黄の鎧下よろいし
着たぎに、卯うの花おどしの具足を着、白地銀欄ぎんらんの陣羽織をつけて、

輿のうえにあぐらを組んでいた。非常に都合のいいことには、彼は五尺一、二寸ぐらいな小男であり、体重も人より軽いので、士卒の肩も楽だったし、彼自身もそう窮屈を覚えなかった。

城寨じょうさいの門の内で、やがて、たたたと足音が聞えた。幾人かの城兵が坂の上から駆け戻って来たものらしい。

「お使い。通んなさいッ」

いかつい声と一緒に、眼のまへの柵門さくもんが大きく口を開けた。暗闇の中にひしめく兵の影は、一団百人以上もいるかと思えた。その波の揺れるたびに、閃々せんせんと槍の穂が瞳を刺す。

「大儀でござった」

と挨拶して、官兵衛は、

「それがしは、跛行びっこでござれば、輿こしのまま罷り通まかる。無礼をゆるされよ」

と、断つて、ただひとり供として連れて来た子息の松千代長ながま政さ（松寿丸）のすがたを後ろにふり向き、

「松千代。先に立て」

と、命じた。

「はいッ」

と、父の輿の前へまわつて、松千代は、敵兵の槍の中をまっ直ぐに歩いて行つた――。輿は、四人の士卒になに担になわれて、その後から柵門へ入つてゆく。

十三歳の一少年と、跛行びっこの武者とが、悪びれた様子もなく、使

いとして、自分たちの陣営に入つて来たのを見ると、殺氣立つていた餓狼がろうのような城兵も、敵ながらこの父子を憎む気もちは起らなかった。——自分たちの臥薪嘗胆がしんしょうたんしている戦いの苦しみを、ひとしく敵もしているものと、おたがい、もののふ同士の立場を思いやつて、むしろ一種の同情すら抱いた。

柵を通り、城門をくぐり、やがて中門へかかると、そこに家老の後藤将監と城士の精銳級が、嚴然と、白眼を揃えて、来る者を待つていた。

（なるほど、これでは、食糧がなくなつたくらいでは、なかなか陥落おちないわけ、石にかじりついても、この城はこの人々で守られよう……）

官兵衛はここへ来るまでのあいだに、なお少しも衰えていない城兵の士気を見て、いよいよ自分の任の重きを感じた。——それはまた直ちに、主君秀吉の直面している現状の容易ならない立場が、思いやらるる深憂しんゆうともなった。——

（どうしても、自分の託されている使命は、首尾よく果して、亡き半兵衛どのの霊をなぐさめ、また殿の直面しておらるる長困難攻の御困難をも、ここで打開し去らなければならん）

と、独り心に誓いかため直していた。

今、そうした彼のすがたを、目前に迎えた後藤将監しょうげん以下、城方しろかたの人々も、

「——これは」

と意外な思いに打たれた面持おももちであつた。

前年以来、勝ち誇つてゐる寄手の敵將、さだめし威儀をつくろい、傲然ごうぜんここへ臨むと思ひのほか——供といへば可憐な一少年ひとりしか見えない。そして当の官兵衛は、将監のすがたを見かけると、いそいで輿こしを地上に降ろさせ、不自由な隻せつきやく脚を立てて、

「やあ、別所どのの御家老、後藤基国どのとは、あなたでござつたか。黒田官兵衛です。お使いに参りました。筑前守ちくぜんのかみ秀吉の代人として。——やあ、方々には、おそろいでお迎え、恐縮です」と、にこやかに挨拶する容子ようす、いかにも磊落らいらくで、しかも何の衒てらいも見えなかつた。

父と父

敵中に使いした官兵衛の印象は、案外、敵に好感をもたれた。

君も武士、我も武士、もののふの慣^{なら}いにこそ——と、勝敗の立場は度外^{どがい}して、心をもって心に接して行つたからであろう。

けれど、これだけで、彼の使命とする——開城降伏の勧告^{かんこく}——を敵がうけ容^いれるわけではない。

燈^{とも}火^{しび}もない城中の一室で、後藤將監と会見、半^{はん}刻^{とき}ほどの後、官兵衛から、

「では、お答えを待つ」

と、席を立つと、

「いずれ、主人長治や諸将とも評議のうえ、御返辞つかまつる」と、将監も立った。

こうして、会見当夜のもようでは存外、この交渉は、成立を見るかと思われたが、以来、五日経ち七日経ち十日経つても、城方からの返辞は音沙汰もなく過ぎた。

冬は、十二月に入り、とうとう対陣のまま第三年の正月を迎えてしまった。

慙なくも、寄手方たる平井山の陣営では、餅もつき、将士は少しずつの酒も頒^わけてのんだが、

「城方では」

と、敵ながら、この正月を、一体どうして露命を繋いでいるやら、何を食って生きているやらと——偲しのびやらずにいられなかつた。

官兵衛の使いした十一月の末から十二月に通じて、三木の城は、実に、寂莫せきばくとしたものをひそめて、沈黙していた。もう寄手に撃つべき鉄砲の弾たますらないことは読めていた。けれど秀吉も今は、「おそらく、城の余命も長くはあるまい」

とみて、無下むげな強襲も抑おさえていた。

単に、こうして、根競こんくらべというだけならば、秀吉のいまの立場は、決して困難とも逆境ともいえないが——この平井山の陣営も彼の立場も、決して、秀吉一箇の独立した戦いではなく——要

するに信長の制覇せいばに対抗する西、南、東、北の敵性連環れんかんの一角にぶつかつて、その包圍環ほういかんに撃破の穴をあけようとしている信長自体の、手脚の一つである秀吉に過ぎないのだ。従つて、その主体たる信長の感情は、

(なにを、無為無策むいむさくに)

と、前線の長陣を、焦々じりじり思っているかも知れないし、また日頃、秀吉にこころよからぬ周囲の者どもも、

(筑前どのには、始めから荷の勝つ大役)

とか、

(このまま、彼一手に、お任せおきあつては)

とか、さまざまな誹謗ひぼうも行われていることは、疑いもないこと

だった。——その証拠には、やれ、秀吉は土着民の人気取りばかりやって、無用な軍用金を冗じようひ費ひしているとか、陣中の将士の反感をおそれ、飲酒の禁も嚴格でないとか、何とかかとか、信長へ聞えてゆくほどな問題でもない些さ事じがいちいち中央に聞えて行つて、それが微妙な中傷の材料とされているのを見てもよく分ることだった。

——が、秀吉は決して気にもとめなかった。彼も人間であり、ふつうの感情の持主である以上、眼中にないというわけではないが、

（些さ事は、どこまでも些事、糺ただせばいつでも明白なこと）
として気に病まないだけのことであった。

ただ、彼が憂いとしているのは、何といつても、西の強大、毛利というものが、かかるあいだに、着々と国内態勢をととのえ、また大坂本願寺の強固な勢力といよいよ緊密な作戦をこらし、東は遠く北条、武田に呼びかけ、北は丹波の波多野^{はたの}一族から裏日本の諸豪を誘導し、全日本にわたる鉄のごとき反信長陣の聯合^{れんごう}を一日ましに強めてゆくことであつた。

その力の、いかに隠^{いんぜん}然と、大きなものかは、現在、中央軍の直面している荒木村重^{むらしげ}一族の一伊丹城^{いたみ}すら、いまもつて、陥^おちないことを見てもわかる。村重一族が頼んでいるのも、ここの別所一族が頑張っているのも、すべて自力とその城壁ではなく、（いまに毛利軍が大挙して、救いに来る！ 信長を撃つ！）

それなのである。

およそ始末のわるいものは、正面の敵でなく、陰かげの敵である。

石山本願寺、西国の毛利、こう両面の二つの旧大勢力こそ、まさしく信長の敵だったが、直接、死にもの狂いに信長の理想へ組みついて来ているものは、伊丹いたみの荒木村重であり、ここでは三木城の別所長治などだった。

「あたら可憐、胸と胸を打ち割って、語りあえば分る——敵ならぬ敵と、かくも死闘して、かくも長い月日をここに費やすとは」

と、こよいも秀吉は、慨然がいぜんと、篝火かがりを焚たかせて、夜寒をしのいでいたが、ふと、うしろを振り向くと、そこには何の屈託も知らない小姓組のうちでも、年少な小つぶばかりが焚火たきびに寄って、

一月の寒さというのに、半裸体になり合って何かおかしげに騒いでいる。

「佐吉、松千代。おまえたちはさつきから、一体、何をほしやいでいるのだ」

うらや

羨ましげに、秀吉が訊くと、近頃、小姓組の仲間に入った黒田松千代が、

「何でもありません」

と、あわてて肌を入れて、具足を着直した。

すると、石田佐吉が、

「殿さま。松千代どのは、穢きたないことと、お耳に入れるのを憚はばかって、

お答えを避けましたが、申しあげないと、御不審かもしれません

から、私から申しまする」

「ムム。何じや穢きたないこととは？」

「みんなして、虱しらみを捕り合っていたのでございます」

「虱を」

「ええ。いちばん初めは、助作どのが、私の襟えりに這っていたのを見つ、それから虎之助どのが、仙石せんごくどこの袖にも見つ、みんなして、移るぞ移るぞといって、からかっているうち、こうして焚火にぬくもっていたものですから、誰の姿を見ても鎧よろいの上に、虱がぞろぞろ這い出して来ました。——それから急に痒かゆくなつて、敵の大軍をみなごろしにするのだ、叡山えいざんの焼討ちだなどと、肌着の大掃除をやっていたところでございます」

「はははは。そうか。こう長の陣では、虱も籠城につかれたろう」
「けれど、三木城とちがつて、ここには兵糧が豊かですから、焼討ちでもしないと陥おちません」

「もうよせ。そのはなしは。わしも痒かゆくなつた」

「殿さまも、もう幾十日、お風呂をお浴びなさらないかしれません。きつと殿さまのお肌にも、雲霞うんかのごとく、敵が立て籠かこつているかもしれませんよ」

「佐吉。よせと申すに」

秀吉は、わざと、彼らに体をゆすぶってみせた。小姓たちは、自分ばかりが虱ばかりでないことを証明されると、大よろこびに歓んで、

「ハハハハ」

と、雀躍^{こおど}りせんばかりくるくる廻った。

すると陣幕の外から陽気な笑い声と温かい煙にみちたここを覗^{のぞ}いて、

「お小姓組の黒田松千代どのはここにおいでか」

と、ひとりの兵がたずねていた。

「はいッ、おります」

立ってゆくと、それは父の部下だった。

「御用の折でなければ、ちよつとお越しあるようにと、あちらのお小屋で、お父上が召されておられますが」

松千代は、秀吉の前に行つて、

「参ってもよろしいでしょうか」

と、ゆるしを仰いだ。

はて——？ と秀吉はそれへ眼をそそいでいた容子ようすである。平常あまりないことだからである。しかしすぐうなず頷いて、

「行つて来い」

と、いった。

松千代は父の家来に従ついて駈けて行つた。陣屋陣屋ではどこも火を焚たいていた。またどこの部隊も陽気だった。もう餅も酒もないけれど、正月気分は幾ぶんかまだ残っている。——こよいは一月十五日だった。

父は陣屋の中にいなかった。この寒いのに、飯屋かりやからずっと離

れた山鼻の一端に、床しょうぎ几をおかせて、腰をかけていた。

吹き曝さらしである。見晴らすには何の邪魔物もないだけに、寒風

は好き勝手に肌をめぐつて血も凍こえるばかりである。が、官兵衛

孝高よしたかは、まるで木彫きぼりの武者像のように、ひろい闇へ向つて、じ

つとしていた。

「父上、松千代にございますが」

そばへ来て、ひざまずいた子のすがたへ、彼は初めて、少し身を動かした。

「殿のおゆるしを得て来たか」

「はい。お断りして来ました」

「しからは、しばしの間、父に代つて、ここの床几に腰かけてお

れ」

「はい」

「眸ひとみはしかと、ここから真正面の三木城をにらんでおれ。——と

いうても、星さえ暗い、城の方には、一点の灯もない。おそらく見えまいが、じいっと、眸をこらしているうちに、自然、太虚たいきよのうちにも、うツすらと見えて来る。城の影が、敵の気はいが……」

「御用とは、それだけでございますか」

「それだけだ」

と、床几ゆずを譲つて——

「ここ両三日からだ。この父がみるところでは、何となく、城の

内に、ものの動きが感じられる。ここ半年以上もたえて見なかった煙なども立ち昇った……城をつつむ唯一の目かくしとなる木立なども、惜し気もなく伐り下ろして焚物たきものにしている形跡がある。深夜、心耳しんじをすまして、ここから聞けば、哭なくような、笑うような、名状し難い人の声もするように思われる……いずれにせよ、この正月の松の内をこえて、彼らのなかに、一つの変ったうごきが起こりつつあるのは事実だ」

「……あ。そうでしょうか」

「とはいえ、それは象かたちで現えているものではない。うかと放言して、味方に徒いたずらな緊張を起させ、誤つては、父の失態、また敵に乗ぜられる虚を作る。……ただ父はそれを感じておるため、こうして、

おとといの夜も、昨夜も、床几をすえて、城を観^みていたのじや。

眼で観るのではなく——心眼をもつて」

「むずかしい見張りでございますが」

「そうだ。むずかしい、がまた、やさしいともいえる。心さえ澄^ち
^{ようめい}明にしておればよいのだ、妄想なく。——それゆえに、他の

士卒には、命じておかれぬ。しばしだが、そちに代らせておくわけじや」

「わかりました」

「居眠るなよ。肌をさす寒風の中だが、馴れると、ふしぎに眠うなる」

「大丈夫でございます」

「そしてもし……ひとたび城方の方に、チラとでも、火の気を認めたら、すぐ諸將に諮^{はか}れ。また、明らかに、城中の兵が、どこか一方から、城外へ出て来るなど見たら——それ、そこにある狼^{のろし}烟^{づつ}筒にすぐ火縄を投げこんで、それから殿さまのところへ駈けてゆけ」

「^{かしこ}畏まりました」

松千代は、眼のまえの大地に埋^いけてあるのろし筒へ、そつと眼を落しながらうなずいた。

戦陣なので、当然ではあるが、彼の父は、彼に対して、いちどでも、辛いかとか、痛いかとか、慰めらしいことばをかけたためしがない。——けれど、事にふれ、折にふれ、こうして絶えず兵

学の常識を教えて下さるのだとは、松千代にもよく分っていた。
そして厳かな中にも、人知れぬ温かみを感じ得ている自分を、またなき仕合せ者と思っていた。

官兵衛は杖について、そこから飯屋の方へ歩み出していた。黙々と、ひとり山を下って行くらしい様子なので、従者が、あわてて、

「どちらへ？」

と、訊ねたが、官兵衛は、

「――麓^{ふもと}まで」

と、簡単に答え、なお、

「輿^{こし}は要^いらんど、輿^{こし}はいらんど」

手を振りながら——びっこ跛行ではあるが——じょうず上手に杖にすがりながら、ぴよんぴよんと、軽く跳とぶように山道を降り始めていた。
あらかじめ、供に従ついてゆく者は、命じられてあつたとみえて、
もりたへえ母里太兵衛、栗山善助のふたりが、それと見て、彼のあとから駈
け下りて行つた。

「殿、殿」

「お待ち下さいまし」

官兵衛は、杖をとめて、

「おう、両名か」

と、山の中腹で振り返つた。

「お早いのに驚き入ります。御不自由なあしもとお脚下で、お怪我けがを

あそばすといけません」

「ははは。跛行^{びつこ}もだいぶ引き馴れて参った。気をつこうて歩くと却つて転ぶ。ちか頃は、勘で跳ぶのじゃ、こつで歩くのじゃよ。見栄^{みえ}はいらんからのう」

「合戦の中ではいかがですか」

「戦場は輿^{こし}にかぎる。乱軍となれば、双手^{もろて}に剣もつかえるし、敵の槍を奪^とつて、突き返すことも自在。ただし、進退の駈引は、まことにままにならぬが」

「さこそと、お察しいたしております」

「けれどやはり輿にかぎるな。輿の上から雪崩^{なだ}れ打つ敵軍を眺めやると、むらむらと満身から大氣が発する。叱咤する自分の声に、

敵も退くかと思われる」

「……あ。危のうございます。この辺の崖道、山陰に雪があるため、雪解ゆきげのしずくですべりまする」

「下は溪流だな」

「お負おいたしましょう」

母里太兵衛が、背を向けた。官兵衛は、負われて溪流を越えた。さて、何処へ行くのか？

それをまだ家来の二人とも聞いていない。つい今し方、麓さくの柵から、一人の武者が使いに来て、官兵衛の手へ何やら一通の書面を手渡して行ったのは見ていたが——それにしても何用が起ったのか、想像もつかない。

ただ松千代を呼びにやったとき、同時に、ほかの部署についていた太兵衛と善助へ、麓へ参るとき供して行け——ということばはうけていたが、内容はまだ聞いていないのである。

「殿……」

だいぶ歩いてから、ふと、そのことにふれてみた。栗山善助の口からである。

「こよいは何ぞ麓の陣地にあるお味方の部将から、お招きでもあつて臨のぞまれますので？」

すると官兵衛は、からからと笑つて、

「なに馳走にでも、呼ばれて行くというのか。いつまで、正月をしていられるものぞ。筑前どのお茶会もすんだし……」

「では、どちらへ」

「行く先か」

「さればです」

「三木川の柵だ」

「えッ、河原の柵へ。あの辺は危険です」

「もちろん危ない。だが、敵にとつても、危ないところだ。ちようど、相互の陣地と陣地が、相接しているところだから」

「それでは、もっと御人数を……」

「いやいや、敵も大勢は引き連れて来ぬ。従者一名に子どもひとりぐらいだろう」

「子どもを……」

「そうだ」

「解^げしかねまするが」

「まあ、黙って来い。知れても悪いことではないが、ひそかな方^{ほう}が、今のうちはよい。筑前どのへも、落城のあとになって、御披露に及ぼうと思っている」

「城は陥ちましようか」

「陥ちないでどうする」

「失言しました。近いうちにと申し足すのを忘れました」

「まず、落城も、ここ両三日を出ることはあるまい。まかりちがえば、明日^{あす}にも」

「えッ、明日にも？」

ふたりは、孝高の顔を見まもった。その面おもてに、はや灰白ほのしろく、水明りがうごいていた。——蕭条しょうじょうとして、そよぐ枯れ蘆あし、瀬の水音も耳を打ってくる。

母里太兵衛と栗山善助のふたりは、そのときギクと足を竦すくめた。河原の蘆あしの中に、敵らしい人影を見たからだった。

「やツ？ ……何者か」

次の愕おどろきは、刹那のそれとは違っていた。敵方の大将らしい者には相違ないが、ひとりの従者に幼児おさなごを担になわせ、それ以外に、郎党もつれていないし、敵対して来る容子ようすも見えない。——こちらから歩みよって行くのを、凝然ぎょうぜん、待つもののように佇たたずんでいるだけだった。

「その方たちは、ここですばらく待つておれ」

官兵衛のことばである。すべては主人の意中にあるものと察して、

「お氣をつけて」

のみ答えながら、先へ歩いてゆく主人の影を見まもっていた。

官兵衛が近づいて行くと、蘆の中に佇たたずんでいた敵も、すこし前

へ歩み出して来た。そして相見るやいかにも昵じつこん懇そうに挨拶を交かわしていた。十年の知己ちきでもあるかのように。

かかる場所で、かかる敵味方のあいだで、こういう密会をして
いるのを認められたら、直ちに、敵へ氣脈きみやくを通じるものと疑わ
れよう。――が、二人はほとんど無関心であるものの如く、四方よも

山やまの話など交わして、その末に、

「書面をもつて、厚あつ顔かましくも、お願い申しあげたわが子とは、

それに背負わせて来た幼児でござる。この戦陣の中、明日にも城とともに相果てる身をもちながら、なお煩ほん悩のうな親心とおわらい下さるまい。……余りにもまだ何も知らぬ頑がん是ぜない者にござりますれば」

こういつているのは、敵方の将だった。それは、三木城の家老、後藤将監しょうげん基国もとくににちがいない。官兵衛孝高よしたかが昵懇じつこんのものとえば、去年の晩秋のころ、秀吉の使いとして、降伏の勧告に赴いたとき、親しく城中で会見したことがあるという——その後藤将監以外に、知っているものはないはずである。

「やあ、それへ、お連れ召されたか。どれどれ、お会い申そう。

……御家来、背から下ろして、その和子をこれへ」

やさしく磨さしまねいているのは、官兵衛孝高である。将監の従者は、

主人のうしろからおそるおそる進んで、背に紐ひもで十文字に負つて来た幼い者を解いて下ろした。

「お幾歳いくつじゃ」

「お八ツにおなり遊ばします」

日頃から傳役もりやくとして侍かしずいていた郎党であろう。解いた紐で眼

の涙を拭ふきながら、答えると、辞儀をして、うしろへ退った。

「お名は」

こんどは、父なる人の将監しょうげんが答えて、

「巖^{いわのすけ}之助といひます。母もすでに亡^なし……父もやがて。——官

兵衛どの、切に、行く末よろしくご養育を」

「お案じあるな。それがしもまた子をもつ父。あなたの父としてのお気持はよう分る。かならずそれがしの手にお育て申して、成人の後は、後藤の家名を絶やさすまい」

「それ聞いて……あすの夜明けは……心おきなく討死ができまする……巖之助よ」

と、將監基国は、そこへ膝を折つて具足のふところに幼いわが子を抱えて云い諭^{さと}した。

「いま申す父のことばを、よう聞けよ、そちもはや八歳。さむらいの子というものは、いかなる時でも泣くではない。まだ元服と

て遠い先だし、常の世なれば、母も恋し、父のそばにもいたい年頃であろうが——世のなかは今、このとおり合戦の真ツただ中じや。父にわかるるも是非なし、また君と共に死ぬるも当然、すべて、そなた独りが不運というのではない。まだまだそちは、こよいまで、父の側におっただけ仕合せ者——よう天地の神さまに、その仕合せをありがとうござりますとお礼をいえ。よいか……。

そしてこよいからは、あれにおらるるお方——黒田官兵衛孝高様のそばにて、御主人とも、育ての親とも、大切に仕えるのじやぞ。……わかったか。わかったであろうな」

頭つむりを撫なででて、こう云い聞かせると、巖之助は、黙もくつて幾たびも領うなずいた。ぽろぽろと涙はもとよりこぼしていたが。

三木城の運命も、いまは旦たん夕せきに迫っていた。城中数千のもの、もとより城主別所長治と、かたく死をちかい、潔いさぎよく死ぬべく、斬つて出る覚悟をしていた。

家老後藤將監も、もちろん鉄石の心に、今とて寸分の揺るぎもない。——だが、彼にはただひと粒の幼おさなご児、巖之助があつた。この頑がんぜ isn't ないものまでを、死なすにはしのびない。また武門の意義を負わせるには——余りにもまだ年少すぎる。

一見、敵ながら、頼みがいある人物とみていた官兵衛孝高に、彼は書を送つて、

（父母なき一孤児を、養育して賜わるや）
と、意中を明かしてみた。

（父と父、武士と武士、相見たがいのこと、おひきうけした。明夜、三木川の畔ほとりまでお連れあれ）

とは、将監がきよう手にした官兵衛からの返辞だった。

で、ここへ、わが子を従者に負わせて、連れて来たわけであったが、さすがに、あすは死を期している身だけに、

（これが最後）

と思うと、つい、子を諭さとしながらも、彼もまた、不覺の涙をど
うしようもなかった。

突き放すように、

「巖之助。そちからも、ようおねがいせい」

と、膝を立てて、その可憐いじらしいものを、官兵衛の方へ、わざと

力づく、追いやった。

官兵衛は、おさなご幼児の手をとつて、

「かならず、お案じあるな」

と、くれぐれも約し、やがて母里もりたへえ太兵衛を呼んで、

「陣地まで、負つて行け」

と、いいつけた。

太兵衛、善助のふたりも、初めて主人の心と、こよいの用向きを解した。心得て候と太兵衛が巖之助を負う。善助がそばに従ついて行く。

「……では」

「では、これにて」

云いつつも、別れ難わかにくかった。官兵衛も、心を鬼にして、早く去ることが、情けだと思いながら、ついしゅんじゅん遡巡して、去りがてに、同じことばを繰り返していた。

——と、将監基国は、

「官兵衛どの、あすは戦場で、お目にかかりますぞ。おさらば。」

——その折に、おたがい、こよいの私情にさし挟まれて、槍さきを鈍にぶらせては、末代までの名折れ、まかりちがえば、あなたのお首しるしを頂戴するやも知れぬ。貴公もまたおぬかりあるな」

と、笑って、さらに、

「さらば」

と、投げ捨てるようにやいな、足を早めて、すたすたと城

の方へ駈けて行つた。

官兵衛は、早速、平井山へもどると、秀吉の前に出て、敵将から託されたこの幼児おきなごを見せた。

「育ててやれ。よい善根ぜんこんだ。——それになかなかよい子ではないか」

いいものを拾つたといわないばかり、子ども好きな秀吉は、眼をみはつて巖之助いわのすけの顔を見たり、傍へ寄せて、頭を撫でまわしたりしていた。

おそらく、まだ何もわかるまい、この正月でわずか八つになつたばかりの巖之助である。知らない小父さんおじばかりいるこの本陣の中では、ただ団栗どんぐりのような丸い目をきよろきよろさせている

だけだった。

後の——ずっと後年に。

黒田家の数ある武士の中でも、彼こそ真まことの黒田武士ぞ、と世に
いわれた 後藤又兵衛基次ごとうまたべえもとつぐとは、このときの木から落ちた山猿み
たいなこの一孤児、巖之助であつた。

ここに、三木城も遂に陥落を告げる日が来た。天正八年正月十
七日である。城主別所長治は、弟の友行、一族の治忠とともに割
腹して、城を開き、家臣宇野卯右衛門うのうえもんを降使として、秀吉へ一書
をもたらし、

（抗戦二年、武門の尽くすところは果した。ただ忠勇な部下数千
と、一族の不愍ふびんなる者どもを、すべて殺すは情として忍びない。

ねがわくば足下に託し、足下の寛大に仰ぎたいが、尊意如何)

と、あつた。

もちろん秀吉は、欣然きんぜんその潔きいさぎよねがいをいれ、併せて、三木の城を収めた。

軍旗祭ぐんきさい

降使、宇野卯右衛門が、長治ながはる以下、三名の首を献じて、三木城内にある数千の助命を仰いだ日、秀吉側からは、浅野弥兵衛が応接に出た。

検分もすみ、開城の手続きも、滞りとどこおなく、終つた。

秀吉は、全軍に令して、

「城内から出て来る降人どもには、わけて懇ろねんごにしてつかわせ。

——まず、大釜に粥かゆを煮たかせ、飢えたるものには、温かい粥を。病人には薬を。怪我人には手当を」

と注意した。

開城の日はほとんど、そうした餓鬼がきぶるまい振舞と、施薬せやくなどに暮れてしまった。

宥いたわる方も、宥いたわられる者も、いまはおたがいに熱い眼をもち合っていた。

「——秀長」

秀吉は、義弟おとうとの羽柴秀長を呼びよせて、こう告げた。

「三木の城は、この後、そちに守りを申しつける。こうして陥おとした大事な一城であるぞ。心してよく守れよ」

「はい」

秀吉は、重じゅうせき責を感じたように、首をたれた。いうまでもな

く、彼は後の大和やまと大納言秀長だいなごんひでながである。幼時は、父こそちがうが、

秀吉と同じ尾張中村の茅あば屋やに生れ、同じ母のひぎに甘え、同じ

貧苦かんきと寒飢の中に育てられてきた骨肉である。——が今は、兄の

力に励まされ引き上げられ、彼も一箇の部将として洲すのまた股ながは、長

浜ま以来、つねに秀吉の出陣といえは従軍していた。

この際——

秀吉が、三木城へ、弟を入れて、ここを引き払ったのは、彼の

意志でなく、もっぱら官兵衛孝高の献言けんげんによるところが多かつた。

秀吉としては、自身、三木城に入るつもりだったが、
 （不得策ふとくさくです。——播磨はりま一円を抑えるには、よろしく、姫路に
 抛よるべしです）

と、官兵衛が力説したのである。

要害ようがいの堅城というのでは、三木の地形がすぐれている。しかし、領政交通の利は、断じて姫路きよが優まさっている。なお、中国の攻略、四国の征定など、将来の大計を考えれば、姫路城に拠点きよてんをおくことの利は、議論の余地もない。

「しかし……」

と、遠慮ぶかそうに秀吉はいつた。

「姫路の城は、前々よりお許もとら父子一族の住居すまいではないか。秀吉が入城しては」

「なんの、それがしどもへは、べつに一城を取って下し賜わらば結構です」

「うむ。そうするか」

「自慢ではありませんが、姫路の城は、南に飾磨しかまの津をいだき、舟行しゅうこうの便はいうまでも候わず、高砂たかさご、屋島やしまなどへの通いもよく、市川、加古川、伊保川いほがわなどの河川をめぐらし、書写山しよしゃざん、増位山ますいやまなどの嶮けんを負い、中国の要所に位くらし、中央へも便ですから、大事をなすにはあの地に如しくはありません」

——で秀吉は、一も二もなく姫路へ入ったのであった。

黒田父子の主人筋で、一たん織田方へ味方しながら、中道で寝返りを打った御著ごちやくの小寺政職まさもとは、三木陥落と聞くやいな、戦いもせず、居城御著をすてて、備後方面びんごへ潰走かいそうしてしまった。

世間は、もの笑いにした。しかし官兵衛孝高は、

「惜しむべし、惜しむべし」

と、痛嘆幾たび、このみじめな主家の末路に哭ないた。

後のことにはなるが——彼がいかに末路の主家を悲しんだかということは、その後天正十年、流寓落魄りゅうぐうらくはくの果てに、備後の鞆びんごで政職が死んだとき、その子氏職うじもとが、落ちぶれ果てているのを求め、信長に詫び、秀吉にすがり、旧主の子の助命に骨を折って、

黒田家の客分として迎え、故主の旧恩にむくうことを忘れなかつた事実を見てもよくわかる。

君君たらずといえども臣臣たり、——智あるも智に溺れず、彼は真面目な漢であつた。

中国探題^{たんだい}の居城として、まさに姫路は絶好な拠点だつた。秀吉はそこに移るとすぐ、

「この城郭^{じょうかく}もよいが、様式のすべてが古い。この城の設けられたときは、一地方の防塞^{ぼうさい}として築かれたのだろうが、いまは時代がちがう、目的もちがう。信長公の関南西覇^{となんせい}の基点として、秀吉がその前駆^{ぜんく}をうけたまわるところのもの。もそつと、雄大た

らねばならん、じゅうちん重鎮の風を示さねばならん」

一族の浅野弥兵衛にこう命じて、直ちに改築——というよりは
まったく新たに規模をあらた革めて、その工事に着手させたのだった。

彼の建築好きは、いわゆる私生活中心のそれとはちがう。建設
好きなのである。信長が旧態を壊こわしてゆくそばから、彼は新しい
ものを建ててゆく。信長の性格は、破壊によくあらわれ、秀吉の
特性は、その建設好きによく出てくる。

「こんな大工事を起されて、信長公からお疑いをうけはしません
か」

官兵衛は心配した。信長の一面を知っているし、懲こりているこ
ともあるからである。が、秀吉は、

「だいじょうぶ——」

と、笑つて、

「この城に、わしの母や妻子を入れさえしなければ。……わしの母や妻は長浜に置いてあるじゃないか」

と、いった。

「いかにも」

官兵衛もうなずいた。

「ところで、孝高^{よしたか}。——足下^{そつか}は御著^{ごちやく}の城へ入つて住め。幸い

に、小寺政職が捨てて逃げたからそのあとへ」

「過分です」

「いや、お礼などは、却つて、こちらが過分に存ずる。あの御著

に住むには、なおなかなか骨が折れよう。——今もつて、毛利に属する英賀城あがに三木通秋みちあき、山崎城に宇野祐清すけきよ、朝水山城ちようずさんに宇野政頼まさよりなど——あちこちに、うるさいのが、頑張つておる」

「お案じには及びません。その程度の、小城、山城などは、ひとつひとつ暇をみては、ふみ潰つぶして参りますれば」

「——と存じて、御著に赴いかれるようにたのみ申すのだ。何分たのむ。——そして岡山うきたなおいえの宇喜多直家と聯絡をとられ、児島地方に砦とりでをかためて、一先ずは、毛利の大軍をそこに喰いとめておかれよ。秀吉、但馬たじま、播磨はりまのうちの諸般にわたり、一掃除すました上は、直ちに、第二段の策に乗り出して合体申せば」

その約束は、六月から七月にかけて果された。占領地の内政や

ら、城郭の大改築、軍の再整備などがすむと——七月の二十日、御著の官兵衛の麾下^{きか}を誘い、総軍、因幡^{いなば}、伯耆^{ほうき}へ入った。

この二カ国にあつた地方の小群雄も、西の毛利と、東の織田を見くらべて、きようまでは叛服^{はんぷく}常なく、あしたに和を乞い、夕べには裏切り、始末の悪い存在だったが、秀吉の旗幟^{きし}をいま眼前に見ると、ことごとく陣前に来て降順^{こうじゆん}を約した。

ここに、中国攻進の覇業は、いちじるしく曙光^{しよこう}を見た。——

一時は、暗澹たる前途を思わせたが、三木一城の陥落以後、急速に、秀吉の軍威は振って、但馬、播磨、因幡、伯耆の四カ国はいまや完全に新しき勢力下に置かれることになった。

「——ああせめて、もう半歳^{はんとし}も竹中半兵衛が生きていたら」

と、秀吉は、地下の人に、これを見せてやりたいと思うにつけ、
 「官兵衛孝高の終始一貫変らぬ信義こそ、きようある第一の功」
 と、書をもつて、信長に乞い、彼のために、播州で一万石の領
 土と感状とを乞いうけて与えた。

官兵衛は、初めてここに、大名の列に加わったのである。

また、それまでは、旧主小寺家からもらった小寺姓をも名乗つ
 ていたが、この時から、旧姓をまったく廃して、黒田姓ひとつに
 回^{かえ}つた。

後の黒田如^{くろだじよすい}水——官兵衛孝高もこうして今や自他ともにゆる
 す一箇の武将とはなった。生れもつかぬ片脚の身は不具にこそな
 ったものの、男のすがたの疵^{きず}にはならない。

その後もまた官兵衛には、加増の恩命があつて、城地御著から山崎の城へ移された。

重なる歡びを、家中の諸士にも頒つたため——また戦風陣雨の幾春秋をきようまで各の^{ふしやくしんみようしるし}不惜身命の印ともふり翳して来た陣旗を^{まつ}祠るために、一日、大振舞いをほどこした。

救民を賑わし、町屋も業を休み、城中の諸士は、無礼講^{ぶれいこう}とあつて、正月のように、昼から頬を赤く染めていた。

「あれ見い。きようから戴くわれわれの軍旗を」

「御家紋も定められたな」

もの珍しげに、人々は、城頭を仰ぎあつた。

それまでの旗幟^{はたのぼり}は黒田家として定まつたものもなく、仏号、星

の名、干支かんしなどを、その時々^にに書いたものを用いていたが、そう

いう祈禱的なものであつてはならぬと、官兵衛孝高がその地の惣そうしやだいまみようじん

社 大明神みそぎに七日間の禊みそぎをとつて、神前に新しい旗幟きしをたて

ならべ、神酒みきをささげ、のりとを奉じ、家士一統、潔斎けっさいして、

「士魂のうえ、常に神あり。神いますところ、四時、この旗あり。

——誓つて神意にたがい申すまじ事」

と、宣誓の式をとり行い、やがて城頭ひるがえに翻したものである。

それはまたおそろしく大きな旗幟はたのぼりだった。幅は練絹ねりぎぬで三幅。

長さは一丈三尺。上下一尺五寸ほどは黒く染めて、上部の黒の中

には永楽銭の紋を染め出し、その竿頭さおがしらには「まねき」と呼ぶ

一幅三尺ぐらいな五色の布を虹のごとく吹き流してある。

馬印も、それにつれて、雄大なものだった。余りに、これ見よがしに過ぎはしまいかと、家臣のひとりが、官兵衛にいうと、

「否々。筑前どのは、なべて豪気雄大の風がお好きだ」
と、彼は答えた。

また、従来の永楽銭の紋のほかに、藤の花を巴ともえにした紋を定じよう紋もんに加えた。これも官兵衛の考案とあるので、家中の人々は、

何で藤ふじ巴ともえを選んだか、彼の心を酌くみかねていたが、きよう軍旗祭の神酒みきを一同していただく席上で、官兵衛からこういう話が
あつた。

「——かつて、わしが伊丹城いたみじようの獄中に囚とらわれていたとき、獄舎の窓に、藤の花が咲いていた。この藤の花が咲きみつる頃は、到

底、わが生命いのちはあるまいと、朝に見、夕べに見、密ひそかに覚悟をきめていた。……然るに、はからず、そち達の忠義や、また筑前どのや竹中半兵衛の情誼じょうぎにより、ふたたび世の陽の目を仰ぐ身とはなった。——そこでみずから怖ることは、かく隻脚かたあしの不具ともなつても、年月経たてば、いつか往年の苦しみも恩も忘れ、横着なわがままごころが、とかく不足を思い出すもの。そうあつては勿体なし、そちたちの忠義にも、亡友の恩にもすまぬ……と、わざと、定紋に藤をえらび、小袖の紋を見れば、すぐ伊丹の獄中を思い出すようにいたしたのじゃ。……われ一生の事のみではない。子々孫々忘れぬようにな」

——軍旗祭の祝いに、秀吉もその日、わざわざ山崎へ来て、歓かん

をともにした。旗幟や馬印を見て、

「豪腹ごうふく豪腹。官兵衛らしい」

と、非常に恐きようえつ悦えつしていた。

官兵衛はその日、一通の古手紙を取り出して、

「これは、殿の前で焼き捨てたいと思う」

と、いった。

「なにか？」

と、怪しんで見ると、それは秀吉から官兵衛へ与えた自筆の書状である。中国発向はつこうのとき、

——御身を兄弟とも思うぞ、永代粗略にはせぬ。
と書き送ったものである。

「こういうものがあつては、却つてよろしくありません。君臣の別は嚴たるこそよけれど」

と、彼は、秀吉の目前で、焼きすててしまった。

醜しこぐさ

——ここで視野を一転しよう。

敏さとくも、時代の方向を、見さだめたつもりで、中国経略の途中から、突とつ如じょ、主將の秀吉を裏切り、また盟主信長に反抗を宣言して、伊丹いたみの城にたてこもった荒木 摂せつ津つ守のかみ村重むらしげの孤立化こそ、見ものであり、笑しょう止しな存在となつた。

（三木城は陥^おちない）

彼は、こう見たので、呼応したものであつた。

また、

（今に、毛利の水軍が、海路^{うなじ}を舳艫^{じくろ}相^{あい}衝^{ふく}んで東上してくる。また陸からは、吉川^{きつかわ}、小早川の精銳が播州を席卷^{せつけん}し、秀吉をやぶり、諸豪を麾下^{きか}に加えて、怒濤のごとく中央へ攻めてくる！）
そう固く信じていた。

なおなお、

（同時に、本願寺も起つ）

と思ひこみ、

（裏日本からは、丹波の波多野を始め、越前の残党も、あわせて

ふるい立ち、驕きようじ児信長を、中央につつんで、ふくろ叩きとする）とも空想していたのである。

いや、それは決して、彼の空想だけでもなかった。事前において、毛利家からは、

（かならず、水陸より攻めのぼる）

という誓紙も入っていたし、細目にわたる攻守同盟の約文も交かわされていたのである。

ところが。

一昨年六月、叛旗はんきをたてて籠城以来、その秋になっても、毛利は進出して来ない。冬になっても、年は明けても、形勢は変ってこない。

さらに、一年を籠城し、ことしこそは、毛利輝元てももと自身も、吉川、小早川も、西ノ宮附近に上陸し、大挙、信長を圧して来るかと見えたが——依然、その包囲は、示威恫喝じいどうかつにとどまっていた。とこうするうち、三木の城もはや危ういと聞えて来た。

「三木の城さえ救い得ない毛利軍だとすると？ ……」
と、村重もあわてだしたが、事すでに遅しである。

「しまった！ 恃たのむべからざるものをおれは恃んだ！」
いまは足ずりして、独り自己の迷妄と暗愚を羞はじるしかなかった。

顧みれば、左右の腕とも頼んでいた中川瀬兵衛、高山右近もすでに敵の招降に従って、伊丹いたみの運命は見離されていた。

孤立。そこにしか、自己を見出し得なかった。

頻々、あらゆる方法で、毛利に来援を催促しても、

（八月には攻めのぼらん）

と、いい、

（九月には事故あれば、十月に至って援軍せん）

といい、返書のたび、猫の眼のように変るので、さしもの村重も、

（いかん！）

と、観念した。

主に引く

荒木あらきぞ弓の筈はずちがひ

射るに射られぬ

ありをか

有岡（伊丹）の城

寄手の者から世上にまで、こんな落首らくしゅさえうたい囃はやされていた。当然、村重についてここに至った将兵の士気はひどく腐りきってしまった。九月の中旬頃なかばである。足輕大将の中西新八郎、渡辺勘太夫、そのほか、だいぶな人数が、彼を見すてて脱走してしまった。

城を捨てて逃げて来た将士は、信長に降伏を願い出た。しかし信長は、

「ひとたび土道をすたを廃らした降人ども、生かし飼うとも何の益になる。斬ってしまえ」

と、処置を命じ、ひとりも免し置かれなかつた。

不義の旗、反臣の軍。村重もまた、毎日、散々ちりぢりに脱軍する部下を恨むこともならなかつた。

信念を失つた集団はもう何の力もないのみか、たがいにその腐敗を急いで、自解を早め合うだけだつた。

次々と、部下の脱走がやまない中であつて、九月中旬の一夜、主将の荒木村重からして、一族の者にも無断で、極く身近な家臣五、六人を連れただけで、突然、城を脱け出し、尼ヶ崎方面へ逃げてしまった。

「何たることだ！」

あとの人々の憤慨はいうまでもない。各、足ずりして、村重

の卑劣ひれつを罵のつた。

毛利に売られた荒木村重は、今また、その一族と部下を売ったのである。毛利の援助をたのしみ、主將の言をたのんで、共にこの城にたてこもった無数の人々は、いまやまったく見殺しに捨てられた。「かくなる上は」

と、老臣の荒木久左衛門や、そのほかの歴々は、城を開いて、その妻子たちを人質ひとじちとして差出し、寄手の織田信澄のぶずみへたいして、降参を申し出た。

その云い条もまた浅ましく、

「われわれども、袂たもとをつらねて、村重に面会いたし、尼ヶ崎、花はなくま
限なくまの二城も差出しますれば、なにとぞ、御仁恕ごじんじよをもつて、一

命だけはお救いおき下されたい。もしまた、村重がなお肯き容れぬ場合は、自分たちが一手となつて、村重を討ち取り、尼ヶ崎、花隈の二要害も、寄手方に先立つて、これを陥し、悉く信長公に献じ奉ります」

と、いうのである。

——が一方、村重はなお、尼ヶ崎の支城にかくれて、頑迷に、無条件降伏には同意しない。自己の生命だけに執着しているからだつた。

久左衛門たち一族は、持て余したか、うろたえたか、伊丹城へも戻らず、尼ヶ崎を乗り取る術すべもなく、

（身こそ大事）

と、ついにその醜^{しゅうれつ}劣な性根をあらわして、思い思いにそこから逃亡してしまった。

織田信長の寄手の一軍は、機をすかさず、伊丹城^{いたみじょう}へ入って、これを占拠してしまった。

信長は、怒った。

敵国の崩壊^{ほうかい}は、当然、味方の大捷^{たいしょう}をここに齎^{もたら}すものだつ

たが、それを歡ぶ前に、敵とはいえ、余りな醜さ、余りな卑劣に、武門人道のうえから、信長は持ち前の感情を激発して、

「いやしくも身を武門におきながら、末期^{まつご}に臨んで、妻子兄弟を

人質に出して捨て去り、各 身ひとつばかり助からんとするなど、

弓矢の人なかには、前代未聞の醜事^{しゅうじ}」

といい、

「醜類しゅうるいの面々、一匹たすも生けおくな。その妻子眷族けんぞくも、見せ

しめのためすべて刑に梟かけよ」

と、峻烈しゅんれつを極めた。

彼の憤りいきどおは、日本武士道の清節のために抑止よくしできなかつた。私

憤よりも公憤のほうが大きかつたのである。けれどその処分かの苛

烈れつが、醜類の敵だけに止まらず、かわい妻子眷族けんぞくにまで及ん

だので、世人はその酷むごたらしさに、みな面おもてを蔽おおつた。人間の美醜

両性、ぜひない世相の一面とはいえ、いまその惨状を筆にするも

傷いたましい気がする。ざつと誌しるせば、その折、信長の手に捕われて

いた敵方の妻女百二十幾人と、その召使の女たち三百八十余人は、

すべて、一カ所に集められ、鎧やうり、薙刀なぎなた、鉄砲の類で殺された。

——その悲しみ叫ぶ声は、天地に飮こして、眼に見、耳に聞いた人々は、十日も二十日もその日の記憶を忘れることができなかったということである。

歴々の上じやうらふ 藺ふたち、衣裳美々しく粧よそはれたるまま、かなはぬ道とさとり、並居ならびるたるを、さもあらけなき武士たちうけと 請うけと取、その母親にいだかせて、引上げ引上げ張付はりつけにかけ――

とは、当時の見聞記けんもんきに書かれている一節である。

処刑は苛烈を極めた。

それらの上臈たちに仕えていた侍女、若党などの百何十人も、

まわりに乾草ほしくさを高く積んだ四つの空家に押し籠められて、一いっ刻きのまにみな焼き殺された。

また幼い子どもらや、その乳母などは、車一輛りように、七、八人ずつ乗せ、それを幾輛もつらねて、京都の町々を引き廻しにして曝さらした。

六条の河原では、やがてそれらの可憐いじらしい和子わこたちや女房たちの打首が執行された。

みな歴々の女房衆にてましませば、肌には経きやうかたびら、色よき小袖うつくしく出立いでたち、少しも取みだれず神妙也。……中に
もたし女と申すは、聞えある美人、かつてはかりにも人にま
みゆる事もなきを、あらけなき雑色ざふしきども共に、小肱こひぢつかんで車

に追ひ乗せらる。最期するときも、彼たし女と申すは帯しめ直し、髪高々とあげ、小袖のえり押しのけて、尋常に斬られ候也。いづれも最期よりけり。

「信長公記」の筆者はその折の実状をこう書いている。たし女とは、村重の妻であるとも噂された。伊丹一城の男ばらが、前代未聞の醜態を巷に曝した中であつて、ともあれ、醜草しこぐさの中にも花は花らしくと——一点の清香を放ったものであつた。

それと、当時、世人の賞め者ほものとなつて、ひそかに涙をそそがれたのは、荒木久左衛門の息子で十四歳になる少年と、伊丹安太夫の倅せがれのわずか八歳といういたいけな幼児おさなごだつた。

ふたりとも、死の座にひき立てられて来ても、少しも悪びれず、

「最期所はここか」

と訊ね、河原の素むしろに直ると、掌をあわせて、頸に刃を受けたという。

「何たるいさぎよさ」

「いじらしい和子たち」

「親の顔が見てやりたい」

それもこれもみな荒木一人の逆意から——不料簡から——と、世人はごうごうと彼の罪を責め、またこれらの人質を捨てて逃げた親たちを恨み罵った。

けれど、その荒木村重やその親たちを、憎むとも、

「科もない幼児や女房衆を、こうまで苛烈に遊ばさなくても」

と、世人は、信長の処刑の余りにも峻烈^{しゅんれつ}すぎたことにも、決してよい感じは抱かなかつた。

「おそろしいお方ではある」

という畏怖^{いふ}のみが先だって、信長が、武門の節義を正すために敢えてした大乘^{だいじようてき}的な憤りまでを読み知ることはできないのである。

「あのお方に叛^{そむ}いたものは、悉くこんな目にあうぞ。これはわざとこうして見せた右大臣様のおしめしじやろ」

つとめて善意に解釈したつもりで、人々はまずこんなところで口をつぐんだ。そしてこの稀有^{けう}な出来事を、一生のうちでも忌^{いま}ましい見聞^{けん}の尤^ゆなるものとして、みな少しも早く記憶から消し去ろ

うとするものの如くであつた。

一方、伊丹城を始め、花隈はなぐまや尼ヶ崎の支城を捨てて諸所へ逃げかくれた男らしからぬ男どもは、当然、見つかり次第討ち取られた。中には、

「世を捨てたら？」

と、寺へ駈け込んで、一夜に髪を剃りそこぼち、きのうの具足太刀を、数珠法衣ずずころもに着かえて、どこまでも命を保とうとした醜類しゆう中の醜もあつたが、

「仮か借しゃくすな」

とある信長の嚴命に、織田軍の兵はそれらの者もすべて山門から引きずり出して斬つた。

ただここに最も世人を齒ぎしりさせた一事は、この酸鼻さんびを起した当の張本人荒木村重が、ついに追捕ついぶの網にもれて逸早く逃げてしまったことである。

うわさには、花隈はなぐまから兵庫の浜へ出て、船をひろい、備後びんごのおのみち尾道へ落ちて行つたとあるが——杳ようとしてしばらく所在が知れなかつた。

さもあらばあれ、彼村重は、もう人の中の人ではあり得ない、完全に死んだものだ。いやなお、どこかに生を偷ぬすんでいる限り、窒息ちつそくの苦悩をしながら腐肉ふにくを抱えているものにすぎない。

こんどの荒木村^{むらしげ}重退治の合戦にあたつて、織田方に一異彩^{いさい}を加えた手勢がある。九鬼嘉隆^{くきよしたか}の率^{ひき}いる水軍だった。

摂津^{せつ}の花隈^{はなくま}城陥落の日、この船手勢は、思いもうけぬ海上から霧を払つてあらわれ、艨艟^{もうどう}數十艘^{そう}を浜にならべて輕舸^{はしけ}を下ろし、たちまち川口から溯^{さかのぼ}つて各所へ陸戦隊を上げ、花隈から逃げ落ちて来る敵のものをことごとく首にして、信長へ献じたのである。

「船手は海上のそなえとのみ思っていたが、機に応じて、陸上の働き奇特なことである」

と、信長は、九鬼嘉隆の本高三万五千石へ、さらに七千石の加

増を与えて、

「いよいよ水軍の充実に力をいたすように」

と、励ました。

織田氏の水軍は、その部門ができてから、まだわずか三年ぐら
いしか経っていないのである。もとより非常に幼稚だった。

けれど、その短日月のうちに育成して来たものとしては、目ざ
ましい発達といわなければならない。

なにしろ、ごく近年までは、信長自身すら、兵事といえ**ば**ほと
んど攻城野戦のこととして、海上の軍備までには思**い**いたる**違**も
なかった。いとま

その通念を破って、彼に、

（水軍なくしては）

と、痛切に、その必要を知らしめてくれたものは、敵であつた。西国の強大毛利もうりなのである。

大坂石山本願寺の頑強な交戦力は、信長がいかに畿内きないの陸上から包囲しても、その交通路を遮断しゃだんしても、すこしも衰えるふうがない。——その持久力と反抗はむしろ日を逐おうて強烈にさえなつて行つた。——で、その依つて来る原因をつきすすめてみると、何ぞ知らん、武器も弾薬もまた夥おびただしい食糧も、海上から商船に偽装した毛利方の兵船が、いくらでも満々と帆をはつて、安治川口あじがわぐちから大坂市街へそれを輸送しているのだつた。

（そこを断たなければ）

と、彼は陸上の装備と、訓練のない、また極めてあり合わせな漁船など集めて、大坂の川口で毛利の水軍を阻めた。^{はば}それは三年前の天正四年頃のことである。

ここでは、さしもの織田軍も、^{ざんぱい}惨敗を喫した。^{きつ}以来、彼は、
(水上の戦いでは、われまだ毛利の敵にあらず)

という非を痛切に知った。そしてひそかに水軍の建設に苦慮していたが、いわゆる素質のない将兵を基本としては、その業は容易でなかった。

^{せきへき}赤壁の江上戦に、^ぎ魏の^{せいもう}精猛を率いる^{ひき}曹操が、完敗を喫したのも、当初、彼の軍隊の兵は多く北国産の^ご山沢に飛躍したものであり、それに反して、江南の国呉の兵士は、大江の水に馴れ、

南海の潮に鍛えられたものが多かったことに、大なる敗因があつたという。

いま、安土の豪壁を地上に築いた信長である。その勢力と財をもつて、彼にまさる兵船を造ることは至難でなかった。——現に琵琶湖の往来にさえかなり巨きな船舶はもっている。

けれど、彼が苦しんだのは、船の大や数ではなかった。その機動の生命となる人である。

柴田、佐久間、滝川、その他、羽柴筑前と見まわしても、適任とは思われない。西海の雄藩毛利とはおのずから質がちがう。

折も折。

こういうところへ、彼に接近して来た一人物がある。九鬼嘉隆

という贅^{ぜい}肉もなく骨じまりの慥^{しつ}乎とした色のくろい男だ。いわゆる潮みがきにかけられた皮膚と生きのいい鰯^{ぼら}みたいな眼をもつて、

「てまえに仰せつけあるなら、毛利に劣らぬ水軍を組織し、かならず数年のうちにあなたの麾下^{きか}に加えてみせる」

と、或るとき、信長の前で、信念がなければ決していえないことばをもつて、云い断^きつたのである。

嘉隆は、伊勢の産だとあり、その一子は、鳥羽^{とば}の城主^{はらけん}原監物^{もつ}の聳^{むこ}でもあるというので、信長も相当に礼遇^{れいぐう}し、その言にもかなり耳をかたむけた。

面^{つら}がまえもよし、海事の知識にも富んでいる。信長は一見、

——この男、用^{つか}える。

と、思った。

くきうまのすけよしとか

九鬼右馬允嘉隆は、信長から水軍の建設をいいつかると、鳥羽、熊野などの船大工や、多年海上で動作に馴れた水夫^{かこ}などを糾^き合^{ゆうごう}して、やがて七艘の大船を作り立て、これを堺^{さかい}の浦へまわして来た。

彼の使命は、西国から輸送される軍需船を、大坂の海口で封鎖^{ふうさ}するにある。

毛利方では、堺^{さかい}の浦に忽然^{こつぜん}と出現した一船団を、当然にすぐ探知していたが、

（一夜作りの織田の水軍、何ほどのことがあろう）

と、多寡^{たか}をくくつて、相かわらず、九鬼船隊の視界のまえを、悠々と、兵糧や武器を満載して舟行していた。

（やらせておけ。やらせておけ）

右馬允嘉隆は、時を計っていた。そしてその年七月の烈風の夜——毛利方の大船団が大坂港へはいつたのを見とどけると、

（こよいこそ）

と、舳艫^{じくろ}をしのばせて襲いかけた。

——九鬼右馬允は九艘の大船に、無数の小舟を相添へ、山のごとく飾りたて、敵船まぢかく寄せつけ、やにはに大鉄砲をいちどに放ち懸^{かく}る。

と、当時の記録に見える。「山のごとく飾り立て」とあるのは

船楼や艫ともに、旗幟はたのぼりだの鎗やりや熊手を植えならべて進んで行ったものであろう。

この夜、風浪が高かったので、碇泊ていはくちゆう中の西国船は各、船と船とのあいだに繋綱もあいをとりあい、また海泥に深く碇いかりを下ろしていた。

たちまち一艘そうが火災を起した。すわと、抗戦に立ち向ったときは、ほかの船にもあちこち飛火が移っていた。敵にのみ氣をとられていた毛利勢は、繋綱もあいを切つて、友軍の火の船を、まず先に避けねばならないことを忘れていたのである。

（よし引き揚げろ）

燃えさかる数艘の巨火きよかへ、さらにさんざん矢や小銃をうち浴び

せて、九鬼船隊はすばやく淡^{たん}の輪^わ方面へ逸^{いつ}走^{そう}した。——毛利方の水軍は、してやられたりと憤^{いきどお}つて、

(多^た寡^かのしれた伊勢や熊野の漁夫兵、大国毛利の水軍の面目にかけても揉^もみ潰^{つぶ}せ)

と、残余の大船小舟をととのえて、堂々たる船陣をつくり、淡^{たん}の輪^わの海上へ追いかけて行つた。

物見の舟を放つて、とつこうつ敵船をさぐっているうちに夜があけた。朝霧のあいだに双方の石火矢^{いしびや}や銃火がかわされ出した。

すると、思いもうけぬ方から霧を破つて、またべつな一船隊が毛利方へ迫撃して来た。その旗艦らしい一艘には、あきらかに滝^{たき}川^が左近将監^{わさこんしょうげん}の旗じるしが望まれた。何ぞ知らん伏勢^{ふくぜい}があつ

たのである。

九鬼右馬允の乗っている大船には、熊野権現くまのごんげんの大おお幟のぼりと日の丸がひるがえっていた。名づけて日本丸とよぶそれは、胴どうの間ま七間縦たて十数間という熊野船だった。

荒浪の中を乗りまわし乗りまわし、鯨のように日本丸は暴れまわる。近々と寄せては、敵船へ松明たいまつを投げこみ、退いては、大鉄砲をうちこむのだった。

七月の陽が、海面うみづらをも焦やくばかり高くなつた頃、淡の輪の海上は黒煙くろけむりにみちていた。毛利方の船はほとんどいつてよいほど焼き沈められた。風浪がつよい日なので、炎は高く壮観をきわめた。

このことは、堺^{さかい}、大坂の耳目^{じもく}を震撼^{しんがい}させた。信長の勢威を知つても、なお毛利の富力と強大をずっと高く評価している一般民も、これはと、それまでの常識と観念の訂正にまごついた。

抜け目ない信長は、ここに自己の水軍を持つと、それらの大船を連ねて豪壮な船飾りをほどこし、一日、近衛公^{このえ}やそのほかの公卿^{けい}を堺へ招いて船御覧^{ふなごらん}の催しをした。もちろん彼は民衆を忘れない。貴賤僧俗、男女老幼、すべての者へも船見物をゆるし、堺の数日を船祭に沸^わきたたせた。

丹波^{たんば}・丹後^{たんご}

山陽の北部には山陰がある。

ふたつを併せて中国あわという。中国攻略は、当然、二方面作戦にならざるを得ない。

秀吉が、山陽に働いているあいだ、山陰方面の司令官としては、明智光秀が任じられていた。

山陰は、光秀の働き場だった。

ここ数年に、光秀は、よくその任に對して、功を挙げた。

細川藤孝ふじたかを副將として、丹波、丹後の敵性を、一城一城、攻め陥おとして行ったのである。

この地方の強敵は、何といつても、波多野秀治はたのひではるの一族だった。討伐にかからない前は、その大敵の本拠、八上城やかみじょうを中心とし

て、ひとしく織田信長へ反意を示している大小地方武族の旗は、各地の要害に散在する四十余カ所の城と、三十余カ所の砦とりでにわかれて翻ひるがえつていたものである。

それをここ数年間に、営々と攻め、孜し々として降し、約三分の一にまで伐り平きらたいげて行つたのは、まさに山陽の秀吉の武勲と比べても、決して遜そん色しよくのない惟これとうみつひで任光秀ひでのてがらといつていい。

もちろん信長が光秀に信頼することも、その功勞を賞揚することも、決して秀吉以下ではなかった。

「筑前と日向ひゅうがとは、まず、織田軍の双壁であろう。いずれも錚そう々うそう、いずれも若い。両者の働きを見くらべるは、当代の壯觀と

いうもの。彼らもよき世に生れあわせたが、予もよき将を左右に持ったな」

率直に、信長は、或る時、老臣たちへこういったこともあるそうであるが、物に感じると、人いちばい激賞して惜しまない信長としては、それも決して政治的なことばではなかった。

その証拠には、特に、これとう惟任の姓をゆるされ、丹波亀山の城に六十万石を附与され、一門の眷族けんぞくもみな余栄をうけて、いまの明智日向守光秀は、もうむかしの漂浪ひょうろう零落れいらく時代の十兵衛光秀ではなかった。

「この御厚恩をわすれてはならんぞ」

とは、光秀自身が、つねに六人のわが子にも、甥おいや姪めいの一族の

ものにもいつていることばであつた。

その心がけは必然に、所領地の内治や法令にもよくあらわれていた。彼は、信長の名を辱め^{はずかし}ない新興勢力下の一大名として、次々に、領民をよく悦服^{えつぷく}させていた。

おまえ見たかや

お城のにわに

きようも桔梗^{ききよう}の花がさく

領民はそう謡^{うた}つて、新しい領主の温情とその家門を祝福した。

光秀の明^{めい}晰^{せき}な頭脳をもつてする文化の振興や新味ある政治は、

到底、前に住んでいた地方豪族の施政ぶりなどとは比較にならないものであつただけに、土着民は、たちまち彼に随喜した。また

風を慕^{ふう}つて、戦わずして彼の城門に投降して来る地方武族もすくなくなかつた。

酒井孫左衛門、加治見石見^{かじみいわみ}、四方田但馬守^{よもだたじまのかみ}、萩野彦兵衛^{はぎのひこべえ}、並^{なみか}河掃部助^{わかもんのすけ}など、みなその砦^{とりで}を捨て、部下をつれて、この春、

彼の家臣となつた人々である。

だが、かんじんな丹波第一の敵の嶮^{けん}要^{よう}——八上城^{やかみ}だけはなおまだ頑^おとして陥^おちずにあつた。

細川藤孝、織田信澄、滝川一益、丹羽五郎左衛門などの諸将が、光秀を援^{たす}けて、年来、伐^きりくずしにかかつていたが、波多野秀治は、時に帰順したり、時には反抗したり、また忽^{たちま}ち、勢威^{さか}を旺^{さか}んにして来たり、どうしてもその防^{ぼう}塞^{さい}と敵性は抜くことができな

かった。

天正七年の五月である。

「今でしよう、八上を叩くのは」

これは、秀吉からの献議けんぎだと聞えている。両面作戦とはいえ、その機動は、たえず一つに活流かつりゅうしている。播州方面の手は今なら移動できるという秀吉の保証によつて、

「一挙に、八上を陥せおと」

とある信長の総攻撃の令は発しられたのである。すなわち光秀の本軍は山城方面から、秀吉の弟秀長の軍勢は但馬方面たしまから、また丹羽五郎左衛門の一手は摂津口からと、三方面から競進の勢いで波多野の牙城がじょう八上へ迫った。

羽柴秀長、丹羽五郎左衛門、この二将にひきいられた各大隊は着々、その担当地域に戦果をあげて、敵性の砦や城地を、席卷せつけんして行つた。

——が、光秀の前面は、ある程度で停頓ていどんを見てしまった。しかしそれは主隊として、ここで彼が絶対に粉碎ふんさいして見せなければならぬ——敵の牙城八上との対峙たいじであつた。

「明智勢の面目にかけて陥せおと」

光秀の指揮は、いつになく、実に激越を極めた。

「——あらゆる犠牲をはらうとも」

と、部下の将士に、夜も夜討を朝にも朝討を、敵に息つく間も与えないほど、味方をも猛烈に督した。

けれど、八上城は陥ちない。——そのあいだには、羽柴軍や丹羽軍の赫々たる戦功が両方面から聞えてくるのである。——光秀は、こうちやく膠着したままの自軍をながめて、

「あら。恥かし！」

と思つた。

信長の恩寵を、人いちばい厚くうけている自身を、そこに顧みるほど世上にたいしても、

「かくては名折れ」

と、あせ焦心らずにいられなかつた。

ゆうゆう悠々と政治軍事の経策に理念をめぐらしている人である時、

彼は世間にもぎらにない大器であつた。いわゆる人材のすぐれた

ものであつた。けれど、その裏面性の感情から衝かれて、もの
 思考に入ると、別人のように、みだれやすかつた。当面の些事さじに
 もひどく拘泥こうでいして、明晰めいせきな頭脳も、それに支配されてしまう。
 かれの聡明と、文化人的なつましきは、平常の言語行動にお
 いては、彼の内部にそんな脆弱ぜいじやくな欠陥があることなどは、ま
 つたく氣けぶりにも他人へ覗のぞかすことはしない。一族近臣にすら窺うかが
 わせない。ただ彼自身が、自身だけで、

（——こんなことでは）

と、誠いましめているだけだったから、その胸中の苦悶はまた人いち
 ばいのものであつた。

「だめです。あらゆる作戦も、ほとんど城中の敵には、何のこた

えもないかのように。——この上はただ濠ほりを深め、柵さくをかため、長囲を期して、敵を干乾ひぼしにするよりほかには」
と、帷幕いばくの智囊ちのうも、前線の部将も、いまは挙こぞつて、それにだけ一致していた。

光秀の兵理軍学の蘊うん奥おうも、ここに至つてはすでに施し尽きていた。しかも彼は、今日明日のうちにも、敵城を揉もみつぶさねばと焦心あせつていた。

（——さだめし齒がゆき者と、信長公も思し召しつらん。丹羽、羽柴の友軍も、あれ見よ光秀が手を焼いておるわ、と密かに笑いてやあらん）

などと味方の上下の思わくまでを、こんな中にもひとり苦慮す

る光秀であつた。

さらに、ここは自分の働き場所——丹波の役であるという責任感もある。これとうひゆうがのかみ惟任日向守たるの誇りもある。断じて、悠々とここにこうちやく膠着を続けてはいられない。

「なに。長陣で囲んでいるしかないと、いやいや、光秀には疾とくより考えておることもある。無為無策むいむさくの長陣をきめこんで、友軍のめざましい戦功をよそに眺めてなどおられようか。……作左、作左」

と、一方にいる部将たちの一名を呼び、
「いつぞやそちが本陣へ伴つれて参つた大善院だいぜんいんの和尚おしょうをもう一度呼んで来い。夜に入るもかまわぬ、すぐにだぞ」

と、いいつけた。

旗本、進士しんし作左衛門は、命をうけると、すぐ駒をとばして、多た紀郡きごおりの大善院へ駈けて行つた。

攻城数月、すでに季節は夏に入つていた。陥おちない城を目のまえに、光秀は、毒虫や蚊を追うべく籬かがりを焚たかせて、その夕迫る煙のなかを黙々歩み巡めぐつていた。

大善院の住持が、進士作左衛門に伴ともなわれて、光秀の陣所へ見えたのは、それから間もないことだった。

「夜中、ご苦勞であつた」

と、光秀はこれを、帷幕いばくに迎えて、左右の者を退しりぞけ、ほんの近側の、二、三名と住持を加えただけで、何か、密議をこらしてい

た。

八上城やかみの波多野はたの一族と大善院とは交渉浅くない。

「貴僧の骨折りひとつで、領下の民の塗炭とたんの苦は救われ、城中幾千のものの生命いのちは安泰を得よう。この任務こそは、僧侶たる御身に課せられた当然の使命というものではおざるまいか」

光秀は、切々、彼を説くのであった。

城中へ行つて、波多野秀治兄弟を説はたのひではるけとて、招降の使いを命じ
たものである。

それも、理において、嫌といえないように、光秀は明めい晰せきに理論だてて説き伏せた。大善院の見たところでは、公平に見ても、まだこの八上の城を挟はさんで戦っている攻防両軍の勝負は、いずれ

が勝ち、いずれが衰えたとも見えない。むしろ寄手は、やや攻めつかれ、守城側の士気のほうが、はるかに振っているかとも思われるのであつた。

——が、否^{いな}み難く、大善院の住持は、

「成るか成らぬかは、天意にまかせて、ともあれ、最善の努力を尽しましょう」

と、約した。

光秀は、懸念した。彼の口^{こうふん}吻からも、すでに事の不成功が予感されたからである。無条件では——と、この交渉に熱意のもちきれないような容子^{ようす}が、住持の面^{おもて}にありあり読めた。

内心、功を収めるに急だつた光秀は、自身から一つの具体的な

条件を提出した。——大善院は、いかに彼が焦心あせつてゐるかを憐れみながら、

「それならば、城中へお使いに参るにも、單に降伏をすすめるといふのでありませぬゆえ、守將の御面目も立ち、事を運ぶにもまことに運びよいかと思われます」

と、多分にその可能性のあることを告げ、やがて深更しんこうに退去した。

大善院では次の日、本目ほんもくの西藏院さいぞういんと協議をすすめ、和議の幹旋あつせんにあたるべく、万端その備えをしていた。

程なく、光秀の本営から、西藏院側へ、ひとりの老女が送られて来た。それは光秀の母ということに表面いわれていたが、事実

は、かれが養っている叔母であることは旧臣などみな知っていた。また西蔵院や大善院側でもうすうすは知っていたが、飽くまで光秀の母として鄭重ていちょうに取り扱い、城中との折衝せつしょうが運ぶに至つて、これを人質として、守將の波多野秀治はたのひではるの許へ送つた。

それに従したがいて、当然、大善院の住持も、使いとして城へ行つた。秀治と会つて、彼が伝えたところは、

「もともと信長公の御本意は、室町以後の諸国の乱脈を、統合一和するにあつて、決して各地の旧家旧領の制を、徒らいたずらに打ち壊し、また徒らどうざつに討殺することが、本来の御趣旨ごしゆしではおざらぬ。――

光秀どのが最もつよくいわれている重点はそこで、たとえ御開城あるとも、誓つて、本領ほんりょうあんど安堵と御家名の存続は請うけあうとの

固い御約定ごやくじようを示されておる。御母堂までこれへ遣わされてまでの御誠意に対しても、何とぞここは御賢慮ごけんりよのほど切に仰ぎあげまする」

それに対して、波多野秀治は、

「降伏はいやだ。しかし対等の和談ならば」

と、いい、また、充分心のうごいた証拠には、

「ともかく、光秀と会見してみての上で」

と、まで応じる色を見せて来た。

その結果、光秀と波多野秀治とは、まったく素肌すはだな心と心をもつて、話し合ってみようとなり、一日、本目ほんもくの西藏院で双方

会見の約束が成り立った。

ふた
一二つの門もん

「——お見合わせになつてはいかがです。断るぶんには、今からでも関かまいますまい」

一部の将士は、波多野秀治の出城を、心もとなき思ひらしく、切に諫いさめた。

右衛門大夫秀治うへもんだゆうひではるは、きよう城を出て光秀と会見するため、もう身支度から供揃ともぞろいまでしているのである。何で今さら——といわぬばかりな顔して、

「いかに光秀なればとて、自身の老母を質しちとして、この城内へあ

ずけておきながら、この秀治に危害を加えるはずはあるまい。安心せい」

と、笑つて出かけた。

いうまでもなく和睦わぼくのための会見だ。服装もつとめて平和的に装よそおうが礼儀である。しかし万一を慮おもんぱつて、供には屈強さむらいな士ばかりを選よりすぐつて連れて行つた。騎馬、徒歩かち、総体八十余名という人数。かなり物々しくはあつた。

列は、本ほん目もくの西蔵院につく。

住持以下出迎える。

山門に駒をつないで、右衛門大夫秀治は、院内へ通つた。

時刻をたがえず、明智光秀の側でも、すでに来ている。大書院

二間を抜いて、西の間に城方の波多野主従、東の間に寄手方の光秀とその侍將たちが、おごそかに居並んでいた。

きのうまで、城壁と濠ほりをへだてて、矢弾やだまを交わして来た敵味方が、いましきめと一すじを間において、こう対坐したのである。

「……………」

らんらんとした眼と眼が、いずれも卑下ひげなく、相手方の顔やすがたを見つめ合った。瞬間は、やはりどうにもならない。味方敵方の意識に圧しられて、顔のすじも肩の骨も、硬こわばりきったままだった。

しかし西蔵院や大善院の住持が出て、きょうのよろこびを述べ、この長い籠城ろうじょうと猛攻の根くらべが、平和裡りにおさまって、波

多野氏の旧領も安堵あんどとなれば、領民もどれほどありがたいと思うであらうか——などと巧みに扱うと、ようやく、双方の心体もほぐれ出して、そこに何とはなく人間的な親しみすらお互いにわきはじめた。

「何もありませんが」

と、僧衆が立ち出で、
饗きよう 応おう の膳がくばられる。光秀は、膳

部を見ると、

「こう闕しきいをへだてていては、いつまでも対峙たいじしているような形でおもしろくない。打ち交まじろうではないか、一名おきに」

と、みずから努めて親しみを寄せて行つた。

波多野秀治は、彼よりもつと磊落らいらくだった。ほんとに交まわれ

ば赤裸になれそうな人物である。光秀のことばに、

「いかにも」

と、すぐ同意を示し、すすんで床の間をうしろに光秀と隣りあつて着席した。

光秀は、杯をすすめ、また、籠城百日に近いあいだの防戦ぶりを、口を極めて賞めた。

秀治は、哄笑して、

「そうですか。そんなに寄手方としては、攻めあぐみましたかな。面目至極じゃ。惟任これとう光秀どのの軍勢に持て余されたとあつては

――

と、酒はつよいとみえ、すぐ杯をほしては光秀に返しながら、

秀治はなお談じる。

「城攻めの成否は、またたくまに陥^おちれば陥ちる。或る期間をすぎて、陥ちこじれると陥ちないものでござる。城中の人間はいくらでも飢餓と危険に馴れて来ますからな。すでにそれがしの八上^{やかみ}の城なども、それになりかけて来たところで、広言ながら、この先まだ一年や一年半は支えてごらんに入れてもよい。はははは」

ふと、光秀が座中を見わたすと、城方の者は、云い合わせたように、箸^{はし}もあまりとらず、杯も唇^{くち}へ運んでいなかった。

——ああさすがに嗜^{たしな}み。

光秀はながめ遣^やつてひそかに感服した。

（みなが、揃^{のど}つて、喉から手が出そうな食物を——日頃の飢^{ひも}じさ

を、じつと、つつましく^{こら}忖えているな）

と、察したのである。

城中にはすでに二十日^{はつか}も前から兵糧^{まった}が完く尽きているはずである。ここにいる城方の面々も充分に食べていたとは思われない。食べていたにせよ、ただ露命をつなぐに足りる程度に胃の腑^ふをしのいで来たに過ぎまい。

それを、いかにも、

（こんな食膳には飽いている）

という顔して、珍味^{ちんみ}佳酒^{かしゆ}のまえに、泰然^{たいぜん}としているのは辛いだろう。武士は食わねどというが——また、これもきょうの和睦^{わぼく}の交渉に強味をもつひとつの兵法とはいいいながら。

光秀は、秀治へいった。

「御家中の方々みな、主君のあなたへ御遠慮のように見うけらるるが、どうか其そこもと許よりお声をもつてちと過すべせと、おゆるしを与えて下さらぬか。われらの方の者どもは、かくの通り気きままに頂戴しておるゆえ」

「やあ、お心こころ入れな」

と家来思いな秀治は、自分がすすめられたより欣よろこんで、さて城しろ方ろかたの一同へ向い、

「飲め飲め。せつかく、ああ仰せられるものを、辞儀固くして、戴かぬはかえつて無礼に似る。——飲めぬ者は箸など取れ」
と、いった。

黙然と、城方の面々は、かしらを少し下げた。それからおもむろに箸を上げ、杯を手にし始めた。努めてがつつかないように。

会見の最初からの約束で、今日の一会は、いわゆる厳めしい談判ではなく、勝敗優劣の念も去つて、酒間の談笑のうちに、和そうと思えば結び、非と考えたら別れよう——そういう条件のもとに敵味方一座したものであるから、光秀と秀治とは、この辺からぼつぼつその話に触れているような容子であつた。

至極、武人肌でまた磊落な波多野秀治は、光秀のものやわらかさや、驕慢きようまんのふうもなく、心から接待してくれる態度に、すつかり感激してしまつたらしく、

「爾後のおあつかいは、御身にまかせる。ただ城中の者の生命と、

その後の扶持ふちだに保証して賜るなら」

と、無血開城の大事を、ほとんど一いち諾だくにひとしいことばをもつて、光秀にこたえているのだった。

「いや其そこ許もとが、それ程までに光秀を信じて下さるなら、信長公へたいしては、光秀かならず一身を賭としても、八上城の旧領安堵のことと御家門諸臣の永続は、おうけあいいたし申す。誓つて、御名誉をも傷つけはいたさぬ」

光秀もまた、それに対して、力をこめて云った。

宴が終る。

終つてまた、会談に入る。

和議はここに成った。剛ごう愎ふくな波多野秀治は、

「おまかせすると決めたからは、すべてを貴所に御一任する」

と、むすんだ。

「では、このままの休戦状態を、長く滞^{とどこ}らせておいては、兵と兵

のあいだに、勝手な事端をおこさぬ限りもない。ここからすぐ御

同伴申すゆえ、安土^{あづち}へ参つて、信長公に直接お会いなされては如

何」

光秀のすすめに、

「異存はござらぬ」

と、秀治はこうなると飽くまでさっぱりしていた。

城中へも、使いが行く。

寄手の陣へも、

（和談成立、数日休戦）

の趣を、おもむき光秀から伝令をもつて、諸所の攻口へ伝えしめる。

かくて、ひる午まえからの会談は、半日にして一決していた。また

夕餉時ゆうげどきとなつたので、夜食は光秀の饗応として、陣中から酒しゅこ

肴うすべてを取り寄せ、こんどは精進料理に限らない晩餐ばんさんとな

つた。

秀治も、家臣一同も、すっかり心をゆるしたものの、午ひるよりは

よく過した。そして灯ともし頃、ここで身支度をして、すぐ安土へ出発となつた。

「御乗馬は、西門口へまわしてあります。御家来方も、はやそこにてお待ちうけです」

右衛門大夫秀治は、さいごに室を立て、三、四名の側臣にかこまれながら寺の玄関を出たが、そこで案内者として待ちうけていた明智方の人々がそういうので、

「御苦勞」

と会釈しながら、夕闇の境内を縫って、西門の方へ従^ついて行つた。

ところが、彼よりも先にどやどやとここを出た波多野家の諸臣は、同じように外に待っていた明智方の武士たちに、

「御主人の御乗馬は、東門の外につないでおきました。どうぞ、あちらへ」

と、指さされたので、彼らは主人の秀治が行った方角とは真反

対な、東門の方へ伴ともなわれていたのである。

いずれ自分らの主人は、すぐあとから来るものと信じていた。

しかし、東門の外へ出てみた途端にふと怪しんだのは、そこに待っているはずの乗馬も小者たちの影も見えない。ただ寥々りょうりょうたる夕闇があるだけだった。

「御乗馬や供の者は、いずれにおりましようか」

一団になつて佇たたずみながら、波多野家の臣たちがこう明智方の者へたずねると、そのことばが終らないうちに、四方の夕闇から一斉に答えたものがある。

ド、ド、ド、ドツ、ドツ――

銃声と、弾たまけむりだった。

何でたまるう。そこにいた約四、五十名の人影は、折重なつて打ち倒れ、或いはのけ反り^ぞ、或いは跳びあがつた。

口々に異様な声で、

「――あつ」

「計つたなッ」

「ひッ、卑怯！」

と、いうような叫びが渦まいたが、それも瞬間。

辛うじて、弾をのがれた三分の一ぐらいな人々が、

「ちッ、ちくしょうッ」

「うぬッ」

と、明智方の武士へ向つて、大刀を抜き、眼をいからして、猪^ち

よとつ
突して来た。

けれどそれに対しての、第二段の備えのあつた明智方では、たちまち木陰や物陰から、一隊の槍組をさしまねき、

「ひとりも遁^{のが}すな」

と、追い包んだ。

夕月の下に、青光りするものはみな鮮血であつた。生きて八上の城へ馳^はせ歸つたものは、十人に足らなかつたろう。——その余の小者はすべて明るいうちに捕虜^{とりこ}となつていたものだった。

東門の銃声は、当然、宵のしじまを破つて、西門の方まで聞えた。

右衛門大夫秀治と、近臣の三、四名とは、ちようど、たつた今、

西門の外へ足をふみ出したところだった。

さすがに、休戦中の銃声には、剛愎ごうふくな彼も、愕がくとしたらしく、低い石段の途中に、その歩みを立ちすくめたまま、

「光秀どの！ 惟任これとうどの」

と、すぐ前後を見まわした。

その一瞬へ来ても、彼はまだ光秀のきよようの饗応に見えた好意や、あの温和な物ごしや、なおまた固く誓った和議に対して、疑いをさし挿はさんでみようとはしなかったのである。

「や。お見えになりませんが」

「いや、すぐ今の今まで、伴つれ立っていたが？」

秀治は、降りかけた石段を後ろへもどった。そして、自分が先

に來過ぎたかと——西門をくぐつて境内のほうを覗きこんだ。眞つ暗な門の陰からピラと魚に似た光が走った。大型な笹穂ささほの槍であつた。無意識に——

「ばかッ」

と、秀治はさげんだ。

怖ろしい大声だつた。山門の棟木むなぎにぐわんと鳴つたような。——それと共に、彼の佩はいていた陣刀は電光をえがいて槍のケラ首あたりを斬り落していた。

しかも、彼の眼にとまつたのは、その一槍だけだつたが、事實はうしろからも一本の槍がいちどに彼の身ひとつへ蒐あつまっていたのである。陣刀一閃せんのもとに、彼が前なる一槍を斬り落していた

とき、彼のからだは、そのまま横へ泳いで行つた。二カ所の槍傷に堪えやらず――。

「ううむッ。小^{しょうじん}人^{にん}めッ」

光秀の奸智^{かんち}を罵^{ののし}つたのであろう。そう唸^{うめ}きざま、山門の壁に身をぶつけると、そのまま倒れて息絶えた。

この突発事に、当然、彼の近臣、三、四名も無事でいるわけはなかった。けれど、その人々も網のなかの魚でしかない。あたりに潜^{ひそ}んでいた鉄甲の武者の、夥^{おびただ}しい人影は、たちまち包围して、縛^{くく}りあげたのか、斬りころしたものか、その結果すら見え分かぬほど、手早く仮^{かしやく}借なく始末してしまった。

八上の城は、こうして落城してしまった。

守将なく、重なる部将も、みな城外へ出て、だまし討ちに打たれてしまつては、いかに頑強な城兵でも、支え得るわけもない。

一難を抜いた光秀軍は、つづいて、赤井一族の宇津城を攻めやぶり、進んで福知山の鬼ヶ城を略し、ここに丹波全州の平定を完うして、援軍の丹羽、織田信澄らの味方へも、まず面目を保つたし、安土へ対して、勝軍を報じることができたが——彼の心中には、この勝軍を心から歡ぶことができたかどうか。

その後、八上城の残軍は、城を出ても、ことごとく光秀に心服したかのような色を示していた。しかし世評は、彼をめぐつていろいろに沙汰した。

もつとも多い非難は、

「いかに功を焦心あせればとて、母なるお人を城方へ人質としてさし出す所為しよゐはなからう。しかも、城將をあざむくための方便とすれば、危ないことは知れているに」

と、いう声だった。

かりそめにも母と名のあるものを、光秀たりとも、そんな具には用いていない。人質に送ったのは、実は叔母であつたのだ。以もつて、光秀はみずから慰めようとしたかもしれないが、やはり慰めきれないものが、心にわだかまっていたにちがいない。

彼は、荒木村重のように、荒削りな神経の持ち主ではない。いや人いちばい纖細せんさいでもあり、また正邪を知り善惡の批判にあきらかな知能である。

それだけに、あとの苦味にがみはいつまでも消えまい。

亀山領内の民治には、明主ぞ仁君ぞと仰がれていながら、その政治的手腕にも似あわず、軍事にかけては、焦心あせり気味がみえ、
ふてぎわ不手際が目立った。殊にそれを、三木城その他の攻略を遂げた秀吉の行き方と較べるにおいて、一だいちんまずいと思わせるものがあった。

鷹たかを追おう

信長も、多忙であつた。

わけてここ両三年の生活は。

彼のいるところ、政務の中ちゆうすう 枢すうとなり、彼の赴おもむくところ、軍の本營となる。

そのあいだに、好きな角力すもうを見たり、山陽、山陰その他の戦場から戻つて、折々、伺候しこうする部将をねぎらつては、大いに酒宴も張り、例の、

「——人生五十年、ゆめまぼろしの如くなり。死のうは一定じよう」
とある得意な小舞を歌つてみせたり、また、家臣と家臣の家のあいだを取り持つて縁結びの世話までやいていた。

細川藤孝ふじたかは、丹後の一色義直しきよしなおを亡ぼして、その田辺の城を、信長に献じ、信長から、

「御身、そこに在あるべし」

と、ゆるされて、いま、丹後一円の地を所領している。

その細川藤孝と、隣国丹波の明智光秀とは、親戚以上の親睦しんぼくをつづけている。

ふたりの仲は、信長にまみえる前からの交わりだった。

まだ光秀が時にも主にもめぐまれず、越前の朝倉家に客となつて、訪う人もない浪宅に微禄びろくしていた頃、初めて門をたたいて、将来の希望を語りあつた人こそ細川藤孝であつた。

その将来の人物を、

（信長のほかにはない）

と見極めて、共に、越前を脱して、将来の計を岐阜城に説き、以来、款かんを通つうじて、今日までその志を、信長に託して、成し遂げ

て来た——藤孝、光秀のふたりだった。

だから、ふたりが会えば、かならず往年のことを思い出して、

「あの時は。この時は」

と、苦勞を語りあうことが、他目にも羨ましいほど親しい藤孝

と光秀なのである。

信長も、この二人の功は、充分に認めていた。いわゆる譜代ふだいの臣以上なものがある。とりわけ細川藤孝には、その家筋の高さに對しても、別格の尊敬を払っていた。

「幽齋ゆうさいの息子、与一郎忠興ただおき、あれはもう幾歳いくつになるな？」

ふと、老臣の林佐渡は、信長から突然、こう訊かれてまごついた。

幽齋というのは、細川藤孝の道号である。歌道や茶道では、幽齋のほうが通りがよい。信長もまた親しみを示しているつもりか、多くの場合、その方の名を呼び慣れていた。

「さあ？ ……」

と、佐渡は額ひたいに手をあてて、

「御記録所へ参つて、調べて参りましょうか」

と、立ちかけた。

「それには及ばん」

信長は、制した。近ごろは、佐渡もすこしもうろく耄碌気味な、と舌

打ちするように、

「二十歳はたちは越えたらうな」

「細川どのの御嫡男は、初陣ういじんこのかた、御功名も度々聞えて

おりますれば、はや、それどころではございますまい」

「光秀には、たしか、息女むすめが多かったように聞いておるが」

「お子、七人のうち、上の五人までが、女子おなごばかりとか……いかおこぼしなされておられましたか」

こんな座談が出てから間もなくである。信長はいつのまにか、細川、明智両家の家庭にすっかり詳しくくわなっていた。縁故のある臣下からいろいろ聞きあつめて耳ぶくろへ入れておくので、誰よりも精通せいとうするはずであつた。

その年の九月。

両家のあいだに、華やかな婚儀が執りとむすばれ、媒人なこうどは、

「我なり」

と、信長みずから名乗つてそれを盛大にさせた。

婚儀の後、花婿花嫁は、安土にお礼に来た。至極、似あいの夫み婦よであつた。花婿の与一郎忠興は、後の細川三斎。

花嫁は、明智家の三女で、時まだ十六の蕾つぼみであつたが、やがて細川家の内室、ガラシヤ夫人といえ、垣間かいまみ見たこともない者まで、美人だそうな——と噂した。

内には、臣下と臣下との、こういう家政的な些事さじにも心を用いながら、外にはまた、着々と、大局へ向つて、大きな手を打つてゆくことも忘れていない信長であつた。

いま、彼の企画きかくにある最大な宿題として、密ひそかに手をつけてい

る問題は、

对本願寺との政治的解決

であつた。

それを為すに、

「機会は今だ」

と、彼はみたのである。

およそ信長がここまで来る百戦苦闘のうちに、寝てもさめても、信長の苦慮となつていたものは、本願寺門徒の活躍であつた。表面的には、教団という極めて消極的な存在でありながら、その執^し拗^{つよう}な反抗と、抜けきらない潜勢力とには、まったく手を焼いて来たものだつた。

その本願寺に對して、

「一撃に抹殺せん」

とばかり、大坂出兵を斷行し、川口、桜ノ岸に、堂々と展陣して、しかも何の効果も挙がらず、却つて、彼らの結束と抗戦を強めたのみで退陣した元龜元年から——顧みると今年てんしやう 正八年まで——ちょうど足かけ十一年になる。

あきらかに、本願寺軍と織田軍とのあいだに、合戦が宣せられてから、実に、十一年間。この長期を、信長が、この怪敵のために、悩まされ、妨さまたげられ、また常に一部の兵力をそれに割さかれて来た有形無形の損害は、言語に絶するといつてもよい。

が——隱忍いんにんに隱忍をかさねて、いまやようやく、根本からそ

の患うれいを除くときが来た。いまこそと、彼はひそかに、手に唾つばして、それへ取りかかったのである。

八年の二月、大挙して、京都へ出た信長は、その夥おびただしい人数と行装ぎようそうの威を誇示しながら、山崎、郡山、伊丹いたみなどの大坂近郊を、巡遊していた。

「鷹を追うのじゃ」

と称して、鷹狩と触れてはいたが、その狩衣かりぎぬをかなぐり捨て、その将士の勢子せこに矢弾やだまを命じて、

「屠ほふれ」

と、号令一下すれば、石山本願寺を中心とする全大坂の教団きょうだん街んまちは、一挙に、灰ともなし得るほどな布陣と兵力と、そして明

瞭な意志とを、彼へ示していた。

そういう態勢を作っておいて、信長はおもむろに、

「どうするか？」

と、彼の思慮を、ながめていたのである。

足もとは見すかされていた。さしも全土にわたる教門の勢力をあつめて、この浪華ななわの一丘に、巍然ぎぜんたる特異な法城を構えていた石山本願寺も、もう以前ほどな実力はなくなっていた。

ここ十一年間の推移があきらかにその衰退を実証している。

まず將軍義昭よしあきの没落は、その第一だった。遠く聯携れんけいして、

腹背ふくはいからたえず信長を苦しめていた反信長派の一環、武田信玄

が忽然こっぜんと死去したことも、本願寺にとっては、片翼をもがれた

ようなものだったし、つづいて越前の朝倉、江^{ごうしゅう}州の浅井、伊勢の長嶋門派の殄^{てんめつ}滅をうけたことなど——満身創^{そう}痍の傷手^{いたで}だったといつていい。

わずかにたのんでいた上杉謙信も逝^ゆいた。紀州地方の雑賀門徒も、信長にくだつてしまった。松永久秀また討たれ、播州の三木城、伊丹城の荒木村重、丹波の波多野一族までが——相次いで、征伐をうけ、本願寺からながめているかすかな希望までを、地上から掃^{はら}いつくされてしまった形である。

なお強^しいて、恃^{たの}めば、

「東には、武田勝頼。西には大国毛利がある」

という豪語も吐けないことはないが、その武田も長篠^{ながしの}の一敗

に屏息^{へいそく}し、西国の毛利も、このところ一戦一退のみをつづけ、加うるに元就^{もとなり}以来の保守主義もあるので、果たして、この上積極的に東上の意志があるかどうか——すこぶる覚^{おぼ}つかないとみなければならない。どう樂觀的にみても、いまや石山本願寺は、あらゆる外勢力と絶縁された無援の島であつた。

兵略と、政略と。

こう二つは、いつも、二つで一つであつた。信長の胸の中では、いまや衰兆を現わして来た孤立本願寺にたいしても、

「陥^おとせば、陥ちる」

と、確信をもつて、ながめながら、信長はまだ、一氣にそれを、力攻しようとはしなかった。

「相成るべくは、一兵をも損せず」

と、思慮し、また、

「石山の法城を中心に、方八町の門前町、そのほか浪華^{なにわ}三里の内
の町屋、港、橋々などを、兵火にかけて、灰燼^{かいじん}とするも惜しい」
と考えているからであつた。

彼の兵馬が、表面、鷹狩となえて、大坂近郊の地を、示威的
に巡遊しているあいだ、彼の命によつて、洛中にとどまっていた
佐久間右衛門、宮内卿法印^{くないきようほういん}などの外交家たちは全力をあげて、
関白近衛前久^{かんぱくこのえさきひさ}にはたらきかけ、

「本願寺のために。いや、法燈の滅却と仏徒数十万を救う意味で」
と、理を説いて本願寺一類の大坂退去を慫慂^{しょうよう}していた。

近衛前久さきひさは、信長とも親しかつたが、とりわけ本願寺新門しんもん跡ぜきの教きょう如きようや、その父の顕如上人けんによしやうにんとは昵懇じつこんだった。

そんな関係もあるところからすすんで、

「身にかえても」

と、その衝しょうにあたることをひきうけた。

勅命そくせいを奏請そうせいして、まず、

「事なきように」

と、本願寺側を諭さとした。

けれど十一年のあいだ、全門徒の血と信仰をもつて、信長に抗し、ここに拠よつて来た本願寺としては、いまいかに恃たのむ味方を諸所に失ったからといって、

「では」

と、すぐ大坂から地方へ後退することも為し難かつた。

新門跡の教きようによ如は、強硬派の随一である。父の顕如が、

「——この上は」

と、大坂退去の意を発表すると、彼は彼でまた、

「われらは、一寸たりと、当石山御堂は退みどうきませぬ。たとえ父君

以下、門徒ことごとくこの地をお去りあらうとも」

と、号して、さらに防塁を築き、同心を語らい、廻文を飛ばし
などして、

「信長と最後の戦せん」

と、激氣いやが上にも、昂たかいものがあつた。

けれど、大坂を退く^ひべし、との通達は、もう一近衛^{さきひさ}前久の調停ではなく、すでに、朝廷からのお心遣いであつた。勅命であつた。

去ル程ニ、大坂退城仕ルベキノ旨、辱クモ禁中ヨリ御勅使降^{クダ}
 サレ、門跡^{モンゼキ}、北之方^{キタノカタ}、年寄共^{トシヨリドモ}如何アルベキヤ否ヤノ儀、
 権門^{ケンモン}ヲ恐レズ、心中之存^{ソシン}ジ寄ノ旨趣^{ヨリ シシユ}、残ラズ申シ出ツベキ
 ノ由尋ネ被^{マウサル}申——

と、その折の古記に見えたとおり、勅答を迫られていたのである。

衆議、また幾回かの評定をかさねた結果は、当然、こういう答えしか案じ出せなかつた。

第一には。勅命に違背すべからず。

第二には。所詮^{しよせん}、信長に敵抗しても、信長には勝ち得ない。

第三には。門徒一般の実状を見ても、既にその非を悟っている。これ以上、無辜^{むこ}の人命を犠牲にするは、仏者のえらぶ道ではない。

第四には。法燈の保存。

なお、ここは退^ひくべきであるという理由は、いくつも数えあげられる。

それに反して、強硬派の玉碎主義は、要するに、武門と沙門^{しゃもん}の立場を混同しているきらいがあつた。

結局、五月には、大坂退去が宣言された。それから、葛藤^{かつとう}

はあつたが、遂に、七月下旬から八月初めにかけて、最後までふみとどまつた強硬派の教如の一類もみな大坂を立ち退いた。その終りの日こそ、浪華津なにわづにこの街が開かれて以来の見ものであつた。法城うけとりやくの請取役は、織田家の臣矢部善七郎であつた。

大坂市内外にある本願寺の、端城はしろや木戸とりでの砦など、五十一カ所の守りは、つぎつぎに破却されていた。

いまは裸城はだかじろの石山御堂いしやまみどうに、矢部善七郎以下の夥おびただしい織田兵が乗りこんで来たその日まで、教如上人と六、七名の扈從こじゆうは、なお去りがてに残っていたが、善七郎から、

「御切腹のおつもりか」

と、糺ただされて、

「否、否」

と、上しょうにん人

以下は、ぜひなく囲みの一方を解いてもらつて、

悄然しょうぜん

、石山を立ち退いたものであつた。

伝来の宝物も、仏具調度の七珍八宝も、ことごとく堂宇どううのうちに遺したままであつた。

「やがて、信長が来て、検分みぐるのとき、醜みぐるしくも、取り乱したるも

のかな——などといわれては恥辱ちじよくぞ」

と、本願寺側でも、その以前に、あらゆる什物じゅうもつ宝器ほうきを展列

して、いちいち目録を添え、塵ちりを払い、欄らんを浄めきよ、立つ鳥水を濁

さず——のことばの通りきれいにして去つていた。

最後の最後までふみとどまっていた教如は、その去るときに、

法衣の袂へ、茶入れ一ツ入れて行つただけであつた。そしてその日のうちに、泉州佐野川の辺まで落ちのびて行つたという。

爰ニ大坂ヲ創テ初メテヨリ以来四十九年ノ春秋ヲ送ルコト、

昨日ノ夢ノ如シ、世間之相、事時之相ヲ觀ズルニ、生死ノ去

来、有為轉變ノ作法ハ、電光朝露ノ如シ、タダ一声稱

念ノ利劍、コノ功德ヲ以テ、無為涅槃之部ニ至ランニハ如

カジ――

當時の人、太田牛一おおたぎゅういちの手記によれば、大坂開市以来の繁栄

と、顕如、教如などの心中を、いかばかり口惜しくも名残惜しげんと、こう記述している。

――然リト雖モ、今、故郷離散ノ思ヒ、上下涙ニ打沈ム、然

ウ而^{シテ}、ヤガテ退城ノ後ハ、信長公ノ御成^{オナリ}アツテ、御見物ナサルベシ、其意ヲ存ジテ、退去ヲ前ニ、端^{ハシバシフシンサウチ}々普請掃除ヲ申シツケ、表ニハ弓鉄砲ノ兵具、ソノ員^{カズ}ヲ懸^{カケナラ}並べ、内ニハ資財雜具ヲ改メ、有^{アル}ベキ態^{テイ}ヲ結構ニ飾^{カザリオ}置キ、御勅使、御奉行衆へ相渡シ、八月二日未^{ヒツジ}ノ刻、雜賀^{サイカ}ノ浦、淡路島ヨリ数百艘ノ迎へ船ヲ寄セ、端城^{ハジロ}ノ者ヲ始メトシテ、右往左往ニ縁^{ユカリユカリ}々ヲ心ガケ、陸路海路ヲ蜘蛛^{クモ}ノ子散ラスガ如ク別レ候。
 イヨイヨ時刻到来シテ、松明^{タイマツ}ノ火ニ西風来ツテ吹き懸^{カケ}、余多^{アマタ}ノ伽藍^{ガランイチュウ}一字モ残ラズ、夜昼三日、黒雲トナツテ焼ケ終ンヌ：
 …。

故意か、自然か。

こうして極めて合法的に石山本願寺の空け渡しはすんだが、そのあとで、一炬いつきよ、全山の堂塔伽藍どうとうがらんと、多年の築城的門壘もんるいは、三日三晩にわたって、炎々、大坂の空に歴史の光煙こうえんを曳いて、すべては灰と化してしまった。

火は、あらゆるものの決裁と清掃を執り行う時の氏神うじがみだ。そして残る白い灰は、次の土壤どじょうに対して、はやくも文化の新しい萌芽ほうがをうながし、灰分的な施肥せいひの役目をはたしている。

このとき、誰が思い至っていたらうか。

やがて、この丘の灰のうえに、大経綸だいけいりんを抱いた主あるじが居館きやかんを構えようとは。

しかもそれが、安土を数倍も大きくしたような構想をもった、

かの大坂城の出現であらうとは。

いやいや、もつと、誰にも予想できなかったであらうことは、その大坂城に君臨するものが、いま中国の一隅にあるところの、筑前守秀吉なりとは——たとえそのとき、偉大な予言者があつて明らかに予言しても、万人が万人とも、誰もほんとはしなかったであらう。

折檻せつかん

涼みがてら——。あたかも、そんなふうにすら見える。

信長は、川舟で、宇治橋を見、そのまま大坂へ下つて来た。

本願寺開城の直後である。八月の十二日だ。残暑の陽は、川波を射、舳ふなべりをつよく刎はね返している。

「於蘭おらん」

「はい」

「何を考えておる」

「……べつに何事も」

蘭丸は笑った。

紫の幕とぼりが、信長と蘭丸だけのいる一ひと囲かこいを、めぐっていた。

近習の多くはみな艫ともの方に陽の直射を浴びている。川舟なので屋形かたは小さかった。

そのかわり、この一舟を中心として、数百艘の川舟が、笹の葉

を撒いたように清流をくだつてゆく。

「涼しさに居眠ったか」

信長も苦笑する。

風を孕^{はら}んでは、紫の幕が裾^{すそ}をはためかせる。蘭丸の顔に、その

色や、波の影が、頻りに映る、頻りに揺れうごく。

「料紙^{りょうし}、硯^{すずり} 筥^{ばこ}があるか」

「備えてございます」

「これへ」

と、信長も、さきほどから、実は何か考えこんでいたらしいのである。——で、蘭丸が、妨^{さまた}げぬように沈黙をつづけていたので、自分の思案顔に、ひとの顔まで、思案顔に見えたのかも知れない。

蘭丸は、硯すずりの面へ、水滴からわずかをこぼして、静かに墨を下ろした。気みじかな信長は、料紙と筆とを手にして、もう待っている。近頃になく、その眉に、険けわしいものが潜ひそんでいる。

「これに置きました」

「うむ、む……」

と、のみである。

——蘭丸はあとへさがった。衣摺きぬずれも憚はばるようである。信長は、何やら苦念しては書き、書いては眉こわを恐くしている。まったく、きついお顔である。敏感な蘭丸は、

——これはただ事でない。

と、ひそかに寒い思いがした。

人には、ゆめ、語れることではないが、蘭丸自身にも今、心痛にたえないものがあるのだった。——それと信長の眉のむずかしさと見くらべて、

「——何か、この身に」

と、そぞろ懼れ^{おそ}られたのである。

幼少から多年、信長に近侍しているので、信長の感情をその眉や唇^{くち}に見ることは、誰^さよりも敏^{さと}い蘭丸であっただけに、

（きょうのお書き物は、^{ただごと}凡事ならじ……）

と予察されたのであつた。

彼の直感^{あやま}は、過^{あやま}つていかなかった。けれど幸いにも、それが自分に対するものと懼^{おそ}れた心配^はは外^{はず}れていた。

その日、信長が船中で書いていたのは、折奉書三枚にもわたる長文の折檻状せつかんじょうであつたのだ。——或る一臣下の怠慢に對して、日ごろの憤りを発し、峻烈しゅんれつな辞句をつらねて、その罪状を責めつけたものであつた。

「いま大坂はお手に入り、積年の禍根かこんはのぞかれ、こうして宇治の清流を、爽やかにそれへ向つて御入城あろうという——かかる日に、どうしてそんなおむずかりを起されておいでやら？」

と、蘭丸はひとり呟つぶやいていた。けれど、こういう機微な心理になると、いくら信長の胸の中に住んでいるような蘭丸でも、

——わからぬお方。

と、つくづく思うしかなかった。

方八町四方という石山御堂の城構えは、三日三晩の火にかかっても、まだ一部の建物はこのつていた。

信長は、そこに入城すると、すぐ認めたおいた折檻状を、中野

又兵衛、楠木長安、宮内卿法印の三人にあずけ、

「佐久間信盛父子へ、これを渡せ」

と、使者の役をいいつけた。

信長が大坂へ入って、その占領地を檢分の後、第一に発したものは、怠慢な臣下にたいするこの、

折檻状

なるものであつた。

大鉄鎚は、佐久間右衛門信盛父子へ下つた。

いや、それを頭上に受けない者までが、例によつて、峻烈しゅんれつ

極まる信長のそれが始まつたかと、他人事ひとごとならず身をちぢめて、

「いつたい、どんな罪状で？」

と、成行きを見まもっていた。

使者の手は、冷然と、信長自筆の問責状もんせきじょうを、佐久間父子に

手渡したと伝えられた。

信盛父子は、ここ五年ばかり、石山本願寺に対する寄手の大將として、大坂の抑え城に在番していたのである。——つまり石山御堂の落城は、本来、彼の手によつてなされなければならない任にあつたのだ。

とかくして、五年の間、この対大坂の寄手勢というものは、何

もなすことなく暮れていたのである。

いわゆる無^む為^い空日を過していたのだ。信長が、いかにこの間を、焦^{じりじり}々思っていたことかは、今、その譴^{けん}責^{せき}状^{じょう}となつてから、初めてみな、

「ごもつとも」

と、思い当つた。

相手は、十一年余も、信長自身ですら手を焼いて来た門徒の本拠である。これが佐久間勢の一手で陥^おちなかつたからといって、ただそのことのみでは、そう責めもしまい。

信長が怒つたのは、次のような箇条によるものであつた。

一。Ⅱ在任五年のあいだ、ほとんど、戦争らしい戦争を開始

していない。これは世間がみないっていることだ。

二。Ⅱ力攻が至難なら、策略外交もあるべきである。しかるに、五カ年間、まだ、一度も、安土へ献策を携えて来たためしもない。

三。Ⅱ兵力不足を常に啣ちおる由であるが、信長としては、

三河、近江、和泉、紀州、そのほか根来衆など、七カ国

の在郷に、人力、兵糧、何事にもあれ、大坂寄手の勢へ与力すべしと申しつけてある。大将として信盛父子もそれは篤と承知のはずであるに關わらず、少しもそれらの人的資力も物資も活用しようとはしない。これ、無能、無策、未練、戦意に欠けているためでなくて何であろうぞ。

四。Ⅱこの間、軍費を冗じようひ費しながら、与力、被官ともがらの輩には恤あわれまず、ひたすら自家の費ついえを惜しみ、衆心みな軍を離れ、士紀また振わず、世上に織田軍たるの面目を汚し、この戦国の中に、ひとり悠々閑日を偷ぬすんで、今日に至る。実に前代未聞の怠け者とは汝らのことである。何のかんばせあつて今、信長にまみゆるや。

——大要、以上のような罪状をかぞえあげたものであるが、辞句痛烈、こんな生やさしい程度ではないのである。

このほかの条くだりにも、自身、面罵めんばするような激語がずいぶん見える。

たとえば、

「汝は、信長の代になつてからでも、三十年奉公して来たが、そのあいだ、佐久間右衛門が比類なき働きをしたと、世間から称えられたような例が、一ぺんでもあつたか」

と、いうような言葉や、

「丹波国にあるこれとうひゅうがのかみ惟任日向守の働きをみろ、天下に面目をほ

どこしているではないか。次には山陽数カ国を平定している筑ちくぜ

前守んのかみひでよし秀吉にも辱じたがよい。小身でも池田勝三郎は、花隈はなぐま

城を攻め陥おとしている。またそちと同様の宿老ながら、柴田修しばたしゆり

理亮勝家は、すすんで北国攻めに当り、難治の地に苦勞してい

るのを何と思う」

と、痛罵を加え、その上、

「汝のような者が、信長の統業下にあることは、世間のうたがい、物笑い、日本にとどまらず、明国みんこく、高麗こうらい、天竺てんじく、南蛮なんばんまでの恥さらしである」

とまで極言しているのである。

これを受けた佐久間父子が、いかに慄ふるえ戦おのいたかはいうまでもない。

信長の使者から、口上で、

「即日、遠国へお立ち退のきあるべし」

と、云いわたされた佐久間信盛父子は、いわゆる取るものも取り敢あえずといったような狼狽ろうたいぶりで、

「お詫びは、いずれ後から」

と、匆々、そうそう 高野山へ逃げのびた。

ところが、信長の令は、なおそこまで追求して、

「高野に在住は罷りならぬ」まか

と、達した。

信盛父子は、生ける心地もなく、そこからさらにまた、紀州きしゅう 熊野くまのの奥へ落ちて行つたという。

——譜代げにんの下人召使めしつかひにも見離され、足にまかせての逐ちく電でん也。われと我が草履を取るばかりにて、徒歩かちはだしのすがた、昨日はゆめか、見る目も哀れの有様とぞ。

当時の筆記に見ても、時人は何の同情も持たなかった。むしろ信長の嚴罰を当然として、この一事件を、冷笑視していたらしい。

森蘭丸も、そのひとりだった。

彼は、賢いので、こういう噂に対しても、自分から先に口を出して、死屍ししに鞭打むちうちつようなことは決して吐かなかつたが、近習の同輩が、あれこれと、佐久間父子のうわさをして嗤わらうと、

「あまりに、寵ちようぐう遇ぐうに狎なれすぎてお在いでたからじゃ。五年余の

間、天王寺に在陣中も、茶之湯ばかりに凝こられて、陣務はいつこ
う怠いとつておられたという。信長公にも、お茶は好きの一つであ
り、茶はよく遊ばされるが、佐久間父子とはお心入れがちがう。

……何事にせよ、手がける者の心入れ一つで、邪道ともなれば、
修養ともなる。ともあれ、五十年の長い間、それを黙もくつて視みてお
られた公も公なれば、甘えていた佐久間も佐久間。われらも、顧

みて、日常に誠めねばなりますまい」

こんな程度に、当らず障らずの批判はしていた。

けれど、実をいえば、蘭丸は心のうちで、

「あの御折檻状が、佐久間父子へ下るものでよかった。……ああ心配な」

と、人知れず、ほっとしたり、なお安んじきれないものを、胸の奥に残して、頻りと心を労^{つか}っていたのである。

それは、彼自身の問題ではなかったが、自分以上なものの身に^か関わることだった。

——と、いうのは、蘭丸の老母——森三左衛門可^{よしなり}成の後家の妙光尼^{みょうこうに}と、本願寺方の謀将鈴木重行^{しげゆき}とは、かねがね信長には

ごく内密で文通など交^かわしていた。

十一カ年、信長に抗戦した本願寺陣営には、実に、鈴木重行という稀^{きたい}代な謀將がひそんでいたのである。重行は、蘭丸の母の妙光尼が、後家となって後は、ひたむきに仏門を慕い、信仰のこととなれば、何ものもない女性であると知ってから、法話や仏縁を頼^{たの}つて、その人にいつか昵^{じつこん}懇をむすんでいた。

そして、蘭丸の母から、安土の動静を、それとなく、たえず探り取^うつては、本願寺方の作戦に利して来たのである。

その鈴木重行も、いまは本願寺一類の人々とともに、十一年の寓^{ぐうえい}営をあとに、何処かへとおく落ちのびてしまった。——従^{したが}つて、複雑な時局や、世情にうとい蘭丸の母自身は、自分の行為が、

今日までどんな妨さまたげを主家にしていたかなども、今もって気がつかず、ただ茫然としているのであろうが、

「もし、知れたら？」

と、このところ蘭丸の心痛というものは、一通りではなかったのである。

疾とくから、母に諫いさめたこともあるが、母は、絶対にそんなことはないという。早くから、良人とわかれた母にとって、たった一つの信仰であつたし、子として、無む下な意見立ても云いかねるまま、ただ、

「……困つたもの」

と、蘭丸は、今日まで、そのことについては、細心な警戒を、

母の周圍に払いとおして來たのである。

佐久間父子の処分が片づいた後も、蘭丸はまだ安心しきれなかつた。

蘭丸ばかりでなく、信長の衆臣はみな、過去の行為や、身を顧みて、

「他人事ひとごとではない」

と、無言のうちに、動揺していた。

大坂に停とどまることわずか五日、その月十七日には、信長はもう去つて京都へ移つていたが、二条城に入るや否、彼はまたまた、

宿老の林佐渡守通勝みちかつや、安藤伊賀守父子へ対して、

——遠国へ追放申しつけらる。

という折檻状を發したのだった。

「何事も、やり出せば、徹底的にやるお方。きっと、まだあるぞ」

とは、みなひそかに、囁き合っていたことだったが、譜代中の

譜代、林佐渡がその槍玉にあげられようとは、たれも思いもしていなかったし、当人さえも、寝耳に水であつたとみえ、譴責の

使者が行つても、

「お戯れではないか」

と、初めのうちは、真に受けなかつた程だつたという。

それもその筈。——今日、信長が彼を処罰した理由は、いまか

ら二十五年前、信長がまだ清洲にあつて暗愚で乱暴な若殿と——

四隣からうとんぜられていた頃の旧い問題なのである。

その頃、林佐渡が、彼にあいそをつかし、信長の弟の信行のぶゆきを奉じて、織田家のあとに立てようと謀たくんだことがある。

「いまだに、あんな昔のことを、深くお心のそこに据えておられたのか」

と、聞く者はみな呆れもし、慄ふるえ上がりもした。——二十五年という長い過去を洗いだてすれば、どんな者にも、多少の過失や怠慢は各自に必ず思い出された。

また、同時に追放された安藤伊賀守父子の罪案も、十四年前の旧いことだった。

信長が、伊勢へ出馬したとき、その留守に、甲州軍を引き入れようと計ったらしい形跡があつたのである。——が、これは未然

に敏くも信長の知るところとなつて、当時、安藤伊賀の一味は、わざ詫状じようを入れて、一応、すんだ問題になっている。

「——それを、十四年後の今日となつて？」

と、人々は信長の余りに強い執念に今さら驚きと戦慄を抱かずにいられなかった。——どうしても宥ゆるせぬものならその時罰しられたらよいと思つた。いまようやく、天下の大半がその有に歸し、敵性の牙城がじよう大坂までが掌てに入つたこの時に会して、何も、ふた昔も前の臣下の罪や過失を罰しなくてもよいであろうに——と、恐怖をとおり越して、臣はいささかその苛烈かれつな追求に対して、うらめしい感じさえ抱いた。

わけて、蘭丸の心痛は、ひと通りではない。朝夕、信長の側に

いて、信長の眉を見ているだけに、気が気ではない。

「……もし、母と鈴木重行しげゆきとのことが、ちよつとでも、お耳にはいったら」

と、逸いちはや早く、母のいる安土へ向けて、弟の坊丸ぼうまるを使い、

り、また兄の森伝兵衛にも言伝ことづけて、過去数年のあいだ、鈴木飛ひ騮だのかみ守重行と往復した手紙などは、一切、密ひそかに焼き捨ててしまふように注意しておいた。

その坊丸が帰つて来た。人目のないところで、蘭丸は、坊丸へたずねた。

「手落ちなくいたして来たか。また母の禪尼ぜんにへも、過去のこと、これから先のことも、ようくお心得こころえあるように、お諭さとしいたして

来たか」

「はい。母の禪尼も、今度という今度こそは、よくお解り下すつたようです。——けれど、兄上の伝兵衛様には、なかなかまだこれで心配がなくなつたとはいえぬと仰っしゃつて、嘆息しておいでになりました」

「まだ何か、後日の患うれいがあるといわれておいでたか」

「そうです。いくら手紙などを焼き捨てても、かんじんな鈴木飛騨守重行という者がこの世に生存している限り、なんにもならないと仰っしゃつていました」

「……ううむ、その重行は、本願寺一類と共に落ちのびて、今はどこにいるやら？」

蘭丸も、眉を曇らした。

名めいしょう將しょうと名めいしょう將しょう

大坂も。また本願寺一門も。——と、その総敗退が聞えて、この際、もつとも衝撃をうけたものは、当然、中国の毛利であつた。すでに、その地盤の一角、播磨はりまから但馬たじま、伯耆ほうぎにわたるまで、秀吉の進攻に、刻々、削り取られているところへ——この飛報である——さらに濃い敗色を加えたことは蔽おほいようもなかった。近畿きんきにも、丹波、丹後にも、恃たのむ味方は次々と倒れてしまい、いまは織田氏の圧力を、全面的、直接に受けもし防ぎもしなければ

ばならない立場を余儀なくされて来た。

毛利家には、元就もとなりの遺言であつたという、一つの方針があつた。鉄則があつた。

それは、

(分ぶんを守り、中国を固かため、父祖が百戦によつて得た領土を失うな)
ということだつた。

しかし、時の潮うしおは、決して、元就の遺言のみを、敢あえて避けてはいなかつた。

滔々とうとうとして、その保守主義の防塁へも、革新を迫つて来た。

吉川元春きつかわもとも、小早川隆景こばやかわたかかげも、智勇兼備とよんで恥かしくな

い大将である。ただこの国に生れ、この家門に育ち、その遺訓を

奉じて、

「中国の尺土せきどたりとも、敵に委まかすな」

と、戦い、また戦い、あらゆる善戦を施して来はしたものの、要するに、その起ち向っている立場は、時潮の逆であつた。――抗し得ぬ時代の怒濤どとうにたいして、ひたぶるにその保守的家訓の旗を、血にまみらしているものであつた。

さもあらばあれ、毛利も誉れある武門の家だ、両川りようせんも非凡といえる将器である。ここまでの戦績を見ても、遠くは越後の謙信、甲斐かいの武田までを、外交的機略に用い、また、その名分めいぶんを大きくするためには、前室町さきのむろまち將軍の義昭よしあきを自己の国土に引き取つて養い、中央には、本願寺の法門勢力の広大な組織とその

財その実力を余すなきまでに利用し、水軍に陸上に、あらゆる反^{はん}間の策、正面攻撃など——驚くばかりな大規模と遠^{えん}謀の下に、よく戦いぬいて来たことは、天下の認めているところだった。

もし、毛利方に、吉川元春なく、小早川隆景もいなかったとしたら、毛利輝元の名は疾^とくに屠^{ほうむ}られ、中国全土はこれより数年も前に、信長の治下に収められていたにちがいない。

いま、そのあらゆる外^{がい}郭^{かく}陣營を破られても、なおかつ、

——中国に毛利あり

の厳然たる勢威を失わずにいるのは、実に、智勇双璧の両川が、その指揮にあればこそといっても過言ではない。

——が、必然の結果として、年ごとにその陣容が、退^{たい}嬰^{えい}策^{さく}に

なつてゆくのは是非もなかった。

隆景は、もつぱら山陽方面の防禦ぼうぎよにあたり、吉川元春は、山

陰道のふせぎに當つてゐる。

これに対して、秀吉は、

「まず、鳥取の城を」

と、奪取にかかった。

そう意志して、行動にかかり出すまでには、かなり長い時間があつた。そのあいだが、秀吉の戦いなのである。

いざと、攻めにかかるときは、彼としてはもう仕上げを成すよ
うなものだつた。

数カ月前から、彼の命をうけた黒田官兵衛は、若狭わかさ方面へ潜行

して、その船舶を買い占め、鳥取地方に散在している食糧という食糧は、あらゆる手段をつくして他へ運漕うんそうさせてしまった。

また、吉川元春が、その味方へ、糧米ろうまいを積んでは、海上から輸送する途のみちあることを知って、沿海洋上に、船隊を配備して、それをも完全に封鎖してしまった。

「もう、よい頃です」

官兵衛から、時流れりと、鳥取城の弱まった情報を手にすると、秀吉は初めて、軍をうごかして、敵の城下に迫ったのである。

もちろん秀吉の軍がそこへ到るまでには、因幡いなば、伯耆ほうきなどに散在する敵の諸砦しよさいを、その前年から、次々と、攻め潰つぶして行ったものである。

鳥取の城には、初め、山名豊国やまなとよくにがたて籠こもっていた。

秀吉は、その前に、鹿野城しかのじょうを陥おとしたとき、多くの降人の中か

ら山名豊国のむすめを見出して、陣中に留めておいた。

「豊国ごときは、札つきの豹変ひょうへん武士である。初め、元就もとなりの威

に伏して、毛利に従い、後には、尼子、山中の勢力に脅おびかされて

それに組し、近年また吉川、小早川に款かんを通つうじて、この一女を人

質にさし出していたもの——かかる武士を動かすには、矢弾やだまを消

費するまでもない」

と、秀吉は、その第一次攻戦の折には、ほとんど戦わずに、山名豊国の招降に成功していたのだった。

それは、豊国のむすめを、きれいに粧よそおわせて、城から見える麓

の丘に立たせ、

「やよ、見給え」

と、城中へ呼びかけたのである。

豊国が、城から見ると、美しく化粧したわがむすめが立たされている。そしてその側には、新木のはりつけ磔はりつけばしらがそび聳そびえていた。

「むすめも不愍ふびん、因幡いなばの所領も惜しと思わば、よくよく御分別あるがよからう。——御返答は明朝まで相待たん」

と、城外から云い送った。

案のじよう、山名豊国は、その晩、使者を出して、降伏を誓つて来た。

けれど、彼の家臣のうちには、硬骨もある。

「余りといえ、ば、薄志弱行な」

と、主人ながら、豊国にあいそをつかし、結束して、豊国を、
他国へ放逐ほうちくしてしまった。

そして、急使を、毛利軍の吉川勢に報じ、

「急援をたのむ」

と、告げた。

吉川元春は、すぐその部下の勇将、牛尾元貞うしおもとさだを向けたが、元

貞が、矢癘やきずをうけて、病臥してしまつたため、ふたたび、

いちかわうたのすけ
「市川雅楽允、参れ」

と、代りの将を派遣した。

けれどなお、誰か、毛利一族のものを上に戴くのでなければ、

士氣の程も心もとないという鳥取からの要請に、吉川経家が
 新手八百余人をひきつれて、城へ入った。

前からの城兵とあわせて、約二千人が一つになつてたて籠った
 わけである。けれど、それ以外にも、城下の家族や百姓などの非
 戦闘員も悉く、城郭内に避難したので、たちまち在庫米は食べつ
 くしてしまった。

城の西を賀露川は、北流して日本海へそそいでいる。そして糧
 米を積んだ船舶は、ここを遡つて、城兵の糧を運んでいたのであ
 る。

だが、それは従来のもので、ここ二カ月余も、その軍需船は、
 はたと絶えてしまった。——若狭その他の地方にあって、糧米買

止めの策と海上封鎖に活躍していた、秀吉麾下きかの黒田官兵衛が働きは、ようやく顕著けんちよになり、城兵の胃の腑ふへ、直接こたえて来たのであった。

「もう城中の糧かては、あと半月を支えるほどもない」

急は、度々、吉川元春の手許へ告げられた。元春は、ために、数百石の糧米を、自領から取り寄せて、これを一船隊で海上から廻送したが、時すでに遅し、そこは封鎖されていたし、陸上には、秀吉の大軍二万が着いて、もう到るところを取り囲んでいたのである。

秀吉は、鳥取城外の帝釈山たいしゃくざんに陣し、水ももらさぬ包囲陣を布しいていた。

勇敢な城兵は、暗夜、たびたび袋川を泳いで、芸州の味方との連絡を計ろうとしたが、一兵たりとも、秀吉の布陣の網の目を潜くぐることはできなかつた。

みな、捕虜となるか、その場で殺された。

かくて、山陰第一の要塞ようさいを誇っていた鳥取城も、自焚じふんぜんめつ全滅か、開城降伏のほかはなくなつた。

まだ、もうひとつ、城兵にとって、致命的な事実があつた。

八月の一夜である。

瀕死ひんしの城兵に、糧かてを入れるため、毛利方では、運送船五隻に、兵船十隻をもつて護衛にあたらせ、海上から決死の覚悟で、賀露かろ川がわを溯のぼつて来たのであつた。

「来たな」

と、河口の警備隊は、これを繋ぎ狼煙つな のろしで、沿岸の味方へ知らせた。

夜半よなかだったが、封鎖陣には、一尾の魚も通さないほどな手配りがととのつていた。

羽柴秀長、藤堂高虎とうどうたかとら、細川藤孝ふじたかの援軍などが、一丸にな

って、河中の船団をつつみ、小舟から投げ柴しば投げ松たいまつ明などで、

彼の主船を焼き沈め、乗員三百余人の毛利兵を殲滅せんめつしてしまっ

た上、その主将鹿野元忠しかのもとただの首をあげて、城中へ、

「各が、鶴首してお待ちかねのものも、かくの通り」と、送りつけた。

七月中でさえ、鳥取城のうちには、もはや一粒の糧かてもなく、兵のうちにも、避難民の中にも、餓死や病者がふえていたところである。——もうそれに怒って反抗する気力も乏とほしかった。

羽柴秀長は、藤堂高虎に諮はかつて、もう敵方も参ったであろうと、能弁のうべんな一臣下を、使いとして、敵の一拠点いちきよてん、丸山の陣へ、

「はや、降伏せられよ」

と、説きにやったが、その使いは帰つて来なかった。よくよく調べてみると、案に相違して、使者は餓くびきられてしまったということがわかった。

「小癩こしやくな」

と、秀長も高虎も、直ちに、一挙粉碎をもくろんで、行動にか

かりかけたところ、忽ち、秀吉の本陣から、

「みだりに動くなかれ」

という嚴命が来た。

炎熱八月の雲の峰の下に、たいしゃくざん帝釈山はたのぼりの旗幟は、すずやかに、

また、こともなげに、ひるがえつていた。

例によつて、秀吉は、何かにつけ、いちいち安土の信長へ使いを派していた。

——かように計らいたいと存じますが如何でしょう。

——かくかくの事態に見えますゆえ、かく致しておきました。

時には、無用なと思われる事々まで、いちいち急使を立てていた。

信長の代理として、高山長房ながふさが陣中の視察に來た。それが月なかばの中旬頃。

九月——空しく過して——やがて十月となると、秀吉は初めて、堀尾茂助吉晴をよび、

「城中へ使いして來い」

と、命じた。そして、

「かような使いは、そちとしては初めての勤めであろう。心して参れよ」

と、いろいろな心がけを訓おしえ、茂助もいつか、自分の側で、かような任務にも当る一かどの武者になったか——と感慨深そうに彼のすがたを見まもった。

回顧すれば、もう十数年前になる。信長が、齋藤義龍よしたつの岐阜ぎふを攻めるに当つて、金華山の峰つづきを、その裏山から攀よじて奇襲したとき、山中で道案内をした一樵夫しょうふ——まだ十六、七歳の、やまが山家育ちの若者こそ、今日、寄手の一方に、一部隊をあずかり、人後に落ちない武者振りを見せている——この堀尾茂助であつた。ふと、今も、

「はやいものだのう」

秀吉は思わずにいらなかった。わが息子の育つたのを見るような眼でながめた。

「よくお旨を奉じて、行つて参ります」

茂助は、この大役に、感謝した。懸命な容子ようすが顔いろに出てい

た。

「待て、待て」

立ちかける茂助へ、秀吉は念を押すようにいった。

「この使い、できそうか。自分に問うてみて、——」

「はい。きつと」

「さきに藤堂家の臣は、即座に斬られておる。覚悟はあるか」

「もとより、事不調の節は、生きては帰らぬ所しよぞん存にござります」
すると秀吉は、急に不ふきげん極まる顔をして、

「坐れ。もう一度そこへ坐れ」

と、叱った。

堀尾茂助は、坐り直した。なんで急に秀吉の叱りをうけるのか、

彼には分らなかった。

「使者のつとめは、使者の役を完全にしとげるこそ、本分というもの、それ以外の覚悟など要らざることだ。死に赴くことなら余人でもする。敵を説く使者はそんな生やさしい肚では難しい。死にもならず、生きて帰ることもなおいできず、という境に性根をすえて説かねばならぬ。吉川^{きつかわ}経家^{つねいえ}も中国では誉れのある武将。しかも秀吉の大軍につつまれながらも、きょうまでの長日月を、かくの如く立派に守りとおしている者だ。それを説く。戦よりは難しいぞ」

秀吉のいうところを、茂助は、両手をつかえたまま、耳朶^{じだ}の充血してくるほど、熱心に聞いていた。

「御意。^{ぎよゐ}よくわかりました。めつたに生命^{いのち}は捨てぬよう、ただ懸命をこめて、行つて参ります。お使いを果して来まする」

「よし、行け」

茂助は、いちど自分の陣所へ退^{さが}つた。それから身支度をすずやかに改めて、ただ一人で敵の城中へ赴いた。

寄手の使者が来たというので、吉川経家は、

「ともあれ、会おう」

と、城中の一間へ彼を引いた。

かかる使いに、茂助はまだ不馴れである。また、特に弁舌の士でもない。

そしてなお、すでに、この城は持ちきれないことも、目に見え

ている敵ではあつたが、秀吉から云いふくめられて来た通り、茂助は、礼を篤^{あつ}うして、飽くまで敵の善戦^{うやま}を敬い、慇懃^{いんぎん}、理^{わけ}をつくして云つた。

「主人筑前守には、この鳥取城のお守りを、よくこれまでお支^{ささ}えなされたと、口を極めて、われら部下の者にも、嘆賞しておられます。けれど、もはや糧道も絶え、御名分も立つたというもので、これ以上、おすがりあつても、餓死のほか途^{みち}はございませんまい。あなた方武士たちは、斬つて出て、死^しに様^{さま}もお心のまま選ぶことができましようが、傷者、病人、また三千余の領民を共に餓死^{うえし}させるは、無情の至りです。私義^{しぎ}にこだわつて大義なきものです。ところで主人筑前守がお心では、わずか二人の者の生命だにお差

出しあれば、全城の生命は甦よみがえる。あなたの御名誉をも十分に考慮しようと、頻しきりに安土ともお打ち合せにござりますが」

「はははは」

経家は、黙って聞き入っている途中から、ふいに笑い出した。しかし嘲笑ではない。この使者の飾り気のなさを、その眼は、むしろ愛している。

「あいや、お使者」

と、彼もていねいに呼んだ。

「誰が、いつ、降伏致すと申しやったかな。筑前のひとり呑のみこ込みである。筑前が望みは、城中の難民やわが士卒の生命いのちではあるまい。鳥取の城であろう。そうはやすく参らん。これには、経家が

住んでおる」

「いや、おことばですが、この一城、攻めおとさんとするならば、これはもう陥ちます、誰の眼にも」

おと
「陥せ」

経家が、軽く、突き放すようにいうと、茂助はあわてて、

「お互い、武門の弓矢は、そう故なく用いるべきではありませんまい」

「そう秀吉がいうたか」

茂助は、顔あからめて、ちよつと次のことばを見失ったが、飽くまで、その誠実をこめて、

「はい。主君のことばでもありました。また、それがしの信じる

ところでもあります。そもそも、憎むべきものは、先に、この城主山名豊国を、家来の分際ぶんざいとして追放した山名の臣、中村春次はるつぐと森下道与どうよの二名です。この二人の首を打って、城中数千の生命いのちをお救いあるようにと、主人筑前からのおすすめにござります」

「要いらざることをいう。中村、森下の両名は、寄手にとっては憎むべき者が知らぬが、わが毛利軍にとっては、またなき忠臣、その首を渡すなどということとはできぬ。——できぬ相談というものじゃ」

経家は言外に、開城の意のあることをほの仄めかしていた。

この事ある前から、吉川経家としては、夙つとに或る決心を抱いて

いたのである。到底、持ち支えようはない鳥取城の守将として彼の信念した肚はらのものは、

おのれを殺して、衆を救おう！

それであつた。

ところへ、秀吉の使いとして来た堀尾茂助のことばによれば、

（あなたのお首は求めない）

という。

（前の山名豊国を追放した二臣の首さえお渡しあれば、あなたは
本国安芸あきへお引き揚げあるがよい。構えて、秀吉は、貴下の首を
安土へ献じて、自分の功を誇らんなどとは思っていない）

と、懇ろねんごに伝えてよこしたのであつた。

これは、経家の抱いている意志とは、反対な申し越しである。しかし、秀吉がその優越な立場に驕おごらず、たとえ政略にせよ、敵将に示そうとするその寛度と好意は充分知ることができる。

また、その使者も、智者弁者をえらばず、特に、堀尾茂助一箇をさも気軽そうに向けて来たのも、慚はなからず、敗者の心情を酌くんで、こちらの意気地を駆り立てないように、意を用いていることが分る。

「……………」

使者の堀尾茂助が、至って口少ない男なので、経家も、無言にまかせて、あれこれと、胸のうちに思案していた。

——秀吉のような、世事にも人間の心理にも理解のある者への

徒らな意地立てや強がりには、効^{かい}なきことと思われた。経家は、いま使者をうけたこの機^{しお}を逸^{いっ}すべきではないと、独り問い独り答えたあげく、やがて茂助へ向つて云つた。

「開城のこと、同意いたすであろう。立ち歸つて、筑前どのへ、そう伝えてくれい」

「えッ……。では」

茂助は、茫然とするほど、歡びにつつまれていた。こんなによさしく彼が城地の明け渡しを承知しようとは、まったく予期していなかつたからである。

「——だが、あわせて、この儀も慥^{しか}と、筑前どのへ御念を押ししておかれない。山名の二臣は、飽くまで馘^{くびき}ることはならん。この城

の守将は吉川経家なり。守将の責任は一切を負うもの。経家一人の切腹をもつて、城中の将兵を始め、難民どももことごとく御保護の下におひき取りねがいたい。——さもなくばこの城を、無血開け渡しは成りかねると」

「仰せ、立ち帰つて、主君におつたえ申しあげます」

「筑前どのの麾下きか浅野長吉ながよしどのとは、前々より面識もある。使者の見えたのを幸いに一書、託したいが、届けてくれるか」

「おやすいこと、お届けしましょう」

「しばし、休息していてくれ」

経家は奥にかくれて、手紙を認しめて来た。それをあずかると、

茂助は間もなく城を出た。

すぐ秀吉に復命した。

秀吉は浅野長吉を呼んで、書面をわたし、内容をたずねた。

「——やはり、自分の一死をもつて、すべてを赦ゆるされるならば——
—という旨しか認しためてごさいません」

長吉は、自分宛あてのその書面を、秀吉に見せた。

秀吉は、真から惜しむもののように、

「長吉、もう一度、そちと茂助と二人して行つて来い。そしてよく経家さとを諭し、山名の二臣の首を出して、自身には、芸州へ帰るようになすめたがよい」

といった。

浅野長吉はさつそく茂助吉晴と共に、ふたたび城中へ赴いた。

けれど、経家の心をひるがえすことはできなかつた。

「惜しいが、ぜひもない」

秀吉は、遂に、経家の要求を容れた。

望みがかなつて、十月二十五日の昼、吉川経家は、城外の真しんぎ教寺ようじへ移つて、切腹した。

——まだ若い身を、実にしずかに、すずやかに、腹を切つて、城中数千の生命にかわつて逝いつた。

同じ日。

吉川経家の近臣——なさにつぽんのすけ奈佐日本助、佐々木三郎左衛門、えんやた塩谷

かきよ高清の三人も、主君のあとを追つて、腹を切つた。

「いたましい哉かな」

秀吉は篤く弔つた。あつとむら

首は函送して、これを、安土の信長に供え、遺物の種々は、かんそう
かたみ
くさぐさ

安芸の吉川元春の許へ送り届けてやった。

「第一に、米を施せ」

秀吉が、鳥取城を占領すると、まづ先に手をつけたのが、城中の飢民と、城外の窮民の救済だった。

即日、三百石の米が、それらの人々を潤した。うるお

次には、交通の復旧である。袋川の橋も、その日から架設にかからせた。

「これからは鳥取も、羽柴筑前守様の治下になる」

と聞えると、驚かれるばかり、この城下の様相は一変して、山

陰地方の離民を吸収した。

戦のため、一時、ここを避難して帰つて来た土着人ばかりでなく、

「わしは丹後から移つて来た」

「おれは丹波だが」

と、語り合っている町人百姓もある。

物売りも寄る、職人も集まる、遊芸人も流れて来る。僧侶、医師、何くれとなく一つの社会を構成するに必要な百業の人々が、求めずして、集合して来る。それらの者の口うらをひいて見ると云い合わせたように、

「——筑前守様の御領下にいれば、何となく安心で、それに、同

じ暮すにしても、陽気で、張合いが持てて、何となく励みがつく。
——丹波、丹後、そのほか畿内^{きない}も、住むにはもう安心だが、陽陰^{ひかげ}と陽なたほどな違いがある」

と、いうのである。

批判も学問もない民衆の声とはいえ、どうやらこの相違は、近年に至つて、かなり明瞭に、民衆のうちに印象づけられて来た。

——国々各地方の戦いの真相というものは、口から口をつたわるのか、案外、民間などには知れていそうもないことまで、実につぶさに、また、かなり正確なところまで、よく知れているのだつた。

^{これとう}惟任光秀どのは、こう戦つてこう勝った。そしてこういう法

令で治めているが、内実は、どうだとか、こうだとか——までをいう。

また、信長が出向いて、直接、指揮に当つたり、占領治下の後始末したところなどは、余りに、その峻^{しゅんげん}厳に、民衆はただ恐れ竦^{すく}んでゐる風があつた。

たとえば、信長公の御出馬と聞くと、その地方の民衆は、

「もう戦^{いくさ}も長くない」

と、その威力によつて、どんな頑強な城も敵も瞬^{またた}くまに屈服するであろうことを信じるかわりに、

「あのお方が御征伐に向つて来られては、草も木も枯れはてしまふ」

平和の近づく歓びよりも、これから酷寒の冬に向うような恐怖に近い顛おののきのほうを先に抱いてしまうのだった。

それはともかく、鳥取陥落の報に、毛利方のうけた衝撃はいうまでもない。

吉川元春は、自身、安芸あきを発し、同じ頃、秀吉は、占領地を宮みや部善性坊やべぜんしょうぼう、木下重堅しげかたの二将にあずけて、姫路へ退陣して行つた。

急を救わんと駆けつけて来て間に合わなかった吉川軍と、功をとげて帰る秀吉軍とは、途中、伯耆ほうぎの馬之山うまのやまに、相互、必殺を期して対陣した。

だが、大軍と大軍は、相対峙あいたいじしたままで、一カ月余も、兵を

交えずに、そのまま、別れてしまったのである。

去るに臨んで、秀吉はいったという。

「戦わないのもまた、戦法のひとつだ。元春の器量はよく分つた」と。

吉川元春もまた、安芸へ引つ返しながら、独り唧かこつていたということである。

「中国の将来はいよいよ多難だろう。彼の如き者が現われる時代では――。今や世は凡事ただごとの戦乱ではない」

ちちのぶなが
父信長

いそがしい。だが、秀吉はほとんどそのいそがしさに、

「たまらぬ」

と、愚痴をこぼしたことがない。

鳥取を始末し、馬之山うまのやまに対陣し、姫路城へ帰るとすぐ、

「船舶はどうだ。充分に、用意はあるか」

と、舟手の者へ質問である。

四国へ渡海する考えを持っていた。なぜならば、これより前に、黒田官兵衛の手勢は、鳥取城の陥落も見ずに、寄手の陣から後退して、急に、淡路へ渡り、四国に散在している雑然たる敵性の鳥合ごうに、しらみつぶしの剿滅そうめつを加えていたからである。

四国に勢力を持って、頑然がんぜん、信長に対抗している敵は、由来、

ちようそかべもとちか
 長曾我部元親であつたが、信長は、その敵に対して、三好のみよし一
 族を遠くから援護して当らせ、ともかく今日までは、その伸しん展てん
 を制して来た。

ところが、その三好の力ぐらいでは、もう長曾我部勢力の防火
 壁として立つには、覺おぼつかなくなった。急は、秀吉に通報され、
 秀吉は、鳥取攻城中の兵力を割さいて、黒田官兵衛に仙石権兵衛を
 添え、

「四国の急へ」

と、赴かせたのである。

しかし、彼にとつては、飽くまで、中国攻略が経営の根幹こんかんで
 あり、四国は、傍ぼうけい系にすぎない。

「長曾我部元親なるものも、風の中に抛ほうつておけば、炬火きよかになる質がある」

とは思ひながらも、今は、それへ灰をかぶせて、埋うずめ火びの程度にしておけばいい。

あわじ淡路を占領して、大坂と中国との海上を安穩ならしめ、その須す本城に仙石権兵衛を入れて、四国の抑えを命じると、また直ちに、官兵衛を連れて、姫路へ歸つて来た。

それが、十一月の半ばごろ。

そして歸るや否——といつていい。

こんどは、備びつちゆう中の児島へ向い、出陣の指令を出す。

そのの麦飯むぎめしやまじよう山城に、植木出雲守うえきいずものかみが鮮明なる敵色をひるが

えしているのだ。兎島奪取の計は、その前から、官兵衛が、

「今のうちに」

と、しばしば献言中だったが、その都度、秀吉は、

「まあ、まあ」

と軽く聞き流し、

「あれには考えもあるから」

といていたものである。

この際、その考えとは、どんなことがわかるわけだった。――

――と、出陣の間際になつて、さては、と官兵衛には領^{うなず}けた。

かねて、秀吉は、長浜の自分の家庭へ、主君信長の四男於次^{おつぎま}

丸^るを、養子として乞^ねいうけ、妻の寧子^{ねね}と、留守中さびしげな老

母とに、それをあずけて中国へ来ていた。

その於次丸も、いつか、元服の年ごろとなつた。それかあらぬか、秀吉は、この春以来、

「武将の子だ。陣中の困苦にも馴れねばならん」

と、長浜へ迎えを出し、わざわざこの戦場の地へ、わが子を呼びよせておいた。

ときには、前線に連れて行つて、風雨にも打たせ、飢餓きがも味わさせ、怖い中を歩かせたりしていた。

「あんなにも厳きびしくなさないでも」

と、士卒たちが、傷いたましがるといふようなことも、秀吉は、知らぬ顔していた。

こんど、麦飯山むぎめしやまの出征には、兵力一万五千が発向はっこうを命じられてゐる。秀吉はもちろんそれに対して、老巧な臣と、勇敢なる

若手の将を、部隊部隊に配しはしたが、総大将としては、

「おつぎ於次にそれを命じる」

と、発表したのである。

そして、初めて軍の上に立つて、戦いへ臨むわが子を招いて、

「よく、まな習んで来いよ」

と、云いきかせた。

勝つて来いとも、死ぬ気で行けともいわなかった。時に、於次

丸はまだ十四歳だった。

やがて十二月の中旬なかばごろ、於次丸の軍は、功を遂げて凱旋した。

養父ちちでもあり、中国総督そうとくでもある彼だが、秀吉は凱旋將軍がいせんをむかえるの礼をもつて、わが子を待った。

そして、座しやうに請じ、肩を撫でて、

「よういたして来た。どうだ戦いくさというものは、おもしろいものだろうが。敵に勝つとは、こうするものかということが、わかつたであろう」

と、いった。

彼はまた、この歡びを、ひとりで陶醉とうすいしている気はない。もうひとり自分以上に飲んでもらいたい人がある。いや、自分の満足おほはさて措いて、その人のために、この歡びごとを、構成したのではないかとさえ思われぬこともない。

「於次が初陣の勲功いさおしをお聞きあられたなら、右大臣家におかれ
てもいかにばかりか、お歡びあろうぞ。さつそく、安土あづちへ使いを立
ててお報しらせ申そう」

浅野弥兵衛をして、その使者にえらび、即日、手書しゅしょを持たせ
て、安土へやつた。もちろん右府信長へ宛ててである。

書簡の内容をくだいていえば、秀吉の口吻こうふんのまま、こんな意
味がしたためてあつた。

はやいものです。於次も十四歳になりました。老母も愚妻の寧ね
子も、日ごろは、眼のなかへも入りたいほど可愛がつて、長浜の
奥から外へも出ませんが、かくては行く末大器となる質を可惜あたら
盲愛のため親が弱めてしまうようなものですから、このたび中国

の役を幸い、陣中へ招いて、つぶさに戦陣の悲雨さんぷう惨風を味わわせ、約一年を過ぎせました。

そのため、めつきり氣丈者になり、骨柄こつがらも失礼ながら、あなた様に髣髴ほうふつたるものが見え参りました。そこでこのたびびつちゆ備

中う麦飯山の植木出雲守の征伐をいいつけ、一万五千の大將となし、晴の初陣ういじんに立たせましたところ、攻略わずか一カ月足らずにて凱旋し、戦の統率とうそつぶりも養父おやの慾目よくめばかりでなく大出来でした。どうか共々ともどもおよろこび下さい。

ついては、歳としも押しつまりましたし、久々で御健勝の体をも仰ぎ申したく、近く歳暮せいぼの儀をかねて、出府しゅつぷいたすつもりです。そのせつなお詳くわしくお物語りしますが、さしずめ、於次も早、男

一人前の働きもいたしたことですから、この機会に元服させて、羽柴少将秀勝ひでかつと名のらせたくぞんじます。秀吉の名は殿より頂戴のもの、その秀の一字はまた親譲りのもの、御意ぎよい如何でございましょうか。

大体、こんなふうになら直な親心を述べた書簡であつた。

信長の歎びかたは一ひと通りでなかつた。そのてがみには眼を細くして何度も繰り返し繰り返し読んだものである。

——わが血をわけた子、四男の於次丸、それは臣下の家とはいへ、やはり他家の嗣子ししに遣やつてあるということは、親ごろの当然として、たえずどこかで、どう育っているやらと、案じられていたものにちがいない。

「信長も、心から満足いたしおると、よろしく伝えてくれよ。そして、筑前自身、歳暮に出府の由、心待ちにいたしおるとも申しそえて」

使者の浅野弥兵衛は、厚くねぎらわれて、姫路へ歸つた。

この前後である。信長にとっては、もう一つ同じことが重なつていた。

それは、年久しく、甲州に質子^{ちし}として養われていた末子の五男^{ごぼうまる}御坊丸が、甲州の使者に伴われて、安土へ送り還^{おく}され^{かえ}て来たことである。

ようじんぼり
用心濠

信長の第五子、御坊丸ごぼうまるというのは、ずっと以前、美濃みのの岩村城の城主遠山景任かげとうへ、養子にやった子であつた。

元龜三年の頃、その城主は、没落した。——城もろとも、御坊丸の身は、敵方なる甲斐の武田家に引き取られ、以来、信長の血すじなので、武田勝頼は、よい人質ひとじちと、手許てもとに養つていたものである。

それを——その御坊丸の身を、わざわざ甲州から送還して来たのであるから——信長のよろこびは、秀吉から於次丸の元服を報じて来た以上でもあるはずなのに、

「そうか」

と、いったのみであり、御坊丸の成人を見ても、

「大きくなつたの」

という一言を与えただけで、あとは家臣と一しよになって、甲州の使者を歓待する宴席へ臨み、自身、酒をすすめてばかりいる。「なぜか、御坊丸様のお帰りには、さして御喜色もうかがわれぬが」

家臣たちの方が、却って、こんどのことを、慶賀し合ったり、またその欣びの見えぬ信長を、物足らなく、感じたほどだった。程なく、甲州の使者たちは、満足して還った。信長はそのあとで直ぐ、

「時なるかな時なるかな。ついに待っていた日は近づいた」

と、侍側の腹心に洩らした。

そして、なおいうには、

「甲州の勢いも、はや落日のたいしよく褪たい色しよくをあらわして来たではないか。——われから求めもせぬ質子ちしを、送りかえして来たことは、われに寄せる甲州の媚態びたいでなくて何であろうぞ。この一事によつて見るも、甲軍の内容に昔せき日じつの意気は衰えて来つつあること慥たしかである」

果然。

彼は、わが子の無事成長を見たことよりも、その一瞬に、甲軍の衰すいちよう兆ちょうを直感して、父として欣よろこぶこと以上のよろこびを、べつなところに、もっと大きく、ひとり歓喜していたのであった。

使者の歓待に、みずから出て、何かと、胸をひらいて語り合っていたような振舞いも、使者のことばなどから、自己の直感をほくトしてその確信をつかむためであつたことを――後になつて、

「ははあ……。そういう御遠謀であつたか」

と、侍側の腹心たちは、ようやくさと覚り得たのであつた。

日ごろ、信長が手もとにあつ蒐めている甲州の近状やら、こんどの

使者の言などを綜合して、もう一つ、信長をして、甲州の亡兆を

確信させたものは、武田勝頼が、この夏の七月以来、父祖代々の

住居である躑躅つづじヶ崎さきの居館きよかんのほかに、「御新府」と称する新城

を、甲州にらさき韮崎ほとの辺りに築いて、もうそこへ引き移っているとい

う事実であつた。

信長は、そのことを指摘して、

「——信玄はやはり信玄であつた。彼は、その存生中に、天下へ
こう云つていた。われ一代のうちは、甲州四郡の内に、決して、
城郭は構えず、濠ほりひとえ一重の館やかたにて結構、事は足るなりと。……い
ま、勝頼の代になつて、そこを引き移り、新城に拠よつたのは、す
でに父信玄の自信を失つたからであらう」

ともいつた。

書庫のうちから、一面の城しろえ絵図を取り出させて、彼は、侍側の
腹心たちへ、

「それを展ひろげてみよ」

と、命じた。

味方のちようじゃ謀者が、苦心して写しとつて来た甲府の躑躅ヶ崎の
 絵図面である。これを世上一般では甲館こうかんと称したり、お館やかたとよ
 んだり、また躑躅ヶ崎城ともいつているが、決して城造りではな
 く、平凡平坦な土地に、水濠みずぼりひと重廻えめぐらした大きな邸宅にすぎ
 ないのである。

東西百五十五間、南北百六間という広さではあるが、一丈ほど
 の築土堤と、四方の門と、用心濠ぼりがあるだけだった。

「どうじゃ……これを見ても、信玄は、甲斐かい一国を城としていた
 意気がわかう。——しかしすでに、子の勝頼となつては、甲府、
 韮崎にらさきのみしか、彼の城でない」

信長は、すでに、甲斐一円を、わが掌てにしたように、城絵図を

のぞきこんで云った。

としま
年玉

多事多難であつた今年——天正九年という歳も、余すところ僅かになつた。

その年暮くに迫つてである。

中国の総督そうとく、羽柴筑前守秀吉、安土へ上府じょうふす——と公然にとな称えて、彼は、その任地播州姫路ばんしゅうからものしくも出向いて来た。

(いづれ年暮くには伺つて、ごきげんを拝しまする)

とは、さきに養子の於次丸おつぎまるの元服を書中で報らせたときにい

つてある。もちろん信長も待ちかねていたことである。

その於次丸、元服して、羽柴秀勝となつた養子ともなも伴つて。

そして安土へ、着くと、

「秀吉。ただ今、御府下に到着いたしました」

という趣おもむきだけを、早速に、城中へ達しておいて、ひとまず宿所

へ入った。

その由は、すぐ信長の耳へじょうしん上申される。信長は、

「来たか」

と、面おもてを明るくして、すぐ侍臣の堀久太郎と、菅屋すがや九右衛門を

呼び、

「久々にて、戦地から秀吉の上府じや。多年の陣務^{じんむ}、戦場の不自由、思いやらるる。——明朝の登城には、充分、なぐさめて遣わ^{つか}しと思う。饗膳^{きやうぜん}のこと、そちたち奉行^{ぶぎよう}いたせ。たくさん馳走してやれよ」

「承知仕りました」

「彼も、むかしの藤吉郎ではない、いまは数力国を所領する諸侯である。その心得をもつて致さねば、馳走も馳走にはなるまいぞ」

「はい。粗^{そりやく}略^{さく}なきよう今夕より諸事準備いたしおきまする」

ふたりは退^{さが}つて、膳部や調度の係をあつめ、献立の協議や、用具の品々を命じてから、城外へ出て行つた。

あらかじめ、明朝の秀吉の登城時刻やら、相^{しょうばん}伴の人員やら

を問い合わせ、また、信長の懇篤こんとくな内意をも伝えておくためであつた。

秀吉の一行が泊つた桑実寺くわのみでらの宿所は、まだ混雑していた。

「堀、菅屋の両名ですが」

と、幕打ち廻したその玄関へ訪れると、中小姓の福島市松と加藤虎之助のふたりが、出迎えに出て、

「どうぞ、お通りください。殿には、ちょうど唯今、さつそくに旅の垢あかをと、お風呂所へお入りになっていますが」

と、いそいそ両使しやうを請じて、寺中の大書院へ案内した。

ふたりは、湯から上がって来る秀吉を、そこで待ちながら、茶菓を運んで来る小姓や挨拶に来る家臣などの出入りを眺めて、

「羽柴どのの家風というか、ここへ来ると、家中の誰もが、まことに気軽で、容態ようたいぶらずに、世辞せじぶらず、至つてみな明るい感じがする。——一家中というものは、こうありがたいものだが、さてなかなかこう参らんものでな」

などと噂うわさしていた。

そこへ、黒く拭ふき磨よういてある方丈ほうじょうの大廊下の方から、秀吉のすがたが見えた。後ろについて来る家臣たちも、置去りにするほど、彼の足の運びは、無造作で早かった。

「——やあ、御両所」

座に着かないうちからである。

ふたりの後ろからこういつて、それから着席し、

「しばらく。御機嫌よう——」

は、手をつかえて、礼儀となつてからの、ほんの形式だけの挨拶だった。

堀久太郎と、菅屋の二人は、ここでふと、信長のことばを思い出していた。——むかしの藤吉郎には非^{あら}ざるぞ——と念を押されていることだった。

で、ここへ来ての挨拶にも、充分に心のなかで、その注意を構えていたのであるが、先方の秀吉自身が、いっこうむかしの藤吉郎と変りのない会釈なので、このつぎ穂が継^つがないように、二人とも、何かあわてて、

「やあ、これは」

といつてみたり、また、

「その後は、おつつがもなく、大慶至極で——」

などと改まつて、席を^{すべ}るなり、慇懃^{いんぎん}の礼を執つてみたりしていた。

「さあさあ。お寛^{くつろ}ぎあつて」

と、秀吉は早速にも、戦場のはなしである。

また、少し見ない間にも、安土の町とその文化が、長^{ちようそく}足な

進歩を遂げているには驚いた——などと座談に興じ入ろうとする。

「いや、実はその」

と、菅屋と堀のふたりは、辛くも、ことばをさしはさんで、

「今日は、右府^{うふ}様の御内意をもたらし、お使いに参つたのでご

ざれば」

いうと、秀吉は、

「や、や。わが君のお使いとして渡られしか。——粗略、粗略」

と、あわてて席をすこし下がって坐り直し、

「まだ、お届けのみに止めて、自身御挨拶にも罷り出ぬ間に、君より先へお使いを賜わつて、怠慢、申しわけもござりませぬ——。

して、御内意とは」

「いや、恐縮なさるには及びません。右府様にも、お待ちかねのこと、かたがた、其そこもと許との御対顔を、非常なおたのしみとして

おらるるらしく、明朝、筑前が登城のみぎりには、こう饗応せい、
こうもてなせと、御自身、おさしず遊ばすような次第です。——

で、明日の御予定などもあらかじめ伺っておきたいと存じて」

「それはそれは、身に余ることです。いつもながらの君恩」

秀吉は、平伏して、明朝の登城時刻を答え、また、二通の目録をさし出して、

「拝顔の儀をすました上は、またすぐ中国の任地へ赴かねば相なりませぬゆえ、一度の上府をもつて、歳暮^{せいぼ}の御祝儀と、年賀の年玉を兼ね、いささかばかり新占領地の国産の品々を携^{たずさ}えて参りました。これは筑前がほんの手土産^{てみやげ}代りと申しあげて、よろしく、御前へ御披露のほどを」

と、頼んだ。

一通は、右大臣家へ。

もう一通の目録は、御簾中、ごれんちゆうほか奥向女房衆へのものであつた。

「お取次ぎ申す」

と、押しいただいて、堀久太郎がふところに納め、

「では、おつかれのところでもあるし、われらも、明朝のお支度に忙しい。そろそろ、いとまお暇をしようではないか」

連れの菅屋九右衛門をうながして、そうそう匆々に辞しかけると、

「あいや、しばしお待ちあれ」

と、秀吉も一緒に立つて、そのまま奥へ立ち去った。

ぜひなく、両使とも、そこに佇たたずんでいたが、だいぶ手間どれるので、何故待たせるのかと疑いながら、広縁へ出て、折ふし冬ざ

れの寺の庭面にわもに、霜除しもよけをかぶつて、灰ほのかな紅くれないを見せている寒かん牡丹たんなど眺めていた。

——と、特徴のある、さつ、さつ、と聞える蹀音せがして来て、秀吉から二人をこう急せきたてた。

「さあ、参ろう。お待たせ致した」

おや？　と思つて振向くと、秀吉はすっかり衣服を着かえていゝる。しかも礼服であるのみならず、何を問う間もなく、もう玄関のほうへ向つて先に歩き出しているのだ。

使者の馬も、彼の馬も、もうそこに廻まわされてある。小姓たちが、わらわらと、先を争つて供につく。

「——何処いずこへ？」

と、訊く必要もなさそうだ。礼服を着かえて出て来たからにはお城へ行くつもりであろう。しかし羽柴筑前守の登城は明朝ということになっているから、城門でもまごつくだろうし、何よりは信長も予期していないことだ。どういふものだろう、その辺は？堀、菅屋のふたりは、すこし案じ顔して従^ついて行つた。秀吉は、顧みて、

「両所、御案内をたのむ。——君公の方から先にお使いを賜わりながら、明朝までとは申せ、御挨拶にも及ばず、城下におるのはまことに恐れ多い。——今日は、お目通りはさし控え、ただお広間まで参つて、陰ながらお礼だけを申し述べて参りとう存ずる。いざ、お先へ、お先へ」

と、道をひらいた。

そこはかとなく、仄ほかな燭しよくは燈ともされはじめている。女房衆の声かと思う。遠く近くきき々としたさざめきが洩れて来る。安土の奥の殿深くは、宵ごとにちかづく初春はるを待つ支度などに忙しいのであろう。

狩野山楽かのうさんらくの絵、また某なにがしの彫刻など、ここは当代の巨匠の精華せいかをあつめた芸術の殿堂でもある。むかし——といっても遠くもな
いわずか二十年足らずの清洲の小城から較べれば、ここの主あるじの右大臣信長も、時には感慨なきを得ないにちがいない。

奥殿と中殿とのあいだを渡してある唐橋からはしの欄らんに立つて望むと、
無数の舞扇を重ねたような天守閣の五層の廂ひさしと、楼門の殿閣でんかくの

大^{おおびさし} 廂^{ちゆう}とは、見事な曲線を宙^{ちゆう}に交錯^{かうさく}させている。そして山上

から麓^{てんてつ}にいたるまでも、豪壮な建築物の壁や屋根の森のあいだに点綴^{てんてつ}され、それから平面^{ひら}に展^{ひら}けている安土城下の全市街は、濃^の藍な暮色のなかに星を撒^まいたような灯の海をなしていた。

信長は、いま、食膳に向いかけていたが、

「なに、筑前が見えた」と

意外そうにいうとすぐ、一室から一室へと、歩を移して、

「袴^{はかま}。袴^{はかま}」

と、小姓の者へそれを急^せいた。そして毎夕、食膳のときには、

給仕^{はべ}に侍る女房衆のあきれ顔を振向いて、

「——夜食は、あとに致す。膳部^さは退^さげてよい」

と、いった。

あわてて小姓たちのさし出す袴をとって穿きかえるべく、その紐^{ひも}を結びながら、

「久太郎、九右衛門。……筑前はどこに通つておるか」と、信長はまた、一隅へ目を向ける。

堀久太郎と菅屋九右衛門は、こう信長を狼狽させたことをひどく恐縮しながら、

「お広間に通つてただひとり控えております。今日は、陰ながら遠く御礼のみを申し上げて、宿所に戻り、予定どおり、明朝登城して、お目通りを仰ぐつもり、お耳へ達しるには及ばぬ——と仰つしやつておられますが」

答えると、信長は、

「筑前らしいわ。気も軽々と見えたもの哉、^{かな}せつかくのこと、会わずに帰す法やあろう。こよいは、忍びの対面ぞ。会おうぞ！
そつと一目」

軽々しくも来たるもの哉——と、手をたたいて信長はすぐ袴を穿き^はかえたという。信長は気さくが好きだ。気軽な中に認められる誠意を砂中の金のごとく愛する。

——などと思つて、へたに狎^なれたりして近づけば、かならず激怒に触れるのだ。

事大主義は嫌いかと思えば、出入りの威儀、君臣の礼儀などには、徹頭徹尾、やかましやのほうである。

かりそめにも、それを軽んじたりなどしたら、いかなる譜代ふだいでも、諸侯でも、たちどころに痛罰を喰う。――で、侍側じそくも諸将も、またあらゆる文化面の人たちも、信長にまみえるときは、精進しょうじ潔斎んけつさいの心地で接する。挙止一語半句、みだりにも笑わず、かりそめに戯れない。

だから時々、信長としては、甚だじれつたいものを覚えるにちがいない。人間の味とか、本心の光とかいうものの乏しい嘘の中に住んでいる自分に、まず嫌気がさして来るらしい。いきなり客をまえに、大あくびと共に、伸びなどして、

（ああ、明けても暮れても、木像と話しているというものは、退屈だのう。とはいえ、木像自身も、身をもて余すじやろう。衣いかん

冠束帶そくたい、脱だごうにも脱だげんし——

こんなことをいったりする。

何か氣にくわないと、ひとのことをよく木像木像という。安土あづちの殿楼でんろうに人は多いが、その中にも彼はたえず追求しているのだつた。——真実な生活味と、人間の感じがする人間とを。

今宵しも、彼の求めている氣もちに、いつも、ぴったりする男がひよことおとずれて来たのである。

しかも、明朝登城という約束を、信長のことばでいえば、氣も軽々と、儀容や形式にこだわらず、不意に今夜のうち来てしまったという——まことに埒外らちがいな男である。

「やあ、久しや、筑前か」

はかまひも

袴の紐もまだ結びきれぬまに、彼はもう大股に広間へ来ていた。そしてそこにただひとり坐っていた秀吉のすがたを見るや否やの声であつた。

「さて、さて、懐^{なつ}かしいぞ。会^あうは明日^{あした}とのみ思^{おも}うていたに、よう来た、よう来た。——この広間では広すぎて寒い。こなたへ来い。此方^{こなた}へこそ」

と、さしまねく。

これは驚くべき例外である。右大臣家みずから先に立つて、しかも自分の居間へと案内するのであつた。

秀吉たるものも、この主君の歡待^{かんたい}に、どうして易々^{いはい}と甘んじていられよう。

「……あ、いや。わが君」

なにか、あわてていおうとはした。けれど、信長がさつさと行つてしまうので、身を屈めたまま、膝をもつて駈けるように追いつき、

「勿体ないお扱い、お座所にお在して、近臣へおいつけ給われ
ば」

「まあ、よい。入れ」

すでに、常住の一間の前である。信長の気もこよいは実に軽
々と見うけられた。——それ、筑前に褥をとらせよ、寒いから
手炉を与えよ、茶よりも、酒がよかろう、まだ夕食は前かすんだ
か——などという細々しいことまで、左右に命じ、彼にたずね、

さながら親身の弟でも迎えてくれるようだった。

「……はい。……はい。はい」

とばかりの他は、秀吉は平伏したまま答えも出なかった。何をいおうとしても、ただ感泣が先だつてしまう。有難なみだというものか、甘やかな感情の底から、時々、嗚咽おえつになりそうな熱いものが瘡こみあげて来てならなかった。

それを見ると、信長もまた、眼の縁ふちに充血をあらわした。泣き虫な男と泣き虫な男とが寄つたように、しばしはお互いおもてに面をそむけ、小姓や近臣の怪しむ眼を憚はばつていた。

やがて、信長はいった。

「極暑の頃からこの極寒にいたるまで、因幡いなば、伯耆ほうきの僻地へきちにおい

て長々の苦勞。病みもしつらん、老いもしつらん、などと案じていたが、思いのほか、却つて、若やぎて見ゆる。筑前、ひと頃よりは若^{わこ}うなつたのう」

若くなつたぞと、自分のみ賞^ほめられていては、相すまないと思つたのか、秀吉は、

「いや、わが君にも、年ごとにお若くなるやに仰がれます」

と、これへ来る前に剃^そつたばかりの髯^{ひげ}痕^{あと}を撫^ぶして、初めて、笑つた。

膳部、銚子が来る。杯は、和^{なご}やかな主従のあいだを、幾たびも往復する。こういう打ち溶けた待^{たい}遇^{ぐう}は、一族の者でも、めつたに恵まれないものであつた。

「於次が、初陣ういじんしたそうな。いつのまに、具足を着る年になつたかとおもうほどじゃ。早いものだの」

「ひと目、御覧に入れたく存じました。——明朝は連れ参ります。長浜の寧子ねねや老母にも、見せたいと思いますが」

「見せたがよからう。これまで来たついでじゃ。そちも一夜は長浜へ泊れ」

「いえいえ、そうしてはおられませぬ。なお、播州ばんしゅうの任地には、二年も三年も、妻子の顔を見ぬ部下は、たくさんおりますれば、秀吉ひとりが、老母の膝にあまえ、妻の顔を見てかえつたとあつては」

「きびしい遠慮じゃの。……そうそう、久しく甲州に取られてい

た五男御坊丸が、武田家から送りかえして来たことを、そちは聞いていたか」

「……おうわさに」

「どう思う？」

「めでたいことと存じました」

「御坊丸の無事をか」

「それもそれ……また一つには、織田家の御武運にとつても」
「むむ」

と、多くをいわず、また聞かず、胸と胸にうなずき合つて、

「さつそく、明春には、山路の雪の解けるとともに、甲州へ討ち入ろうとおもう……が、どうだな」

「然るべしと存じます。熟れた木の實を揺すぶるようなものでしょう」

「いや、そうもなるまい」

「徳川殿を語らい、十分、三河衆にも働かせたがよろしゅうございましょう」

「家康からも、しきりと、甲州入りの儀を、これまでにすすめては来てあったが、大坂表の本願寺一類の始末がつかぬうちとはと、ひとえに大事をとっていたことが、今日となってみれば、却つてよかつたように思わるる」

「わが君が甲州へお入りの頃には、秀吉の兵馬も、備中へ乗り入れ、芸州の毛利が中軍へ、なだれ入っているやも知れません」

「甲州と、中国と、その攻略はいずれが早かろうか」

「むろん甲州がお早く片づきましょう」

「筑前」

「はい」

「弱音をふいたの。信長に負けじと、そちが強がるかと思うたが」

「毛利と武田とでは、本来、その強味がちがいます。甲山きやうさん峽

水いは嶮けんなりといえ、嶮の破るときは、一挙にして潰つえの早い

ものです。武田譜代の士馬精銳しばせいえい、なお数万騎ありましよう、す

でに信玄という支柱を欠き、内に和なく、各、誇って譲るなく、

しかもその人、その地の利には、文化に遠く、武器も戦法も、は

や時代遅れといつてよいでしょう」

「中国におりながら、そちは却つて、甲州方面の機微きびに詳しいようではないか」

「おのれを知り、敵を測るはかためには、どこの国とも睨みあわせておらねばならぬ必要からです。——武田に比せば中国の毛利というものは、なかなか跡形あとかたもなく亡ぼし去ることはできません」

「そんなに根づよいか」

「海運の利便、海外からの文化、殊には物資にもめぐまれ、人は鋭感でまた智的です。加うるに、その豊かを内にもちながら、故毛利元就もとなりが遺訓はまだ一族に生きていますから、ただ武力一途いちずでそれを絶滅せんなどは思いもありません。——戦いつつ、攻めつけつつ、お味方もまた彼に劣らぬ文化と政略を布しいて、土着の

領民をも悦服せしめてゆかぬことには、ただ一城一城と戦い取つても、結局、さいごの勝利——真の戦果は、掴むことができません。……どうか、秀吉の戦い遅々として捗らずとも、ここ数年は、大洋を旅するごとく、風と波とに、おまかせおき下さるようひとえに御寛容を仰ぎまする」

かくも親しい主従というものがあるだろうか。夫婦の仲というもおろか、刎頸の友といつてもこれ程ではあるまい。

信長も秀吉も、更けるを忘れている容子だった。このぶんでは、夜もすがら語つても語り尽きまい。——部屋を隔てて控えている近習たちの顔いろに案じている色も出るほどだった。

「明朝のことあれば、そつと、筑前どのへ、御注意申しあげて

みてはどうか」

やはりその中へ来て控えていた菅屋九右衛門が、堀久太郎に小声で諒^{はか}った。久太郎もそれには同意だ。黙^{もく}つてうなずくと、すぐ起つて、縁へ廻り、二間ほど越えて、おそるおそるその一室へゆるしをうけて入った。

そして、秀吉のうしろへ寄り、それとなく時刻を注意すると、秀吉も初めて気がついたように燭をながめて、

「ほう。もうそんな深^{しん}更^{こう}か、いや、何も覚え^{おぼ}えず、つい、意外な長座を」

座をさがりかけると、信長はまだ飽かない顔して、

「久太郎、何じゃ」

と、いう。

「いや明朝もお早い御登城、余り夜も更けましたことゆえ」

「ムム、そうか。筑前も旅装を解いたのみであつたな。さだめし疲れていたろうに」

「なんの、余りの欣よろこばしさに、私こそ、御寝ぎよしんの時刻もわきまえず……」

と、堀久太郎の好意を謝して辞しかけながら、その堀久太郎へ、そつと訊ねた。

「こんせき今夕、宿所においておあずけ致した目録は、御覧に供えて下されたか」

「いや、それすらまだ、わが君のお目にかけるいとま違ありません。

何せい、これへあなた様を御案内して来るとすぐ引き続いてのお物語りで——」

「そうそう、これは筑前が落度でござった。では、お後にでも」
云いのこして、彼は、やがてそこを退出した。

その後で、堀久太郎と菅屋九右衛門の両名から、さきに秀吉から取次を託されていた献上品の目録を、信長の前へさし出した。

御前へ。

という一通のほか、

御おん奥女房衆へ。——とある二通のそれを披ひらいて、その品々の

名目を読み入っていた信長は、

「ほう」

と、幾たびか、眼をみはつていた。

物驚きをしない信長も、何かそれにはよほど驚いたらしい。例外な献上事に相違ない証拠には、寢所に入る前、ふたりへ念を押して、

「筑前が心をこめての献上品、篤^{とく}と見てやらねば、彼の誠意にたいて悪^あしかろう。明朝、彼がそれを山へ運びまいる頃には、相違なく信長へ知らせい。——信長、天守の上から一見いたすであらう」

と、いつて眠りについたのをみてもわかる。

饗応奉行の堀、菅屋のふたりは、さて何事かと顔見あわせた。ただ事の献上物ではないらしい。それを天守閣から望見しようと

いう信長のことばもあるので、

「塵一つもあつては」

と、にわかに、夜半ではあつたが、足輕や小者をあつめて、山上門から山上門の道筋はいうまでもなく、玄関前の広庭、さては麓ほりの濠の唐橋あたりまで、すべて視界に入るところを、夜明けまでにくま限なく掃かせ、さらに、琵琶湖の砂をいちめんに敷かせて、果てなきまで、きれいにほうきめ箒目のあとを立てた。

「物々しいお迎え。そも、明日は誰どなた方様の御登城か」

と、まだ仔細を知らない人々は目を見はった。よほど貴顕きけんな堂上うじょう人でも見えられるのであろうと、誰もが想像していたふうであつた。

ゆうべもいたく晩おそかつたのに、今朝もまた信長は夙はやくから起きていたふうであつた。

彼の座右ざゆうには、目につく者がひとり召し呼ばれていた。堺さかいの千宗ちそう易えきである。茶道衆のひとりとして、茶事があればかならず趣向しゆこうを問われ、また平素にも信長の相手によく見える者ではあつたが、この頃としては、その姿をここに見せたのは珍しいといえるのである。

なぜならば、大坂本願寺落去の直後に、きびしい追放を喰つた佐久間右衛門父子に對するお咎とがめのうちに、

——陣中、茶事さじに耽ふけり、風雅ふうがにうつつ抜かす事、言語道斷。

なる一箇条があり、その詰問的な辞句からみると、信長は、かの仏教にたいして、苛烈かれつな破壊をやったように、近年の茶事流行の弊風へいふうに対しても、また、極端な強圧をやり出すのではないかと、世の茶道者流はみな怖れおののいたのであつた。

ひがしやまどの

東山殿からの茶が武家一般に伝わって、それが公式な饗応のあとに、また、各の家庭のうちに、さらに、陣中の交友や心養にまで用いられたして来た傾向は、もう近年ともいえないほど、また流行ともいえないほど、日常のものになりきっていたが、これに伴う趣向しゅこうの数寄すきとか道具の贅ぜいとか、淫いんすればおのずからどんな道にも余弊よへいの生じるのは同じことで、この道にも近ごろはややそういう悪風がないでもないとは、茶外の人々の非難ではなく、

茶道に携たずさわっているものの口から憂うれいられていたことでもある。

その憂うれいが、果たせる哉、佐久間追放の罪状のひとつとして、

世上に喧けん伝でんされたので、

（ふたたびお叱りのあらぬうちに——）

とばかり、極く近頃、茶ちや杓しやくや袱紗ふくさいじりをし始めた諸侯ま

でが、折角の志を急に變じて、

（茶などは知らぬが無事）

とばかり、遠ざかってしまったのが、ここすくなくらずあるらしい——という下火をあらわしていた。

だから自然に、茶事の往来も聞かれず、堺や京都を中心として、いわゆる「茶家さか」と呼ばれている者の門戸までが、ひっそりとし

てこの道のさびれを思わせていた折に、せんのもうえき千宗易のすがたがここで見られたことは、久々の珍しさというよりは、それに心をもつものにひとつの明るさを感じさせていたにちがいない。

——今朝、その宗易は、疾とくから、安土の園内の茶室に入つて、ひとりの茶弟子を手伝いに、しきりと室内の拭掃ふきそうじ除から露地の清掃まで自身の気のすむまで心を入れてしていたが、やがて炉ろの灰も見、道具のかざりなども終ると、

「一応、御内覧をねがいまする」

と、信長の室へ来て、その終つたことを告げた。

信長は、うなずいて、すぐ共に起たつた。茶席は六畳であつた。

茶入れかざりには秘蔵の大海が出ている。——花入れは目につく

が花はまだ挿^いけてない。客を迎える寸前に挿^いけるべく水屋甕^{みずやがめ}のそばの小桶に根を浸^{ひた}してある。

「よろしかろう」

^{いちえつ}

一 閱^{いちえつ}して、信長は露地へ出た。ぴよいと、木陰^{こかげ}へ退つて、平ぐものように地に額^{ぬか}ずいた者がある。

「誰だ？」

うしろから宗易が、

「弟子の者にございまする」

と答えると、何もいわず、通つて、広庭へと歩みながら、

「宗易。まだ霜も解けぬ。けさはちと早すぎたかな」

と、顧みて笑つた。

それから、築山つきやまの亭ちんに立ち寄つて、近頃とみに茶事がさびれた噂などを宗易が持ち出すと、信長はまた哄笑して、

「そうか、そんなふうにみな受け取つておるか。どうした勘ちがいやら、信長はまだかつて茶事を禁じた覚えはない。——だが、

佐久間ごとき無能がそれに溺れるはひとつの茶弊さへい、茶害ともいえるよう。世をあげて戦い、或いは孜々ししと働いている中に、ひとり閑か逸んいつを貪むさぼるためにのみし澄ましている者あれば、それは茶避さひ、茶さ懶らいの徒とも申すべきか、信長は感心せぬ。……が、秀吉のような忙しい男には、すすめてもやらせたい。けさの炉はその支度、釜の湯も、彼のごとき男にこそ汲まれたかろうに」

近習たちが迎えに来た。やがて筑前どのが御登城の時刻も近づ

いて候^{そうろ}うとある。信長は宗易をのこして天守閣へ立ち去った。

陽^{ばな}はたかく、冬の朝はあたたかに煙っている。木々の梢^{こずえ}の氷も露^なときらめき、一望、安土の全市も、霜に濡れていた。

「ええ、ほウい」

「えーッ、ほウッ」

旺^{さか}んな声が、麓の城門から聞えて来た。信長は眼をこらした。

彼のそばには、簾^{れんちゆう}中の女房衆もあり、子息^{まげ}たちもいた。もち

ろん近習小姓は居ならんで、みな朝陽のなかに眩^{まげ}ゆげな顔をそろえていた。

「やあ、あれか」

信長の嘆声だった。

今の信長をして、目をみはらせる程な物資は、けだし容易な物ではない。

その信長が、

「――見ずやあれを」

と、指さしながら、傍らの人々を顧みながらいうのである。

「何と、おびただ夥しい進物の台の数ではないか。あれがみな筑前の手み

やげなりと彼は云いおる。中国入りのしるしまでに、携えて来た

進物しんもつとは、いやさすがに、たいきもの大気者大気者。あはははは」

実に愉快そうに信長は眺めて止やまず、笑つて止まなかつた。

けれど、彼以外の人々は、ただ眼をうばわれていた。また、きも胆を飛ばしていた。

およそ、安土城が創はじまつて以来の出来事にちがいない。山麓から目の下まで、かなり長い坂道の門から門のあいだは、後から後からと担にない上げて来る、進物台しんもつだいの列でうずまつたまま、いくら見ていても、列が終りそうもない程だった。そのあいだをまた羽柴筑前守が家中として、見栄みばえの劣らない者どもが、各盛装を凝こらし、進物之奉行しんもつのぶぎようとして、或いは警固や足輕頭がしらとして、陸續りくぞ山へ登つて来る。

「まだか。……まだ続くか」

信長もあきれ顔に、

「かほどな進上物とは、おそらく世上に例ためしもあるまい。信長でさえ、眼に見たは初めてじゃ。この安土城の門をすら、筑前めは、

狭くいたしおる。無双むそうな大氣者よ」

その目録は、ゆうべのうちに一見していたが、まさか、これ程とも思っていなかったものとみえる。信長は、あたり隈くまなく聞えるような声で、大氣者という感嘆を、二度も三度もくりかえしていた。

進物台の総数は、二百幾十という数だった。多門、中門をこえ、大玄関の広場に先頭が順にそれを下ろして並べていても、まだ麓の門は、あとの台を入れていた。

庭上、広前にいたるまで、城内は満目それでいっぱいになった。被おおいの布を払って披露された品々は、その一端をあげても——おこそでこそで小袖之料二百余反、播州杉原紙二百束、鞍置物十疋、明石干しそく、くらおきもの、びき、あかしほ

鯛だい千籠、蛛蛸くもだこ三千連、御太刀幾振、野里のざといもの鑄物の種々くさぐさなどと――
―その数も品目の多いことも、まったく言語に絶している。つまり
り当時の人々の慣例や常識にないことであつた。

「やあ、見えたか」

やがて、謁見えっけんの広間に、席をかえて、秀吉を待つていた信長

は、ゆうべの信長とちがつて、日常、諸侯に接するとおりな信長
であつた。

秀吉も、いと慇懃いんぎんに、

「爾来じらいは、陣務のため、つい奉伺ほうしを怠りまして」

と、詫び、

「いつもながら御健勝のていを拝して」

と、式どおりな礼儀を述べたが、ただ今朝の登城には、養子の秀勝を連れて来たので、

「かくの如くに」

と、その元服すがたを、信長の眼に供えた。そして主君の満足そうにうなずく面おもてを仰いで、彼自身も同じ満足をこの朝に抱き合った。

たいきもの
大気者

きようおう
饗 応

には、秀勝も同席したが、後の茶の湯には秀吉だけが

招かれた。

お相しょうばん伴ばんには、丹羽五郎左衛門と長谷川丹波守。それに、医師どうさんの道三がお詰つめという顔ぶれ。

亭主役の信長は、いつのまにか衣服もかえて、簡素な十徳じつとくを着ていた。陰の水屋には宗易そうえきの心くばりがはたらいている。

「筑前には、但馬たしま、因幡いなばなどの陣中でも、折ふしには、茶をいたされておられるか」

信長の問いである。

炉のまえに在る彼のすがたは、そこに懸けられてある姥うば口ぐちの霰あられ釜かまとともに破綻はたんなくひたと坐っていた。話しぶりにも幾ぶん亭主という心もちが加わって、丁寧なうちになお親しみをも示している。それは臣下との語らいというよりは茶友を迎えている

すがただった。

「いや、どうも、それがです……」

と、秀吉もここでは暢々のびのびとくつろいで、

「ふと、致してみたり、また、とんと忘れ果てたり。また茶というものと私とがいつこう一つになりません。たまたま、服のむにしても、相かわらず不精ぶしようなことのみしておりまして、かように清すがすが々とお茶室のうちでいただくことなどは」

相客の五郎左衛門長秀がわらい出して、

「いやいや、筑前どのには、それが結構茶の精神こころに適かなっているものでしょう。無法の法です。無規格の中の大規格です。ちよつと寸法にははまらないかのように見うけられるが、御辺ごへんには御辺の

寸法というものをちゃんとお備えになつておられる。むしろお羨うらやましいほどである」

「これはたいへんなお褒ほめにあずかりましたな。茶の精神こころとやらも、いつかどまだ弁わえきまので、折角のお褒ほめも、どこをどう買つていただいたのやら分らぬが」

「その茫ぼう漠ぼくとしているところですな。たとえば春はる霞がすみのたなびいている天地のようなお寛ひろさ。そのお懐ふところのうちには海もたたえ山もそびえ野も広々とあるかのようで——また、ないかのようでもある——といったような茫漠さが」

「ぼんやりしていてよろしいと仰せられますか」
「そう思う」

「すると、茶の心とは、ぼんやりしているほどよろしいもので？」

「いや、そうはいえませんが。これは筑前どのに限ったことで」

「むずかしい！ いや、厄介なものですな」

「それを筑前どのには、いともやさしく、気軽に持つておられようが」

「何も分らんからで」

「うははは。これはどうも、いくら申しても、こんにやく蒟蒻問答のような」

客と客のはなしを、水屋の陰で、かげ宗易はじつと聞いていた。何か、興深そうに耳をすまして。

ひそかになった。信長自身が、てまえ点前しているものとみえる。茶ち

やびしやく

柄杓やびしやくから茶碗におとす湯の音が、しずかに聞える。それは量にしては、小柄杓一ぱいのわずかな湯であつたが、茶室の静寂しじまをやるただひとつの音であつた。聞きようによつては、とうとうと滝つばへおとす千丈の飛瀑ひばくとも大きく聞える。

ちやせん

茶筌ちやせんの音。そして亭主からすすめる。客側がいただく。それらのかそけきうちに交わされる主客の和敬わけいの礼と睦みむつを、水屋の宗易はやはり前のままの姿で、板敷いたじきに凍りついた人の如く聞きすましていた。

一碗また一碗、お正客からおつめまで、一巡すると、やがて亭主の信長も、自服で一ぷくのみながら、客とともに四方山よもやまのはなしに交まじる。ここでは床とこの花を愛めであいい、高麗こうらい茶碗ちやわんの古雅こがを

語り、露地の風趣や、冬日のあたたかさなど——話題はまったく日頃の戦陣や人間の葛藤^{かつとう}を離れて、おたがいにながらの生命を養い楽しませようとした。——ひとたび事ある日には、その生命を最大価値にまで昂^{たか}めて捨ててもし働かしも得るように。

そのあとで、茶入れ、茶板^{ちやいた}など拝見のことがあり、それがすむと、亭主の信長は水屋へ退^{さが}る。

客は隣の広間へ移って、雑談にくつろいだ。

信長も、あらためて、それへ出て、客一同へ向い、手をつかえて、

「まことに、不行き届きでござった。何の興もあるまいが、ゆるゆるおはなしなど」

と詫び入っている。

客は臣下、亭主は主君。ここでの形は、何か逆さま事に見えるが、たとえ主君でも亭主である以上、客に対して、慇懃、いやしくも和敬を崩さないことは茶礼である。——常に群臣を下に睥睨して、皇居へ伺候するとき以外は、頭を下げることを知らない信長にとっては、ここはよい修行室になるともいえよう。客に仕え、自分に慎み、低頭屈身、すこしの粗相もないように、終始、おのれの心を人の満足と歓びのために提供しきるなどという行いは、とても信長の性には合わぬことと思われもするのだが、それがこの茶室では極めて自然に行えるのだった。主君が奉公人となり、奉公人がかりに主座にすわってみる。これは小閑のあそ

びといえ、なかなかおたがいによい反省にもなった。

「御亭主には、いつのまにやら、お点前てまえも行作ぎようさも、お見事になられましたな。きようは、篤とくと拝見して余りのお変りように、思わず見恍みとれました」

これはお正客の秀吉が、そこで話の口きりに述べたお世辞であった。すると次客の丹羽にわ五郎左衛門長秀が、

「それはそのはずです。失礼ながら、ここの御亭主には、何事にむかつて、不可能ということはないのです。自分には出来ぬということとは仰せられた例がない。——ですから茶道の御勉強にかかつて、桶狭間おけはざまや長篠ながしのの戦場へ奮迅ふんじんしたあの心ぐみでやるのだと、いつかもおはなしがあつたそうで、京の大黒庵だいこくあんも、

驚き入っております」

亭主の信長は笑いながら黙ってそれを聞いている。客と客との興じ入るのにまかせた。

秀吉がたずねた。

「大黒庵とは、誰方どなたです」

「京都の六角堂の隣に住む武野紹鷗じょうおうのことです」

「あ。紹鷗ですか」

「ここの御亭主のお手ほどきは、初めに、その紹鷗が導き申しあげたが、近ごろは、堺さかいの千宗易せんそうえきが伺みかつて、お磨みがきをかけておる。されば、御上達はあたりまえともいえましょう」

「宗易。あれなら御師範として、申し分はありますまい」

「織田の軍が、初めて、堺へお討入りのせつ、どこやらの家で、お茶をあがられ、その折、侍坐^{しざ}しておられた筑前どのが、挨拶に見えた千宗易を一見されて——これは名器^{めいき}だ——と仰つしやったそうな」

「そんなことを云いましたな。はははは」

「後に、それを思い合わされてか、安土へ召しよばれ、近ごろでは、ここの御亭主がよく仰せられるおことばにも——筑前は大氣、宗易は名器、一対^{いつつい}の者と、一し^{ひと}おお目にかけられておられます」

亭主の信長は、初めて口をさし挟んで、

「筑前には、その後、宗易とも久しゅう会わぬことであろうの」

「はい。両三度は、何かの折に相見しておりますが、中国へ参つて

以後は」

「幸いじゃ。あとでこれへ呼ぼう」

「ほ。参っておりますか」

「水屋をいたしおる」

「それは、ぜひ……」

と、待ちもうけている折へ、縁をめぐつて来る静かな跣音がした。

「宗易か」

「はい」

「入るがよい」

その障子が腰低くあいて、冬日の中に宗易のすがたが見えた。

宗易が加わってからその座談はなお賑わった。多くは他愛ない世事ばなしである。また、茶器名物のことなどだった。

その茶器のはなしから、宗易が唐物茶入れについてかなり詳しい説を述べた。するとそれまで、いっこう分っているようないないような顔をしていた秀吉が、俄然、口をひらいて、それらの花器や茶入れの渡つて来るところの明という国がらについて、その風俗、氣候、山川、地域の広さなどを、見て来たように得々と語り出した。

「日本国内の御始末も、一応お成し遂げあそばした暁には、こなたの御亭主にも、いちどその明国へお渡りあつて、長江千里という流れを溯り、南宗北画などによくみるような程よきところ

ろに、茶室をお建てになつてはいかがで」

信長は、客の談と尊敬して、いちいちうなず領いて、

「ほ。……ほう左様か」

と、さも感じ入つたように聞いていたが、口辺のどこやらでは
やや笑っているようでもあつた。

宗易もまた、にやにや聞いていたが、秀吉が弁じ終るのを待つ
て、

「おはなしで思い出したが、わたくしの茶の徒弟に、折もあらば、
筑前守様にお目通りをして、お礼を申しあげたいといつてゐる者
がある」

と、いった。

「はて、誰であろう。あなたの茶弟子のおひとりで」

「はい。お忘れがありますまい。御幼少のときには、尾張の中村でよく遊んだこともあるなどといっていました。成人の後には、長浜のお城へ拾われ、だいぶお目かけられていたそうで、当人は、再生さいせいの御恩人じやと申しております」

「あ。思い出した」

と、秀吉は小膝を打って――

「では、於福おふくではありませんか。もと清洲きよすの茶わん屋捨次郎すてじろうの息子。後に、流浪していたのを、しばらく長浜へ拾って飼いいいたことがあるが」

「その福太郎です。お察しのとおり……」

「於福が、宗易どのの御門弟になっているとは、これは知らなかった。どういう御縁でしたか」

「堺の南^{みなみの}之^の莊^{しょう}の辻に、塗師^{ぬし}宗祐^{そうゆう}というものがおります。宗祐ではおわかりになるまいが、本名を杉本新左衛門といい、彼の塗る鞆^{さや}をそろり鞆^{さや}などと申すところから、曾呂利新左衛門というほうがよく世間に聞えておるようです」

「ああ、曾呂利ですか」

丹羽長秀がそばから頷^{うなず}いた。医師の道三も知っている顔つきをあらわして微笑^{ほほえ}む。

宗易は、ことばをついで、

「てまえが、於福を弟子にいたしたのはその曾呂利の家が機縁で

した。棗^{なつめ}などを塗らせるため、折々、訪^{おも}ううちに、いつも見馴れない男が、漆^{うるしかす} 粕^こを漉したり、木地の下拭^{したふ}きをしたりしてゐす。仕事の手すじはなかなかよい。気もねれているし、人なつこい男。目をかけておるうちに、わたくしに縫^{すが}つて茶を学びたいという。職人が学んでどうするというと、茶道具をつくるからには、茶の心がなくては、良い器^{うつわ}はできぬからという。師匠の曾呂利もともに、この男には、何か知れぬが、おもしろいところがある。すこし置いて、庭掃除でも雑^{ぞうきん}巾がけでもさせてみて下さいとしきりに頼む。……ま、そういつた次第でかれこれ三年ほど側^{はた}においてみました。至極、心得がよく、やがて一^{ひと}かどの茶人にはなれようかと楽しんでゐるわけです」

「そうですか。それを聞いて、何やらこの筑前までが、ほっと安心いたしました。中村にいた頃からの幼友達おきなですから。いつも思ひ出すごとに、幸せを祈っていたものです」

「では、お庭先へなど、呼んでみましょうか。会ってやって下さるか」

「これへ来ておるので」

「供に連れて来て、何かと、掃除の手伝いなどさせておりました」
亭主の信長はさき程から、客のはなしの穂を折らぬようにと、控えめに口をつぐんでいたが、ふと、笑いだして秀吉へ、

「思ひ出した。その於福とやらのことと思ひ出した。筑前がさい前、得意になって話された大明だいみんの知識は、於福が幼少のとき、

父の茶わん屋捨次郎から聞いたはなしの又聞きではないかの。またぎ
 …どうも、予がいつか於福から聞き取った話と余りにも變つてお
 らぬが」

と、その時云い出した。

「やあ」

と秀吉は、仰ぎようさん山に、恐縮の手を頭へあてて、

「――では、いつの日か、御亭主には、その於福を召されて、親
 しく、明土みんどの国情をお聞きとりになつておられましたか」

「だいぶ前であるが、宗易の口から、こんど茶門の徒弟にゆるし
 た男に、めずらしい素姓すじようの者がおると聞いたのじや。――十数
 年の長いあいだ、陶器すえものの技術を習まなぼうため、明みんの景德鎮けいとくちんに渡

り、かの地にとどまるうち、異国の一女を妻として子まで生まれた。そしてやがて日本へ帰国の日には、その子連れ帰つてそのまま家に養ひ、この国の子らと何ひとつ変らぬように育て上げて来たという。……その茶わん屋捨次郎の子なるものが、いま宗易^{もと}の許におる於福じやそうな」

「これはどうも、秀吉よりは、もつとお詳しそうですね。……御亭主も、宗易どのも、お人が悪い。前もつて、そうならそうとお断り置きくだされば、^{みんこく}明国の話をするにも、多少、手加減がありましたものを」

「ははは。いや決して、客どのに恥をかかせんなどという気はなかつたが、筑前にも、海外の事どもに、さる関心を持つておるや

と、心から耳かたむけて、御身の明国に対する知識を窺うていたまでじゃ」

「それではなおいけません。浅薄なところをすっかり御亭主に観破されたようなもので」

「何の何の、まだ日本には、堂上方どうじやうがたはいうに及ばず、諸侯の

うちでも、識者とみずから任じおる面々でも、明国と問うても、

どんな国がらか、また暹羅シヤム、呂宋ルソン、天竺てんじくなどを訊ねても、どの

辺か、どんな国か、皆目、弁えぬものがまず十中八九といってよ

い。——然るに、筑前には、茶席において唐物からもの茶入れ一つ見る

にも、異国の茶わん一つ手にして観るにも、いつも油断なくそれらの器物をとおして海外の事情と文物に触れようとする心がけが

見える」

「おそれ入りました。実をいえば、幼少の頃、於福の父の茶わん屋に奉公中から、かの地に長くいた捨次郎と申すものから、そうした話を聞くのが^{たの}娛しみのひとつでした。けれど以後は、さる事情に詳しい者に会う折もなく、至極お恥かしい程度の知識しかございませぬ」

「あすの夜、あらためて、また登城されるがよい。この安土へ^{あつ}蒐めた^{はくさい}船載の品々、^{ことごと}悉く展じて見せよう」

「ぜひ、おねがいます」

「また、御身も、信長がゆるした程の^{たいきもの}大気者じゃが、もつと大^{やから}氣な輩が、幾人もおる。それらの者にも会わせよう。呂宋^{ルソン}、暹羅^{シヤム}、

オランダ
和蘭陀、てんじく天竺など、南蛮諸州のくわしいはなしも聞きおかれた
がよい」

「遠い異国のことに、左様にくわ詳しいやから輩がおりますか」

「おる」

「ははあ。バテレン宣教師ですな」

「ちがう、ちがう」

と、信長は手を振って、

「きようは茶事。その儀は、あすの夜の馳走にしよう。あすの夜、
渡られい」

と、笑った。

間もなく、お正客の秀吉たちは、亭主の信長と宗易に見送られ

て、茶庭の柴折門しおりもんから退さがつた。

松落葉のしつとり積んだ道に、針葉樹こずえの梢から陽がこぼれている。いま茶席の柴折門を辞して、安土の庭を戻ってくる秀吉の影を慕って、

「もし、もし。……殿さま」

と息せいて追つて来た者がある。

秀吉は歩みをとめて、その男を眼の前に待った。葛布くずふのこもの小者ば袴かまに藍木綿あいもめんの肩衣かたぎぬを着ていた。秀吉の足もとへ来て額ぬかずくなり両手をつかえたまま云った。

「お久しゅうございました。茶わん屋の福太郎でございます。長浜からおいとまをいただき去つた——」

「おう、於福おふくよな」

秀吉は膝を折つて、共にそこへ跼うずくまりながら、まるで身寄りの者に親しむように、

「達者か。さてさて、どこことなく、物腰までも変つたのう。その後は、堺さかいの宗易の門に入つて、茶道修行に身を入れておるそうな。秀吉も聞いて安心したぞ。……勉強せいよ、一筋に」

彼の肩へ手をかけて懇ねんごろに励ますのだつた。遠いむかしの友達時代を思い出させるような温情があふれている。が、その頃を考え出すのは、於福にとつて、辛つらかつた。また、余りにも今は身分の懸隔けんかくがありすぎる。彼は、秀吉の手の下に、いよいよその肩を低く伏せて、

「……それだけを、ちよつとお耳に入れて、欣んでいただきとう存じまして、まことに、御無礼とはぞんじましたが、お戻りを窺^{うかが}つて」

「いや、^{よろこ}喜んでおるとも、わが事のように、秀吉はうれしく聞いた。中国の探^{たん}題^{だい}羽柴筑前守と一介の茶弟子^{おふく}於福とは、おのずから奉じゆく道はちがうが、世に樂土^{らくど}を創^たて、人に益し、あわせて自分一箇も人間らしゅう達成してゆこうとする志に變りはない。

——今はなお、合戦また合戦と、^{いとま}違なき世の中だが、かならず次には、おまえたちの奉公がいよいよ大事な世となつて来よう。それまでに確^{しつ}かりと励んでおけよ、自分を作つておけよ」

「ありがとうございます」

「また会おう」

「……御機嫌よう」

於福は、秀吉の膝を払った。そして自分はなお松落葉の上にひざまずいたまま、秀吉の影が、櫓門やぐらもんの陰にかくれ去るまで見送っていた。

秀吉は清々すがすがしい心を抱いて宿所へ帰った。きょうのお茶のあいだも愉快だったし、於福が適当な道をみつけて、そこに正しい生き方をしているのを知ったことも欣うれしい一つであつた。

秀吉は、自分の知る周囲に、ただひとりでも、不幸な者があるとかにかかった。親類遠縁から故郷の旧知の端にいたるまで、自分を頼みとする者なら心にとめて、その息災そくさいを計っていた。そ

れはあながち人のためにするのではなく、彼自身が幸福であろうとする希^{ねが}いから来ているものだ。周囲に不幸な者を見ながら、自分だけを幸福とし、その幸福に満悦していることは由来できない性質の彼だからである。

桑実寺の宿所へ帰ると、彼はその日、手紙をかいた。

湖畔、ここから程近い、長浜を思いながら、久しくそこに留守している老母と、そして妻の寧^ね子へ宛ててである。

歳暮^{せいぼ}、新春の御祝儀をかねて、多忙の陣中から上府し、右大臣家に謁^{えつ}し、一兩日は滞在はすれど、すぐにもふたたび中国の御陣へ帰らねばならぬ身ゆえ――

と書中に詫びて、留守の近状を問い、自分の健康をも告げて、

加藤虎之助と福島市松のふたりに、使いとしてそれを持たせてや
った。

つぎの日は。

せめて今日一日だけでも、長陣のつかれ、旅の気疲れなど、す
べてを一擲^{てき}して、気ままに宿所に籠^{こも}っていたいとしていたが、そ
れも周囲がゆるしてくれない。

「筑前どの中には、御在宿か。池田じや」

早朝からもう訪客であつた。池田信輝^{のぶてる}が見える、滝川一益が
来る。

それが帰つたと思うと、佐々成政^{さつさなりまさ}が立ち寄り、蜂谷頼
隆^かが訪い、市橋九郎右衛門と不破河内守^{ふわかわちのかみ}が同道して見え、京

都の貴顯きけんから使いやら、近郷の僧俗から、種々くさくさの物を持つて、

「おなぐさみに」

と、献じに来るものやら、午過ぎひるすては、休養どころか、門前市をなすばかりだった。

時も時、年暮くれなので、歳暮の祝儀を述べるため、安土へ参向の諸侯が期せずして集まっているせいもある。あすは北陸の柴田勝家も入府するだろうと聞え、また前田利家の宿所にも、夥しい荷駄がいま着いたなどと客の口にうわさされていた。

噂といえ、応接いとまなき中なので、誰がいったことやら、秀吉は頭にも止めていなかったが、

「明智どのに、何か、御不首尾なことでもあったのか」

と、これとうみつひで惟任光秀について、ささや囁く人が多かつた。

「御歳暮の献上にと、数頭の名馬を曳かれて見えられたが、何やら御前ていよろしくなく、お上にはそれらの物をすぐ突つ返されたなどと沙汰する者があつたが——」

というものもあるし、また、

「いやいや、昨夜、細川どのやその他、大勢の者に、御酒ごしゆを下された席において、明智どのばかりいつものように冷静な面おもてを澄まして、興じ入る乱酔らんすいの徒をながめていたのを、右大臣家のお癖として、却つて、ちと小憎く思おほされてか、光秀飲めと、大杯を強いられ、飲まぬか、なぜ飲まぬ、強たつて飲めなどと——一瞬いつときではあつたが、けわ険しいお模様があつたそうなの。そんなことが、種いろいろ

ろ々に聞えたのではないか」

という者もあつた。

そうかと思うと、

「めつたに、口にはいたされぬがあの衆しゅうには、どうも異心があるらしいということを、なぜか、ちらちら耳にいたす。その出所はよくわからんが……」

などと由々しい事柄を、めつたに口外はできぬがと断りながら、衆の中で口外している人物もある。

人物というものも、それが一国一城の主とか、一方の将とかに

なつて、重責じゅうせきを感じ、自重を怠らないでいるときは、各、

しかるべき人柄を保っているが、酒に蝟集いしゅうして、座興放談に耽ふけ

りなどしていると、案外な不用意を露呈^{ろてい}して、知らぬまに、重大な波紋を作っていることが多い。

幾歳^{いくつ}になつても、男性には童心が失^うせない。殊に戦国の諸将にはみなその愚に似たものが濃い。集まると小児みたいに他愛なくなる一面があるのだつた。——故にこんな口にも出すまじきことばを口に出したりする者もあるのだろうか、信長を始めとして、安土を中心とする諸列侯の中で、そんな愚劣な童心振りのみじくない者といつたら、それは十目十指、たれでもすぐ、

これとうひゅうがのかみみつひで
惟任日向守光秀

と、いうにちがいない。

あの知性と、あの冷静な風采とは、明智どのとうわさすれば、

すぐ^{まぶた}瞼に描けるほど、たれの脳裡^{のうり}にも、際だつて、鮮^{あざ}やかに、また冷たく映つていた。

秀吉にくらべ、秀吉にも劣らないその戦功や、また織田随一といつてよい頭のよき、軍治兩政の知識には、ひそかに推^{すい}服^{ふく}していたのも、余りに教養のにおいを表に持ったその人品には、何^{なん}人も、なぜか親しめない。むしろ、離れてそれを觀^みたがる雰^{ふん}圀^い氣^{いき}をもつてめぐつていた。

せつかく、きよう一日の宿所の閑^{ひま}を、氣ままにと考えていた私生活を、こう朝から夕までの訪客攻めと、その訪客の釀^{かも}す思ひ思いな雑談とに煩^{わづら}わされては、秀吉も、閉口するばかりか、

（人の陰口などは迷惑）

という顔も時には示したろう。

そう考えられるのが、常識であるが、ここの主は、あるじまた変つて
いるのだ。——明智どのにはどうも謀叛むほんの兆きざしがある——などと
重大な口外をする客が傍らにしようと、べつにそれへ目をくれる
でもなく、

「ははは。左様かなあ。ふーム……。それは美味うまかろう。それが
しも帰陣したら、ぜひそれは食つてみよう」

と、大声でべつな客と話に熱中していたりなどしている。

何かと思えば、冬季の陣中、食物に困ったとき、兜かぶとの鉢はち金がねを
鍋なべとして、猪肉ししや山鳥とを捕とつては食つたという話などに、ひどく
傾けい聴ちやうしているのだった。

それでもなお、一方の客たちが、人の陰口に興じて、光秀の是々非々などくり返していると、

「甘いなあ、諸公も。そういう類たぐいの風説は、いわゆる埋まい言げんの計

と申して、他国から敵対国へ来ている者が、そつと火だねを埋いけて行つた場合が相応に多いもの。惟これと任うどののうわさなども、出

どころは、ひよつとしたら先頃帰国したという甲府筋の者ではないかな。——それが人に火のついたときはいくらでも沙汰していただけるが、いつ何時、自分が火だねにされているやも知れぬ。御用心、御用心」

これで話はおしまいになつてしまふ。秀吉が呵か々かと笑うと、それについて、是ぜといつた者も、非といつていた者も、同じ哄笑の

下に、それを忘れ去ってしまった。

よい機しおとして、秀吉は、

「やあ、もう日暮に迫るか。実は今夜は、御礼のため、もう一度登城いたして、明朝には、また中国へさして帰陣の予定。失礼だが、これで……」

と、客の帰りをうながして、自分もさつさと、湯殿へはいってしまった。

時間がないのは口実ではない。家臣たちは事実もう明早曉の出發に、何かと荷梱にくりをまとめているのに、訪客がたえないため、片づかないで困っているのだ。秀吉もそれを察して、あれも要いらぬ、これも要らぬ、こよいはほんのお別れのごあいさつ、略服でよい、

客ももうお断りしろなどと——湯殿から上がるなり衣服を着けながら云つていた。

すると、そのいいつけが、まだ表の者まで届かないうちであつたため、いつていることばの下に、また取次が来て告げた。

「これとう惟任日向守さまが、お越しになりました。ちようど同日の参府、さんぷ久しぶりに、お会いして帰りたいと、いんぎん慇懃に仰せられて

——

「なに、日向どのが来た？」

秀吉は、何か偶然のような氣もした。それと、登城のまぎわだし、折のわるいような氣もした。けれど、取次へは、すぐこう云つていた。

「書院へお通し申せ。そして、しばしの間、御猶予ごゆうよとな」

その猶予は、これから髪を結ゆい直すためだった。元結もとゆいはかえなかつたが笄こうがいや櫛をもつて、ひとりで髪をなでつけていた。

「——馬に鞍をつけて、表へ曳いておけよ。間もなく登城するゆえ」

外に控えていた近臣たちへいいつけると、秀吉はその足で、客書院のほうへ廻った。

ふつうの居館とちがつて、寺院なので、たそがれの一刻は、何となく、物のあいろも深沈しんちんと仄暗ほのぐらい。——ふと彼がそこを開

けると、まだ灯あかりの来ていない広やかな壁と畳の寒々とした中に、

寂然じやくねんと独り——たとえば、一箇きぬたせの砧せ青磁の香炉がそこに在

るかの如く——澄んだ面おもてをしてひたと坐っていた。

「やあ、どうも」

いつでもだが、秀吉の声は、その伽藍がらんがもっている寂じやく寞まくを鐘あるしのように破るものだった。

主の明るさに対しては、客もどうしても快活にせずにはいられなかった。

「やあ、これは。——筑前殿にはいつもながらお麗うるわしい御気色みけしきで」
光秀としては、最大な表現といていい。努めて磊落らくらくであろうとしたのだ。けれどすこし話しているまに、そういう努力はすぐ霧消して、彼のすがたはやはり知性の結晶に回かえっていた。

隆たかい鼻はなすじから額ひたいにかけて、てらりと聡明が光っている。この

年暮^{くれ}でちょうど五十四を越えようとしている光秀であつた。凡^{ほんざ}材^いでも五十四の年輪^{ねんりん}を数えるほどになると、おのずから重厚が備わつて来る。まして治乱の中に心胆を磨き、逆境から立身の過程に飽くまで教養を積んで来たほどな人物というものには、云い知れぬ奥行がある、床^{ゆか}しいにおいがある。

（——良いさむらい哉^{かな}）

秀吉の眼で見ても、しみじみ思う。信長がその寵愛を傾けて打ちこんだのも無理はないと思う。丹波亀山の城にあつて、五十四万石を所領する諸侯として見ても、すこしも不足のない人がらと領^{うなず}ける。

「筑前どの。何をおわらいでござりますか」

ふと、話のとぎれに、光秀からこう訊かれて、秀吉は初めて、しげしげと客に見入っていた自分の恍惚こうこつに気がついて、

「あははは。いやべつに」

と、卑屈なく声を放って、さり気なく措おこうとしたが、もし光秀がひがんではいけないと考えたものか、

「あなたもだいぶお薄くなつて来ましたなあ、額きわの際が」

と、思いもよらぬことを云い出した。そしてそのあとへなおこ
う云い足した。

「お口の悪い信長公は、てまえのことをさして、猿々さるさるとおつしやるように、あなたのことをば、きんか頭とよく呼ばれる。丹波たんばのきんか頭はげあたま（禿頭）という方言ほうげん）が負けずにやりおるわ――

などと日頃のおうわさにもよくお口に遊ばす。あははは、今、お頭つむを見ておるうちに、ふと、お上のお戯れを思い出したのでござった。おたがいにか年とし経りましたなあ」

秀吉は、自分の鬢びんを撫でた。かれの頭髮はまだ黒い。はつきり光秀とは、九ここのつ歳の年下を示している。

「いや、御辺ごへんなどは、まだまだ……」

光秀は、羨うらやましげにすら、相手を見ていた。何不足ない栄達を自覚しながら、年とし齢だけはもう十年も若くあつて欲しいなあと云いたげな顔いろである。

自分のきんか頭を云い出されたことから、客としての居心地は、たいへん気楽になつて来た。光秀は、何でも云いたいことのいえ

る秀吉の性格にも、また羨ましさを感じないでいられなかった。

今夕、丹波へ帰国するので、ちよつとお顔を見に御門前まで立ち寄つた——と、さつきもいつていたが、何ごとか、折入つて胸の思いでもじツくり聞いてもらいたいような容子ようすが、光秀には見えた。

にも関かわらず光秀は、容易にそれを持ち出し得ないのである。

秀吉は、折ふし出かける間際ではあり、客の容子ようすにも観みえるものを感じたので、

「——時に、惟これ任とうどの、お目にかかったのが、幸いだ、人のうわさというものは、何を云い出すやら知れたものではないが、さりとして、火のない煙と打ち捨てて措おこうも、衆しゅう口こう金きんを鎔とかす

の惧おそれがある」

「なんぞ、それがしのことについて、お耳にふれた儀でも……」

「されば、親しい御辺のこと、これは書面をもつても、お告げせずばなるまいと思つていたところです。あなたは、誰かへ書いて与えた詩に、亀山城の北にある愛宕山あたごやまを、周山しゅうざんに擬なぞらえ、御自身を周の武王に比し、信長公を殷いんの紂王ちゆうおうとなしたようなことはありませぬか」

「やくだいもないことを」

光秀は手を振った。やや面おもてを青白うして、二度までいった。

「やくだいもなや！　いったい、誰がそんな悪意のある取り沙汰をば——」

光秀の吐いた声は、沈痛そのものであつた。言葉というよりは長嘆に似ていた。

けれど、秀吉は、それ程な相手の深刻な表情を見ていながら、まるで鞠でも受けとるように、彼の口真似そのままにいった。

「まったく！ いやまったく。——やくたいもない！ やくたいもないことをば。——あはははは」

この笑い声はまた、天井を揺するばかりだつた。次の間に控えていた家臣が驚いて、何事かと、襖を細目に開けてみたくらいであつた。

「これ、これ」

その気配へ、秀吉は目ざとく振り顧つて、

「——馬を曳いたか」

と、たずねた。

家臣がそこから、

「御用意はととのうておりまする」

と、伝える。

光秀は、急に、燭台の灯へ、おもて面をあげた。

「おお、つかうかと、つまらぬ話にお出ましの間際をさまた邪げ、思わ

ず失礼を——」

と、しとね褥を退け、そしてなお起ちもやらずに、

「申さば、世間の毀誉褒貶きよほうへん、これはたれにも、避けられぬこと、

また齒牙しがにかけるにも足らぬことにございましょうが、最前も仰

せのごとく、衆口金を鎔かすのたとえもある。慎まねばなりませ
ん。……何とぞ、やくだいもない一儀は、以後、お耳にふれるご
とに、唯今のごとく、お笑い捨てくださるように」

「心得申した」

こんどは真面目に、深々と相手へ同情の眼を凝らして、

「御辺にも、余りに深くお氣にとめぬがよろしい。僭越とお叱

りなくば、この筑前のごとく、物事にちと無神経でおられたら—
—と申しあげたい」

「それは常々おうらやましく存じておる」

「では」

と、促^{うなが}して、

「こよいは、これより御礼のため登城いたしますから」

「長座つかまつ仕つた」

主客一しよに起つて、書院を出、玄関のほうへ共に歩いて行つた。

草履を穿はいてからも、山門の外の駒つなぎまで、なお肩を並べ合っていた。光秀はなおもつと早く、もう少し時間の余裕を見て、この人を訪とわなかったかと悔いているふうだった。

「さあ、お召しなさい」

先へ、駒をすすめて、秀吉は佇たたずんだ。なおここまで主客の礼儀をとっているのである。語り尽きない残り惜にじしさを滲にじませていたが、光秀は、御免と会釈して、先に馬上の人となった。

秀吉も、鞍へ移った。

そしてこの門前から、双方の従者の列は、各の主人を先にし
て左右に別れた。

安土の夜に行くには、たいまつ松明もちようちん提灯も要らなかつた。歳暮
のせい、町の灯は種々さまさまな色彩いろどりをもち、家々の灯は赤く道を染
めて、春を待つ騒めきさわめきを靄々あいあいと煙らせていた。冬靄ふゆもやの空には、
一粒一粒に、星が滲にじんでいた。

「この頃は、聞き馴れない唄や器楽が流行はやるのう」

秀吉は、家来にはなしかけた。従者のひとりがそれに答えて、

「この町に、なんぼんでら南蛮寺が建つてからだそうです。異国の笛とか抱ほ
琴うきんが入つて来たばかりでなく、その音階に馴れて来て、これま

であつた歌謡の節ふしや曲までが、何となく違つて来たと申します」
 「でも、洛中の六条坊門にも、南蛮寺はあつたが、こんな風潮は
 なかつたようだが」

「まだあの頃は、二、三カ国の宣教師バテレンしかおりませんでした。けれど近頃、この安土の町に住んでいる異国人の種類はたいへんです。皆が皆、宣教師バテレンではありませんが、それが連れて来た家族やら召使やらを加えますと……」

——なるほど、辻へかかると、賑やかな雑ざつ鬧とうの中には、かならず異人のすがたが見えた。松や竹や餅など売っている日本の歳としの市いちを、物珍しそうに見物して歩いていた。

信長はその夜も、彼が帰国の暇いとまご乞こいに来るといので、心待

ちに待ちわびていたらしい。

全城の燭しよくは、秀吉を迎えた。

主従、夜食を共にした。また、堀久太郎から、はいりようもの拝領物の沙

汰などあつた。

「御品おんしなじな々は、明朝、御出立までに、御宿所へお届け仕ります」

とて、その内容だけを聞いた。国次くにつぐの刀や、茶の湯の名器十

二種などである。

「かさねがさねの重恩。ただ冥加みょうがのほどおそれます」

秀吉はありがたさの余り、涙にも暮れそうな姿だった。そして

暇を告げかけると、

「いや待て、なおまだ、きのう申し交わした約束が残っておる」

といつて、信長は、彼を促^{うなが}して城^{じょう}楼^{ろう}の上^{うへ}へ伴^{ともな}った。

ここの一閣へは、よほどの貴賓^{きひん}でもないと案内されることはないし、重臣でもほんの、二、三の者しか知っていないということだった。

「きのう茶席で約束したように、そち以上な大気^{たいき}者^{もの}を見せてつかわそう。はいれ」

信長は一室を開かせた。

驚くべき人間が、その扉を開いたのである。更紗^{さらさ}を纏^{まと}い、黒い皮膚^{くろかわ}に、珠^{たま}や金環^{きんかん}を飾^{かざ}っている二人の黒奴^{くろんぼ}だった。

しかしこの黒奴については、秀吉はそう瞳^{どう}目^{もく}もしなかった。

安土の城内で度々見かけていたし、また宣教師^{バテレン}から薦^{すす}めたものと

いうことも知っていたからである。

けれど、信長に従^ついて、一步室内へ入ると、思わず、ああという声が出た。ここは安土の内かと疑った。

大きな部屋と小さい部屋と、二つがひと間になっている。あわせて約百坪ほどな広さはあろう。その壁、その天井、装飾、床、敷物にいたるまでことごとくが、異国の色彩と調度品で彩^{いろど}られていた。

「その床^{しょうぎ}几^よへ倚^よつて休むがいい」

信長は、椅子をさして、床几と称^よんだ。美^{うる}わしい天^{びろうど}鷲^{うど}絨^みと密^{みつだ}陀^{ぬり}塗^{ぬり}のような塗料をもつて造られてある。

秀吉は、観るものに、眼が忙しかった。

次室と広間との境には、裾長すそやかな帳とばりが一方へ絞しほられてあり、それは天竺てんじく織おりというか、欧羅巴ヨーロッパのゴブラン織というものか、秀吉すら初めて見るものだつた。

ルソン、呂宋、交趾コーチ、安南アンナンあたりの舶載品らしい陶器、武器、家具の

類から、印度とかペルシャなどから齎もたらした物らしい鉱石かたまりの塊や、

仏像、絵革えかわ、聖多默サンタマリア縞あじま、それから南蛮船の模型だの、金銀の

細工品だの、自鳴鐘とけいだの——と数えて行つたら限りきもないほどである。

その間にも、しきりと鼻を襲つてくるのは、まだかつて日本の上では嗅かいだことのない執拗しつような香料のにおいであつた。そうした視覚、嗅覚、あらゆる官能から異様な刺戟をうけて秀吉はやや

呆れ顔をしていた。

あまりに珍奇な世界へいきなり連れて来ると、子どもは側の親も忘れて口をきかなくなる——そんなふうな秀吉であつた。

信長は、それを見て、ひそかに楽しんでいた。どうだ、といわないばかりな顔して——。

と、秀吉はふいに、つかつかと彼方かなたの壁へ向つて歩いて行つた。そこには日本的な六曲屏風きよくびょうぶが二面だけ現わして立ててあつた。彼は手をかけてその六曲全面を部屋へ展ひらいた。そして、腕拱うでぐみしで、その前に坐つてしまった。

「……うーむ」

と、唸うなっているように見える。

金泥きんでいの地に、重厚な顔料えのぐで、地図が描いてあった。

「……?」

秀吉はやがて、それへ顔をすりつけるようにして、頻りと、何かさがしていた。

その背なかへ、微笑を向けながら、信長が遠くからたずねた。

「筑前。何をさがしているのか」

すると秀吉は、見向きもせず、なお屏風に顔を彷徨さまよわせながら答えた。

「日本です。……日本は、どこでしょう」

信長は歩いた。そして、彼のうしろに立って、にやにや笑っていたが、やがて教えていう。

「筑前、筑前。そんな所をいくら見ても日本はないぞ。その
辺りは、羅馬、スペイン、また、埃及などという国々の抱だいてお
る内海——」

その屏風の左半双の端から、右の半双面の方へと、信長は秀吉
をさしまねいた。

そして、秀吉と並んで、屏風絵の世界地図の前に坐った。

ポルトガル
葡萄牙の、一宣教師が献上したものを原図として、狩野派の

お抱え画工がそれを美術化して、六曲一双に濃彩をもって描いた
ものなので、もとより地図というほど精密でもないし、また、原
図そのものからして、まだ地球の全貌図としては、はなはだ幼稚
杜撰なものであったことはいうまでもない。

けれど、大体において、世界の広さは描かれている。地中海もあれば、印度洋もあり、大西洋もあつた。太平洋も紺碧こんぺきな厚い顔料えのぐに塗りつぶされてあつた。

「筑前。見よ」

「はあ」

「日本はここだ。この細長い島国。われらはこの上に生れている」
「これが日本でございますか。……これが」

秀吉は、凝視ぎょうしした。

息もせずに見つめていた。

そして顔を離すと、あらためて、六曲一双の屏風の広さを——
いや世界の広さを見直して——また眼のまへの細長い一島嶼とうしょの

小ささを全図と比例しては見入っていた。

「支那、南蛮諸島、西欧の国々、どこも見くらべても、何と、日本は小さいのう。小さいではないか」

信長がいうと、秀吉は、しばらく黙っていたが、

「そうとも思いませぬ」

と、答えた。

そして、さつきからとんでもない所を見まわして、日本をさがしていた海外的な知識の浅さを、ここで取り返そうとする面目を以て云った。

「おそれながら、わが君も、お体といつては、五尺二、三寸。お肉は薄く、決して大男ではありません。然るに、世には六尺豊か

の大男と称する者、たくさんおりますが、あながちそれをもつて、大なる人物とは思えませぬ。故に、絵に描いた国の広さや、小ささには秀吉決して驚きませんが、ただこれをみていると、頻りに嘆じられるものが痞こみあげて来ます。——思わず、ああと嘆きたくなります」

「最前から、しきりに感に打たれておる容ようす子だが、そちらしくもないぞ、何をさようにかなしむのか」

「桶狭間おけはざまの御合戦のみぎり……またその後も折々、わが君がよくお口にあそばす小歌の一節を思い出しまして」

「はて、妙なことを、そちはかような折に思い出すな。——人生五十年……あの歌か」

「左様でございます。この世界の廣大を、この生命のあるうちに
見尽すには、五十年では足りそうもありません。せめて百年は生
きたいものと思ひます。ああ、生きたい、生きたい。――折角、
この身、日本に生れ、やわか、中国、四国、九州ぐらい見物して、
それで生涯の満足ができましたようや。君には、如何思し召すや存
じませんが」

「こやつが」

信長は、いきなりその右の手を以て、秀吉の肩を、強く叩いた。
それは、会心かいしんの笑みえと力とをこめて思わす打った強さだった。

「覚さとくも、わが胸を察して云いおるわ。生きようぞ、百年も」

この時代の人の眼孔がんこうは大きかった。

日本を、当時の日本だけにしか、観ることの出来ないような狭小な眼は、徳川期になってから、後天的に努められた観念である。信長は、後の鎖国主義さこくしぎなどというものを、知らなかった。

秀吉においては、日本の小ささをさえ知らなかった。彼の世界観は、彼の常識と観念の上から、日本を最大なものと考えていた。日本と較くらべるような地球上の「大なるもの」はあるわけがないとひとり呑みこんでいた。

だから彼はこよい信長から、六曲一双にわたる全世界の地図を見せつけられて、日本の存在をその尨ぼうだい大な陸地面からさがし求めるのにまごついたにしても、西欧南洋北夷ほくゐ諸州の箇々の大きさに、そう驚きはしなかった。

ただ、

「これが日本か」

と、眼を凝^こらして、

「思っていたよりは小さい」

と、感じただけに過ぎなかった。

そして、嘆じられたのは、

——世界は広大だ。

ということだった。人の天寿はそれに比して、余りにも短いと思つたことだった。

彼ばかりでなく、総じて徳川鎖^{さこく}国主義以前の——元龜、天正の人間には、おぼろげながら、万里の波濤の彼^{かなた}方にも、人とよぶ異

人、国とよぶ国が、無数にあることについて、詳しく知っていた。その海外知識はまた、宗教を通じ、美術を通じ、鉄砲を通じ、織物や陶器や自鳴鐘とけいを通じて——日に月に滔々とうとうと東漸とうぜんして来た時でもあった。

「国は多いよ、海は広いよ、けれど何千何万里、漕ぎ巡こまわつてみたつて、日本のような国は、ありはしない。唐天竺からてんじくといったつて、ありはしない」

こんな言葉は、幼少の時から、秀吉などよく聞かされていたものである。

尾張の中村附近にも、そういうことをよく語る年とし老よりが、二、三人はいた。

村の人のいうには、

「彼の衆はみな若い頃には、八幡船ばはんせんとかいう船に乗つて、明みんこ国くから南蛮へまで押し渡つたものじゃそうな」

とのことであつた。

秀吉がまだ子どもの頃だつた天文年間には、もう和寇わこうはだいぶ下火したびになつていた。けれど昔を語る潮焦しおやけのした老人は、まだたくさん田舎に生きていた。

「もつと多くの話を彼らから聞いておけばよかった」

と、長じて後は、惜しいことをしたと、秀吉も思い出すことがあつたが、とにかくそうした人々が、民間に語り伝えて来た海外知識もまた、決してばかにできない下地を持つてゐる。

いわんや堺、平戸ひらどそのほかの海港と、呂宋ルソン、安南シヤム、暹羅マラ、滿刺ツカ加、南支那一帶の諸港との往来は、年ごとに頻ひんぱん繁を加えて来るし、それが国民一般の宗教に、軍事に、直接生活に、濃く影響し始めてきた今となつては——その政治的重要性からも、信長が多大な関心をもつていたことは、当然すぎるほど当然なことだった。

「……………」

「……………」

この夜。

信長と秀吉とは、世界地図の六曲屏びようぶ風を前にしたまま、ずいぶん長いこと、黙然と坐りこんでいた。黙想ふけに耽ふっていた。

何を語りあつたろうか。

それはその屏風しか聞いていたものはない。けれど、結論において、ふたりの理想が合致していたことは確かだ。なぜならば、やがて深更、ふたたび暇を告げて別れるに際し主従の面おもてには、これまででない、もつともつと深い男児の心しんけい契けいともいえるものが、あきらかに双方の眉宇びうにたたえられていたからである。

蘭丸らんまる

早そうぎよう 曉しゅつたつ の 出 立 だ っ た。

庭面にわもも、屋根も、霜が白い。桑実寺くわのみでらの広間小間には、また燈ともしび火を立てている。

早飯は秀吉の習慣だ。箸はしをおくとすぐ身支度もすましてしまう。

それに遅れまいと、障子の外、廻廊の彼方かなたなどを、あわただしく家臣たちの跽音が往来している。荷梱にぐりなど運び出している。

「昨夜、帰って参りましたが、深更の御退城、すぐお寝やすみになられましたから御返辞をひかえておりました」

福島市松と加藤虎之助は、この出発間際の寸暇を見て、秀吉の前へ復命に出ていた。

ふたりは、秀吉の意を帯して、長浜の城に在る母堂と夫人を見舞い、留守の近状を、つぶさにまた、秀吉の老母と寧ね子夫人から言伝ことづかって来たのであった。

「おう、ゆうべのうち、帰っていたか。して、どうじやった。長

浜の様子は」

「はい」

と、市松がいう。

「どなた様にも、おかわりもなく、わけて御母堂さまには、たいへん御機嫌でいらつしやいました」

「そうか、この冬、お風邪も召さずに、起きておられたか」

「中国からの殿のお便りには、いつも身を案じて給^たもるゆえ、寒いうちは、外へ出て百姓もせぬようにしておる。そして、筑前どののすすめに従い、部屋を温かにし、合間には、鼓^{つづみ}の大^{おお}倉^{くら}、小^こ舞^{まい}の幸^{こう}若^{わか}などを招いて、奥方さまやその余の御家族たちに囲まれ、至極、陽気に暮しておるから、もういささかも陣中では留守

を案じて下さるな——と、くれぐれも左様に仰せられました」

「そうか。いや、それを聞いて、安心いたした。つい間近の安土まで参りながら、ちよつとの暇に、顔ぐらいは、見せに来ててもよさそうな……などとお愚痴はなかつたか」

こんどは、虎之助へ向つて訊ねた。元々から二人は、遠縁の者だけに、こういう家庭の内輪事うちわごとも、秀吉も気軽に訊かれ、また答える方も、どこか気安く語られるのであつた。

「お愚痴どころか、お母堂さまには、私たちが伺つていたところへ、ちようど右府様うふからお迎えの使いがお見えなされて、久しぶりのことである、筑前が安土に参つておるゆえ、寧子ねね様を伴い、ちよつとわが城へ来て対面してはどうか——とありがたい御ご詫じやう

があつたにもかかわらず、お母堂さまのお答えには、中国の役す^{えき}ら、まだ半途と聞く、安土に來たのも、公の御用、^{おおやけ}こちらから婆や妻などが会いになど行つても、あの子は決してよろこび顔をいたしますまい。折角、右府様のありがたい思し召ではござりますが、お断り申しあげます——と、美々しいお迎えのお船をも、むなしくお返しになつたほどでございます」

虎之助は、市松ほど弁舌がまわらない。わけて主君の前では、畏れるの余り吃^{ども}り気味なので、これだけ伝えるには一所懸命であつた。

それをもどかしく思つたのか、秀吉は聞いている途中から、身をまげて、傍らの文机^{ふづくえ}や文庫から手まわりの物を取つて、腰に

帯びたり、懷紙をふところへ納めてみたり、まるで空耳そらみみに聞いているかのような容子ようすに見えた。

そして、虎之助が、語り終るとすぐ、

「よしよし、使いの返事、よくわかった。もう今朝はここを立つ。はやはや外へ出て、そちたちも、供廻りともまわのことなど急げ」

追い立てるように、退けてしまったのである。

二人は、倉皇そうこうとして、そこから出て行つた。——と、入れち

がいに、堀尾茂助が、何事か告げるべく、またその障子を開けると、秀吉は独りで泣いていた。懷紙を面おもてにあてて涙を拭ぬぐっているのである。

「……………」

おや？ という顔して、そのまま、茂助が障子の下にうずくま
つていると、秀吉はひどくあわてて、

「吉晴。何用だ？」

と、まるで咎めるような声音でいった。^{とが}

「はッ、はいッ……」

茂助も理由もなくあわてて、早口に、

「右府様のお使いとして、^{もりながさだ}森長定どのがお越しですが」

と、取次いだ。

「なに。森蘭丸どのが」

秀吉は、何か、唐突な感じをうけたように^{つぶや}に呟いたが、すぐ思い
当ったらしく、

「——ああそうか。お迎えして、あちらの客書院へお通しせい。

ここは取り散らしておれば」

と、自分も立ち上がった。

ゆうべ安土へ暇いとまぎ乞いに登ったとき、信長から拝領物の目録を賜わった。その品々を今朝、蘭丸に持たせて、これへ差向けられたものであろう。秀吉はそう察しながら、客書院へ歩いていた。

案のじよう蘭丸は、国次くにつぐの刀、十二種の茶器など、信長からせんべつの餞別の品を携え、上座に坐って待っていた。

相変らず美しい。華著きやしやな装いを凝こらしている。すでに、今年

あたり、二十三、四歳にはなるはずだが、今もって、世間が美童と目しているのも無理はない。

主君の使者なので、秀吉は下^{しも}にすわり、一応の礼儀があつて後、初めて話も日頃の親しみ振りに返る。

「もう、お立ちでしょう」

「いやいや、お急ぎ下さるには及ばぬ。いずれ一夜は京都のつもりですから」

「せっかくたまたまの御出府でしたのに、御休養の暇もなかったでしょう。しかし上様の御機嫌は近来にないものでしたな」

「訪客の多いには閉口いたした。柴田どのも北陸から今日あたり御着府とか」

それには答える興味もなく、蘭丸長定は軽くたずねた。

「明智どのも、お立寄りになられたそうですね」

「見えられた。旅づかれか、少しお元気がなかったようだ」

「何か、申されてはおりませんでしたか」

「何かとは？」

「上様からお叱りをうけられたこととか、私のうわさなど」

「いや、べつに」

「お気のどくに堪えません。このたびは、非常な御不首尾ごふしゆびでお帰りなされた。きつとその鬱うつを筑前どのに聞いて戴こうと思つていたにちがいない」

「では、明智どのが、信長公からいたく叱られたという沙汰は、ただの噂ではなかったのかな」

「いったい、明智どこの重くるしい勿体もったい振りが、日頃から上様

のお氣きしよ性にはちくちくと御不興を刺戟するのです。それがたま

たま、御酒宴の中であらわに爆発したというに過ぎません。――

然るに、明智どのには、女性のような邪じやすい推をなさる一面から、

何か、この蘭丸長定が君側からそれを焚たきつけでもしたように取
つておらるるらしい。……これは蘭丸として心外にたえぬところ
です」

「ははは。そうかなあ。彼も惟これとう任光秀、亀山の城主、当代の人
物だ。それがしには分らんが、仰つしやるような感情があるとす
れば、何か、そこにべつな原因があるのではないか。お身様の方
に、そう猜疑さいぎせらるるべつな理由が」

「思い当るのは、私が、鈴木重行しげゆきのことを、上様へ御忠告した

ことがあるだけです。かの本願寺の謀將鈴木重行の始末について……」

「その重行が、本願寺散亡の後、どうしたというのでござる？」
「あなたも御承知ないか。大坂石山の没落とともに、姿をかくしていた鈴木重行は、いつのまにか名を変えて、丹波亀山の城中に客臣となっていたのです。——十二年の久しきあいだ、織田家を悩ませた本願寺の黒幕の謀將を、おゆるしも仰がず、かくま匿うなどという行為は、明らかなる叛意と申されても仕方がないではございませぬか。かりにあなたが、信長公であった場合、それを知つてもなお光秀どのを、重臣として、快く、迎えておられますか」
「こういう時、秀吉の面は、おもてすこぶる微妙なものを湛たえる。」

熱心に聞き入る色もあらわして来ないし、といって、相手の訴える気もちをへし曲げて、うわの空に外^そらしているという顔でもない。

「ふむ。ふむ。なるほど」

いずれともつかない^{うなず}領^{うなず}きを見せてはいるが、彼自身の意志は、そのあいだ^{ひょうびよう}縹^{ひょう}渺^{びよう}として、天外に遊んでいるのかもしれない。

正直なところは、余りこういう話題には触れたくないとするのだらう。ひとの陰口、毀誉褒貶^{きよほうへん}、中傷讒訴^{ざんそ}、これに関わ^{かか}っていた日には限り^きがないからである。障子の棧^{さん}のチリを吹いて、わが目もチリにこすらなければならない。秀吉の性^{しょうぶん}分^{ぶん}に合わないことだ。

のみならず、彼としては、すでに前日、光秀から這般しやはんの消息はうかがっている。さすがに、五十余齡の光秀は、童形の青年蘭丸とはちがつて、露骨にことばには出さなかつた。けれど秀吉には、充分、

(……ははあ)

と、その意中も葛藤かつとうの根も読みとれていた。ほぼ察しがついていたのである。

蘭丸の母堂の妙光尼が、歸依きえするの余り、かねてから本願寺軍の謀將鈴木重行しげゆきのため、表面信仰、裏面密謀、ふたつの仮面めんの使いわけに操あやつられていたことを——その危険を——軍事にたずさわる秀吉としては、当然な防諜ぼうちようかんし監視の眼から疾とくに覺さとつてい

たからである。

蘭丸は母思いだ。また、才^{さい}長けた好青年でもある。

母の妙光尼の老後の幸福も、兄弟多勢の今日の出世も、ひとえにみな蘭丸の君^{くん}寵^{ちゆう}浅^{せん}からぬためといつてよい。

彼らの亡父^{ちち}、森三左衛門可^{よしなり}成^{なり}の忠節が、深く信長の胸に銘^{めい}記^きされていたことも間違いないにせよ、信長が蘭丸に傾けている信用と寵愛は、また格別なものがある。

それ、これ、思い合わせれば、石山本願寺の滅散後、鈴木重行が、何かの縁をたよつて、明智光秀に恃^{たの}み、亀山城の家中に、姓名を変えて、なお生きているということとは、蘭丸にとって、到底耐え難い不安を抱かせられたにちがいない。

（もし、重行の口から、母妙光との、前々からのことが、事細かに洩れでもしたら？）

こう恐怖し出したら、蘭丸とて、じつとしていられないのも無理ならぬことである。信長の君寵も信用も一度に覆くつがえつて、その代りに何が妙光尼に与えられるか、蘭丸に酬むくわれるか、余りにも明白である。

石山本願寺落去のときから、すでに蘭丸はその恐怖を抱いて来た。佐久間信盛父子の追放だの、宿老林佐渡の末路だの、すべて髪の毛ほども信長に異心を抱いたものの処断には、たとえそれが遠い過去であろうと昨日の事であろうと決して宥ゆるさないのが、愛されているわが御主君であつた。特に、蘭丸が人知れず胸をい

ためているその事一つは、身ひとつだけの心配でなく、母以下、森兄弟一門の今や致命的な不安となつていのである。

「——やあ、世間は面白い。たまたま、戦陣から出府して、世間ばなしをいろいろかがうと、いやもう限りもなく、世の味を満まんきつ

喫くいたす。まずそれだけこの安土は、平和の余裕よゆう綽々しゃくしゃくたり

で、四民を安からしめておるわれらの寸功もありといえましよう

か。われら戦陣に在る身では、晨あしたにはきよう死ぬかと思ひ、夕べ

となれば明日あすはとちかい、明けても暮れても、慾よくといえば死に花

を如何にとしか考えられぬ者にとっては、またなき耳の楽しみ、

腸はらわたの薬でござる。来年はまた一、二度出て参まゐりたいもの。——今

朝は立ち際ぎわで甚だ落着かんが、次の出府の機おりにはぜひゆるゆると

おはなしいたそう。……あははは。きようはどうも、失礼ばかりで」

これは、間もなく、秀吉が、蘭丸とともに席を立て別れる際にいった世辞である。これこそは、ほんとの世辞であつた。

秀吉の行装ぎようそう 一列が、まばゆい朝日の下を、桑実寺の門前町

から流れ出てゆく時、使者の蘭丸もまた安土の城門へむかつて歸つていたが、何ぞ知らん、この地上におけるこう二人の相識そうしきは、この時が終りだつた。誰か、この朝から半年後の本能寺ほんのうじの変を予知することができようか。

秀吉は京都に一泊した。

京都。——京都のすがたは実に一変した。

わずか十年前の京都を知っている者はみなそういう。二十年、三十年前の京都を見ている人々はなおのこと、隔世の感なきを得ないという。

それほどな推移を短いあいだに示していた。

まず、何より違つて来たことは、洛^{らくちゆう}中^{ちゆう}に入るとすぐ、大君

ここにましますという光耀^{こうよう}と清潔さに盈^みちていることと、その

「民」たるをもつて幸福としてゐる人々の平和な生活ぶりだった。それとまた、ここに立てば、

説明なしに、日本の正しい在り方とは、やはりこうであつたかとおのずからわかる心地もしてくるのだつた。

一般の庶民が感じるところは、やはり秀吉が感じるところだつた。

彼は、その少年時代、東海道を漂泊中などに、よく仰いだことのある——あの富士の秀麗な山容を——今の京都にふと思ひあわせた。

千古万代、この国とともにある不壊ふえの富士も、雲におおわれて、
 一いつてんかいめい天晦冥あふまったく人界から見えなくなる数日もある。

と思うと、忽ち一片の雲だにない澄明ちやうめいの青空に、飽くまであざらかなその姿容しようを示す日もある。

あくせくと、下界の生業たつきに追われている人々は、その全姿を眼に仰ぐせつなのみ、

ああ、富士。

と、呼ぶ。驚嘆する。

そしてはまたそれに馴れて忘れるともなく、雲を見ては雨を嘆くばかりで、雲のうちにも不壊ふえの富士のあることを思わなくなる。

近くは、応仁おうにん以後からつい室町幕府の末にいたるまで、もつ

と前には、足利氏あしかがし、北条氏などの暴政を私した時代など、思え

ば、この国の曇と晴も、富士と雲とのように、繰り返され繰り返され、治乱久しいものであつた。

（——今の京都は、晴れた日の富士のようだ）

秀吉は、洛中に馬を駐^{とど}めるたびに、ここ二、三年は、いつも同じ感激を抱く。

そして、

（これは、何に依って来たものか）

と、考える。

雲そのものの変化は問題ではない。富士そのものの実存だけが動かない事実である。

けれどその快晴を齎^{もたら}したものは、なんといつても自分の主人信長の力だったと思う。信長がなかったらなお乱雲^{らんうん}晦冥^{かいめい}の下に、多くの四民は、さる堂上の公卿^{くけ}が日記にも書いているように、

——如何に成りゆく世にやあらん。

と、きようきよう恟々、安き思いもなく、きようを送っていなければな

らなかつたろう。

それが、今はどうか。

皇居をめぐる山さん紫水明しすいめいのひかりといい、町屋町屋の輝きとい
い、そこに生業なりわいし、そこに楽しみ、そこに安堵あんどしきつっている市
民といい、つい一昔前の、室町幕府の治下には、まったく見られ
なかつたものが盈みちあふれているではないか。

誰よりも信長をよく知りぬいている秀吉は、また信長の理想を
今眼で見た心地がした。兵馬こうそう倥傯の中に、武人として、伊勢神
宮を修理したり、禁裡きんりの築土つじの荒れたのをなげいて、御料を献じ
たりしていた人に、信長の父信秀がある。そんな篤志家はあの時

代にはほとんど稀れだったといつてもいい。

思うに信長が、朝廷に仕える一信長をもつて任じだしたことは、父の影響によるものであり、そして父以上、積極的な性格をそれに加えて来たのであった。

御所の造営。

みかき
御墻の築き。

内大臣拝受の御礼。

おんせちえ
御節会の復興。

そのほか内裏だいりの御経済の改良やら、公卿殿上の生活安定から、諸祭事の振興など、あらゆる面にむかつて、彼は皇室の復古に心をかたむけた。

室町幕府を捨てて足利義昭よしあきを追つてから、わずか十年、眼まのあたりに、ここまでの推移と民生活の安定を見ては、もうこの頃の信長をさして、

(公方の謀叛人むほんにん)

などという者もいなくなっていた。かの叡山焼き打ち直後には、

(稀代きたいなる大魔王)

とまで罵ののつた法師輩ほうしばらまで、彼にきのうの非難を繰り返し得な

いのみか、共に、今日の明るい洛中洛外にあつて、その平和に浴しているすがただった。

わけて、ことし天正九年の春に行われた馬揃うまぞろいの盛観せいかんは、

年の暮れかかる今になつても、人々は何かといえ、忘れ得ない

語り草としていた。

この春の大馬揃いは、要するに平和の大祭であり、信長の覇^はを誇^じった示威^いでもあり、また、外人宣教師などに対する国際的意味も多分にあつたが、もつと、重大な意義としては、親しく至尊^{しそん}の臨^{りんぎよ}御^ごを仰いで、兵馬の大本を明らかにしたことであつた。

遠^{じようこ}い上古^こには、防^{さきもり}人と称され、つわものとみずから誇り、都^{つど}に集^{つど}う若者たちが歌つたという、

つるぎ太刀

腰にとり佩^はき

すめらぎの

御門^{みかど}のまもり

我^おを措^おきて人はあらし

のあの氣高い王朝時代の——きれいな濁り氣のない、純正無垢^{むく}な誇りと誓いとを——慚^{あは}なくも、信長は、この大馬揃いの挙行をもつて、身にも示し、世にも顕^{あら}わそうとしたことは確かである。

いつの世からか、皇室と武門とのあいだは、建国のときの神^{しんそ}

則^く、天皇の兵は治安を守る防人^{さきもり}であり、軍は国の御楯^{みたて}であり、

劍は我を磨き人を生かす愛ですらあつた本質^{わたくし}から私にうごき紊^{みだ}れ

て、時には分離し、時には皇室を威嚇^{いかく}するなど、その弊^{へい}は、応仁

以後の室町末期にいたつてまったく極^{きわ}まっていたといつていい。

その紊^{みだ}れを時代の主人公として世もゆるし自身も任じている信

長が、このとき大馬揃いの催しをもつて、それらのあらゆる意義

を、理窟や法制に恃たのまず、上下ともに楽しみ歡ぼうとしたことは、さすがに武弁ぶべん一遍の頭領ではない、偉大なる政治家としての信長のすがたをここには見られるのであった。

さて、その景観を思い起してここに一端を写してみるならば――

その日は、二月二十八日、京洛けいらくの春も闌たけなわの頃だった。

上京かみぎようだいり内裏うちの東から南への馬場八町には、若草の色もまだ浅く、柵さくのところどころの八尺柱は、緋毛氈ひもうせんでつつまれていた。

そして、禁裡きんり東之御門外あたらのあたりに、御出御ごしゅつぎよをあおぐ行宮あんぐうは建てられてあった。

仮殿とはいいいながら、それは清すがすが々しい白木に金銀の菊花ちりばが鏤

められ、珠簾しゆれんには紫の紐ひもが神々しく垂れて、大屋根の葺いらもさながら金砂を刷はいた大和絵そのままに霞かすんで見える。

摂家せつけ以下、殿上月卿雲客はことごとくそこに陪観ばいかんの席を賜わつて寄り集つどうていた。——衣香いこうあたりをはらい、四方よもに薫じ、箇々の御粧おんよそおい、御儀の結構、華やかなこというばかりもなく、筆にも詞ことばにも述べ難し——とはその日の有様を書いている。当時の筆者の嘆声であつた。

日月の旂はた、五色の御旗、ゆるやかに春風のなぶる下には、なお御親衛の弓、矛ほこをたずさえる防人さきもりの隊伍が、花園の花のように揃そろつていた。そして時刻の辰たつの刻こく（午前八時）の頃としなれば、遠く、下京しもぎようの本能寺から、貝の音は聞えて、——一番隊、二

番隊、三番隊、四番隊と、京の大路を練^ねつて一条東の馬場口へすすんで来る行列の出発を報^しらせていた。

その頃もう馬場のまわりには人か霞^{かすみ}かと疑われるほど、数十万の民衆は、この日の盛儀を微^{かす}かにでも拝^{おが}もうものと雲集していた。

やがて、柴田勝家、前田利家などの、北国衆がまず、信長の馬廻りとして、さきに馬場へながれて来た。燦^{さんさん}々と、その旌旗^{せいぎ}や

甲^{よろい}かぶとに旭^{きよつこう}光^{ひかり}がきらめいて、群集は眼もくらむような心地に打たれた。

——が、これはほんの前奏曲にすぎない。やがて七番隊の武^{たけい}井^{せきあん}夕^ゆ菴^{あん}が馬場にはいると、次に、信長のすがたが見えた。

御床^{ごしやうぎもち}几持^{いぢ}四人。奉行市^{いちわか}若^{わか}。地を金に、浪を絵取りたり。

左に、御先小姓、おんつゑもちきたわか御杖持北若。おなぎなた御長刀持ひしや。

また、御小人五人、おこびと御行滕持小市若。

召されたる御馬大黒。おほぐろ惣御人数二十七人。

右、御先小姓、おむかばきもちここまわか御行滕持小駒若。おほくたう御木刀もち糸若。いとわか御

なぎなたもち長刀持たいとう。

これは「信長公記」の中の一節であるが、ほんの左右の供人だけを誌してあるに過ぎない。しるそのほか扈從近臣の壮美な粧いに至つては、ただただ言語に絶した偉麗いれいというほかはない。

さて、信長自身のその日の装束はといえは、

梅花ヲ折テ首ニ挿シフリカシラサ

二月ノ雪、衣ニ落ツコロモ

の心かと当時の筆者は形容している。

——御頭巾は唐冠おづきん からかんむり、うしろに花を立てさせられ、御小

袖では紅梅に白、上に蜀江しよくかう にしきの錦をかさね給ふ。御肩衣おんかたぎぬ、

紅べにどんすに桐唐草きりからくさなり。お袴はかまも同然。お腰に牡丹ぼたんの作り花

をささせられ、御太刀、御佩おはき添のしへはさや巻の熨斗付也。

御腰蓑おんこしみのには白熊、鞭をおびられ、白革しろかはのお弓懸ゆがけには、桐

のとうの御紋あり、猩々皮しやうじやうがねんくつの御沓むかばきに、お行むかばき膝は金に虎の

斑まだらを縫おんくらかさひ、御鞍重あふね、泥障しりがいり、御手綱やうらく、腹巻、馬の尾袋をぶくろ

まで紅の綱、紅の房しりがい、鞆やうらくには瓔珞つけを付させられ——

と、実地に見た者の感激を、そのままここに借りるとしたら、

それは際限もないくらいな描写である。

もつとも、この日に着用する信長ひとりの装束のため、京都、奈良、堺などの唐綾、唐錦、唐刺繍の類から、まだ一般には珍しいゴブラン、印度金紗、南蛮織のあらゆる物まで、選り蒐めてその粹を凝らしたものだ。細川与一郎——藤孝の子の彼なども、その係の一員だったので、信長の着用する蜀江の小袖の袖口につかう金縷を捜すため、京都中を奔走してようやく適当な品を見出したというほど、金力と人力がそれまでには費つていたものである。

（——まるでこの世のお方とも見えない。住吉明神の御影向でも仰ぐようだ）

と、その日の群集が、ただ、もう礼讃したというのも、あな

がち誇張な嘆声ではなかつたであろう。

織田家の血すじは、総じて美男型であり、女子はみな美人である。この年、信長は四十八歳、なお端麗な余風をとどめているばかりでなく、^{きひん}氣稟はまだ青年に劣らず、眉にも頬にも化粧をほどこし、きようを^{はれ}曠と装つたのであるから、^{ばいかん}陪觀の外国人の群れ——^{ゼスイット}耶蘇会の代表者などもみな驚目をみはつて、

（すばらしき大演武会の司会者は、また^{ヨーロッパ}欧羅巴の国王間にも到底見られない華麗豪壮な^{ふんそうちりば}扮装に鏤められた端正なる一貴人であつた——）

と、彼らが各の本国への報告書に、あらゆる讃辞をもつて伝えていゝるのも無理ではない。

しかもそれは、信長一人の盛装と、扈從こじゆうの美観だけではなかつた。信長は、この大馬揃いに出場を命じた諸侯へ対しては、すべてに向つて、

「天子の御覧ごえいらんにそなえ奉る曠はれの日にてあるぞ。明国みんこく、南蛮みなまん、西夷せいゐの国々へまで聞えわたるわが国振くにぶりの武家式事ぶけしきじぞ。心いっぱい豪壮ごうそうせよ、美術せよ、われとわが姿と行動とを芸術せよ」

と、命令したのである。

実に、この盛典を機として、時の人々は、それまでの余り好まない暗灰色をいちどにかなぐり去つたといつていい。

時人じじんの心理は、まさに今、夜の明けたような曙しよしよく色いろどを欲していた。明るさに向つたときは明るい色を、身にも世間にも彩りた

いのが本能だった。希望に燃えている、豪壯を愛している、殺伐な裏には優雅に渴かわいている、血ちなまぐさ腥いい半面には華麗を慕う。――それは武人自身でなく、むしろ暗鬱あんうつな戦国の下に長く恟おびえいじけて来た民心にたいして、

(さびしむなかれ。歛よろこべ、謳うたえ。このとおり時勢は、今し刻々と暁天のような光彩にうつりつつあるぞ)

を感じさせる為にもなった。

さて、この曠世こうせいな大演武には、信長の一族、岐阜中将信忠のぶただ、北畠きたばたけ中将信雄のぶお、織田三七信孝のぶたか、柴田、前田、明智、細川、丹羽にわそのほかの諸侯から将士約一万六千余と、会衆十三万余人という盛況の下に行われ、各人各隊の演技のあつた後、やがて最後

の番には、信長自身、演技に立ち、悍馬かんばに跨またがつて馬場を縦横に駈けめぐり、馬上劍をふるい槍を把とり、またその槍を投げて、ま的とを射たりした。

衆人の喝采かつさいは、その度ごとに鳴りもやまず、天地を動かすばかりだったという。

馬上から、ま的とを睨み、槍を投げては、い的つを射潰す彼の演技は、風神颯爽さつそうとして、華麗壯絶を極め、しかも一度の失敗もなく、五、六たびも繰り返された。

十三万余人といわれるその日の会衆は、一箇の信長を、みな自分の持物でもあるかのように、歡呼し、礼讃し、果ては、

「さすがだ！」

と、対象視しているぐらいでは飽き足らなくなり、ひろい馬場の外では、熱狂した人浪のしぶきが、

「如何いかにや如何いかに」

と、踊り狂っている態さまが、はるか、玉座の御間近おんまぢかにある堂上

諸卿しよけいの席からも眺められたとみえ、その辺りの無数な顔もこと

ごとく紅潮をたたえ、また微笑ほほえみをふくんでいた。

時に――

御階みはしの下から、わらわらと、十二人の朝臣あそんたちが、信長のほう

へ駈けて来て、

「勅使」

と、声をかけた。

いま演技をすました信長は、地に降りて疲れた馬を宥いたわつていた。馬は海から泳ぎ上がったように汗に光り、その全身から湯気をたてていた。

「勅使です」

二度目の声に、彼は、はっと気づいたものか、馬の下にひざまずいた。

勅使は、綸言りんげんを伝えていう。今日の事、叡覽えいらんあつて龍りゆうが

顔ん殊のほか御うるわしく、上古末代の見もの、本朝のみか、異国にもかほどのさまはあるべからずと宣のたまわせ、斜めならぬ御気色みけしきに仰がれた。千秋万歳、御名譽なことであるという犒ねぎらいだった。

「……………」

信長は、感泣していた。

亡父^{ちち}信秀の志を、子として、いまその一つでも成し遂げたような心地もしたろう。

たそがれ頃、彼は、路傍の群集から、さらに大きな歓声をもつて送られながら、宿所の本能寺へもどって行つた。

群集は、口々に、

かかるめでたき世に生れ合はせ、天下安泰、黎^{れいこ}戸^{けむ}の烟^{けむ}り戸^{けむ}ざさず。生前の思ひ出、ありがたき次第にこそ――

と、云い囃^{はや}したとあり、なおまた、

かたじけな

忝^{かたじけな}く、かけまくも、一天万乗の大君を、信長公の御盛儀のた

め、間近う拝み奉る事、ありがたき御代^{みよ}かなと、貴賤老幼の

やから
輩、ただただ合掌、感じ敬うやまひ申し候事、この世はさながら歡

喜感涙のうるはしき大だいいちう一字とも見え侍はべり候也

と、その日の状況を記録した筆者、太田おおたぎゆういち牛一もまた感激の

なかに浸ひたつて書いている。

.....

秀吉は今、京都を通過しながらその日を偲しのび、また主君の一日の偉大を考え、ひいては自分に顧みていた。

潮声風語
ちようせいふうご

秀吉は、大坂へかかった。

よどがわ
淀川まで来ると、

「先にお着きのお荷駄にだは、すべて積み終り、御船中のお囲幕かこいも、万端、ととのうておりますれば」

と、九鬼家の使いである。

迎えの使者はなおい。

「陸路のご予定にございましたろうが、浪華なにわの浦まで道をまげてお立ち越えねがいます。それよりお船に召されて、海路、姫路へのお渡りまで、われわれども、お供仕りますれば」

秀吉は、淀川に近い休み茶屋の床しょうぎ几こをかりて、供の人数と一緒に休息中であつたが、口上を聞くと、自身気軽に出て、

「それは、九鬼殿のご好意か」

と、たずねた。

三人の使者の答えには、

「主人の命によつてお迎えに罷^まり出しましたが、お船廻しの儀は、

安土の上様から早打をもつてのお指図と伺つておりました」

と、ある。

「大儀」

と、秀吉はすぐ承知し、

「九鬼衆の使いにも、茶など与えよ」

と、左右へ心づけた。

彼としては、勿論、もう平定した播州^{ばんしゅう}と中央とのあいだの往来

などは、さして危険ともしていなかったが、信長はなお、

（道中いかなる変があろうも知れぬ——）

と、秀吉の帰国を後からふと案じ出して、海上を行けと、にわかに、ふなてがた船手方の者へ、その用意を早打でいいつけたものとみえる。

「かくまでに、この秀吉の身を、大事と思しおほめ召し下さるのか」
と、彼は心のうちで、安土の方を振りかえ顧らずにはいられなかつた。

なんじよう何条、その知己にそむ反くべき——である。秀吉は、九鬼家の

案内に従つて、その夕方、大坂の川口から船に乗った。

船は、かつて、この沖で、毛利家の輸送船団を撃げき碎さいした戦歴をもっている軍船の一つである。

艦装ぎそういかめしく、大鉄砲の銃座もすえてあるし、長柄ながえや、鉤かぎ槍やりなども、舷ふなべりに立てならべてあった。

けれど、船楼の一間は、あたかも本丸住居すまいの一部屋を、そのまま移して来たように、衣桁いこうもあれば金屏風もあり、蒔絵まきえの文棚ふだな、小鼓、香炉、火鉢しとね、褥しとね、膳具酒器など、ないものはなかった。

「幸いに、海上は穏やかです、どうか夜もすがらでも、お過あやしください。飾磨しかまの浦うらに着くまでは」

と、九鬼家の家臣という三名のさむらいが、船中料理の粋をこらして、やがてそれへ伽とぎに出て来た。

「船旅は楽でいい」

と秀吉は、近侍たちと打ちくつろいでいたところだった。さつ

そく杯を与えて、

「この船は、何石積みか」

と、質問した。

織田軍の船手方、九鬼家の家臣といえ、みな潮焦^{しおや}けのした顔に鰯^{ぼら}のような眼を持つて、齒ばかり白いさむらいばかり多い。ここに臨んで接待役に当った三名も、年配はみな四十以上らしいが、骨^{ほね}逞^{たくま}しく、贅^{ぜい}肉^{にく}なく、ひどく大きな手を、不器用に両膝へ乗せて、坐り仕事は不勝手でござると、その容^{よう}子^すからして物語っている。これなん今、天正時代の海国武士とでもいう者どもか、風采いかにも洋々と寛^{ひろ}く、顔にも陸棲^{りくせいじん}人士のごとく焦^いつ^ちいた神経などなく、各、鯨^{しやちくじら}か鯨の子みたい、頗る縹^{ひよう}渺^{びよう}たる風格のな

かに、また一種の樂天的な氣概をそなえている。

「は。何でござるか」

ひとりが反問した。

陸上での政治的な勢力とか、そこでの權勢家とか何とかいう憚りも、彼らにはすこしも反映していない。故に、媚^{こへ}び諂^{つら}いも知らないぶつきら棒である。——秀吉は、その三人のぶつきら棒を、愛すべきもの哉^{かな}と、見まわしながら、もう一度いった。

「この船は一体、何石積みか。——これで朝鮮国ぐらいまでは、航^ゆけるかな？」

接待役の三名は笑った。ただ笑っているだけで答えをしない。秀吉はすこし腹をたてた。

「何を笑う。わしの問いが何でおかしいか？」

すると急に恐懼きょうくして、ひとりが謹きん直ちよくに答えた。

「この船は、七百八十石積みで、三本帆檣ほばしら。ただ今、これで朝

鮮まで行けるやとのお訊ねでございましたが、高麗こうらい、大明だいみんは

おろか、安南アンナン、柬埔寨カンボジャ、婆羅納ブルネオ、暹羅シヤム、高砂たかさご、呂宋ルソン、爪哇ジャバ、

滿刺加マラッカはいうに及ばず、遠くは奥南蛮おくなんばんから喜望峰きぼうほうの岬みさきをめぐ

り、大西洋へ出て、西班牙スペイン、葡萄牙ポルトガル、羅馬ローマ、どこへでも、行け

ば行けないところはございませぬ」

「ふ……ウム」

秀吉は、すこし鼻白んだ。

彼らの親切な説明によつて、この船の力も、可能な航海の範囲

も、分ることはよく分つたが、同時に、自分の幼稚な愚問に気がついたからである。

「南蛮南蛮と、よくひと口に申すが、いつたい、それらの国々のどこをさして、南蛮となえおるか」

こんどは平凡を旨として質問した。答える方も平凡にいう。

「ルソン呂宋、ジャバ爪哇、ブルネオ婆羅納、アンナン安南、シヤム暹羅あたりまでを総じて南蛮諸

国と申し、また島々とよび、マラッカ滿刺加から先、ゴア臥亜などを奥南蛮とも申しております」

「ゴア臥亜とはどこか」

「てんじく天竺でござります。てまえどもは印度といっております。

臥亜には東印度総督がおりまする」

「そこまでは、航路どれほどな日数を要するか」

「長崎から媽港マカオあたりまでですと、順風でおよそ十四、五日には着きましようが、それから先は天候まかせで、予定の日をもつては参るわけにゆきません」

「どうして」

「暴風雨あらしにあえば、島に寄つて隠れ、船が壊れれば、船を修理し、みちのり道程ではなく、度胸と根気の航海ですから」

「その方たちは、至極、つまび審らかなことを申すが、いったいそのよ
うな航海をして、南蛮までも参つたことがあるのか」

するとまた三名は、あいまい曖昧な笑顔を示しているだけで、口をつぐみこんでしまった。お互いに答えを譲り合っているらしいので

ある。

「ないこともございませんが——」

と、やがて中の一名が思い切ったように答え出して、

「それを仔細に申し上げますと、だんだんわれわれの前身が——
つまりおさが知れて参ることになり——この儀は主人九鬼嘉隆くきよしたか
よりも、平常、図に乗って自慢げに語ることは相成らぬと、固く
戒められておりますことゆえ、ちと、どうも」

「これこれ、それは自慢顔に無用なおしやべりは慎めといわれた
のだろう。大隅おおすみ殿（嘉隆）に叱られたらわしが詫びてやる。ど
ういうことだ、語って聞かせい」

「——では、申し上げてしまいますが、実は、われわれどもは年

久しく、わだつみろうにん海 浪 人の身にござりまして、かような窮屈な武家奉公は、去ぬる天正五年、信長公より勢州の九鬼右馬允殿うまのすけに仰せ付けられ、織田家の水軍というものが組織されました折に、初めて九鬼殿に呼ばれて召し抱えられたもので、その前は、弓矢を持ち、海上往来はいたしおりまして、武家奉公というものは一向に存じない者にござります」

「そう詫び入らんでもよい。決してその方たちの作法とか言語などを咎めとがはせぬ。……それよりは、何だ、わだつみろうにん海 浪 人とは？」

「つまりその、海上浪人のことで」

「ははあ、和寇わこうか。——おぬしらの前身は」

「まあ、そのようなものでござります」

ばはんせん

八幡船なるものに乗りこんで、海濤万里をもものともせず、

南の島々から

だいみん

大明の沿海はいうに及ばず、揚子江は※魚のごと

く千里を遡り、

さかのぼ

高麗の辺境までも鯨遊して、半生、海を家とし

て送って来た男どもの果てであると聞くと、

「ほうツ……」

と、秀吉は、わざとのように、眼をまろくして、いきなり前の

ちようし

と

銚子を把った。

「ばかなやつだ。さあ飲め」

これが次に飛びだしたことばで、そのことばの下からまた――。

「愚にもつかん輩ではある。

やか

最前から何をもじもじ云い憚ってお

るかと思えば、前身、

わこう

和寇と呼ばれていたというだけの遠慮か。

いやはや、笑止千万。そんな小さい胆きもを持つて、よくも海上を暴れ廻つておられたもの。主人九鬼殿もちと分らん男であるな。――八幡船、和寇、何がいかんか。秀吉なども、もし、十六、七歳の頃に、その方どもと巡り会うていたら、かならず汝らの手下に属して、南海西蛮せいばん大明高麗だいみんこうらい、ひとわたりはぜひ見物しておいたろうに、残念に思う。――いや、まったくだぞ」

「はッ……」

三名が、首を揃えて、恐縮すると、秀吉は銚子ちようしをつきつけて、「順に、杯を持て、あらためて一巡酌しやくしてつかわす。……よく致した、よく致した」

何を犒ねぎらわれているのか、彼らには自覚がなかった。故に秀吉は、

銚子を下に置くと、それを齒痒はがゆがつて、諭さとすのであった。

「和寇というもの、いつのまにか、海上に影をひそめてしまったな。惜しいものとはいわん、また秀吉、奨しょう励れいもせんが、自体、

八幡船の活躍は、起るべくして起つたものだ。……と、思わんか」

「はあ」

「遠い上古、神功皇后じんぐうこうごうさまの拳を今日より偲しのび奉つても、あ

の前後からすでにいかにこの国を侵おかさんとする外夷がいがあつたか思

いやられようが。降くだつて、元寇げんこうの変に、相模太郎時宗さがみたらうときむねをして、

一劍護国の難にあたらせ、民ことごとくの憤怒が、筑紫つくしの大たい捷しや

となつた時の如きは、その最も歴然たるものだ。十万の元

兵、数百の鰲もうどう、すべてを日本に失つてから、さすがに懲こりごり々

したか、その後は襲^やつて来なくなつた。……だが鎌倉以後、もし来られたら、あの大難以上な大難だつたろうと思われる時代は、この国内にだいぶ続いた。たとえば、吉野の宮の時代、足利幕府の初期、つづいて応仁の乱、義満、義政などの無能な將軍の腐敗政治に委^{あづか}られていた時世などに……どうだ、想像してもみよ、もし元寇があつたら」

「左様でございますな」

「幸いに、高麗も明も、元ほどな威を、彼もその時代は、持たなかつたからいいが——それにせよ、室町幕府の腐敗ぶりがそのまま海外に露^ろ呈^{てい}していたら何とも知れん。……それを、室町將軍の援護^{えんご}でもなく、また幕府の指令でもなく、ただこの国の民の意欲

で、氣ままに、存分に侵攻を防禦していたのは、汝らの仲間だった。汝ら、八幡船の力といつてもいい」

「ははあ。そうですね」

「いや、待った。その方どもの時代になつては、八幡船もすでに末期、和寇という名ばかり残つて、恐らくその魂は失われていたろう。——だが、かつては、その方どもの先祖にはあつたものだ。

ひとつの信念があつたに相違ない。なくて何であんな大胆不敵ができる。生命を波濤はとう なげうに抛てるか。由来、この国の民というものは、

故なくして生命は捨てん。いかなる匹夫ひつぷでも生命の価値を知つて

おる。大明、高麗の各地に上陸あがり、珍器重宝をどんどん持つて来

た。だから海賊だといつている。慙あわれむべし、笑うべし、そんな

行為はついでの仕事だ。——そもそも、その方どもの祖先には、もつとべつな熱情があつた」

日頃から云いたくしていたことにちがいない。秀吉は、なお云つて熄やまなかつた。

和寇わこうの功績を。

また、和寇の気もちをだ。見よ、八幡船の起つたところ、彼らの出生地は、みな国難のときの記憶と、体験のもつとも強かつた西国や、南海の士民なることを——と。

その中には、国内に志を伸ばせない豪族のくずれもいたろう。海賊の徒党に過ぎない暴れ者もいたろう。けれど鎌倉以後の剛毅ごうき大志のさむらいもいた。現に、みずから長い旗に書いて「海賊大

將軍」と名乗っていた村上なにがしと呼ぶ和寇の大將のごときは、足利氏に亡ぼされた楠家の一族だったともいう。

すでに、国を愛するがために血をながした一族のわかれが、一
帆万里をこえて、国外に武を振うとき、どうしてその生命の光こうえ
焰んに、護国のたましいが発しられないわけがあらう。国を愛す
る念の出ない理由があらう。

ふかく思つてやらなければ可哀そうだ。和寇の涙を。——和寇
の心を。

国外千里の異境に、名もわからず、花一枝の手向たむけもうけず、天
の星とともに黙している土中の白骨にも、いわせれば、綿々と、
憂国の所以ゆえんを吐くかもしれない。

事実。

室町幕府の長い時代を、ふたたび元寇の襲来もなく、外夷のうかがう眼からも防いでいたのは、幕府そのものの力でも何でもない。私設国防軍をもつて任じていた、彼ら和寇の功績ではなかったか。

「みずから、海賊大將軍と唱えていたのは、事海外に關し、万一の難を、自国の外交上に及ぼすまい、愛する本国へ迷惑をかけまい、またその国家の名を傷つけまいとする——のふかい考えからと思われないこともない」

——などと秀吉のはなしは尽きないほどだった。そして前半生を八幡船に送って来たという三名は、却^{かえ}つて、

「はあ、なるほど」

と、ただ感じ入っているばかりである。

秀吉は、ここで話の気をかえた。

「近頃はまた大いに事情が違うて来たな。西班牙スペインのゼビエーとい

う宣教師バテレンが来たのは、たしか天文二十年頃とか聞いているが、以

来、来るわ来るわこの日本へ。……信長公が、至極、そのとこ

ろを不即不離に、包容なさるものだから、南蛮の島々、奥南蛮の

大国、西欧の諸辺から、種々な物を船載はくさいしてくる。だがゼビエ

ーは本国へ書簡をもつて云っている。——この国だけには兵船を

向けて来るな。文化と宣教師は送つてもとな」

冬荒れか、船はすこし揺れて来た。寒さも痛烈に夜更けを覚え

させる。秀吉は、彼らから聞くだけを聞き、語るだけを語り尽くすと、

「寝むぞ。——そちたちはなお心ゆくまで飲んでおるもよい。旅だ、楽しいめ」

と云いのこして、さつとべつな船室へはいって眠ってしまった。内海とはいえ、沖へ出ると、かなり大きな濤音なみおとが船体を横に搏うつ。

快い眠りのなかへひき込まれながらも、秀吉の浪漫的な空想ろうまんできの血だけはなおどこかでうずいていた。

半眠りのなかのその空想がさまざまな幻像をえかく。

茶わん屋の座敷が泛うかぶ——

少年の頃だ。自分の手はひびあかぎれに腫はれている。

大勢の奉公人のすみに、ちよこなんと、畏かしこまっている自分だつ

た。てだい手代もいる。飯炊き男もいる。下婢かひもいる。

あるじ

主の茶わん屋捨次郎は、美しいお内儀かみと、息子の於福おふくをそばに

おいて、火鉢と晩酌ばんしゃくの膳をそばに、よいごきげんでみんなに

話をして聞かせている。

それがいつでもご自慢の大明国だいみんこくのはなしだった。十年以上も、

大明の景德鎮けいとくちんにいて、支那の陶磁まなの製法を習まなんでいた人に下僕しもべ

として仕えていたというこの家の主の見聞談はまた、どんなに尾

張あたりの田舎しか知らない奉公人たちにとつては、驚異であつ

たものかしれない。

けれど、誰よりも、その驚異を大きな眼と、熱心な耳で、聞き入っていたものは、その頃まだ、日吉といっていた——自分だつたろう——。そう秀吉はいまなお少年の日に、胸ふくらませた鼓動を思う。

芽というものは強いものだ。きつとその生命を日光へ伸ばさずにはおかない。

考えてみると、自分の中に、夢のままで終るか実現するかはべつとして、ともあれ、一度はかならず海外の未知の地をも踏んでみたいという夢を抱いていた。

それが図らずも、数十年後、自分と同じ夢の持主とこの世で遭^はう^く遇したのである。

（おまえもか）

（あなたもですか）

心底を語りあつてみてお互いに驚き合つたものである。日本には自分のような夢を抱いているものなど自分以外にはあるまいと、どっちも思いこんでいたからだ。その人を誰かといえ、いまの主人の信長公であつた。ひとつ理想を持つ御主人とめぐり合う。こんな倖せなことがあるうかと、秀吉は真実そう思うのであつた。海外について学ばねばならぬ。徐々に、眼孔の小さい諸将にも、狭小な考え方を改めさせてゆかねばならない。

（ああ濤なみおと音がする。この濤は、大明の岸をも搏うち、南蛮の島々にしづき、西欧の国へもつづいている。古来、この国の者は、何

でこう日本の内にもみ屈曲してせめぎ合つて来たことだろう。ひとり信長公に至つては、従来の英雄とすこし型がちがつていて、眼界のひろさが、けたちがいだ。かつてない文明人でもある。旧い物にはすさまじい破壊力をあらわすがまたそれ以上の建設的な情熱を持つておられる。お年は明けて四十九歳、なお、二、三十年は優に御活躍できよう。よしこの二十年に……)

秀吉は唇をむすんでほんとに深い眠りに入つた。けれど彼を乗せた船はまだついそこの山陽の地へさしてゆくに止まる。しかも人生の測り難さは、この帰路の旅が、主君信長との最後の別れになりつつあるものとは、遂に、夢にも知らずにいたことであつた。

中国陣
ちゆうごくじん

秀吉は姫路へ歸つた。

歸る^{そうそう}勿々、彼は中国總司令官として、誰よりも高いところに

位置していた。

播州^{ばんしゅう}、但馬^{たじま}、美作^{みまさか}、因幡^{いなば}などの占領下の諸將は、入り代り立

ち代り姫路を中心に去来した。

それらの人々からの歳暮^{せいぼ}の辞や礼物を、こんどは受ける身に立つ秀吉であつた。

「みなに頒^わけてやれ。一物も残さんでもよい」

浅野^{あさの}弥兵衛^{やへえ}に命じて、彼は、その悉^{ことごと}くを、部下の全將士に頒^わけ

て今年の労を犒^{ねぎ}らい、また来たるべき年の覚悟についてこう云い渡した。

「来年こそ重大な意義をもつ年だろう。そしていよいよ多事なことはいうまでもない。今までのいかなる年よりも急激に天下の相^そ貌^{うぼう}は一変し、宇内^{うだい}の文化も遷^{うつ}つてゆこう。どう遷^{うつ}つてゆくかといえ、旧態の破壊撃砕もほぼ一段落をつけ、なお戦^{いくさ}いつつも建設期へ入つてゆく。ここに、新しきを創^たて、人文清新を競^{きそ}い、久しく枯^こ田^{でん}衰^{すい}煙^{えん}の歎きにあつた民をしてみな再生のよろこびに会わしめる。それなくては信長公の多年の戦^{いくさ}いも、ただ単に覇^はたるにとどまり、真の世業というわけにならん。世業とは何、私業でないことだ。国業だ。いやしくも天日^{もと}の下に、劍槍を振舞い、人

血を地にながす業が、かりそめにも私業であつてよからうか」

と、日頃の思いを述べ、

「しかも筑前守は、また来る年にも、各の血ぶるいを励まし、
いよいよ劔槍を研ぐべしと叱咤するだろう。これ決して、筑前が
求めるに非ず、信長公が強しいものでもない。天地の命だ、いわば
われらみな悉くこの世この国の奉公人だ、信長公はただその奉行
におわし、秀吉はそのお手先の一人たり。いま筑前その任をおび
て、この中国に軍をすすめ、毛利を討つも、毛利にして、時勢に
あきらかなれば、抗し難きこの理に目をみひらき、旗を巻いて、
われらに合がつ体して来るべきだが、かなしいかな元就もとなり以来の毛
利は、保守、排他、旧態固執きゆうたいこしつ、その国政は一毛利家の家計に

とどまり、その奉じるところすべて私業に過ぎない。——年明くれば早速にも、わが中国陣はふたたび合戦を展開しよう。彼も名だたる強大な武門、侮り難いものはあるが、彼は私業の兵、われは世業の軍、勝つことは決まっている。必勝の進軍、間近し。初春三箇日は、大いに飲み、大いに心胆を養っておくがよろしい」と、むすんだ。

諸将は日頃から秀吉の恬淡を知っていた。その秀吉のことばとして聞くととき初めて世業という意義に大きな感動を覚えた。ひとり毛利家ばかりでなく、総じて戦国初頭から群雄割拠しはじめた各地の豪雄英傑のあいだには、私業のみあつて世業はなかった。いわんや国業とまで理想し自覚しているほどなものはない。

どなかったといつていい。

秀吉が、今までになく、麾下きかの将士に、こんな訓示をしたのも、こんど安土から姫路に帰ってくる途中、船中で彼自身が大いに覺さとつたことが要因となっていたかもしれない。

海外を考える。

それは当然、

日本を考える。

ことの始まりだからである。日本を日本だけにしか考えられない狭量と狭鼻がこの中で角逐かくちくし、この中で私業の争いを繰り返して来た群雄割拠はそれであつた。それも無意義ではなかつたが、もう今日に至つては、意義も理由もない。むしろ障害だ。秀吉は

こう信じて来たのである。

天正九年は暮れた。

中国陣は、次の段階へ向つて、春とともに、準備おさおさ怠りなかつた。

明けて、天正十年。

この正月となると、毛利方の陣営へはもう挙国的な防戦気がま
えが漲みなぎっていた。

山陽方面の総帥小早川隆景たかかげは、敵の総帥秀吉が、思いのほか
早く、中国へ帰陣したので、彼と信長との会見に、何らかの大方
針が決まったものと見、それに備えるべく、諸所の味方へ令を飛
ばして、

「時やいま非常、中国の興亡この際にかかる。年暮ねんぼの辞儀を廃さ
 ん。歳首さいしゅの祝礼も、敢えて努むには及ばず。それただ敵に尺地せきち
 寸土も辱むるなかれ——」

と、激励していた。

そして、一月の末、ふたたび檄げきを発して、

「備後三原びんごみはらに会せよ」

と、その日時を通報した。

備中高松の城主、宮路山みやじやまの城主、冠山かむりやまの城主——加茂かも、

日幡ひはた、松島、庭瀬にわせなどの主要な七カ城の守将は、前後して三原に

集まった。

隆景は、その人々に告げた。

「山陰山陽両方面とも、今日までの戦況では、遺憾ながら秀吉の精銳の駿々たる攻勢に利があつて、毛利方に戦捷があつたとはいいがたい。しかも彼の兵力は年月とともに増強され、やがて十万にのぼろうとしている。そして備後境へ襲せて来るからには、宇喜多直家がその案内者たることも想像に難くない。宇喜多は多年わが毛利方の一翼だったが、利を見て信長へ款を通じた者である。これも是非なし、敵に武門の節義を売ろうというほどの者には、またその人間だけの小理窟と打算があるにちがいない。ところで、信長、秀吉からは、将来もあらゆる計策や利をもつて、内々に、御身方まで味方に引き入れんと手をくだくに相違あるまい。明らさまにここで隆景は申しておく。信長へ通じたいと思

う者は、遠慮なく彼に従つて去るがいい。古今に例のないことでもないから、今のうちならば隆景も、さまで遺恨いこんにはふくまぬであらう」

平常にはないことばである。

ことばそれ自体が、隆景の決意のほどを割つて見せるにも余りがあつた。

「……………」

七城将は、ややしばらく、默然としていた。

そのうちに一名が、

「ただいまの御ご誼じようは口惜しいことにござります。多年御恩顧の輩ともがらを、左様に心こころ許もとなき者と思し召されてか」

と、声を嚙んだ。

つづいて発言した者も、

「この期に、何のふたごころ一一心を抱きましようや。大事な境目の守護を仰せつけられ、死すとも誉れと覚悟してあるのみにござります」

と、答えた。隆景は、一言、

「満足に存する」

といって、あとは馳走の酒にまかせた。

酒宴中にも攻防二様の政略やら、方針について、種々談合があった。そして、協議も酒の興も尽きると、

「この初春はるは諸事祝儀も一切、先の佳よい年に延ばしたが、これは臨戦の門祝いである」

といつて、七将の者へ、各 ひとこし 一腰ずつの脇差 わきざし を与えた。

七人の将は、

「御勝利の上、重ねてまた、めでたくお祝いの日にお目にかかり
ましよう」

と、退出しかけた。

すると、高松城の守将、清水長左衛門宗治 むねはる だけは、ひとりその挨拶を欠いて、自分だけはべつなことで、その拝領物 はいりようもの にこたえた。

「それがしどもの持口は、たとえば洪水に当る土堤 つつみ のようなもの。敵十万の怒濤は、どこを切るや分りませぬ。さある場合は、自分の持分においては、城を枕に討死あるのみです。この長左衛門に

は、重ねてめでたくお祝いに逢わ^あんなどは存じも寄りません。この御拝領はその意味で一^{ひと}しおありがたく頂戴して参りまする」清水長左衛門宗治は、真を吐いた。よい加減がいえなかったのである。

といって、他の六将が、嘘^{うそ}言を飾ったわけではない。宗治以外の者は、ただ真がいえなかった。総帥小早川隆景に対してばかりでなく、自分の心に対して、

（こんどは必然、味方毛利側の総敗軍はまぬがれぬ）

とは、云いたくなかった。云いきれなかったのである。

だが、隆景は当然、それをみずから知っているべき位置にいた。

彼の胸^{むなづもり}心算では、

「いかによく動員し尽しても味方の兵力は四万八千——乃至五万
せいぜい」

と、みている。

敵はといえば。

摂津の伊丹^{いたみ}、花隈^{はなくま}の二城がくずれ、大坂本願寺が滅去してか

ら、頓^{とみ}に増兵運輸の利を得て、この春には、固いところ十万以上の
の兵力を挙げて来よう。

いや、筑前守秀吉のことだ。目安^{めやす}十万と見せて、十三万も、さ

らに十五万も、怒濤のごとく次々に送って来るかもしれない。

いずれにせよ、兵力において、すでに毛利方は、半分に足るま
い。

加うるに、士氣の問題だ。

いかんせん山陰山陽とも敗軍をつづけているばかりか、信長を孤立せしむべく計ったあらゆる紐帯ちゆうたいの要所要所はことごとく彼のために破砕されてしまったかたちである。

しかもなお隆景が、

「むぎとは」

と、心中たのに恃んでゐるものは、ただひとつ、元就もとなり精神ともよぶべきものがまだ中国武士にはあることだった。

毛利元就が、本国あき安芸の吉田山に城を築いたとき、

——人柱ひとばしらは要いらず、魂柱たまばしらこそ要いるなれ。

といつて、土台深くに「百万一心」と刻んだ巨石おおいしを埋めたこ

とがある。このことは元就在世中からたえず藩士のたましいへ家訓としてうち込まれていたものである。

ああ、それが今、この中国の興亡のわかれ目に來て、どれほどなものをいうか、光をあらわすか、試^{ため}さる^{とき}る秋とはなつた。

事実、智者といわれる隆景も、今日ではもう策もなかつた。滔^とうとう

々たる中央織田の大軍と秀吉の指揮に對して、

「所^{しよせん}詮、小策などは無益」

と、観念していた。

最善をつくし、必死で当る。

それしかなかった。また、どうしても防戦防禦を専らとするしか方針も立たなかつた。

かくて、一月、二月、三月——警固おさおさ怠りなく、げんみつ 厳に密に、さんせんそうもく 山川草木、およそ中国の土にあるものはすべてを動員して来るべきものを待ちうけていた。

一面、秀吉の方でも、着々と戦備はととのえられ、その大方針としては明らかに、

——一挙備中に入り、高松城を占め、進んで安芸あきの本城吉田山に肉薄して、否やなく毛利をして、城下ちかいの盟をなさしめんと、

と、いうにあつた。

はりま 播磨、いなば 因幡、たしま 但馬に散陣していた秀吉の麾下きかは、二月中に、はやくも姫路に集合を命ぜられていた。

三月末、姫路を発したとき、その兵力は、すでに優に六万はあ

った。

堂々、岡山城に着く。

ここには宇喜多秀家の軍勢二万余騎がある。

宇喜多勢、先鋒を命じられ、まさに備中へ入るの態勢をとった。
その前に。

「一応は」

と、不調は承知ながら、秀吉は蜂須賀彦右衛門と黒田官兵衛とを使いになてて、高松城の城主清水宗治に、降伏をすすめた。

「かたじけないが」

と、宗治はまず毛利家の「百万一心」の実を示してきれいに断った。ここに中国陣の戦局はついに最後の段階へ直面することと

はなつた。

ぜにのぶなが
銭と信長

わかれたその後とても、心契しんけいの主従は、何かにつけて、朝夕遠くから思いを交わしていたにちがいない。

中国陣の秀吉と、安土あづちにある信長とは。

秀吉は相かわらず軍務のひとつとして、まめに安土へ消息を出していた。信長はいながら毛利の版図はんとを俯瞰ふかんしていた。そして、

「――彼さえおれば」

と、その方面の策略は、安心していたにちがいない。

その秀吉を、中国へ見送つてから、安土で年を迎えた信長には、
 新春はると共に、年暮くれの混雑へさらに輪をかけたような多忙がめぐつ
 て来た。いや、多忙を作っていたというほうが適切である。

天正十年、みずのえうま 壬午 正月。

隣国の大小名、御近族おんしゆうの御衆、そのほか参賀ともがらの輩、百々

之とどのぼし 橋よりおのぼり成され候に、夥しき群集にて、築垣ついでを

踏みくづし、石と人と一つになつてくづれ落ち、死人も有、

怪我人けがにんは数知れず、刀持、槍持の若党共は、槍刀を失ひ、迷

惑したるもの多し……「信長公記」

正月早々、年始の客は、こんなふうにあつた安土城へ押しかけたもの
 とみえる。ひとりの信長へ、ひと口の年賀をのべるために、あの

総見寺そうけんじ山の広い石段道や大手の惣門そうもんから奥へかけて、こんなにも芋いもを洗うような混雑を呈したとは、信長の威光というか人気というか、人心の流れ方というものの怖ろしさをさえ考えさせる。もっとも、人死にすらあつた程だから、ことしの年賀は、特に異例で、毎年こんなことがあつたわけでもあるまい。

どうしてこんな騒ぎになつたかという、信長が、除夜の晩に、「元日の年賀客は、誰彼を問わず、ひとり百文ずつの礼錢をとれ。めでたく新春に会い、今日を無事に過ごし、信長に謁えつして賀を述べられる冥加みょうがとして、百文ぐらいな年賀税は徴してもよろしかろう。——堀久太郎、蒲生右兵衛がもううひょうえ、ふたりして明日は奉行せい」と、いいつけたことに起因する。

それだけでなく、信長は、

「年賀税をとる代りに、日頃人々には開かぬ城中の秘閣ひかくしんでん深殿をあけ放ちて、ことごと悉く見物させてつかわすがいい」

と、開放ゆるを免したからだつた。

人気といえ、これも人気を喚よび起した原因といえよう。

すでに、数日前から、安土の町々に旅舎やどをとつて、待ちかまえて

いた大小名や、或いは、有資格者の町人、儒家じゅけ、医師、画人、

工匠こうしょう、あらゆる階級のものから、大小名の家中も挙げて、

「きよようの折をのがしては」

と、いちどに山へさして来たから堪たまるべきわけではない。人死に

まで生じるような満山の大混雑となつてしまった。

だが人々はそれだけの値打もあつたと後悔はしなかつた。

まず総見寺毘沙門びしゃもんの舞台から見物し、表之門から三之門に入

り、御殿主ごてんすから白洲まで来て、ここで、御慶ぎよけいを申しあげる。

——といっても、人浪に揉まれるし、後から急がれるし、肝かんじ

賢けんな信長の顔もすがたも見えはしなかつた。ただ、

「あれが三位信忠卿」

「今、向うへ行かれたのが、織田源五様」

「こちらを見て、笑っていらつしやるのが、
北畠中將信きたばたけちゆうじようのぶ

雄卿おきようではないか」

などとせめて一門の歴々を、遠くから望む程度で満足し合つて

いた。

いや、一般の者が、満足もこえて、感激にひれ伏したのは、はからずも、この安土城のうちにかつてありとも聞いていなかった「御幸の間」^{みゆき}を、この日、拝観したことであった。

安土に「御幸の間」があろうとは、一般には、きょうまで、思いも及ばなかったことである。

いつかは、主上^{しゅじょう}の行幸をここに仰いでと、人知れず忠誠を

心がけていた信長の用意を今知るとともに、人々は、

「こうして、恭しくも、至尊の玉座を眼^まのあたりに拝観するとは、

一生の思い出。ありがたい極み」

と、ここへ来ると自然、雑^{ざつ}鬧^{とう}の人波もみな自発的にひそまり

返つて、階^{きざはし}の下、廊の陰など、思い思いに額^{ぬか}ずき合つた。

こうして、年賀の群集は、次々に殿中の座敷を見物して歩いた。
 狩野永徳かのうえいとくのふすま絵に佇たたずみ、纒うんげんべり縷縁こうらいべりや高麗縁こうらいべりの畳に目をみ
 はり、みがき立てた金壁に気もすくみ、恍惚こうこつとした心地で白洲
 へ降りると、

「御台所口より戻れ」

と、城士が通路を指さし、大勢の足は自然に、結ゆいまわされた
 青竹垣に誘われて、御台所の側へ流れ、お厩うまやぐち口へあふれ出し
 て行つた。

するとそこに、思いがけなくも信長自身が、近習たちと共に、
 新あらむしろ 薙たの上に立ちはだかつていて、

「礼錢を忘れずに置けよ。百文ずつの礼錢をわするるな」

と、手ずから錢を受取つては、後ろへ向つて投げているのだつた。

もちろん無数な群集のさし出す無数の手と錢とは、とても信長ひとりでは受けきれない。堀久太郎の部下や、近習も、手伝い手伝い受けてはうしろへ投げてゐる。

けれど、群集の心理は、必然、信長の前へ前へと押して来た。わずか百文の税を、信長に手ずから受取つて貰えるなどは、これも一代の光榮、この後はないことと思うのであつた。

こうして信長のうしろには、またたくうちに、錢の山が幾つもできた。それを足輕組の者がすぐ^{かます}吠につめ込んだ。そして^{かます}吠詰^めの錢は間もなく奉行の手から城下の役所へ下げ渡され、安土

の町々に窮民を尋ねて、この正月をぽかんとしていた貧民を戸ごと賑わした。

そうして裏町の隅々まで、この正月には飢えている顔はない、と想像することも、信長にとってはやはり一つの愉快ゆらくだった、自己の正月を大らかにするものだった。

「どうだ、年賀税は。おもしろいことだったろう」

堀久太郎に向つて、彼はあとでそう誇つた。

久太郎は、初め奉行を命じられた時、かりそめにも天下の覇者はしや右大臣家たるものが、そんな平民的な真似を遊ばしてよいだろうかと案じていたが、民衆の声は、まったく自分の憂いとは反対なものであったので、

「実に、結構な思いつきでした。参賀の人々も生涯の語り草と大よろこびですし、お礼銭のお施し^{ほどこ}をうけた窮民たちは、うわさを聞きつたえ、これはただの銭と違う、右府信長様のお手にふれたものだ、ただ費^{つい}やしては勿体ない、これを資^{もと}にし、来年の正月までには、困らぬようにしよう……左様にみな申しおりますと、役人どもまで飲んでおりました。かような善事は、来年の正月も、また次々の年頭にも、吉例^{きた}といたしてもよいかと存じまする」と、口を極めて称^{たた}えた。

すると信長は、存外、すげなく首を横に振って、

「二度とはいたすまい。窮民^{とが}どものよろこびも、それに狎^なれさせたら、それは却^{まつり}って、政を執^とる者の科となる」

といった。

この正月半ば、森蘭丸は、お使いに派遣されていたが、公務を果して、岐阜ぎふの城から帰って来た。

「もどりました」

「於蘭おらんか。大儀だった」

「岐阜の御金蔵の鳥ちようもく目 一万六千貫、のこりなく束ね直たばして参りました」

「そして、蔵出しのこと、中将へも、委細頼みおいたか」

「はい。お旨のとおりに」

信長は満足そうに頷うなずいた。

織田中将信忠の岐阜城へ、蘭丸が使いした用件というのは、か

ねてその金蔵に入れておいた巨額な金が、年久しく山積みそのままになっているので、信長が、

(さだめし鳥ちようもく 目の束ね縄もみな腐つていよう。一切縄を改めて束ね直して来い)

と、命じたものである。

土蔵の中の金の縄目は何年ぐらいで腐るものか——までを心得ている信長に、蘭丸は心の底から、

(ひとは御主君の軍略の才のみ知って、経済的な御頭脳は余り認めないが……経済といわず、この君に対しては、秘ひそごとか事は少しもできない)

と、つくづく畏おそれた。そしてそういう驚嘆に出会うたびに、母

の妙光尼のなした過去の過^{あやま}ちが案じられ、鈴木重^{しげゆき}行を家中^{かくま}に匿^{かくま}っている。と聞く明智光秀の一挙一動が心懸りになるのだった。

とはいえ、それは蘭丸一箇の心の影である。或いは、幻に過ぎないほどのな、思い過^{すご}ごしかも知れない。ここでの問題はおのずからちがう。

彼の使いの用件を聞くと、はしたない奉公人の末は、

「さすがに、吝^{しわ}い御大将。お目のつけどころが偉い。またそれへ蘭丸とは、打ってつけのよいお使い」

などと陰口し合ったが、やがてその後、もつと深い事実を知ると、彼らは、自分で自分の口を抓^{つか}らずにいられなかった。

いったい信長には、その豪放と派手気に似合わず、本性は吝^{りんし}

齋よくなのだという評がよく世間に撒まかれていた。また實際、その例ともいえるようなことを挙げればいくらでもあつた。

——で。いわゆる召使い根性から、今度の金の縄直しの件も、さつそくその口吻こうふんで囁ささやき合つたわけだが、なんぞはからん、その後伝えられたところによると、岐阜城の金は間もなく、続々金蔵はんしゆつから搬出されて、世の陽の目を見ているという。

しかも、その金はみな、陸輸海運などで、みな伊勢へ送り出されていた。

思い合わずと。

伊勢大神宮は、ここ三百年このかた、遷宮せんぐうの執り行いもなく、神廟しんびようの荒れようは畏かしこき極みであつたし、国家的な神事も久し

く断^たえたままになっていたので、信長は、新宮御造作のことを思い立ち、昨年来、すでにそれに着手させていたのであった。

その御費用として、新宮造作の奉行は、およそ千貫という額を予算して、年暮^{くれ}に差し出したところ、信長は、

「さきに自分が勧^{かん}進^{しん}した、やわたの八幡宮の造営も、予算三百貫というのが千貫をこえた。このたびはわけても伊勢^{おんこと}の御事、

三倍はおろか数倍も要ろう。御費用を切りつめるな」

と、いつて、かねて有事の備えにとしてあつた岐阜^{ぎふ}蔵^{くら}の金子^{きんす}を

それに捧げたのである。信長のケチはこうしたケチだった。彼は、武人銭を愛するという誹語^{ひご}に対して、みずから恥じない信条を持つていた。

南蛮なんばんがっこう学校

一月も半ばを過ぎた。松や竹も除とれてから安土の市民は気がついたのである。

「何じやろ。たいそう荷を積み込んで、毎日よく船が出て行くが？」

その船は、例外なく、湖南から湖北へ行くものだった。

と思うとまた数千俵の米が、陸路を車馬で蜿蜒えんえんの列をなして

行く。

それも湖岸を北へ北へと流れた。

安土の殷賑いんしんは二十日正月を過ぎても衰えは見えない。旅客の往還と、参府帰府の諸侯は相かわらずはげ繁しいし、街道にお使番の早馬や、他国の使臣の寛々かんかんたる歩みを見ない日もなかった。

「瀬兵衛。参らぬか」

「どちらへです」

「鷹を放ちに」

「何よりの好き。ぜひお供仕りましょう」

「三助も来い」

浅春のひと朝だった。

信長は安土を出た。供の衆は前夜からきまっていたが、ちょうど参り合わせた中川瀬兵衛を誘い、また池田勝三郎のぶてる信輝の子、

池田三助も供に加えられた。

お鷹たち八据すえを八人の鷹匠にすえさせ、供の近習も多くは騎馬で、
愛智川えちがわの近くまで遠乗りをかねて出かけた。信長の好きは、騎馬、
角力、放鷹ほうよう、茶道といわれているくらい、狩猟かりは趣味のひとつ
だった。

毎日ノ御鷹野オタカノ、御辛勞申ス計リモナシ。御氣力ノ強サ、諸人
感ジ申ス也——勢子衆セコシユウト供ニ御狂ヒアリテ、御氣ヲ晴ラセ

ラル。

祐筆ゆうひつもこう記している。勢子や弓の衆はためにへとへとにな
るのだった。趣味といい余技といえど消閑しょうかんのなぐさみに聞え
るが、茶の湯にせよ何をやるにせよ、彼のはそんな生ぬるい沙汰なま

ではなかった。

たとえば、相撲すもうにしても、それを安土で観みようとなると、江ごうし

州ゆう、京都、浪華なにわそのほかの遠国からも千五百人からの相撲取を

あつめて興行したりする。諸侯、群集と観覧のあげく、日が暮れてもまだ飽きないで、家臣の内から幾組も土俵がもうにのぼせ、

（堀久太郎と蒲生忠三郎。ふたりして相撲すまえ）

と、組合わせを命じたりしている。

忠三郎とは、後の蒲生氏郷。久太郎とは音に聞ゆる堀秀政である。こういう一世の人物や勇将を端的に土俵へあげて闘わせて観る愉快さには、またべつな興味もあつたに違いなからうが、ともかく兵馬倥傯こうそうのあいだにあつても、彼は天放快活に遊ぶ日はよ

く遊んだ。その遊びにも天下の事を成す氣宇をあらわしていた。

だが、この正月の愛智川行は、至つて簡素だった。そして放鷹もあまりせず、ほんの野駙^{のがけ}程度にすまし、携帯の茶の湯道具を取り出させて野立てで一服のんだりしてすぐ歸りを命じた。

ところが、この日、信州木曾の一族の苗木久兵衛^{なえぎきゆうべえ}という者が、

供も連れずただ一名で、ここへ信長を訪ねて来ている。信長は、

久兵衛の手から書簡を受け取り、一読すると、

「義昌^{よしまさ}、他^{ほか}お身内の意嚮^{いこう}、たしかに信長承知はいたしたが、然

るべき人質^{ひとじち}など、安土へ送り来ぬうちは、否とも応とも、即答

いたし難い」

と、答えて、後のことは、家臣の菅屋^{すがや}九右衛門とよく談合した

がよいと云い残して去った。

きよようの鷹狩は、ここで木曾の使者と落ち合うことが主要な目的であつたかもしれない。彼の帰途を追つて、やがて菅屋九右衛門が追いついて来ると、すぐ鞍側くらわきへさし招き何事か小声に聞き取つた上、

「そうか。ウウム、そうか」

と、満足そうに幾たびもうなずいていた。

その時の帰り途である。鷹狩の列は安土の町へ入つて来た。――

――と、信長は駒を停めて、木立の中の異国風な建物を振り仰いだ。その窓から提ていきん琴の音がながれて来る。彼は急に馬を降り、

従者の一部だけを連れて門内へ入つて行つた。

「右府様のお立寄りですぞ」

先に駈け出していた池田三助が扉を排おして、階上に呶鳴った。階段の下廊下には、大きな裸男の彫像があつた。基理キリ蘇督ストの像か何か三助は知らない。三助はつい珍しげに見まわしていた。

「おう……」

牛のような声が答えた。階上からである。二、三人の宣教師がバテレンあわただしく降りて来た。信長はもう家の中に立っていた。

「才。才。君主さま」

宣教師は、仰山に表情して、最大な敬意と不意の愕おどろきを、こもこもに示した。

ここは隣の南蛮寺と共に創たてられた附属耶蘇ヤソ学校であつた。信

長も寄附者のひとりだが、高山右近だのその他のほかの歸依大名が、材木から校舎の内の物まで、一切寄進して出来たものである。

「授業の模様を参観いたしたい。子供らは集まっているだろうな」
 信長の望みを聞いて、宣教師たちは狂喜しながら光栄を語り合
 った。そのおしやべりに関かまいなく、信長はどしどし階上へ登つて
 ゆく。

狼狽を極めながら、宣教師の一人は先に教室へ走つて、生徒達
 にこの唐突な貴賓きひんの参観を告げた。

提琴ていきんの音がはたと止む。私語ささやきがしんと鎮まる。信長は教壇
 に立ってややしばしこの一堂をながめていた。

（珍しき寺子屋もあるものかな）

と云いたげな顔つきだ。教室の机や腰かけなど、悉く泰西風である。一冊ずつの教科書を各机の上に置き、さすがに諸侯や旗本の子弟だけに、信長のすがたを仰ぐと肅として礼をした。

十ぐらいから十三、四歳の児童が多い。中には元服前後の少年もいる。みな名門の子であり、華麗な欧風文明のにおいにくるまれているので、町にある日本の寺子屋とは、比較にならない花園だった。

だが、どっちがほんとの人間を薰陶くんとうするか、信長のあたまのうちでは、すでに解答はついているらしかった。故に、さして感嘆も驚異もしていない。手近な机の上から生徒の教科書を取りあげて、黙ってめくっていたが、それもすぐ生徒に返して、

「いま、提琴を弾^ひいていたのは誰だ」

と、たずねた。

信長の問いを受け継いで、宣教師の一名が、生徒に質^{ただ}した。信長はすぐ察した。この教室には今まで教師はいなかったものともえる。生徒たちはまた、それをよいことにして、西洋の楽器を弄^{ろう}したり、雑談したり、^き々と騒ぎ合っていたところだったにちがいない——と。

「伊東ゼローム殿です」

生徒たちは、自分らの中のひとりへ、方々から眼をそそいだ。信長も、その視線を辿^{たど}って、十四、五歳の一少年を見出していた。

「はい。あれにあります、ゼロームでありました」

宣教師が、指さすと、その少年は真つ赤になつて俯向いた。うつむ信長は、覚えのあるようなないような気がして、

「ゼロームとは、誰か。誰の子だの」

と、またたずねた。

宣教師は厳かに、子の師として、その生徒へ告げた。おごそ

「ゼローム、起立して、君主さまに、お答えしなさい」

その生徒は起つた。机と机のあいだに、姿勢よく起立し、信長のほうへ礼をした。

「はい。私です。今ここで提ていきん琴を弾いておりましたのは」

言語も明めいせき晰である。眸に卑屈がない。貴人の子らしい感じが

ある。

信長は、その眼へ、きびしい眼をそそいだ。しかし、少年は眼を俯^ふせない。

「おまえだったのか。提琴を調べていたのは」

「はい」

「何の曲を弾いていたのか。洋楽にも曲譜があるのだろう」

「あります。私がいま弾いていたのは、^{イスラエル}以色列の民が^{エジプト}埃及を^{ダビデ}出る太閤の聖歌でありました」

少年は得意らしい。あたかも、こんな質問に答えることのある日を待っていたかのように、スラスラいった。

「誰に教わったのか」

「師父ワリニヤーニに教えていただきました」

「ああ、ワリニヤーニか」

「右大臣様にもよく御存じでいらつしやいましょう」

少年は反問して来た。

「むむ、見ておる」

と、信長はうなずいてから、

「ワリニヤーニは、今どこにおるか」

「ついこのお正月までは、日本にりましたが、もう長崎を立つて、^{マカオ}媽港から印度のほうへ帰ったかもしれません。従^{いとこ}兄弟からの

手紙には、多分二十日頃出帆するだろうと書いてありました」

「そちの従兄弟とは」

「伊東アンシオと申します」

「アンシオなどとは聞き及ばん。日本名がないのか」

「伊東義益いとうよしますの甥おい、義賢よしきたのことであります」

「お。あの何か、日向飢肥ひゅうがおびの城主、伊東義益が一族のものか。そしてそちは」

「はい。義益の一子です」

信長は奇妙なおかしさにくすぐられた。この切支丹キリシタン文化の花園に教育された小ましやくれた美少年を見ながら、その親の伊東義益という男の、我武者がむしゃな髯ひげ面づらを聯想したからである。九州大名の大友、大村、有馬などといい、またその伊東義益といい、西日本沿海の城下は、近年いよいよ濃厚に、南蛮色や欧風の文物に

いろど
彩られてきた観がある。

鉄砲、火薬、望遠鏡、医薬品、皮革、染織類、日用器玩きがんの類、

何でも信長は迎え入れるに吝やぶさかでない。わけでも医学、天文、軍事

に関する物など大いに欲求し熱望しているといつていい。また、

それに伴う多少の弊へいふう風も仕方のないお添え物とまず大きく呑み

こんではいる。けれど齒そしやくも咀嚼しようと思せず、彼の消化器も絶

対に拒否しているものがある。宗教と教育であつた。

しかし、その二つを宣教師に与えなければ、彼らは武器も医学

もその他の物も持つて来ない。信長は大きな意義を文化に賭として、

この安土の一区劃にも、南蛮寺やその学校を許していたが、さて

こうして、心にもなくやらせている学園から、芽や蕾つぼみを持ちかけ

ている球根や苗木なえぎを見ると、

「これでは困る」

と、ここの子弟の将来を憂い、また、

「いつまで、放漫に捨ててもおかれまい」

と、急に考えられもするのであつた。

信長はそこを出ると宣教師たちバテレンに導かれて、華麗な休息室へ導

かれた。そして貴人のために特に備えてあるかのような金碧きんぺきさん

燦然ぜんな椅子いすに倚よつた。宣教師たちはまた、自分らが貴重として

いる自国の茶や煙草などを出して、この大寶に饗きよう応おうしたが、

信長は手にもふれないで、

「いま、伊東義益よしますの子の申すには、ワリニヤーニはこの正月の

末、日本を船出するとかいうことだが、もう帰ったのか」

と、たずねた。

宣教師のひとりが答えて、

「いえ、こんど師父が、欧州へ行かれるのは、自分の御用ではなく、日本の文化のために、御使節の御案内役に従^ついてゆくのです」

「使節とは？」

信長は不審な顔をした。九州はまだ彼の勢力下でない。九州の諸大名と海外との交友や通商には、彼も尠^{せう}なからぬ神経をはたらかせていた。

「まだお聞きおよびございませんか。実はワリニヤーニの発案で、いちどは是非、日本の有力な子弟に、^{ヨーロッパ}欧羅巴の文明を視^みていた

だかなければ、真実の通商も国交も始まらないと、欧州諸国の国王、また法王までを説いて、その御承諾を得、いよいよこんど日本からその御使節を遠くお迎えすることになりました。そしてその人選にのぼった御使節の方々は、十六歳を頭かしらにして、まだ皆、いとお小さい少年たちばかりであります」

と、それらの者の人名までを詳しく告げた。

ほとんどが、九州の大藩の子弟だった。伊東義益の甥おい伊東アンシオの名もその中にあった。大村、有馬の一族の子もあった。

「それは、勇ましい」

信長は、欧州の遠くへ立つという、十六歳を頭とした少年使節の行こうを、心からよろこんだ。

が、同時に、

「ままになるなら、その少年たちに会って、自分の精神の一片でも、はなむけ饒別に語って、信念の中に持たせてやりたいが」

と、思った。

何のために、ヨーロッパ欧羅巴の諸国王が、また師父ワリニヤーニなど

が、大名の子弟らを、さまで熱心に欧州見学に連れてゆくのか。

文化的意志は、りようかい諒解する。しかしまた彼らが最後に期している

大きな野望も信長は充分に洞察している。その二つをあわせて、

信長は、安土の城にもある地球儀を、いつも眺めているのである。

「ワリニヤーニは、そのため、去年京都を去る折、口惜しげに申しておりました。安土の主君様の御事を」

「ほ。……何とな？」

「安土の主君様は、いつでも御洗礼をおうけ遊ばしそうでいながらさてとなると、容易に、うんとお領うなずき遊ばさない。とうとうこの度も、安土の主君様に御洗礼をおさずけせずに欧州へもどるのが、ただ一つの心残りであると……」

「は、は、は。そうか。そういつておつたか」

信長は、椅子いすを立つた。そして鷹を拳こぶしにすえて後ろに立っている従者に向って、

「思わず道草した。さあ帰ろう」

「いうやいな、もう大股に階段を下りて、忽ち扉の外で駒を呼んでいた。さつき提琴を弾ひいていた伊東ゼローム以下、生徒たちは、

校庭に整列していた。

古府・新城
こふ しんじょう

韮崎にらさきの新府の城は、御台所みだいどころや上臈じようろうたちの住む奥の館たちまで、すべて落成した。

「同じ正月を迎えるならば」

と、武田勝頼は、父祖数代の古府——甲府の躑躅つづじヶ崎さきからこの新府へ——年暮くれの二十四日というのに、引き移ってしまったのである。

その引越しの壮観と美しさは、沿道の百姓たちに、この正月と

なつても、まだ語り草となつてゐるほど、言語に絶したものだつた。

勝頼とその簾れんちゆう中なかつを始め、侍かしずく数多あまたの上臈たちや、大伯母の君とか、御むすめ子とか、京の何御前とかいう女性の輿こしや塗ぬり駕かごだけでも、いったい何百つづいたろう。

一族の老武者おいむしや、若武者、またお旗本やら、近習やら、それぞれのお役の者やら、金銀の馬鞍ばあん、青貝の鏤ちりばめ、蒔まき絵えの光、開いた傘、つぼんだ傘、弓とうつぼの群、鉄砲の筒の列、赤柄の槍の林……。そうして行列の果てなく続く中にも、もつとも人目を奪つたものは、武田重代の法ほつしやう性の之旗はたで、

南無諏訪南宮法性 上下大明神

の十三字が、真紅の布地きれじに金色にかがやいているのと、もう一
 旒りゅうは、人も知る信玄が座右の軍旗としていた、紺地こんじ精好織せいこうおりの長
 旗に、こう二行の金字しるが記してあるものだつた。

疾如風徐如林。侵

掠如火。不動如山

それはまた信玄がふかく心契しんけいしていた道の師、恵林寺えりんじの快かい
 川和尚んおしょうが筆になるものとは、どんな者でも知っていた。

（ああ、あのお旗の靈たましいは、躑躅つつじヶ崎さきが館やかたを捨てて行く、きょうの
 お引き移りを、何とも惜しんでいないだろうか）

甲府の領民は、誰もがそんな哀愁に似た感じを抱いた。そして
 この孫子そんし之旗や十三字旗が、ここを立つては川中島へ赴き、その

帰るごとに、帰つて来た勇士たちも領民も、同じ感激と涙と噎かれるばかりの喊かんせい声で、迎え合い答え合つた永祿えいろく前後の頃が、今は、何となく恋しく振りがえられた。

そして確かに、同じ物にはちがいないが、その頃の孫子之旗と、きよう見る孫子之旗とは、べつな物のような気がしてならなかった。

しかしまた、それらの一族門葉の車駕しやがきんあん金鞍と共に、蜚崎ひらさき新府へ移されて行く夥おびただしい重器珍宝、軍需の資材などが、蜿蜒えんえん何里のあいだ、牛車や車輛の列になつて流れ行くのを見ると、

「甲州はまだ強国だ」

と、意を強うせずにはいられなかった。信玄以来の自負心だけは、

將士はもとより領下の者にまであつた。

そうして、引き移つてからまだ間もない新府の城であつたが、二月の声を聞くと、ここには古くからある白梅や紅梅がもう綻びかけ、勝頼かつよりは今も、叔父の武田しやうようけん逍遙軒と共に、奥の丸からその梅林のあいだを縫いながら、鶯うぐいすの声をよそに、頻りと何か語りながら本丸の道へと歩いていた。

「——この正月の賀にも、ついに顔をすら見せぬ。病氣というが、何か、叔父上のほうに、消息はありませんか」

勝頼がいう。

それは、勝頼の従弟いとこにあたる、一族の穴山梅雪あなやまばいせつのうわさをしているのであつた。

武田方にとって重要な南方の要衝ようしゅう、駿河口の江尻えじりの城をあずけてあるその梅雪が、ここ半年以上も伺候せず、何があつても病氣と称して出て来ない心配からであつた。

「いや、ほんとに病氣らしく思われる。梅雪入道は正直な男、よもけびよう仮病などではありますまい」

そういう逍遙軒こそ、亡兄信玄の氣性に似もやらで、実に誰にも負けない好人物なのだから、勝頼としては、この答えに、安心してきるわけにもゆかなかつた。

逍遙軒は口をつぐんだ。

勝頼もそれなり沈黙した。——が、二人の歩みだけは、黙々とつづいてゆく。

本丸と奥の丸との間には、雑木の狭い谷間がある。溪^{けい}流^{りゅう}も

ある。左右の崖には梅が咲きかけていた。

その谷間の橋まで来たときである。何に驚いたか^{うぐいす}驚^{おどろ}が一羽落ちるように、^{ひるがえ}翻^{ひるがえ}つて逃げた。——と、同時に梅の崖から、

「お館^{やかた}。それにお在^いでられましたか。一大事です」

と、跡部^{あとべ}大炊^{おおひ}の子で、近習役の跡部源四郎が、顔のいろを変えて、何事か告げに來た。

逍遙軒は叱つて、

「源四郎。ちと嗜^{たしな}みをもて。一大事などということとは、さむらい

が滅多に口にすべきではない」

と、いった。

若い近習に訓おしえる意ばかりでなく、逍遙軒は、勝頼の愕おどろきを宥なだめるためにもいわざるを得なかった。なぜならば日頃の剛毅ごうぎにも似合わず勝頼がひどく顔色を変えたからである。

ところが、源四郎は、

「かりそめには申しません。真実一大事にございまする」

と、はや崖道を駈けて来て、橋のそばに平伏し、

「ただ今、御表へ、信濃しなのたかとお高遠にしなの仁科五郎様からの早打があり、
木曾義昌殿きそよしまさどの、逆心の旨を、告げ参られました」

と、一息にいった。

「えつ、木曾が？」

と、愕がくとして、疑いと、半ば、信じたくないような感情を声に

して放ったのは、武田逍遙軒のほうであつた。勝頼はすでに或る予感をもっていたのか、唇を噛んで、近習のすがたを見下ろしているのみだつた。

逍遙軒は、容易にしずまらない胸の鼓動を、なお語氣のふるえにみせながら、

「書状は。書状は」

と、早打が携えて来たはずの仁科五郎信盛の手簡を求めた。

源四郎は、答えて、

「事は、火急。寸刻も争えばとあつて、五郎信盛様の御手簡は、第二の早打がお持ちするであろうとのこと。ただ今、着いたばかりのお使いは、口上をもつて、右の儀を、お館へと、云い終るや

いな倒れて、前後も弁えませねば、煎せんやく薬を与えてそつと休息させておきました」

まだ手をつかえている源四郎のそばを大股に通りこえて、勝頼は、うしろの逍遥軒へ、大声して云った。

「五郎の手簡など、見るまでもない。木曾の変心は、事実だろう。彼といい、梅雪入道といい、近年、いぶかしい兆しるし候はいくらもあつた。——叔父御、御苦労ながら、また御出陣ください。勝頼も参りますれば」

それから一いつとき刻と経たないうちに、新府今いましろ城やぐらの櫓から太鼓が鳴っていた。城下には陣触れの貝がながれている。梅は白々と暮れかけている山国の静かな春のたそがれを物々しげに。

発向はその日のうちだった。韮崎にらさきの夕日に焦せかれながら木曾

路へ向つた軍馬は初め五千——夜に入つてなお一万近くも立つた。

「よくぞ、彼より叛はん心を明らかにした。この事なくば、忘恩の

賊も、討つ日はなかつた。この度こそ、木曾のみか、二心ある者、

悉ことごとくを、肅しゆくせい清して余すなく、甲軍の陣紀を一新せねばならぬ

！」

抑え難いきどおき憤りもこめて、途中、勝頼はしばしば馬上でつぶやい

た。けれど、彼と共に怒り、彼と共に、木曾の不信を憎む声は少
なかつた。

勝頼は相変らず強気である。

北条と手を断きつても、

（北条、何者ぞ）

とばかり、この大きな後ろ楯の力を顧みもせず捨ててしまった。周囲の献策で、多年、質子^{ちし}としていた信長の子を、安土へ送り返しはしても、心のうちではなお、

（信長ずれが、何するものぞ）

という軽視は充分に残していたし、浜松の徳川家康に対してはなおさらのこと、

（やがて、見よ）

と、いう反撃ばかりを、常に、長篠^{ながしの}以後は殊に、誇示^{かめ}していた。

強気が悪いわけではない。積極の精神だ。強気は心の瓶^{かめ}に満々

と湛^{たた}えておくべきものである。わけて強者絶対の戦国ではなおさらともいえる。けれどそれには絶対^きに、軌^きを過^{あやま}らない文化的な省^せ察^{いさつ}と、一見、弱気にも似ている沈着^いな力の堅持が必要である。みだりな強がり^いは、正しい相手を威嚇^{いかく}できない。むしろ逆効果を生んでしまう。勝頼の剛毅^{ゆうまい}勇邁^{ゆうまい}は、ここ数年のあいだに、ようやく信長や家康からそういう觀察のもとに軽んじられて来た傾向がある。

いや、敵国ばかりではない。甲州の中においてすら、ややもすると、

（信玄公が御在世ならば）
という声がする。

一族、譜代の輩やからが、折にふれ、事にふれ、故主を慕うところは、それだけの空虚を今に抱いている証左だともいえる。

信玄は、強力な軍国政治で押し通した。けれど、一族郎党をして、いや領民すべてのものに、

（この主君があるからには）

という絶対な安全感をもたせて、自分に頼らせきつた。

勝頼の代となっても、軍役、徴税、そのほかの諸政すべて、信玄の遺法どおりに行っていたが、何か欠けていた。

勝頼には、その欠けている「何か」が、何であるか分らなかつた。いや、欠けていることすら気づかない憾うらみがあつた。

和と。中心への信頼だった。

こう二つの足りない強力な信玄政治は、却つて一族の和を齟齬そごしはじめた。ひいては、信玄時代には、上下一般の信条だった——甲州ノ四境ハ一步モ敵ニ踏マセタル例タメシナシ——という誇りにも、
(この分では)

という危惧きぐをどことなく抱かせるような傾きがあらわれて来た。それが長篠ながしのの大蹉跌だいさてつを境にして、顕著となつて来たことはいうまでもない。あの大敗戦は、ただに甲軍の装備とか戦略上の失敗とかにとどまらず、勝頼の性格的な短所——また日常の強氣に対しても、彼を柱と恃たのむ周囲や一般が、ひどく失望を覚えて、
(勝頼公は、やはり信玄公ではなかった)

という認識を急にあらためさせたことが、後の重大な頽勢たいせいを

醸^{かも}す原因となつていた。

木曾福島を守る木曾義昌^{よしまさ}が、信玄のむすめ婿^{むこ}でありながら、方向一転を計り出したのも、

（勝頼には持ちきれぬ）

と、甲州の将来に見通しをつけ出したことに始まっている。彼は、美濃^{みの}の苗木城^{なえぎじょう}の遠山久兵衛を介して、もう二年も前からひそかに款^{かん}を安土の信長に通じていたのであった。

諏訪^{すわ}の高原から木曾福島へ、甲軍の部隊は、幾筋にもわかれて行つた。

みな、往くときは、

「木曾勢のごとき、一揉^{ひとも}みに踏みつぶさん」

と、大言して立つた。

けれど、日を経て、諏訪之上原すわのうえはらの本陣へ聞えて来る戦況は、一

として、武田四郎勝頼父子に、会心の笑みを刻ませたものはなかった。いや、会心の笑みはおろか、

「なかなか、木曾も頑強です」

「福島けんその嶮岨ようを擁し、難所に奇計をもうけ、お味方の先鋒もまだ

それへ近づくだに、よほど日数を要するものと見られます」

など、捗はかばか々々しくない戦報ばかりであつた。

「自身、その場へ、臨まぬことには——」

勝頼は、聞くごとに、唇をかんだ。彼の性格にあるものが、旺さかんに忿懣ふんまんし、じりじりと埒らちのあかぬ戦況げんきょうに業わざを煮やしはじめて

いた。

月をこえて、二月の四日頃だった。

所詮^{しよせん}、この程度どころでない大悲報が諏訪^{すわ}へはいって来た。このときの混乱と騷擾^{そうじょう}と、武田方の生色^{せいしよく}を奪った愕^{おどろ}き方^{かた}というものは、けだし信玄以来の甲州人としては覚えがない程なものであつた。

諸地方からの早馬や物見の者など、いちどに諏訪口からこの陣所へ混雑して、口々にいうところは皆、次のように一致していた。

「安土の信長、織田麾下^{きか}へ、急に出動の令を発し、すでに、信長自身も、江州を出たとのこと」

またいう。

「——駿河口よりは、徳川家康の手勢、関東口からは北条氏政の兵、また、飛驒^{ひだ}方面から金森飛驒^{ひだのかみ}守、呼応して、いちどに甲州入りを目ざし、伊那^{いな}口には、信長信忠の父子、ふた手にわかれて、はや乱入と聞えわたり、高き山に登つてみますると、東、西、南——いずれを眺めても、濛^{もう}々^{もう}たる薄^{うす}煙^{けむり}が、遙かに望まれておりまする」

「……信長が！ 家康が！ そして北条氏政までが？ ……」

愕^{がく}然^{ぜん}、勝頼は、腰をついたように叫んだ。

諜報の報告どおりに聞けば、自分の立場は、すでに袋の中の鼠にひとしい。

つい、七十日ほど前ではないか。——親切をこめて、わざわざこちらから信長の質子ちしを安土へ送り返してやったのは。

そのとき、使いの者に、信長は何といったか。

（武田家におあずけしておくのは、わが家におくより気安う存じていたが、かくまで御養育の上、お送り返し賜わるとは、四郎勝頼の温情、寔まことに忘れ難い。この一事は、いよいよ両家の親和を永久にする楔くさびともなるであろう）

そういったというではないか。

その信長が。

勝頼は、敵の不信に、髪も逆立つような感情を示した。そしてこの感情の中には、自分を省かえりみてみる余裕など微塵みじんも失なくなって

いた。

だがまだまだ信長に対する彼の怒りは、遣り場^{やば}があつた。この騒然たる陣營に黄昏^{たそが}れの迫つた頃、

「――先手^{さきで}の武田逍遙軒どの初め、一条右衛門大夫どの、武田上^こうづけのすけ

野介どのにいたるまで、夜来、各所の御陣地を捨て去り、いずことも知れず逃げ退^ひかれて候う」

という報が入つた。

もちろん木曾の前線からである。

「嘘だろう」

勝頼は、信じなかつた。

しかし、その夜のうちに、かかることまで、すべて事實に相違

ないことが、次々の飛報によつて、否^{いな}みようもなく証明された。

「何たること！」

勝頼は、罵^{ののし}つた。

「木曾のごときは、疾^とくに亡ぶ家なるを、旭^{あさひ}將軍以来の名門とて、父信玄がむすめまで嫁^{とつ}がせて、一族並に待遇して来たものではないか」

と、あたりの者へ云い散らし、陣營の内を檻^{おり}の中の猛虎のように歩きながらなお云い熄^やまなかつた。

「逍遙^{しょうよう}軒^{けん}も逍遙軒だ。かりそめにも勝頼の叔父、一族の長老ではないか。戦陣を退^ひいて無断、逃げ退^のくとはどういう料^{りよう}簡^{けん}か。その他の奴^{やつばら}輩に至つては、ただ不忠忘恩、いうも口の穢^{けが}れ

ツ……」

彼は、天を恨み、人を恨んだ。そして自分を恨むことを忘れていた。

そうした程、平常から暗愚な彼でもなかったが、よほど肚のきいている人間でも、彼の立場に置かれたら、動転せずにはいらなかったろう。いわんや勝頼の程度では無理もなかった。

「ぜひもない儀。この上は、^{ひと}一まず陣払い仰せ出されて」

小山田信茂^{のぶしげ}やその他のすすめで、勝頼はにわかに諏訪之上原^{すわのうえはら}

から引つ返した。さあれ何たる寂^{せきりよう}寥^{まじ}さだろう。二万余人と数

えられた兵数が、まだ一戦も交えぬのに、旗本以下、彼に附随^{にらさき}して韮崎まで帰ったものの四千ばかりに過ぎなかった。

悶々もんもんとやり場のない心を訴えようとしたのか、彼は、恵林寺えりんじの快川和尚かいせんおしょうを呼び迎えた。

どこまで、悲運は急に来るのか、ここに帰城してからも、彼は、かさねがさねの凶報をうけていた。それは、一族の穴山梅雪入道も明らかに離反を宣して、事もあらうに、その抛城きよじょう江尻を敵に委いしたばかりか、徳川家康の道案内をつとめて、甲州乱入の先手にあるというのであった。

自分の妹いもむこ聶むさにあたる梅雪までが、こう歴々と、反心を示し、しかも自分に向つて滅亡を強しいて来るといふ事実を見ては、彼も、苦悶のなかに、少しは、自己を顧みずにいられなかった。

いったい、自分のどこが悪かったのか？ ——ということをして

ある。

しかもなお、一面には、負けじたましいを、いよいよ猛くして、
百方防備を命じながら、にらさき 葦崎の新城へ、かいせん 快川を迎えたのは、
時すでに遅しではあるが——彼としてはしおらしい自省の現われ
であつた。

「父の信玄が歿してからちようど十年。ながしの 長篠の合戦を経てより
まだ八年。どうして、かくも急激に、わが甲州の武将どもは、か
つての節義を失つたのでしょうか」

勝頼は、和尚にたずねた。

対応したまま、いくら経つても、快川の方から何もいわなかつ
たからである。

「つい十年前までの武將は、こんなものではなかった。各、恥を尊び、名を惜しみ、かりそめにも、主君に裏切るなどということは、父信玄の在世中、稀れにもなかったものです。いわんや一族においてをやです」

快川はなお瞑めいもく目していた。

冷たい灰のような相手に対して、勝頼はさながら火のように云いつづけた。

「しかも、その叛逆者はんぎやくしゃを討ちに向つた者どもまでが、皆、一戦も交えぬばかりか、主命もまたずに、離散するという始末です。これが、さしも上杉謙信にすら、川中島以南、一步も踏みこえさせなかった甲州の一族や武將のすることでしょうか。いったい、

かかる土風の頹^{たい}廢^{はい}は、世の中の罪でしようか、彼ら自体が墮落して来たのでしようか。もつとも馬場、山^{やま}県^{がた}、小山田、甘^{あま}糟^{かす}、その他の宿將の多くは老い、多くは歿し、いま残っているものは、その次代の嫡^{ちやく}か、乃至^{ないし}はまた、往年の父信玄が直属のつわものは、たいへん人間もちがって来てはおりますが……」

快川はやはり答えなかつた。

この老師も老いを思っているのかもしれない。信玄とは並ならぬ心交のあつた快川は、齡^{よわい}もはや七十をこえていよう。雪を置いた眉の下から、変れば変るものと、亡き信玄の後継ぎを眺め入っている体^{てい}であつた。

「老師。——事ここに至つてからでは遅いと思し召すか知りませ

んが、政治の布しき方が悪ければ政治を。軍紀の統率がいけないなら大いに軍紀の振しんしゆく肅しゆくを。……勝頼は革あらためんと苦慮しています。老師は道友、父に訓おしえられたことも多大であつたと聞いています。何とぞ、不肖の子勝頼にも、善策をお授け下さい。どうか、お教えを惜しみたまわず……信玄の子ぞと思し召し……ここが悪い、かく致せ、ああせいと、忌憚きたんなくお聞かせを仰ぎとうぞんじまする」

「……………」

「では、勝頼から申してみます。父の歿後、いよいよ国防を厳にし、軍備を増強するため、河川かせんかんもん閼門の徴税、そのほかの諸税など、急に増して取り上げたのが人心を離れさせたのでしょうか」

「否」

快川は頭こうべを振った。勝頼は急せきこんで、

「では、賞罰ぶんめいの分明に、勝頼の落度がありましたらうか」

「なんの……」

雪眉せつびの面がしずかにまた、横へ振られただけである。

勝頼はついに、泣かんばかりな声をして俯うつつ伏ふした。豪氣強情、

稀に見る自尊心の持主も、快川のまえには身もだえして哭ないた。

「哭なかれな。四郎どの。御身は決して不肖ではない。不孝おんこな御子

でもない。……ただお気づきあらぬ落度が一つあられた」

やがて、快川は諭さとした。やさしく宥なだめた。

「——御身と信長とを、並び立たせた今の時代が無情じやな。所し

詮よせん、あなたは信長の敵ではない。甲山は文化に遠く、信長は地の利を得たりというが、否、重因はそれではない。信長は、一戦一戦戦うにも、一令一令政治するにも、心の裡うち、かならず朝廷を忘れず、朝廷の奉公人をもつて、武門自身の本分としておる。皇居の造営、馬揃いの天覧など、ほんの一事だが、また信長の万事ともいえる。当然じゃ。甲州ならずとも、割拠の群雄に属するものが、みな帰するところへ帰してゆくのは」

信玄に聘へいされて、甲斐かいの恵林寺に来る前の快川和尚は、京都の妙心寺に出世し、美濃の崇福寺すうふくじにいたのである。

正親町おおぎまち天皇には、禪みこころに御心をよせ給うこといと深くおわした。

妙心寺の愚堂など幾たびか召されて宮中の禪ぜんえん庭に参じてい

る。従つて、朝廷に奉じる禪家一般の臣節にも、武家以上かたいものがあつた。わけて快川かいせんは、こんな遠隔にありながら、去年、天正九年には、畏かしこくも、正親町天皇より大通智勝だいつうちしょうくし国師の号をいただいた、特賜とくしの天恩に感泣していた。

そうした快川の心境から、世勢の大きなうごきと、この甲州の推移をながめていると、今、勝頼の痛切な質問にたいして答え得るものは、前にいった一語しかなかった。

彼は、亡き信玄とは、心契しんけいのあいだにあつたし、信玄が彼を尊崇したことも一通りでなく、彼も信玄を信じること篤く、その七周忌の偈げには、故人を評して、

——人中リユウゾウノ龍象。天上キリンノ麒麟。

と称^たえたほどであるが、なお決して、その父に比して、子の勝頼を、いわゆる不肖^{ふしょう}な者とはしていなかった。

むしろ勝頼には、同情していたほどである。人が、勝頼の非をいえば、

（それは、望むが無理じゃよ。余りに親が偉^{えら}すぎた）

と、答えるのが常だった。

彼として、いささかなお、不足を思うならば、もし今日まで、信玄が生きていてくれたなら、その信玄をしてその業を、甲斐一国にとどめさせず、もつと大いなる意義の下に、その大器宏才^{こうさい}を用いさせたにと悔やまれることであつた。しかし、すでにその大処に着眼して、源平時代以後の武門の割拠的存在を、皇室中心

に、徐々と是正し、またみずから臣下としての、その範を身に示している信長というものの大きく中央に在る今日となつては——信玄よりなんといつても人物の小さい勝頼では、快川の囑望しよくぼうはまったくなくなつたといつていい。——春秋すでに去る。快川の氣持だつたにちがいない。

では、その勝頼をして、織田家の麾下きかにひざまずかせ、せめて信玄亡きあとの安全をはかろうとせん乎か——これはできないことだつた。新羅三郎しんら以来の名族、また余りに宇内うだいに耀かがやきすぎた信玄の名にたいしても、勝頼たるものが甘んじて今さら、信長の膝下しつかに、降を乞えるものではない。

また、それ程までに、辱はじも意地もない武田四郎勝頼でもない。

領下の庶民の間には、信玄時代の政治よりも悪くなったという声もある。重税を課されたのがその重なる原因とみられる。けれど快川がみるに、勝頼は決して、自分の贅ぜいや驕おごりのためにそれをしたのではない。ことごと悉く軍事に向けているのである。武器、戦法、あらゆる文化も、中央はもとより四隣の国々まで、ここ数年間に、長足に発達し、銃器火薬の購入だけでも、信玄時代の支出程度では、到底それらの国々と伍しては行かなくなっていた。

「お身を大事になさい」

快川はやがて辞しかけた。

「はや、御帰山ですか」

勝頼はなお問いたいことを胸いっぱい抱いていたが、しょうらいさ松籟

颯々^{っさっ}、呼びかけても、答えは同じものしか聞かれないことを察して、

「これが、最後のお別れかも知れません」

と、両手をつかえた。

快川も、数珠^{ずず}をまとった指を、下について、

「おさらば」

と、いった。否とはいわずに帰り去った。

たかとおじょう
高遠城

「いざ、甲山の春を探つて、桜を狩り草を摘^つみ、帰路は東海に出

て、富士見物などして来ようか」

出陣のことばに、信長はこんなことを云いながら、安土あづちを立つた。

こんどの甲州入りには、充分な勝算があつたらしく、どこか悠々たる門出だつた。

二月十日、すでに信濃に入り、伊那口、木曾口、飛騨ひだ口などの手配を終る一方、関東方面には、北条家を促うながし、駿河方面からは、同盟国の徳川家康に、進撃を催促していた。

姉川、長篠ながしのの戦いなどの時からみると、こんどの甲州討入りは、まるでわが畑の物でも採りに行くような信長の落着きぶりであつた。

もう敵国の中に、敵ならぬ味方がいた。苗木城の苗木久兵衛も、木曾福島の木曾義昌よしまさも、彼の旗を、ひたすら待っていた者に過ぎない。

織田信忠、川尻与兵衛かわじりよへえ、毛利河内守かわちのかみ、水野監物けんもつ、滝川左近などの岐阜ぎふから岩村へ入った軍勢など、その行くところ敵なしという有様だった。

武田方の砦とりで々々とりでは、風を望んで降くだってしまい、武田一族が守るところの松尾城も飯田の城も、夜が明けてみると、空城からじろになっている。

「伊那口方面は、ほとんど支える敵もなく進んでいる」
こういう聯絡れんらくをうけた木曾口方面でも、

「これでは何やら物足らな過ぎる」

と、将士のあいだには、こんな談笑さえ交^かわされていた。

この手の軍勢は、二月十六日頃、鳥居峠へかかっていた。そしてここで埋^{まい}伏^{ふく}の味方、苗木久兵衛父子の兵と合し、奈良井附近ですこしばかり敵の抵抗もあつたが、小合戦で終り、敵の遺棄^い死^き体四十余名を葬つたに過ぎなかつた。

馬場美濃^{みののかみ}守信房の息、昌房^{まさふさ}のたてこもつていた要害^{ふかしじ}深志

城^{よう}も、またたくまに陥ちてしまい、これへ迫つていた織田長益^{ながます}

、丹羽氏次^{うじつぐ}、木曾義昌などの合流軍も、燎^{りよう}原^{げん}の火のよう

に、次々と甲州の外廓^{がいかく}を攻めつぶして進んだ。

勝頼の叔父^{しやうよう}逍遙軒^{しやうようけん}すら、伊那郡^{いなごおり}の一城をすてて逃げたほ

どである。一条右衛門大夫、武田上野介、同左馬之助などが、旗を巻いて、行方を晦くろましたとて怪しむにあたらぬ。

何がかくも、彼らを脆もろくさせていたのか。原因は複雑ではあるが、また簡単にいえないこともない。

——こんどは甲州も保てぬ。

ことごと

悉くの武田方が、いつのまにか必敗を観念していたのだった。

或いはむしろこの日の来ることを待っていた傾きさえあつたのである。

だが、こういう時、たとえばに必敗を知っていても、

「ここに我あるを知れ」

という侍らしい侍が現われない例ためしは古来からなかった。

信州高遠たかとおの城にあつた仁科五郎信盛にしなごろうのぶもりは、まさにその人であ

つた。信盛は、四郎勝頼の弟でもある。

そこまではほとんど、一気にせっけん席卷して来たので、織田信忠は、
「これも、およそ」

と見込みをつけ、一書をしたためて、弓勢ゆんぜいの強い一武者に、
矢文として、搦手からめての山から城中へ射込ませた。もちろん勸降状
である。

すると、城中からは、すぐ返書が来た。——芳札ハウサツヒエツ披閱ヒエツソノ意
ヲ得候——という起筆から堂々とした文面で、終りには、

当籠城ロウジャウノ衆ハ、一旦身命ヲ、勝頼方へ武恩トシテ報イムク居リ候
ヘバ、臆病ナル輩ハイニハ準ズベカラズ、早々御馬ヲ寄セラル可ベ

候。^{クソロ} 信玄以来、鍛練ノ武勇手柄ノ程、御目ニ懸ケ^{ベクソロ}可候。恐々

謹言

と、墨匂^{にお}わしく覚悟のほどが答えてあつた。

信長の命をうけている中将信忠である。しかも若い。

「よしッ、その分ならば」

と、強襲を命じた。

搦手^{からめてのくち}之口、大手之口から、寄手はふた手にわかれて城へ攻め
かかった。

初めてここに、戦^{いくさ}らしい戦が見られた。仁科信盛以下、城兵一
千余は、もちろん死を期してのことだ。さすがに甲州武者の武勇
はまだ廃^{すた}つていない。

二月から三月初めにかけて、高遠城の石垣は、攻守両軍の兵がながす碧^{へき}血^{けつ}に塗られた。濠^{ほり}際^{ぎわ}半町を隔てて結^ゆい廻してあつた第一柵も突破され、濠も石や草や土木に埋められ、寄手は駈け渡つて来て、敏^{びん}捷^{しょう}に石垣の下にへばりつく。

「うぬ」

「来てみろ」

上の土壁や築^{つい}土^じ越しに、恐ろしい敵の目が無数に覗^{のぞ}き下ろす。そして槍を出す、岩石を落す、油をぶっかける、材木を転がして来る。

石と共に、材木と共に、また汚水のしぶきと共に、寄手の兵は、石垣の七分目、八分目まで攀^よじのぼって来ては墜^おちてしまう。

しかし、陥おちた兵ほど、勇敢だった。陥ちてもなお意識があるのは、すぐ刎はね起おきて、また、

「何を」

と、石垣へ取りつくのである。

その兵のすがたを見た兵は、その敢然たる勇姿へわつと声を送り、後から後から負けじと攀よじのぼる。そして墜おちてはまた繰り返し、墜ちては石垣にとりつき、奮ふんじん迅のまえには何ものもない。

しかし、守る方にも、決してそれに劣らない一致と死力がある。土壁、築土、櫓やぐらなどから、半身或いは全身を曝さらして、それへ応

戦しているのは、城中でも逞しい甲州武士のみで——寄手の側からは知れなかったが——一重城壁内の活動を見るとすれば、そこ

にはさらに涙ぐましい全城一心の奮戦ぶりがあった。

籠城と同時に、ここへ避難して将士と共にたてこもった無数の家族、老いたるも幼きも、女も、そして身重みおもの妊婦にんぷまでが、悉くことごと、防備の何かを手伝って、必死に働いているのである。

若い女は、矢を運び、老人は焼けついた鉄砲の掃除をし、また傷負ておいを扶たすけたり、兵糧ひょうろうの炊かしぎに働いたり、どこもかしこも混乱沸ひとくが如き騒さわぎを呈ひしておりながら、しかも誰が命じるでもなく、一すじの秩序はそこにきちんと立たっていて、愚痴めいた顔一つ混まじってはいなかった。

「所詮しよせん、急には陥ちますまい……。いかなる犠牲も惜しまずと申すなればべつですが」

寄手の一將、河尻肥前守は、中将信忠のまえに出て、余りな力攻めの無理と、過大な犠牲をここで払うことの非を説いた。

「ちと、討死負傷が多すぎたな」

信忠も、反省しているのである。肥前守は舌を鳴らしていった。
「しかもまだ、あの通り、城は、頑然^{がんぜん}たるものです」

「策はないか。何か、良策は」

「思うに、城兵の強味は、まだ新府には勝頼ありと、信じているからでしょう。——ここをいまずおいて、先に甲府、^{にらさき} 韮崎を攻むるのも一策ですが、そうするには全体的な作戦がえを要します。……もつともよいのは、新府の落去、勝頼の死を、城方へ信じさせるにあります」

信忠は、うなずいた。

三月一日の朝だった。寄手から射込んだ二回目の矢文が城内に落ちていた。

「兎戯じぎにひとしい偽文にせぶみ、攻めあぐねた寄手の顔を見るような」
仁科五郎信盛はそれを読んで笑った。

矢文には、こう書いてある。

去イヌル二十八日、甲館落去、勝頼殿ニハ生シヤウガイ害アリ。一門
ノ面々ニモ或ハ殉ジュンジ或ハ降人トナリ、甲州中府スデニ定マル。
片々一地方ノ一城ニ過ザル当城ニ於テ、武門申シ立テアルモ
既ニ意義ナカルベシ。早々、城門ヲ開カレ、本領ノ安堵アンドヲコ
ソ計ラセ給ヘ。

織田中将信忠、情ヲ叙^ノベテ、敢^ステ勸ム。

「甘いものだな。見^みえ透^すいたこんな小^こ手^て技^{わざ}を、兵法とでも思^{おも}うて
いるのか」

その夜、五郎信盛は、小^{しょうえん} 宴^{えん}をひらいて、家の子郎党たちに、

その書を示し、

「もし、これに意^いをうごかす者があるなら、遠慮はない、明夜ま

でに、裏谷からこの城を落ちて行くがいい」

鼓^{つづみ}を打ち、謡^{うたい}を微^び吟^{ぎん}し、いと楽しく夜を更^ふかした。

その夜に限って、各侍大将の妻女たちも召しよばれ、一巡り杯
を賜^{たま}わった点などから、一同は早くも、

「こよい限りのお胸であるな」

と、直感していた。

果たして、翌二日の朝、五郎信盛は、大薙刀おおなぎなたを杖ついて、左の太い足に、草鞋わらじをくくりつけ、その片足を引き摺ずり引き摺り城の多門たもんまで歩いて来て、

「昨夜来、なおこの城にふみ止まり、今日をここに待ち合わせた人々は、一同、この下に集まり候え」

と、命じて、自分は多門の上へ登って行つた。

やがて、床几しょうぎを置かせて、多門の上から彼が見まわすと、城中の老幼婦人をのぞいた精鋭の将士千人足らずの人数は、ほとんど一名も減っていないかった。

「……………」

黙^{もく}禱^{とう}でもしているように、彼はしばらく頭を下げていた。――

――御覽ぜよ、なお甲軍にはこういう者もおりますると、父信玄の靈に念じているのであった。

やがて、面^{おもて}をあげた。きつと全軍をそこから見ていた。

彼は、兄の勝頼のように、豊^{ほう}頼^き美^う肉^びの男子でなかった。長

く田舎暮らしの質素に甘んじていたので、何^{ぜい}の贅^い食^{しょく}も奢侈^{しゃし}も知らない。颯^{さつ}々^{さつ}と山野の風に育つて来た若^{わか}鷹^{たか}のような眼^{まな}ざし

を備えていた。

生年三十四歳、父信玄に似て毛ぶかく、眉は長く、唇^{くち}は大きい。

「さてきようは、雨かとも思うたが、一天は晴れわたり、遠山の桜も見え、死ぬには佳^よすぎるほどな日和^{ひより}となった。とはいえ、わ

れら何ぞ、浮雲の富をのぞんで名を捨てんや。……ただ五郎信盛、一昨日の防戦に、見るとおり片脚に深傷ふかでを負い、進退もままならぬゆえ、まず、各々が最後のいくさを見とどけた後、悠々ゆるゆると、ここに敵を待ちうけて存分合戦の後まいるぞ。——いで、大手、搦か手を押し開いて、雄々しき山桜花の散りぶりを見せよ」

その朝の彼のことばだった。

おう、おうツ、と答えあう声の嵐、口々に、畏かしこまって候うと呼ばわり猛たけぶ武者たちの人渦。そしてみな顔は、多門の上なる主人のすがたを仰いで、今を見納めぞと、しばしは同じ声のみを繰り返していた。

死ぬか生きるかでなく、絶対にこれは死の一途であった。

城の門は、城中の者の手で、敢然と、大きく開かれ、千余人の将士は、喊ときの声をあげて斬つて出た。

大手の一門と、搦手からめての一門から。

寄手の備えは、その第四陣まで突きくずされた。

一時は、織田信忠のいる中軍すら、危うくも、混乱しかけた。

「退けや。出直せ」

と、城方の侍大将、今福いまふく又右衛門は、頃を計つて、城中へ迅じん速そくに退いた。

小幡周防の隊、春日かすが河内守の隊なども、今福隊に倣ならつて、

「帰れ帰れ」

と、引つ返す。そして、各、獲えた首をかぞえては、多門の上

の主君に見せ、

「湯など一杯飲んで、また出直します」

と、悠々たる意気を示した。

こうして、大手、搦手^{からめて}とも、一休みしては駆け出し、斬り崩

してはまた引き揚げ、大波の寄せ返すような激戦を繰り返すこと六度、首を獲ること四百三十七級——その日もはや暮れなんとし
て——ようやく味方の人数にもめつきり減^へりが目立ち、残る人々
もすべて満身創痍^{そうい}を負^つつて、恙^{つつが}なく歩いている人影はほとんどな
かった。

パチパチと生木^{なまき}の焼けいぶる響き。ごうごうと炎の迫る音。す

でに寄手は、ここかしこから、城中へなだれこんでいた。

仁科五郎信盛は、なお多門の上において、味方の最期を——その一人一人の働きまでを——眼まじろぎもせず見とどけていた。

「殿ツ。殿ツ。——いずれにおわすか」

家中の小こすげ菅五郎兵衛は、多門の下を駈けめぐっていた。信盛は上から、

「これにおる」

と、健在を知らせ、ようやく近づいたな、そちの顔も見せよ——と下をさし覗のぞいた。

五郎兵衛は、煙の上に、主君の影を仰ぎながら、

「小山田備中どのを始め、お味方の将士、あらまは早お討死です。殿にも、御生害のお支度を遊ばしますように」

と、喘ぎ喘ぎ告げた。

「五郎兵衛、ここへ登つて来い。——介錯かいしやくに」

「はッ。ただ今」

大きく上へ答え、五郎兵衛はよろよろと、多門の階段の方へまわつて行つたが、いつまでも楼上へは来なかつた。いたずらにその梯子口からは、刻々と、濃い煙が昇つて来るだけである。

信盛は、べつな狭間はざまの板扉を押して、覗のぞいてみた。もう下に見えるは敵兵ばかりだつた。——がただ一人、その大勢の中に奮闘している味方がある。しかも薙なぎ刀なたを持った女性であつた。

「あ。諏訪勝左衛門の妻が……」

信盛は、いますぐ死ぬ身なのに、ふと抱いた意外な感を、解こ

うと努めた。

「日頃、ひとの前では、薙刀を持つなどはおろか、口すらよう得えきかぬほど、内気なあの婦人が……」と。

しかし、彼自身、今はすることが迫っていた。そのまま、狭間はざまから大声あげて敵へ云った。

「信長、信忠の手勢ども、しばし常に返つて、虚空こくうの声を聞け。

この世の千年も歴史では一瞬。信長いま覇はを誇るも、散らぬ桜やあらん、燃えぬ覇城はじょうやあるべき。——永劫えいごう、散らず、燃えず、

不朽のものとは、どんなものかを、いま見せてやる。信玄が五男五郎信盛が見せてやる」

織田兵がそこへ登つて来てみた時は、腹十文字に搔つ切った死

体のみで、首はもうなかった。そしてここも一瞬のまに春の夜空を焦^こがす火柱と化^なった。

しゅんそうふ
春騒譜

新府^{にらふ} 崎城^{さきぎ}の混雑は、この世の終りを叫んでいるようだった。
「はや高遠も陥^おち、御舎弟信盛様以下、城とともに、悉^{ことごと}くお討死
の由にござります」

こう家臣から聞いたとき、武田四郎勝頼も、動ぜぬ顔色に受けて、

「ううむ、そうか」

とはいったが、さすがに、いまは自分の力の及ばないことを、
明らかに観念した容子ようすであつた。

つづいて、次の早打には、

「織田中将信忠の兵は、すでに上諏訪かみすわから甲斐へ乱入——御被官ごひかん
の一条右衛門大輔だいすけどの、清野美作せいのみまさかどの、朝日奈撰津あさひなせつどの、山
県まがた三郎兵衛どのの御子息など、戦うも降るもくだ、容赦ようしやなくこれを
殺し、斬つては路傍に梟かけながら、潮のごとくこれへ近づきつ
つあります」

またの飛報には、

「信玄公のお血すじたる盲人の龍宝法師りゅうほうほうしも、敵の手にとらわ
れ、敢あえなき死をおとげなされた由」

と、聞えて来た。

そのときこそ勝頼は眦まなじりをあげて罵ののった。

「無慈悲な織田勢。盲人の法師に何の罪やある。何の抵抗力があるかッ」

しかし彼は自分の死のほうか、より強く今は考えられてきた。

じつと、空むなしい唇くちを噛くんでは、心の波の底に、

「こういう憤いきどおりを外に出しては、勝頼、逆上せりと思われぬでもない。あたりの家臣どもにも不面目——」

と、自制しているふうだった。

神経が太い、粗あらいと、彼の剛毅ごうぎな表面を全部に観みている者も多

いが、実は、家臣にたいしてすら、細かい気をつかう勝頼であつ

た。それにつれて、彼の節義とするとところも、主人としての面目も反省も、総じて小乗しょうじょう的てきだった。

父の遺風をうけて、彼も快川かいせん和尚おしょうから、その禅義を授かっていたが、同じ師、同じ禅を学んでも、信玄のような禅を活いかし得なかつた。

「——まちがいではないか。高遠の城だけは、まだまだ半月や一月は支えきつていると信じていたが」

高遠かんらく陥落と聞いたときなど、こういう眩つぶやきすら洩はらした程である。防戦上の誤算というよりは、人間としての未熟さを忌憚きたんなく出している。何せい、生れながらの素質はあつても、その未完になうちにこの時運に会ってしまったのである。

ここ数日、彼のいる本丸は、広い評定ひようじようの間とそのほかの袖そ部屋でべやまで、すべての襖ふすまをとり外はずし、さながら連日連夜の大地震でも避難しているように、一門一族、家老その他、みな起居を共にし、雑居しているのだった。

もちろん、庭さきにも、幕を張り、楯たてをならべ、兵は高張たかはりを掲げて、夜も寝ずに警備している。

そして、刻々の状況は、大手から中門を通り、直接庭づたいに、ここに報じられ、勝頼は、縁越しに早打しらいの報せまで、自身聞いている。

去年、普請ふしんしたばかりの、木の香の新しさも、金銀のちりばめも、調度の美も、何もかも、今はすべてが、邪魔物、足手まとい

の物としか、誰の目にも映らなかつた。

「お館さまには、いずこにお在わせられましようか」

かいがいしく、裳もすそをくくしあげた女房が、侍女こしもとひとりをつれ

て、御台所のお使いと称し、その混雑な庭面にわもから、ほの暗い広

間の中の人群れを見わたしていた。

それほどそこには、老若ろうやくの武将がいっぱいにいて、何やら

騒然と、思い思いな声をもらしていた。

彼女は御台所付きの女房で茅村ちむらの局つぼねという。やがて勝頼の前

へ来て、奥の丸からのお使いという旨をこう訴えていた。

「何せい彼方かなたの曲輪くるわは女子おなごのみでございますゆえ、こことは違い、

泣き惑うてはただうろうろ、どう宥なだめても、悲嘆してやみませぬ。

御台所の仰せ遊ばすには、いずれにせよ、最期はひとつ時、奥の丸の女子どもも、こなたへ共に立て籠り、侍衆とひとつにいたら、すこしは覚悟も早くつこうかとの御意にござります。おゆるしあれば御台所様のお座も、すぐこなたへお移しいたして参りますが、如何でございましょうか……」

勝頼は聞くとすぐ、

「それがよい。奥方おくも若い者たちも、みな連れて、わしの側へ移つて来い」

と、いった。

そのとき彼の周りにまわには、ことし十六になる嫡男の太郎信勝だの、宿将真田昌幸さなだまさゆき、小山田信茂のぶしげ、長坂長閑ちようかんなどもいて、何か

評議中らしかつたが、茅村ちむらの局つぼねが立ちかける前に、信勝は、つと進んで、

「父上。それは却つて、およろしくありますまい」
と、諫いさめた。

不機嫌に——というよりは、むしろ尖とがった眉、眼まなざしを、子に向けて、

「なぜ、いけない？」

「……でも、女子おなごたちがこれへ来ては、足手まといになります。

悲嘆を見て、剛氣な侍どもの心も乱れがちになります」

太郎信勝は若年ながら、今、一説を主張していたところである。
すなわちここは新羅しんら三郎以来の父祖の地、同じ戦うにも死ぬにも、

最後の最後まで、先祖の地でそれをなすべきで、新府しんぷを捨てて奔はしるのは、武田家の名にかけて最大な恥辱だと云い張っていたところだった。

それに対して、真田昌幸は、

「ともあれ、四面すでに敵、甲府は盆地なので、一度敵の侵攻に会つては、湖の底にいて、水をうけるようなものです。この上は、上州吾妻あがつまへおのがれあるが然るべきでしょう。三国山脈の一端まで逃げおわせれば、四顧、いずれへ出るも国々はあり、隠る術すべもあり、なおお味方を糾きゆうごう合し、御再起の便りもつきましよう」

と、進言していた。

小山田信茂は、また、

「上州方面にもはや、年来、甲州家に宿しゆくえん怨ぐんある輩ともがらが、織田の

手廻しを迎え入れて、火の手をあげ、道を塞ふさいでいる。お館やかた以下

大勢して、無難に通れようとは考えられぬ。如しかずこの上は、郡

内の岩いわどの殿山やまにひとまず御籠城遊ばし、その上の御思案。そのま

にはなお、四散したお味方も馳せ加わりましょうし……」

という献策をすすめた。

長坂長閑も、

「それがよい」

と、同意を示し、勝頼の心もほぼ傾いていたところなのである。

勝頼は、信勝にそそいだ眼を、次には黙って、茅村ちむらつの局つぼねへ向け

て、こう促^{うなが}した。

「起^たつがよい」

「では、ただいまのことは、御台所様のお望みのように……」

「うむ、そうせい」

茅村の局は去った。

信勝の主張はこれで父に否定されたことになった。彼は、無言に返って、さし俯^{うつむ}向いた。

残る問題は、上州吾妻へ遁^{のが}れて行くか、岩殿山方面にたて籠^{こも}るかの二つだった。しかしそのいずれにしても、この新府を捨てて亡散することは、もはや勝頼の心にも宿将の胸にも、避け難い運命と諦^{あきら}められているものようである。

三月三日。毎年のようならば、桃の節句に奥の丸に華やぐ日を、勝頼の簾れんちゆう中一門の老幼は、黒煙に追われながら、新府の館を捨てて落ちた。

もちろん勝頼も城を出た。附き従う侍たちも残らず城外へ出た。けれど勝頼はその総勢を顧みて、

「これだけか」

と、唾然あぜんたる顔をした。

宿老の面々をはじめ一族の典厩てんきゆう信豊のぶとよまでが、いつのまにか

ここに姿がない。聞けば今朝暗いうちからの混雑に乗じて、各郎党を連れて、自分自分の在所や城へ遁のがれ去ってしまったというのである。

「太郎。いたか」

「おります。——父上」

十六歳の太郎信勝は、孤影の父に寄り添って、共に駒をならべていた。

そのほかは旗本から平^{ひらぎむらい}侍や足輕までを合わせても、千人には足りなかった。しかも夥^{おびただ}しい数は、簾中以下上臈^{じようろう}たちの塗^{ぬり}駕^{かご}や輿^{こし}や、被^か衣^ぎ姿^{すがた}や徒^{かち}歩、駒の背などの傷^{いた}々^{いた}しいものの数であった。

「おお、燃ゆるわ」

「焼^やけ旺^{さか}ることよ」

未練のふかい女たちの群れは、^{にらさき}葦崎を離れて十町も来ると、

歩みもやらずみな振り向いた。

朝の空に、火焰と黒煙くろけむりを高く挙げて、新府の城は今し焼け落ちようとしている。ちやうど明け方の卯うの刻頃こく（午前六時）にみずから放つけた火であつた。

「長生きはしようない。何たる末を見ることぞ。これが信玄公のお家の果てか……」

勝頼の伯母君とよばるる尼や、信玄の孫むすめという可憐な乙女とめや、一門の妻女やその召使の女たちなど、みな簾中の乗物にとりついて泣き沈むやら、抱きおうて嘆くやら、また幼子の名を呼び交うなど——金釵きんさい環簪かんしんも道に委まかして顧みるものなく、脂粉や珠玉も泥土にまみらせて惜しむ眼もなかったという——長恨ちようご

歌んかのうちにもある漢王の貴妃きひとの長安の都を落ちる状さまにも似て、

道はすこしも撓はかどらなかつた。

「いそげ。——何を哭なく。——人の世のつね。百姓たちの見る目も恥ずかしいぞよ」

勝頼は、励まし励まし、遅れがちな駕籠や輿こしに入り混じつて、東へ東へ、逃げのびた。

小山田信茂が城を恃たのんで、甲府の旧館ふるたちもよそに見ながら、山へ山へと、めざして行くのである。その間にも、輿こしを担かう凡下ぼんげは姿を消し、荷を持つ小者や駕籠かごの者も次々に逃げ去り、いつか人数は半分に、またその半分に減つてしまった。

勝沼辺の山中へ来たときは、二百人ほどの総勢のうち、騎乗の

武者は、勝頼父子を入れても、わずか二十騎足らずという、あわれな変り方を見せていた。

しかも、ここまで唯一の恃^{たの}みとして来た小山田信茂は、勝頼主従が駒飼^{こまがい}の山村にまで辿^{たど}り着くと、急に変心して、

「ほかへお立ち退^のき候え」

と、笹子^{ささこ}の嶺^{みね}道^{みち}を切り塞^{ふさ}ぎ、勝頼らの来るのを拒んだ。

勝頼父子をはじめ、一同ははたと当惑した。ぜひなく道をかえて、田子^{たご}という部落まで遁^{のが}れてゆく。ここは天目山の山裾という。

春は撩^{りようらん}乱だが、見はるかす限りの野も山も今わの慰めにもな

らなければ頼みともならなかった。そして今はわずか、四十四、五人となり果てた末路の人々は、途方に暮れている勝頼ひとり

なお杖とも柱とも恃たのんで、ひと所に寄り添うたまま、茫然と、吹く山風の中に佇たたずみ合つた。

てんもくざん
天目山

織田徳川の聯合軍は、はやくも甲州内へ怒濤のごとく入つて来たと、この辺の土民までが云い合つている。

家康の軍は、穴山梅雪を案内として、身延みのぶから文殊堂もんじゅどうを経、市川口へ。また織田信忠は、上諏訪かみすわに進攻し、諏訪明神すわみょうじんそのほかの諸伽藍しよがらんを焼きたて、沿道の民家までも黒煙くろけむりとしながら、残兵を狩り立てつつ韭崎いらさき、甲府へ向つて夜も日もなく急進して

来るといふ。

ついに、最後は来た。三月十一日の朝である。

「織田勢の先鋒、せんぼう滝川左近、篠岡ささおか平右衛門などの兵が、はや近くの村々に入りこみ、ここにお館やかた以下御一門がおわすことを里人から聞き知ったらしく、遠巻きに通路を断つて、やがてこれへ押し襲よせて来るらしゆう見うけられます」

これは、ゆうべから里へ出て、敵の情勢をさぐつて帰つた勝頼そばしゆう衆おはらたんご小原丹後が息喘いきせいて今朝告げて来たことである。

ここ数日、勝頼父子をめぐる残余の侍四十一名と、簾れんちゆうじよ中上うしろう

藤たち五十人の一群は、天目山のうちの平屋敷とよぶ所に、しばしの柵さくを結ゆつて立て籠かこつていたが、こう聞くと、

「今は……」

と各、死ぬ身支度に忙しかった。

その中に御台所みだいどころの勝頼夫人は、白い花のような容顔かんばせにやや茫ぼうとしてみえる現うつをたたえ、館やかたの奥の丸にあるとおりに坐つていた。

よよと泣き縋すがつたり取り乱したりしているのは、彼女をめぐる女房たちであつた。彼女らは口々に、

「こんなことになるものなら、いつそ新府のお館いたにおいて遊ばした方がましであつたもの。お傷いたわしゆう。これが武田の御簾中ともある御方のおすがたか」

「生れては、北条家の姫様ひいさまとして、珠たまのように愛いつゝくまれ、嫁い

では武田四郎勝頼様の御簾中とも仰がれた御身が……」

「まだ御^{おん}年も十九というに」

などと限らない悲嘆と悲嘆を交わして、果ては人目もなく声を放つて泣きみだれる上臈さえあつた。

「奥^{おく}方。奥方」

勝頼は、その妻を顧みて、

「いま、小原丹後に、馬をいいつけたぞ。いつまで、これにいても名残はつきず、はや敵も麓^{ふもと}近う迫つて来たという。——ここは相模^{さがみ}の都留郷^{つるごう}にも近いと聞く。そなたは、はや去るがよい。山を越えて、相模の実家親^{さとおや}が手許へ帰れ。北条方の骨肉たちは、よも悪うは計るまい」

と、急^せきたてた。

「……………」

夫人は眼に涙をいっぱい溜^ためてはいたが、決してここを起とうとはしなかった。却^{かえ}つて、その眼は良人のことばを恨んでいるかのようにだった。

「土屋。土屋右衛門。奥^{おく}方を馬の背へ抱き乗せてやってくれい」

「はい」

側^{そばしゅう}衆の土屋右衛門が、畏^{かしこ}まって、夫人の側へ寄りかけると、

夫人はにわかに、涙をはらって、良人の勝頼へ云った。

「まことの侍に、二君はないように、いちど嫁^{よめ}いだ女子^{おなご}には二度と帰る家などあろう筈はありません。ここからひとり立ち去って、

小田原へ帰れとは、お慈悲には似ても、妻の身として聴くには、余りにお情けないおことばにござります。……わたくしはここを動きませぬ。御最期までお側におります。そしてその先までもお供をさせていただきまする」

そのときまた、秋山紀伊守の家来たちが、

「敵は間近です」

「ふもとの寺近くまで来ております」

と、眉に火がつくように注進して来た。

勝頼の夫人は、侍こしもと女たちの悲嘆を叱つて、

「嘆いてばかりいる時ではない。用意のものをこれへ備えてたもと、きつくいった。」

まだ二十歳にも足らぬこの夫人は、最期がせまるほど端正を失わずまた水のように冷静であつた。

かえつて、良人の勝頼こそ、その夫人の落着きぶりに、たしなめられる心地がした。

「はい……」

と立つた侍女たちは、素焼の盃と銚子ちようしとを取り揃えて来て、勝頼父子のまえにおいた。

こんな物まで夫人はいつのまにか支度しておいたものとみえる。白木の三さん宝ほうの土盃かわらけを、默然もくねんと、勝頼にすすめた。

勝頼は手にとつた。そしてまず飲んで、嫡子ちやくしの太郎信勝にわたした。次に、夫人とも酌くみわけた。

「殿。土屋の兄弟たちにも、おながれを……。土屋、この世のおわかれ、今のうちに申しあげよ」

これも夫人の心遣りこころやであつた。

近習の土屋惣蔵は、その弟ふたりと共に、実によく忠勤を励

んでいた。兄の惣蔵は二十七、次の弟二十二、末の弟十九。兄弟一致して、新府落去からここまでの途々みちみち悲運の主君を守つて、涙ぐましいばかり仕えて来た。

「これで、思ひのこすことありません」

いただいた盃を乾ほすと、兄の土屋惣蔵は、にことしながら弟たちを顧みた。そしてまた、勝頼夫妻に向つて、

「このたびの御悲運は、まったく御内方の一族に、離反があつた

ためによる。殿にも、御台所様にも、こうしておいで遊ばす間も、
 人の心は知れ難いものと、定めし恟々きようきようと、安きお心地もない
 でしょう。……が、そうした人ばかりがおる世の中でもありませ
 ん。せめて、御最期の一刻いつときだけでも、ここにゐる者はみな一心
 同体ぞと、人を信じ、世を信じ、お潔いさぎよく、また安らけく、死出の
 お門立かどたち遊ばしませ」

と、なぐさめた。

惣蔵はつかつかと起つて行つて、上臈じょうろうたちの中こにゐるわが妻の
 側へ寄つた。突然、そこで「きやツ」と魂切たまぎる児のさけびがした
 ので、勝頼が、遠くから、

「惣蔵、逆上せしか」

と、激しく叱った。

惣蔵の妻も、声をあげて泣いている。彼は、五ツになるわが子を妻の眼前で刺し殺したのであった。血刀も収めず、惣蔵は遠くから勝頼のすがたへひれ伏して、

「おなさないお叱りです。ただ今申しあげた言葉の証あかしに、まず、足手まといのわが子から先に、死出の道へ立たせてやったまでのこと。いずれ惣蔵も、わが君のお供して参ります。先といい、後というも、わずか一刻……」

のこりなく

ちるべき春のくれなれど

さきだつはなを

あはれとも見つ

^{おもて}面を袖に蔽^{おお}うて、あわれと泣きしずみながら、勝頼夫人が口誦^{くちず}

さむと、侍女のうちのひとりが、同じように咽^{むせ}びながら、

咲くときは

数にも入らぬ花ながら

ちるには洩れぬ春のくれかな

と、詠^よんだ。そして声の終るのと共にはや幾人かは、懐剣を抜

いて、われとわが手に、乳を刺し、喉^{のど}を突いて、流るる血のなか

に黒髪を浸^{ひた}された。

びゆうん――

^{やうな}矢唸りが近くをかすめた。

ぶすツ、ぶすツ、と辺りの土が刎^はねて掘れる。

彼方には小銃の筈^{こだま}がする。

「来たぞツ」

「お館^{やかた}。御用意を」

武者たちは、総立ちになった。

勝頼は、子の太郎信勝へ、

「よいか」

と、覚悟をただした。

信勝も、一礼して、起ちあがりながら、

「お側を離れずに死にましょう」

と、答えた。

「さらばぞ」

と、父子が、駈け出そうとするとき、夫人はうしろから初めて大きな声して良人へ云った。
おつと

「お先に参っておりまする」

「……才才」

勝頼は、立ちどまつた。そしてその目に凝視した。短い刃やいばを持つて、山の端の月とも見える真白い面おもてを仰向けたまま目をふさいだ夫人が、日頃、愛あいし誦しょうしている法華經ほけきょうの五之卷の一章をしずかにその唇くちから唱となえているすがたを。

「土屋。土屋」

「はいッ」

「介錯かいしやくをしてやれ」

「……は。……はい」

しかし夫人は、その助けの刃やいばを待たずに、自ら法華經のながれ出る唇くちの中へ、手の懷劍をふくんだ。

がばと夫人のすがたが、前へ俯つ伏したせつな、ひとりの上臈が、

「御台所様みだいどころには、はやお立ち遊ばしましたぞ。皆々にも、死出のお供、おくれませぬように」

と、残る人々を励まして、すぐことばの下に、自分も刃を仰いで仆れた。

「おさらば」

「いざ」

呼び交わし、さけび交わし、五十余名の女子たちは、りようらん 撩乱、
のわけ 野分に吹き荒らさるるお花畑の花のように、或いは横ざまに、或
うつむ いは俯向けに、或いは、相抱いて刺し交えに、ちが 悉く自刃してしま
 った。

この中に、あわれなのは、乳のみ児や、まだ母の膝を離れない
 幼児の泣き声だった。土屋惣蔵は、そうした子を持つ母ばかり四
 人ほどを、遮二無二、馬の背へ押しあげて、鞍へ縛くしつけ、

「あなた方は、ここを落ちてても、不忠ではない。せめてお命を保
 つたら、子を育ててはかな儚い故主の御一門の御供養となされるがよ

い」

と、子供と共においおいと泣く母親を叱りつけて、それらの者を乗せた馬の三頭を、さんず槍の柄でびしびしなぐ撲った。

馬は驚いて、母子の泣き声をのせたまま、向う見ずに駈け去つてゆく。——土屋惣藏は、弟たちを顧みて、

「さあ、いいぞ」

といった。

そのときもう山の上へ上つて来た織田方の滝川左近、篠岡平ささおか右衛門などの部下の顔はつい先の方に見えていた。

柵の際で、さくきわ勝頼父子は、まっ先に敵兵の目がけるところとなつ

て取り囲まれている。その側へ、加勢に走ろうとすると、味方の跡部尾張守が、あとべ反対な方へ逃げ腰で駈けてゆく。

「不忠者ッ」

かつとした惣蔵は、まずその方へ向つて、追いかけていった。
そして、

「跡部。どこへ行くか」

と、うしろから一刀浴びせつけると、血ぶるいして、今度は、
まさしく敵の中へ駆けこんだ。

最後の一戦。それは武門の者にとっては、この世の名残をし尽
すことだった。

「弓の代え^かを。土屋ッ、弓の代えを」

勝頼は、二度も弦^{つる}を切つて、弓を持ちかえた。惣蔵は側を離れ
ず主君の楯^{たて}となっていた。

面々、あるかぎりの矢を射尽すと、弓を投げて、長巻を持ち、或いは、太刀をふりかぶった。

当然、敵兵も、眼の前へ来た。しかし斬ツつ斬られつの白刃戦も一瞬の間でしかない。大勢はきまっている。

「おさらば」

「殿。若君ツ。おさきに参りますツ」

呼び交^かわし、呼び交^かわし、ばたばたと討死を遂げてゆく。勝頼もはや鎧^{よろい}を朱^{あけ}に染め、

「太郎ツ……」

と、わが子と呼んだが、もう眼は血にかすんでいる。うごくものはすべて敵にしか見えなかった。

「殿ッ。惣蔵めは、まだおります。お側におりまする」

「土屋か。敷皮を持て。はや……生害をせん」

「こなたへ行いらせられませ」

土屋惣蔵が肩をかす。勝頼は彼にすがつて、約百歩ほど退いた。敷皮の上に坐る。矢瘡やきず、槍瘡やりきず、すでに手がきかない。急ぐほど、手はみだれる。

「御免ッ」

見るにたえず、惣蔵はすぐ介かいしやく錯さくした。そしてわが刃に落した主君の首級にとびついて、それを抱えると男泣きに号泣した。

「弟ッ、弟ッ」

十九の弟にそれを渡してお首を持つて逃げろという。けれど弟

もまた泣いて、どうしても嫌だという、兄と一緒に死ぬという。

「ばかッ。行け！」

突き飛ばしたが、すでに遅い。兄弟のまわりは敵兵の鉄桶と化^なっている。無数の槍と刃^{やいば}のしぶきをかぶって、土屋兄弟は、華々しい死を果した。

中の弟の二十二歳になるほうは、終始、主君の嫡^{ちやくなん}男 太郎信勝の影身にそい、この若い主従も、同じ頃、討死していた。

太郎信勝は、よほど美しかったとみえ、武田一門の死を誌^{しる}すに少しの同情もない「信長公記」の筆者すら、

御年十六歳、さすが歴々の事なれば、容顔^{かんばせうる}麗はしく、肌^{はだへ}は白^{はく}雪^{せつ}に似たり、潔^{きよ}さ、余人に優れ、家の名を惜み、父の最

期まで心に懸け、比類なきの働き、感ぜぬはなかりけりと、極力、そのきれいな死しに際ぎわをほめ称たたえている。

勝頼父子、土屋兄弟以下、討死相しょうばん伴の衆としては、次の人々の名を列記している。

秋山紀伊守。長坂長閑。小原下しもうさのかみ総守、同じく丹後守。跡部尾張、同子息。安部加賀守。鱗りん岳がく長老。

以下四十一名侍分。

ほか五十余名簾中上臈たち。

時刻はまさに巳刻みのこく（午前十時）ごろで、諸事終っていたといふ。

武田家はここに亡ほろんだ。

長坂長閑、跡部大炊あとべおおひなどが、勝頼を陥おとしいれた佞臣ねいしんという云い伝えは嘘である。跡部は、最後になつて逃げ腰を見せ、土屋惣藏に殺されたが、それでもこの日まで勝頼のそばにいたし、長閑は立派に主君に殉じている。

また、勝頼の首を見て、信長が足蹴あしげにして罵つたというのも嘘である。反対に慇懃いんぎん床几しょうぎを下つて、その首に敬礼したという家康の人物を引きたてるために、捏造ねつぞうした徳川時代御用史家のこしらえ事にすぎない。

ほんとは、月の十四日、呂久川ろくがわの陣中で、勝頼父子の首を実検し、そのとき、

「日本にかくれなき弓取の子も、運尽きては、こうなるものか。」

あわれよの」

と、左右の者へ^{つぶや}呟いたという。

そして飯田の木戸に^か梃寄せさせたというのが、平凡なる真相であった。

火も^ひ涼し^{すず}

東山梨の松里村へ、その日^{おびただ}夥しい兵馬が入った。もちろん全軍織田色である。大將は三位中将信忠と聞えたが、

「すぐ^{ぶしよ}部署につけ」

と数千の兵を分けて、包囲にかかった直接の指揮者は、^{きか}麾下の

河尻肥前守だった。

目標は、恵林寺だった。

けれど、山林一里四方、境内一万六千余坪の寺内である。ほとんど、村全体をつつむほどな大掛りにならざるを得ない。

包囲は即日終った。

黄昏れである。選ばれた四名の御成敗奉行人が、くつわを

並べて山門へ向った。

織田九郎次、長谷川与次、関十郎、赤座七郎右衛門などであ

る。それに部下の兵若干とはいえ、鉄砲や素槍をたずさえ、

それらの兵は甲州全地を蹂躪して、皆どこかで鮮血を味わつ

ている、いわゆる常ならぬ殺気の持主だった。——あわれあの衆

が山門をたたいた果てはどうなるのか——と村の人々は戸のすき間や壁の蔭からのぞいていた。

奉行人四名は、

「おらんのかッ。誰も」

本堂に上がってどなっていた。

地内はいわゆる七堂伽藍がらんが巍々ぎぎとしていた。七十二門の廻廊、

三門、草門、鼓楼ころう、五重の塔など、甲州第一山の名刹めいさつたる名に

恥じない。けれど、黄昏たそがれの色深く、葉桜や若葉の蔭に、老おいうぐ

鶯いすの啼き迷うのが時々聞かれるぐらいなもので、本堂も洞然どうぜん、

留守のような静けさだった。

「方丈ほうじょうへ踏みこんでみろ」

関十郎が云った。

ことばの下に、土足のままの兵たちが、廻廊を左右に駈け出そうとしたとき、

「誰だツ」

と、強い声を響かせて、紙燭ししよくを持った一僧が、内陣柱の蔭からこなたへ歩いて来た。

奉行人の中の織田九郎次が、ずかずかと此方からも歩み寄って、
「おう、そちは先日、挨拶に出た勸心かんしんとかいう者だな」

勸心はかくべつ驚きもしなかった。静かに、紙燭を下に置いて、平伏した。

「これは、中将様のお旗本衆でございましたか。寺を訪とうひとに

は、おのずから礼もあり、あれに訪ほうしやう 鉢はちも備えてあるに、本堂の上まで、土足でみだれ入るお客は、さしずめ夜盗か、血まようた落おちゆうどしゆう人衆かと危ぶみ、わざと、失礼いたしました。おゆるしのほどを」

「坊主、その方は先日も、無用なことばのみ吐いて、中将信忠卿のお使いを怒らせたが、また今日も、われらをわざと腹立たすつもりか。それでは大きな損であろうが」

「お使いのお旨に、正直なお答えを仕つかまつるのほか、まだ自身の損得など、考えたこともございません」

「おまえはそれでよかろうが、師の快川かいせんこくし国師にとって不利だろう。快川のほかに、一山にはまだ、たくさんな長老、衆僧、稚ち

子、雲水などいるだろうに」

「あ、いや。わたくしの言葉は、一語としてわたくしの言ではありません。みな和尚のおことばです」

「快川の言だというか」

「はい。相違ございませぬ」

「ではなぜ、快川が出て、自身お答え仕らんか」

「塵^{じんがい}外のおひと、殊には老軀、たいがいな俗務は、わたくしが皆、いたしております」

「俗務とは何かッ」

赤座七郎右衛門が、横から足をつめて睨みつけた。勸心という僧は、首を曲げて、柄^{つか}に鳴った彼の手を、冷やかに振り仰いだ。

織田方の軍使は、きようまでに、二度もこの寺に臨んでいる。

そして、命じるには、

（当寺内に潜伏している足利義昭よしあきの手先、上福院というもの。

また以前六角承禎ろっかくじようていといい、今は佐々木次郎と変名している人

物。もう一名は、大和淡路守やまとあわじのかみという織田どのを呪う曲者くせもの。こ

う三名の首を揃えて出せ。——首にして差し出すことが沙門しゃもんで

は出来ぬというなら寺から突き出せ。いずれでもよい）

と、達したのであつた。

恵林寺側えりんじは、そのたびに、言を左右にして、

かしこま
（畏りました）

と、いわない。

のみならず、いつ使者が臨んでも、その応対は、きょうの通りなのである。門を叩く雲水を見るのと何らの変りもない冷淡さだ。

（誠意がない）

と、織田軍は観^みたばかりでなく、自分たちに対して、被征服者一般の抱いている反感すら示しているものとなして、

（この上は）

と、わざわざ仰山にも、数千の軍勢を、こんな山村まで押しすすめて来たわけだった。

四名の奉行^{ぶぎようにん}人は、舌打ちして、

「返答を待つ^{いぢやのう}の、待たぬの。また、いるの、いないのと、かような一野^{いちやのう}柄を相手にして、暇どるのもくだらない。かつ面倒だ。

この上は、家捜しやさがを行うまでではないか」

「まず。それしかない」

「やるか」

「ただ、寺域は広い。伽藍がらんも多い。やるとなれば、もう一応、河か尻わじり殿へ沙汰して、これへ人数および、万全を尽さぬと、可惜あたら、野鼠のねずみを逃がす惧れもある」

「よろしい。それがしが、その人数をつれて、すぐ取って返して来る。それまで、監視をたのむ」

長谷川与次ともつぐが、織田九郎次へいって、廻廊はしごから階を降りかけた。そのときである。

「お待ちください」

「……？」

振り顧ると、稚子ちごを連れたひとりの老僧が、廻廊の横に立っている。与次は、それへ向つて、すぐ云つた。

「お身は、この寺の和尚、快川か」

老僧はたそがれの中に白い眉を横に振つた。

「わしは、ここの末院宝泉院の雪岑せつしんでおざる。快川国師ではない」

「末院の和尚か。して、何の用か」

「寺内に逃げこんだ武田どのの残党をつき出せとの御意。快川も決してお拒こばみはしておらぬと聞くが……」

「われらの求める者は、そのような木ツ端武者の処分ではない。

上福院、佐々木次郎、大和淡路やまとあわじの三名だ」

「そのようなものはおるかしらて。……いや、何かはよく知らぬが、もう一応、あしたの朝まで、静かにお待ち下されてはどうかな。かならず、雪岑せつしんも仰せを奉じて、いるものなら突き出す、おらぬものならば、お詫わびに罷まり出る。いずれともはつきり御挨拶に伺わせまする」

「誰をか」

「国師を」

「しかし、おらぬなどという詫わびはうけぬぞ。当方には、確しかとして証拠もにぎっており、また密訴して出た証人もあることだ」

「それほど、慥たしかなことなれば、おそらく寺内にいるのでしよう。」

しかし、合戦以来、縁故を辿つて、此寺に落ちて来た武田衆は、身分ある者、身分のかろい者、何分大勢のことですから、入念にただ糺さねば」

「ではかならず明朝までに、快川自身、河尻殿のお陣所まで挨拶に来ることを、汝が誓うか」

「かたくお誓いいたします。雪岑せつしんの首にかけても」

「確しかと、約したぞ」

念を押して、奉行四名は、ひとまず陣所へ帰った。

明朝辰たつの下刻げこく（午前九時）までには、かならず寺中から挨拶に出向く——という雪岑長老の口約束をとつて。

さればとて、もちろん警戒の手はゆるめない。織田勢は終夜、

村の道々に、大^{おお}篝^{かがり}を焚^たいて、半ば威嚇^{いかく}していた。

ところがその夜半に、恵林寺の裏山づたいに、そつと脱け出したものがある。三人の法師だという。上福院、佐々木次郎、大和^{やまと}淡路の変装したものに違いない。見とどけたのは織田兵ではなかったが、山小屋の樵夫^{きこり}が降りて来て、朝になつて村へ訴え出たのである。

「なぜ、夜のうちに知らせぬか」

と、訴えたあげく、二人の樵夫は、胆^{きも}のちぢむほど叱^しられた。時刻といえば、すでに辰^{たつ}の刻^{こく}だった。

「寺中からの挨拶など待つまでもない」

河尻肥前守、織田九郎次、関十郎、数千の兵は、山門裏門から

恵林寺へなだれ入った。

ほうじよう
方丈、庫裡、いずこも、掃き清めてあつてきれいである。

ただ、内陣にあつた信玄の木像がない。またどこかへ寺宝の文書や墨付などは運び去つたらしく、ひらひらと、そこらにこぼれ落ちてゐる数片が眼にとまるだけだった。

「や、や。人もおらぬ」

「どこへ？」

まろ
このうろたえは、すぐ解決した。寺の四方から火を放けても、転び出す者はほとんどなかった。寺中のひとすべては、本堂を立ち退いて、楼門のうえに上つていたからである。

「あれだッ。あれにおるわ」

河尻肥前守と織田九郎次は、馬をならべて、鞍上から指さして
 いる。むらがつた兵たちも首をあげてそこへ眸ひとみをあつめた。驚く
 べきものをそこに見たような眼いろである。凝視したまま、しば
 しがほどは、みな心をうつろにしていた。

山門の楼上、正面には、朱あけの椅子いすに倚より、紫衣金襴しいきんらんの袈裟けさをつ
 けた老和尚のすがたが見えた。いうまでもなく一山の長老快川かいせん
 国師こくしである。

左側に、雪岑せつしん、また藍田らんてん、右側には大覚和尚だいがくおしょう。そのほ
 か老僧十一名、弟子僧数十人、生ける羅漢らかんず図のようにずらりと並
 んでいた。いやまだ、そのほかにも、寺中の老幼、稚子ちご、堂どうしゆ
 衆しゆまで、ひと目に数えても百五十人に近かろうと思われる人々

が、恐ろしげに、幼きは老いたる者へ、老いたるは若者へ、抱き合つたまま竦すくんでいた。

「和尚ッ」

馬上から肥前守が呼んだ。

快川は、答えない。

織田九郎次が、また呶鳴つた。

「快かいせん川ッ。あざむいたな」

白い眉は動きもしない。

「焼き殺せッ」

河尻肥前守が、叱咤しったした。山門の下には柴しば、薪まき、焼き草が積み

あげられた。織田九郎次は、馬を跳とび下りて、ためらう兵を叱つ

た。

「なぜ、火を放^つけぬツ。草だけ積んで見ていて何になるか」

煙は楼門の千^{せんぼん}本^{びさし}廂へ立ちのぼった。

「衆僧」

快川は初めて口をひらいて左右の法友へいった。

「諸人、今、火焰^{かえん}の裡^{うち}に坐す。法輪いかに転ずるや。各、転語

を下して、最後のことばとされよ」

みな、一偈^{いちげ}を唱えた。もう焰^{らん}は欄をこえて、快川のすそを焦が

していた。稚子^{ちご}老幼の阿鼻^{あび}叫喚^{きょうわん}はいままでもない。いま偈^げを叫

んだ僧も唸^{うめ}いてのたうちまわっていた。

快川^{かいせん}は、いった。

「――安禪アンゼン必ズシモ山水モチイヲ須ズ。心頭シントウヲ滅メツ却キヤクスレバ火モ
 自ラ涼シ。喝カッ」
オノズカ

快川の死は、それを眼で慥しかと見ていた者でも、いったい彼は死
 んだのやら生きたのやら、分らない氣持につつまれた。

安禪必ズシモ山水モチイヲ須ズ

心頭ヲ滅却スレバ火モ自ラ涼シ

と、さけんだ焰の中からの声がいつまでも耳から去らなかつた。
 満身の法衣ころもがみな焰と化し、腰かけている朱椅子しゆいすも火になつて
 いながら、快川の体はまだ、そのまま姿勢もくずれていなかった。
 楼門の上の老幼衆僧がみな、焰ほのおの壁や焰の床に昏絶こんぜつして、声
 も出さなくなり、びくとも動かなくなつてからでも、快川のすが

たはまだ紅蓮ぐれんの傘蓋さんがいをいただき、猛火の欄にかこまれながら、椅子に倚よつて、平然としていたのである。

あやしい奇蹟のような恐怖感とらに囚とらわれた山門下の武者輩ばらは、
「あれよ」

「……あれよ」

と、囁うわごと言のような声を放つて遠巻きに見まもっているだけだった。

ふしぎや、焰の勢いが最も旺さかんになった頃、快川の眼が二つ白く、火と黒煙の中に、くわつと開いたように感じられた。

間もなく、山門の廂ひさしは、ばらばらとくずれ、火塵かじんはまるで華火はなびのように噴きあげて、快川の影も、だんだん黒く変つてきたが、

しかもなお曲きよくろく

に懸ったまま倒れもせずに楼上にあるではな

いか。

その影を失ったのは、山門の大厦たいかが、大きな響きを立てて焼け落ちた瞬間だった。

焼け落ちたのちも、巨大な火の山は、終日ひねもす、紫いろの余燼よじんをめらめらあげている。そしてようやく夕方には灰になった。

その夜、恵林寺に屯たむろした数千の兵は、大半、快川の夢をみた。いや夢にあらぬものが、あくる日も夢のように、頭につきまとつていたのかも知れない。

「土道を悟った」

心ある者は、そういう感銘をもらした。そして、

「快川かいせんのような境地にまでなり得れば、武士、僧侶の差別はない。いわゆる達人の境だ。われわれ、朝あしたにも夕べにも、血ちなまぐさ腥い戦場を駆け、敵の死を見、友の死を送り、自分の死をも、覚悟はしていながら、戦場以外では、さて、そこまでには成りきれない」

そんな述懐をもらす武者もあつた。

とにかく快川の死は、それを伝え聞いた織田、徳川の全軍にまで、何かしら大きな問題を投げかけた。

生死観。——生死の大事。

つまるところそれであつた。

古来あらゆる智識や達人が、仏教に問い、儒道じゅどうに質ただし、また

その究明に身をもつて、十年二十年の難行苦行を試みたのも、その究極は、生死の問題でしかない。

そのいのちを、鴻毛こうもうよりも軽んじて、主君の馬前、乱軍のちまたを、何十遍となく往来したというさむらいでも、居を家に、身を平時に還かえした日常では、やはり戦陣中のようににはゆかない。で、道を聴く。禅に参じる。

或いは、聖賢せいけんに問う。或いは、剣を練ねつて、胆心を養う。

それとて、なかなか徹しきれないのが、おたがいの常である。死は、生きているかぎり生と対立する。何事に当つてもこのあいだにさまよう。

（死が何。二度とは死なない）

口ではいえるが、またやさしいが、同時に、むつか難しい。生きとし生けるものすべて、この問題を課せられている。その自覚もない者は、死をおそ懼れぬのでなく、生もよく知らない人というほかはない。

或いは、いう者もあるう。快川はなぜ死を選んだかと。

素直に、武田与類さえ、寺内から突き出せば、無事にすんだのではないかと。

武人ではない、しゃもん沙門である。それでも、非難はなかりうにと。

そうだ。あしかがき足利期を通じ、室町没落までの禅家はそんなものだ

った。けれどかつての鎌倉時代の禅門では、そんな妥協の卑屈はゆるさなかった。

ほうじょうときむね
北条時宗が、断乎として、

（蒙古討つべし）
もうこう

とな
と為した大決心も、いわば大禅機である。その時宗に、一語を
贈つて激励した仏光禅師ぶつこうぜんじを見ても、当時の禅林の氣骨稜々
な風は窺うかがえる。

その禅も、いつか文字禅、理論禅になり、遊戲に墮し、風流に
化し、そして骨抜きになりかけた時、ここに日本僧快川あが在った
のである。

僧童七十四名、堂塔三十字、七堂の莊嚴も一火としてしまった
が、快川の氣魄とともに、それは光焰万丈をあげて、禅の認識を、
ふたたび世に新たにした。

さればとて、快川は、時代に反抗したのではない。時勢に盲目であつたのでもない。彼は、それより前に、明らかに勝頼へ対しても云つてゐる。

（何事につけ朝廷を尊び、朝廷を中心として統治をなす主義の信長には、地方の侍や土豪とて、おのずから心をひかれ、一地方の主たるに過ぎぬ武門の主人に対しては、つい離るるともなく心入れのちがつて参るのは、ぜひもない成行きと申そうより、自然に帰するが如きものでしょう。決して、信玄公の御子として、あなたが不肖な子というわけではない）

そう慰めてゐるのを見ても、彼はその自然に帰してゆく時勢に反抗する理由もないし、また盲目でもないことは明瞭である。

にも関^{かか}わらず、彼が、求めて死についたのは凡人の眼にこそ、驚嘆されたり、異なことのよう^うに映^{うつ}るが、彼自身は、元来、生死の別に、さしたる区別を持つていないし、死中生有り、生中生無し。極めて自然な行為だったにちがいないのである。

しかもその自然な行為のうちには、故信玄の恩顧^{おんこ}に対する厚い情誼^{じようぎ}もあつたし、平常、禪林の墮落に対して訓^{おし}えたい気もちもあつたに相違ない。しかも、その生命は枯化するなく、肉体のな^いいのちも、幾世にわたつて、思うところの動きをな^いしうるのであるから、むしろ欣然^{きんぜん}として、大火焰の裡^{うち}に微笑をたたえていただろうと思われる。

さて。

世變転化は、落花と俱ともに行く春の移りも早く、甲州の山野は信長の領下に染められ、右府信長の征旅せいりょは日程のとおりすすんだ。

三月十日。高たかとおじょうちやく遠城着。

同月十九日。諏訪入陣。同時に、軍政発令。

二十日。木曾義昌来謁。きそよしまさ義昌に旧領筑摩郡ちくまごおりに安曇あずみを与う。

同日。穴山梅雪参礼。梅雪には、旧領そのままの朱印を下附。

廿三日。滝川一益を、上野信州の二郡に封じ、関東管領かんりようの

重職にのぼす。

廿六日。小田原の北条氏より米千俵到来。

——といったように彼の陣門と軍旅の道は、往来、出入り、繁昌を極めていた。

さび
淋しき人ひと

木曾口や伊那いなを攻めた兵もやがて続々すわ諏訪に集結した。諏訪は信長の軍勢であふれた。

彼の宿所、その総本陣たる法養寺ほうようじでは、二十九日に、全軍將士への論功行賞を発表し、また次の日には、諸將を会して、戦勝の祝宴を催した。

これより前に、恩賞の沙汰をうけていた者のほかに、この度の拝受者には、

徳川家康には、駿河するがを加封かほう。

かわじりひぜんのかみ
河尻肥前守には、甲斐の一部と諏訪郡を。

もりながよし
森長可には、信濃四郡を。

もうりひでより
毛利秀頼には、伊那郡を。

だんかげはる
団景春には、岩村城を。

森蘭丸には、兼山城を。

などの行賞が目立っていた。

いろいろ遠方から氣をつかつてくる北条氏政にたいしては、
なしじまきえ　ひとこし
梨地蒔絵の太刀一腰与えただけで、

「いずれ家督相続もいたさねばならぬな」

と、暗にそのときはそれを認めてやろうという程度の口吻を
もらしたに過ぎない。

みな信長の一心に出ることだ。恩賞の厚薄はぜひもない。甲州討入だけのものではなく平常の勤めぶりや首尾不首尾も加味されているものとみな解している。で、ここにも君側から離れずにある森蘭丸なども、ひそかに、

「このぶんでは、過去のことなど、すこしもわれらには御懸念もないらしい」

と、受賞のよろこびよりは、むしろ母の妙光尼のために、胸なでおろして、森一家の累進るいしんを、ひとり祝っていた。

「お兄上の長可ながよしどのにも、信濃四郡の封ほうを受けられ、まことにお覚えおぼのめでたいことで」

と、羨むうらや人々から祝辞をいわれても、以前のように、そう後ろ

めたい氣もしなかった。

祝宴の席でも、蘭丸の面おもてには、つつみきれない得意があふれて
いた。

信長から、於蘭おらん、ひとつ小舞こまいせい、といわれればすすんで舞い、
鼓つづみをせよと命じられれば、非常によい高音たかねをその掌たなごころから出して聞
かせた。

「きようは、惟任これとうどのにも、めずらしくお過しになられてみゆ
るの」

座中、どこかで、そんな会話が聞える。みると、諸大将のうち
に光秀も交じっていた。話しかけたのは、隣の滝川たきがわ一益かずますであ
った。

「酔わいで何としましょう」

光秀はまったくいつにない酒気に染まった顔をしている。信長から何かというときよくいわれる「きんか頭」のすこし禿^はげ上がった生え際^{はぎわ}まで赤くてらてらさせていた。

そして一益へ、

「一^{いっさん}盞^{さん}、いただきましたしょう」

と、杯を乞^こいながら、非常に明るい口吻でなおいった。

「長い人生にも、きょうのようなめでたい日に会うことは、そう幾度もありますまい。あれ、御覧^{ごらん}ぜられい。塙^{かき}の外はいうに及ばず、諏訪^{すわ}一帯は申すもおろか、年来われらの骨折^かつて来た効^{かい}あつて、いまや甲信すべてお味方の旌旗^{せいき}に埋まっているではありません

んか。多年の宿願が、眼のまえに、実現したのではおざらぬか……」

彼の声は、常のとおりで、さして大声でもなかったのに、ひどくそのことばは、一座によく通った。

なぜならば、ここかしこで、私語騷然^{しごそうぜん}としていた者が、いつとはなく口をつぐんで、

信長の顔と、光秀の方とを、見くらべていたからである。

信長の眼は、まっ直に、^{すぐ}光秀のきんか頭を見すえていたのであった。

余りに、ものの観^みえすぎる眼というものは、時によると、見出さなくてもいい不幸をも見つけ出す。なくてすむ禍^{わざわ}いもあるも

のにしてしまう。

光秀のきのうからの姿に、信長の眼は、そうしたものまで観^みとつていた。

常に似あわず光秀は、努めてことば多く明るく粧^{よそお}っている。

そんなはずはない。

と信長は観るのだった。

なぜならば、こんどの論功行賞には、意識的に、彼の名を除外してある。武人として、行賞にもれることは、事そのものよりは、功のない身をみずから辱^{はじ}ることのほうに、むしろ痛切な寂^{せきり}寥^{よう}がある。そのさびしさを、光秀はどこにもあらわしていないのだ。この人中では却^{かえ}って反対な笑顔^{えがお}や楽しいな会話にばかり立ち交じ

っている。

正直でない。いつわりだ。

どこまでも裸になれない漢。おとこ可愛げのないやつではある。

なぜ、愚痴のひとつも、こぼさないか。

——信長の眼は彼を見ていればいるほど、さつきからこうきびしくなっていた。酒気も手伝っていたろうが、無意識についそう観えてならないのである。

ここにはいないが。

秀吉を観る眼には、そういう感情をそそ唆られる危険はなかった。

家康を観るにしても、こうまで意地わるくはならない。

それが、光秀のきんか頭に接すると、むらむらと、眼のなかで、

ひとみが一変する。かつては、決して、こうでなかった。いつのまにとも覚えないう時の推移とともにこうなっていた。

この時、かかる事件から、こう遽にわかに変った、という変り方ではないのである。強しいてその一劃期をさがすならば、彼が光秀へ感謝するの余り、坂本城を与え、龜山の本城を持たせ、惟任これとうの姓をさづけ、むすめの嫁入りにまで世話をやき、逐次ちくじ、出世を追わせて、丹後五十余万石に封じたりなど、優遇を極めた——その優遇の翌日あしたあたりから——すこし彼の光秀にたいする眼は、前とちがつて来たことはたしかだといえよう。

それともう一つは、こればかりは、光秀自身にしても、どう改めようもないその風采ふうさい、人品などに、原因がある。いやしくも

事を処理して過あやまらない明めい晰せきなきんか頭の生はえ際ぎわの照りを見ると、
 信長の感情は、彼の性格的なにおいに向つて、ひどく天あまの邪鬼じやくな
 焦いらき氣が立つてくるのだつた。

だから、信長の意地悪な眼は信長から射向けるのではなく、光秀
 そのものが、自然そそに唆そりたてるのだともいえないことはない。そ
 れは、光秀の聡明な理性が何かに光るときほど、信長の天あまの邪鬼じやく
 が、言語や顔いろに現われるのを見ても分ることだつた。これを
 公平にふたつ合わせて鳴つた掌てはいつたい、右掌が先か、左掌が
 先か。そう第三者は見ていてもさしつかえない。

ともあれ、今。

滝川一益を相手にさりげなく話していた光秀のすがたへ、じつ

と注いでいた信長の眼は、すでに凡事ただごとと見えなかった。

光秀は、気がついた。——無意識に何かはつとしたらしい。なぜならば、信長が、とたんに席を起ったからである。

日向ひゆうが。これ、きんか頭

信長の足のつま先へ、光秀は面おもてを伏せて慎んでいた。と、その首すじを、冷ひややかな扇の骨が二つ三つ軽くたたいた。

「はッ。はい……」

光秀の面色は、その酔えいも、きんか頭の額ひたいの照りまでも、さつと褪あせて、土のように変じていた。

「座さがを退れ」

信長の扇は、彼の頸くびすじから離れたが廻廊を指して、なお剣の

如く見えた。

「何事か存じませぬが、御^みけしきを損^{そこな}い、光秀、恐^{きようく}懼身のおき場^{わきま}も弁えませぬ。どこが悪いと、お叱^いりくださいましょう。この場にて、お叱^いりくださるも厭^{いと}いませぬ」

詫^わび入りながらも、彼は、平伏したまま、身を^{すべ}にらせて、廻廊の広縁へさがった。

信長も、そこへ出た。

どうなることかと、満堂の人々は酔^{えい}をさまし、口腔^{くち}の乾く思いをじつと抱いていた。

——どたつと、その板の間に大きなひびきがしたので、わざと、気のどくな光秀のすがたから眼をそらしていた諸将も、はっ

として、室内からみな振り向いた。

扇は、信長のうしろへ、投げすてられてある。

見ると、信長は。

こんどは手ずから光秀の襟がみをつかんでおられる。そして何かいわんとする光秀にその余裕を与えず、ずずと圧おして、廻廊の欄干らんかんまで押し詰め、もがく頭を、ごつごつ欄干に小突こづいていた。

「——なんというた。日向ひゆうが。たった今、なんというたか。——

われら、骨折りたる効かいあつて、この甲州に織田家の兵馬が充満みちみちて見ゆるは、まことにめでたい日であるとな。——左様に申したであろうが」

「も、もうしました……」

「これッ」

「……あ」

「いつ、汝が骨折ったか。今日の甲州入りに、いかほどな殊勲しゆくんをなしたというのか」

「も、勿体ない」

「なに」

「光秀、いかにお祝酒に酔いましょうとも、なんで左様な、驕りおごがましきことばを」

「さもあるうず、そちに、驕り得る理由はない。したが心の油断というもの、信長が酒興にまぎれ、耳をそらしておると思うて、

つい不平を申したな」

「おそ おお畏れ多い。天地の神も御覧あれ。光秀、破衣孤劍はいこけんの身より、今

日の重恩ちようおんをいただきながら、なんとて」

「いな」

「お放してください」

「放してやる」

信長は突き退のけて、

「於蘭。水」

と、大声で呼んだ。

蘭丸が、器うつわに水をたたえて捧げた。その水を手にとる眸ひとみは火で

あつた。彼は彼自身の心火に燃やされて肩で息をしていたが、光

秀は、いつか主君の足もとを去ること七、八尺も向うに、襟えりを正し、髪をなでて、板敷に胸もつくばかり平伏していた。

「……………」

あくまで取り乱さないそのすがたが、なぜか好意に見えないのみか、信長の足をしてさらにそれへ歩ませようとさえしかけた。

「……あッ。もし」

蘭丸がたもとを抑えなければ、ふたたび広縁の床が鳴ったろう。蘭丸は多くをいわず、また眼の前のことに触れなかった。

「お席へおかえり下さいまし。信のぶただ忠様。信のぶずみ澄様。また丹羽にわど

のを始めとして諸将方、手もちぶさに、お控えでいらつしやいます」

信長は素直に、大勢のなかへ戻つて来た。けれども坐らなかつた。そのまま、座中を見まわして、

「ゆるせ、興きようざ醒めたことであろう。各は、存分に。存分に」
云い捨ててさつさと、奥の房へかくれてしまった。

客きやく来く一い味ちみ

土蔵どぞう長屋ひさしの廂つばくろに、燕つばきが、群れ鳴いている。陽の暮るるも知らず、
親燕は巢の中の雛ひなに、餌えを運びぬいているらしい。

「画題になりますかな」

ひろい中庭を隔てた住居の一室で、明智の老臣、
斎藤さいとう利三としみつ

が客にいう。

客は、海^{かい}北^{ほう}友^{ゆう}松^{しょう}という画人。この諏訪^{すわ}の人ではない。

五十前後か。画人ともみえない骨ぐみ。無口である。幾棟もある味噌^{みそ}屋^{やぐら}蔵の白壁が、そこだけを辺りの夕闇から暮れ残している。「いや、この戦時中、ふいにお訪ねして、世外人の悠長なはなしばかり……。おゆるし下さい。さだめし、御陣務も多かろうに」友松は、暇^{いとま}を告げるつもりらしく、長座したしとねを退^さがりかけた。

「まあ、よかろう」

斎藤^{くらのすけとしみつ}内蔵助利三は、おっとりしたものである。うごかず、ひきとめて、

「せつかく見えられたのに、光秀様に、お目にかからず帰られるなどという法はない。主君、お立帰りの後、お留守に、友松どのが見えまして申しあげたら、なぜ止めておかなかったかと、わしが叱られる。まず、まず……」

と、殊さらに、新しい話題を出して、このゆくりない来客をひきとめていた。

いま京都に家を持っているが、海北友松は、江^{ごうしゅう}州^{かただ}堅田の人。つまり光秀の領する坂本城の近くに生まれた^{ゆかり}由縁をもっている。のみならず友松は、以前、武人として、岐阜^{ぎふ}の斎藤家に^{ろくし}禄仕していたことがあるので、その頃から、内蔵助利三とは、よく知っていた。——利三も、明智家に属するまえは、斎藤一族のうちに

驍ぎょうめい名ある稲葉伊予守長通いなばいよのかみながみちに仕えていた時代があるからである。

友松が、浪人後、画人生活に入つて行つたのには、岐阜の滅亡という理由が進退を明らかにしているが、利三が、故主をすてて、明智家の家人けにんになつたことには、複雑な内容があり、旧主と光秀とのあいだに生じた葛藤かつとうを、信長のまえにまで持ち出して、裁さ決ばきを仰いだような、紛争もあつたりした。

しかしいまは、その当時、世間を騒がせた噂など、誰も忘れて、彼の真つ白な鬢髪びんぱつを見るものは、

（明智家にとつて、なくてならぬお人）

と、その重要な老職の位置と人がらとを、みな矛盾むじゆんなく尊敬

していた。

信長の本陣法養寺だけでは、宿舎の割当てがつかないため、一部の将は、諏訪の町家に分宿していた。

明智の一隊は、ここの旧い味噌問屋に屯し、兵も将も、数日來の戦勞から解かれてゐる今日であつた。

あるじ主の息子らしいのが来て、留守居の斎藤利三へいう。

「御家老さま。お風呂をお召しなさいませぬか。お士衆、足輕衆まで、はや夕餉の兵糧もおすみになりましたが」

「いやまだ、殿のお帰りもないうちは」

「殿様には、だいぶ晩ういらせられますな」

「きようはの、御本陣におかれては、戦勝の大宴じゃ。殿にも、

あまり参れぬ御酒をたんと戴いて、めでたさのあまり、酔を過しておらるるものとみゆる」

「では、お夕餉ゆうげなど、先へおすましなされては」

「いやいや、お戻りを見ぬうちは、食事も摂とりとうない。……したが、折角、引き留めたお客には氣のどくじや。客人だけを、湯殿へ案内してくれぬか」

「昼のうちお見えなされた旅の画師でございますか」

「そうじや。あれに蹲うずくまって、退屈そうに、独り牡丹畑ぼたんばたけの牡丹を見ておる。声をかけてやってくれ」

息子は退さがってゆく。そして隠居所の裏を見まわした。黒々と牡丹の叢咲むらざきしている前に、海北友松は、ぽつねんと、膝を抱いて、

眺め入っていた。

すこし後から斎藤利三としみつがその柴折門しおりもんから出て行つたとき、もう息子も友松もいなかった。

利三は、実はすこし気懸りになり出していた。主君の帰りが遅すぎる。祝賀の大宴なので、ずいぶん今日は盛会だろうし、長くもなろうとは察しられたが、

「……それにしても」

と、やや不安に似たものを覚え出していた。

旧い茅葺門かやぶきもんを出ると、道はすぐ湖畔の街道に出る。諏訪湖の

西空にはまだ残照が仄明ほのあかるい。内蔵助利三は、街道の彼方へし

ばらく眼をすましていた。

案じていたほどのこともない。やがて彼の主人はこなたへ向つて来る。馬、槍、従者などの一群を従えて。

けれど、その影が近づくにつれて、内蔵助利三の眉には、やはり不安に似たものが去らなかつた。なぜならば、どこか常とはちがう気がしたからである。

戦勝の祝宴から帰つて来たひとの姿とも見えないのである。颯^さ爽^{つそう}と馬上にゆられ、その従者たちも、きようは賜酒^{ししゅ}の酔に、華やいでいるはずなのに、悄^{しょうぜん}然^{ぜん}と、その光秀は、徒歩^{ちほ}で来る。

乗馬は、郎党に曳かせ、至極浮かないすがたで、歩いて来る後から、従者たちも、同様に、どこか冴えない空気をながして、黙々と、供して来るのだった。

「これまで、お迎えに出ておりました。おつかれにございませう」

利三が、前に屈むと、光秀は、なにか驚いたように、面おもてを向けて、

「利三か。……いや心ないことをした。儂わしが歸りの遅いのを案じていてくれたの。ゆるせ、ゆるせ。ちときようは御酒をいただき過ぎたゆえ、わざと酔を醒さまそうものと、湖畔を徒歩ひろうて戻つて来たのじゃ。顔いろが青いとて案じるなよ。気分もだいぶ快ようなつたし……」

何か御不快なことにお遭あいだつたとみえる。多年側近く仕えて
いる主人である。内蔵助利三くらのすけとしみつが見のがすはずはない。

けれど、敢えて、深くは問わなかった。ただ、いかにその気色けしきを慰めようかと、この老職は、その世に馴れ人に練られた心にくだいて、宿舎に入ると、主君光秀の身のまわりの世話までやっていた。

「いかがですか。あちらのお座所で、まず茶など一ぷくさしあげましょうか、それとも、お召めしかえのついでに、すぐお風呂をお浴あみあそばしますか」

戦場に立てば、驍ぎょうめい名敵を畏怖いふせしめるに足る猛将利三としみつが、小姓の手もからず、光秀の小袖から袴はかまをはく手助けまでしているのだった。光秀には、この老臣の、やさしい舅しゅうとこ御にも似ているいたわりがよく分っている。

「湯浴ゆあみか。……そうだの。こういうときは、一風呂浴びたらさだめし爽さわやかになるかもしれんな」

「そう遊ばしませ。御案内いたします」

利三は、いそいそ、先へ立つ。

風呂と聞いて、早速、次の間にいた小姓が、この家の息子やに告げにゆく。

紙燭ししよくを持って、息子は、宵の湯殿の入口に、うずくまっていた。

「田舎いなか風呂でござりまする。まことに、やぶせくて、諸事行き届きませぬが」

光秀は、息子の影へ、眼を落したが、黙ってそのまま湯殿へ入

る。小姓、利三がうしろに寄り添う。

しばらく、中で湯の音がしていた。利三が外から云った。

「殿。……お背中をおながしいたしましょうか」

光秀の声で、

「小姓がおろう。老体の手をかりては気がすまぬ」

「いえいえ」

利三は、入って行った。そして小桶こおけに湯を汲んで、うしろへまわった。かかる例ためしはないが、ここは戦陣の出先、また折ふし、きようは常ならぬ主人の顔いろ、何とかして、その気分を、一転させたいと願うのであるらしい。

「一方の将たる者に、垢あかなど落させては」

光秀はあくまで謙虚だった。家臣に対してもつねにこう遠慮気を示すのは光秀の特長でもあり短所でもあると、利三などは、むしろその性格の一面は余りよいとは考えていないほうであつた。

「何の何の。この老骨の武名などは、ききよう桔梗の御旗の下にあればこそで、明智家あつての内蔵助利三。利三あつての明智家ではございませぬ。さすれば、生きて御奉公しておるうちに、一度ぐらいは、わが君のお肌の垢など洗い流すことも、身の思い出と申すもので……」

利三は、はかま袴をからげ、かただすき片襷をかけて、彼の背を洗っていた。
ほのぐら灰暗い湯気と明りの中に、光秀は甘んじて、背を洗わしながら、首うなだれて、黙りこんでいた。

内蔵助利三が、自分に尽してくれる心入れを、そのまま、自分と信長との君臣のあいだに移して、ふかく自省しているのだった。

(ああ過^{あやま}てり)

光秀は心のうちで痛切に自分を責めた。何を不快としていつまで根に持って苦しんでいるか。信長ほどな良い主君を持ちながら、自分の忠節と情操とは、この一老職にも及んでいないではないか。ああ恥かしい。——彼はうしろから利三にザツとかけられた湯を、あだかも水のように心へ浴びた。

湯殿を出ると、光秀の気色^{けしき}も語音も変っていた。心気^{しんき}一^{いつ}爽^{そう}。利三もともに爽やかを覚えた。

「やはり一浴してよかった。悪酔ばかりでなく、疲れもあつたと

みえる」

「御気分が癒なおりましたか」

「内蔵助。もうよいぞ。そちも心を労つかうな。さばさばいたした」

「きょうのお顔色では、凡ただならぬ御不快と、実は、お案じいたし

ていましたが、なによりでございました。……では、お耳に入れ

ますが、お留守の間に、珍客が見えられて、お帰りをお待ちしておりまする」

「ほ。この戦場の仮宿へ、珍客とは」

「画師の海北友松どのが、ちようどこの甲州に旅しておられ、他は訪れぬまでも、殿にはちよつとでもお目通りして、御機嫌を問うて参りたいと、昼から来ておりました」

「どこにおるの」

「てまえの部屋と定められたあの隠居所に控えさせておきました」
 「そうか。ではそちの部屋へ参ろう」

「殿からお運び遊ばされては、客が恐縮いたしました。後より
 御前へ連れ参りまする」

「いやいや、客は一風流子、格式張るには及ばぬ」

おもや母屋の広間には、光秀のため、ていちょう鄭重な夜食が支度されてい

たが、彼は、内蔵助利三の部屋で、客の海北友松をまじ交え、至極簡
 素な夕食を共にした。

友松と会ってからの彼は、いよいよ明るい面おももちに返って、南
んそう宋ほう北宋の画風を問い、ひがしやまどの東山殿の好みと土佐の絵所の比較

を論じ、また近世の山楽などの狩野調かのうちようから和蘭陀絵オランダえの影響などにいたるまで、その方面にも日頃から浅からぬ修養のあるところを洩らして、ひいてはなお、

「自分も、老後にでもなったら、清閑をたのしみ、童学のむかしに返つて、絵でも描いてみたいと思う。そのうちに、ひとつ光秀のために、絵手本を描いておいてくれい」

などといった。

「かしこまりました。不つつかですが、ぜひ認したためて、お手許にさしあげましょう」

これは友松も心から欣よろこんでいうことのできる返辞だった。光秀のために、光秀の晩節は、ぜひともそういう所へ落着かせたい。

閑雅^{かんが}へ導きたい。穢^{けが}すことあらしめたくない——とは、昼もここ
くらのすけとしみつ
 で内蔵助利三としみじみ語り合つたことだからである。

友松は中国の梁^{りよう}楷^{かい}の画風^{なら}を倣^{なら}つて、狩野、土佐ともべつに、
 近頃、独自の一家の画境を開拓し、ようやく世人に認められて来
 ていたが、なぜか安土の襖^{ふすま}絵を信長から委^い嘱^{しよく}されたときには、
 病氣と云い立てて、乞^こいに応じなかつた。

信長に亡ぼされた斎藤家の遺臣たることを思えば、信長の居室
 の装飾に、その筆を用いることを潔^{いさぎよ}しとしなかつた彼の心事はわ
 かる気がする。

がいじゆうないごう
 外柔内剛

ということばは友松の人がらにそのままあてはま
 る。その友松なればこそ、光秀の聡明も理性も信じられなかつた

のである。この冷静や叡智えいちもひと足踏みすべ込らすと、いつなん時、常識の大河を決して、みずから濁流に身をまかせないとも限らない——およそ正反対なあぶな気を——この人も多分に持っていることを彼は平常からはらはらした眼で見ているのだった。

で。その光秀からこよい、絵手本でもと乞われると、それこそこの人の晩節まつとを完ゆえんうする所以ゆえんと考えられたのである。そして光秀自身も、ふかく自身のあぶな気に反省していることも分つて、何せよ、それは早速にも、画かいて上げねばなるまいと思われたことだつた。

光秀は、その晩、快眠した。

一浴のおかげであつた。また、思わぬ佳よい客のお蔭であつたと

思う。

暁――

兵はもう暗いうちから起きて、馬には草飼い、身には甲よろい、そして腰兵糧までつけて、主人の出るのを待っていた。今朝、法養寺に勢揃いし、諏訪すわを立って、甲府に向う。そしてさらに、東海道を経て、安土へ凱旋という予定。

「殿。はやお身支度も」

「おう内蔵助か。ゆうべは、よう眠ったぞ」

「それはおよろしゅうございました」

「立ち際に、友松へ、志ばかりと申して、路用の手当つかわなと遣すがよい」

「ところが、その友松どのは、今朝起きてみますと、もうおりませぬ。兵と共に起き出て、まだ夜も明けぬうち、一いちりゆういちじよう笠一杖の気軽さ、飄ひようこ乎として立ち去ったものとみえまする」

「さても氣がるな……」

と、光秀はつぶやきながら朝の空を見て、

「羨うらやむべき境涯ではある」

と、いった。

内蔵助利三は、その前へ一卷の画軸を展ひろげて、

「かような物を置き残してまいりました。忘れ物かと思いましたが、よく見ますと、まだ墨の痕あとも乾いておりませぬ。……思うに、昨夜殿からおたのみ遊ばした絵手本をすぐ思い立って、ゆうべあ

れから眠らずに朝まで画いていたものと考えられます」

「なに、寝ずに」

光秀は、画卷がかんのうえに、ひとみを落した。朝の光になおさら白い紙のなかに、みずみずと大輪の牡丹ぼたん一枝いつしが描かれていた。そしてその絵の肩に文字があつた、「無事ぶじ是貴人これきじん」と賛語さんごしてある。

「無事ぶじ是貴人これきじん」

口のうちに誦よみながらそこを巻いてゆくと、大きな蕪かぶら之の図えが繰り展のべられた。蕪の題語には、

客来きやくらい一味いちみ

と、ある。

何の苦心もなく一いち抹まつしたかのような墨画すみえの蕪かぶらであつたが、見

入っていると、土のにおいが鼻をつくばかり迫つて来る。大地の生命をそのまま一茎の葉とはちきれそうな根にもつた蕪の野性は、甚だしく無邪氣にまた屈託なく、光秀の理性を嗤わらっているかのようであつた。

「……………」

あとは、いくら繰り展ひろげても、何も描いてなかつた。余白のほうがかに多い。

「この二図で、夜が明けてしまったものとみえますな」

利三も絵は好きなので、共に頸くびをのぼして、鑑賞かんしょうしていた。

光秀には、その蕪が、見ているうちに、裸の嬰兒ちごが、手をひろげて、欠伸あくびしているように見えて来た。

美を見出すよりは、理を酌^くむような心理になつて来るのである。
光秀は、長く観^みていることを惧^{おそ}れた。

「内蔵助。巻いてくれ」

「お預り申しておきましょう」

そのとき遠くの空に貝の音が聞えた。本陣法養寺から市中の諸隊へ用意をうながしているのである。血戦の巷^{ちまた}に聞く貝はいんいと凄^{せい}愴^{そう}な余韻^{よゐん}をひいて何ともいえぬ凄味のあるものだが、かかる朝の貝の音はいかにもおおどかな悠々と寛^{くつろ}いだ気もちのするものであつた。

「いざ、寄場^{よりば}へゆこうか」

光秀もやがて馬上の人になつていた。今朝の彼の眉は、今朝の

甲斐^{かい}の山々のごとく、何の曇りも翳^{かざ}していなかった。

富士^{ふじ}を見つ

いちど富士を見たい。

それは信長が多年抱いていた願望だった。およそ、自己の欲することとして、能^{あた}わぬことのない信長に、いったいどんな私欲があつたかといえば、

(富士を見たい)

という恋であつた。

尾張に起つて、西へ西へと、その驥^{きそく}足を伸ばして来た信長は、

まったく、ことし四十九の今日まで、富士山を見ていなかった。

ながしの長篠までは出馬したが、富士の神容しんようには接していなかった

し、参州吉良まで鷹狩たかがりに出向いたこともあるが、ついで富嶽ふがく

の秀麗しゅうれいは仰いでいない。

(いつかは、いちど)

思いながら年々、北征南略、中央にある日も、劇務と人にかこまれて、そんな簡単な——他愛ない少年の希望にも似たことが——却って信長の心には長いあいだの憧憬あこがれとなっていた。

四月の四日。

信長はもう甲府にいた。

相模の北条氏政は、その居館へ、また使いを立てて、

「御滞陣のおなぐさみまでに」

と、武蔵野に狩^{かり}獵して獲たという雉^{きじ}子五百羽を贈つて来た。

それからまた、三日目には、目録に添えて、

馬十三頭

鷹三疋

とを献上して来たが、信長は躑^{つづじ}躑^{さき}ヶ崎^{やかた}の館の広庭に、それを曳かせ、一見しただけで、

「馬、鷹ともに、さして珍重するに足らぬ物。——信長の氣に入らぬと申して、氏政の許^{もと}へ持ち帰れ」

そういつて受取らなかつた。

北条の使いは、面目悪げに、持つて歸つた。そして、忌^{いまいま}々し

さの余り、誰もいないところへ来ると、

「増長坊め」

と、舌打鳴らした。

こんなこともあつたりして、信長はその月十日、いよいよ甲府を出発し、待望の「富士見物」をしながら凱旋がいせんの途についた。

彼の全軍が、甲府を出る朝の町々は、この盆地の城府がひらかれて以来の賑しんらいだつた。

いかに新羅三郎以来の家武田氏が、ひと頃の隆盛を極めた文化があつた所にせよ、中央の精兵と衛軍の豪美莊重な粧よそおいにはくらべようもない。かの馬揃えの天覧に、御簾ぎよれんのあたりの月卿げつけい雲客くくを驚嘆させ、三十余万の民衆の眼を奪つた絢爛けんらんに劣らな

い曠^{はれ}のいでたちが、この日も、信長とその前後の諸大将旗本をつんでいた。

後漢^{ごかん}のむかし、魏^ぎの曹操^{そうそう}が、西涼^{せいりょう}軍^{ぐん}の北夷^{へいゐ}の兵が自分らの行装に、おどろきの眼をみはって、指さし囁きあうのを見て、馬の上から、

（おまえ達は、何を驚き珍しがっているのか。この曹操とて、目はふたつ、鼻はひとつ、人並と何のかわりもない。変っているのは、知識深謀の才だけだ）

と、未開の西涼勢をからかいながら通ったというが、きょうの信長の面上にも、沿道の民衆にたいして、ややそれと似たような得意さがうかがわれた。

五彩の霧が行くように、せいぎ旌旗の列は、笛吹川にそうて下る。

やがて、川を越えて、えびぐち蛭口。——町屋はみな商いを休み、道

をきよ浄め、砂を掃き、領民はみな香をた焚かんばかりに軒下につつし

んで出迎えた。そしてここには徳川家の武士が大勢出て、警固や、

接待の事にあたっていた。

「このえ近衛どのが、お目にかかりたいと申しまするが」

この町へ入ったとき、一行の中にいたこのえさきひさ近衛前久が、旗本を通

じて、信長に面接を求めた。

前久は、龍山と号し、のぶただ近衛信尹の父にあたる。そしてだじよう太政

大臣の現職にある。

朝廷と武門のあいだにあつて近衛前久はよくうごいていた。武

門によつて下意を上達するうゑに都合のよい人でもあつたらしい。永祿四年といへば川中島の大戦のあつた年であるが、その夏も、彼は上杉謙信の乞いに応じて、上州うまやばし厩橋に会し、謙信の小田原攻めに従軍し、越後へも行つてゐる。

かんぱくうじのちようじや

関白氏長者ともある重臣が、軽々しく諸州を歩き、武将の陣門を出入りするので、室町むろまち幕府からも妙な眼で見られたらしい。京都へ帰るとまもなく職を削られ、前久自身は、失踪してしばらく行方を晦くらましていた。

その頃、嵯峨さがにかくれて、嵯峨記さがぎを書いたり、詩歌風月を友として、本来の公卿生活にもどつていたが、信長が出て、室町幕府を廃し、義昭よしあきを趁おうと、またいつか世間に出て、信長のため薩

摩に使いしたり、石山本願寺との交渉に出向いたり、そしてことし二月、太政大臣の重職を拝していた。

こんど甲州入りの役に従つて、信長の陣中にあつたのも、もちろん信長の乞いによるものでなく、前さきひさ久の望みであつたろう。信長としては現職の太政大臣などいう大たいひん賓は、わけて陣中、好まぬ荷もつだつたにちがいない。

——お目にかかりたい。

この前久からこう改めて云いよこしたので、信長は、彼の存在を急に思い出したような顔して、

「そうそう。まだこの中にいたか」

と、つぶやいた。

輿こしを降りて、近衛前久は、沓くつの運びも雅みやびやかに、長い軍列の遙か中ほどから此方こなたへ歩いて来た。

兵、旗本、諸將、みな最大の礼と静肅を姿勢にとつた。けれど信長は、馬から降りもしない。

「やあ」

と、鞍の下へ来た前久を至極あつさり迎えて、何か？ と問うような眼をみはった。

諸人環視の中なのに、その眼を見ると、前久は、つい要いらざることをしてしまった。馬上の人に対し、その無礼をとがめもせず、却つて自分のほうから笑顔えがおや会釈をして話しかけたことである。

「右府うふには、富士見物をしながら東海道を経て、安土へ御凱旋と

うけたまわるが、予も共々、同道してよかろうか。何のおさしずもなきまま、これまで軍に従ついて参りはしたが、いっこうわれらの身まわりは、かもうてくれる者もない」

待遇がおもしろくないらしい。不平を訴えに來たものだ。

信長は訊き直した。

「なに。何ですと？」

「いや、その、前さき久も右府と共に東海道を上のぼつてもよろしかろ

うと、念のため、聞きおくわけじやが」

「近衛このえ。わごりようなどは、木曾路きそじを廻まわつて歸かえられたがよかろう。

晴々しゅう凱旋する兵とともに、東海道をあるくはおかしかる。

まず、まず、木曾路を上りませ」

云い捨て、さつさと、先へ馬を進め、その日の宿舎へ入つてしまつた。

前久はとり残された。ぜひなく彼はかしわざか柏坂の麓から道をかえなかせんどうなかせんどう中山道へ廻つたが、このことは、だいぶ旅行中の評判になつた。ずっと後に書かれた「みかわごふどき三河後風土記」の筆者など、

——信長の粗暴さもあらん

などと記しているが、粗暴だけでいえることばではない。この性格があつてこそ頑固な旧態一掃もなし得たのである。しかし、このとき諸将の中にいた明智光秀などは、自分の心事にひきくらべて、近衛前久の立場を、ひどく気のどくに眺めていた。

あく翌る日は、すその裾野の本巢湖泊りもとすことまだった。

「冬のような」

と、信長をはじめ、行軍の将士はみな寒気におののいた。

前に、富嶽を仰ぎ、うしろに湖を見る落葉松林からまつばやしの中にすべて新しい木口の宿殿が建てられてあつた。

ここへ着いて、徳川家の将士の出迎えをうけ、本陣内の青畳の上に乗ると、信長はまず、

「行き届いたことよ」

と、道中から宿舎まで、隈なく心入れの行き渡っていることを、徳川家の家臣へ、褒めたたえた。

事実、こんどの事に、徳川家康が頭をつかっていることは、なみたいていなものではないらしい。何せい、信長のきげんをとり

結ぶのは難しい。まして、満足を感ぜしめるなどは、よほどでなければ求められない。

だから、きょう一日の道中を振り返つてみても、道の悪い所は、石を除き、樹を払い、橋はすべて新しく架けかえてあるし、山坂は土をならし、谷へ降りれば、谷間に茶亭さていが造られてあり、峰へ登れば、見晴しを計つて、お茶屋の設けが待ちうけ、彼処かしこでは、里の女が茶を献じ、ここでは思いもうけぬ美人が、山の物を料理し、風光を景物に、一献進いっこんしんじょう上のもてなしがあるなど、かりそめにも一日中の旅を飽かしめないように、あらゆる気心が配られていた。

北条氏政が、苦勞して、武蔵野の雉子きじや、相模さがみの名馬をあつめ、

これをうやうやしく献上に出ても、

(氣にいらぬ)

とばかり、目にも入れず突つ返したほどのな、大ざっぱかと思うと、道々の^{ほうぎ}箒の目にも、宿舎の手洗鉢にたたえてある水にも、真心があるかないか、ひと目で知つてしまふ信長の眼であつた。

もしこの行に、^{こう}秀吉が加わつていたら、家康のこの行届き方を眺めて、真に誠意の現われと^み観たか、これは喰えない^{くせもの}曲者と察したろうか。とにかく、信長なる一箇の氣むずかしやをして、こゝまで旅の日々を、日々 ^{にちにちこれこうじつ}是 好 日 として楽しませるなどという手腕も、決して尋常一様な人間のよくなし得る設計ではない。おそらくこの状況を、はるか中国の遠くにいて、便りに聞いただ

けでも、秀吉の胸中には、家康のすがたが、従来より一倍大きく
腹蔵ふくぞうに据え直されたにちがいない。その程度の想像は確かであ
るといつても過言にはならぬと思う。

夜は夜とて、酒肴しゅこうの善美、土地の名物、鄙びた郷土の舞曲ひなな
ど、数々のお伽とぎ。そして宿殿の外には、夜空も焦がす大篝火おおかがりびを
諸所に焚きつらね、

（侍どもが、かくまで、心をこめて、警固しておりますれば、か
りそめにも、御道中とて、御不安のないように）

と、彼の眠りの安らかなるようというところまで、少しの抜
かりもなく、徳川家の誠意を示していた。

夜もすがら篝火かがりびにいぶされていた墨の富士は、暁と共に、茜あかね

いろをうつ、信長が本巢湖もとすこを出立する頃は、飛ぶ雲すらない一天に、くつきりと白妙しろたえの全姿を見せて、その裾野すそのゆるやかに野へつづく果てまで、鮮あきらかな線を描いていた。

「めずらしい。実に、このように、富士が全姿を見せることは、一年のうちでも、極めて稀です。右府様の富士御見物に、山靈さんれい木花咲耶姫このはなさくやひめにも、雲をはらって、お迎え遊ばしているものと思われます」

徳川家の人々は、富士にも意こころがあるように、口々にきょうの快晴をたたえあつた。

「富士。富士」

信長は馬上で幾たびも子どものように讃嘆を發した。

見飽きぬ面持おももちで、

「見たか」

と、こじゆう扈従の人々へも、感動を求めた。

こういう会かいしん心なものに対しながら、やはり平常の如き理性をもつて、すこしも表に感激をあらわさない大人どもが、信長には、張りあいがない、飽きたらない。

ふと、彼は、

（秀吉がいたら）

と思つたが、また、

（いや、あれは何度も、見ているかもしれないな）
と、思い返した。

そんなことを考えながら何気なく振り向いた諸大将の列の中に、ちらと、日向守光秀の顔もあつた。

(……何だ、あの顔は)

彼のひとみは、翡翠かわせみが水底を覗いたのぞきのような、じつと、

光秀の面おもてを見ていた。

(彼。すこしも、今日の旅を楽しんでおらぬ。富士に対しても何の興めめもないらしい。法養寺のことを、まだくよくよしておるな。女々しいやつ)

思わず舌打ちが出た。自分が楽しもうとするとき、自分の眷けんぞ族くのなかに、ひとり楽しまぬものがあることを知ると、信長は、つつがない五体のなかに、ただ一本痛んでいる齒はみたいいに、氣に

かかつて、楽しむ心の邪魔になった。

——が、そのとき、彼の行くての先に、わあつという頗る大らかな喊かんせい声せいがきこえた。今朝、暗いうちに、道筋の先駆をして行つた小姓衆が、各、若駒にまたがって、裾野の広さを吾がもの顔に駈け廻り駈け廻り、責め馬しているのだつた。

「やりおるな」

信長はにことながめて、

「この広い天地へ出ては、魚のように、鳥のように、人も振舞いたくなるの。いで、予も一ひとむち鞭」

つぶやいていたかと思うと、信長は衝動的に、いきなり鞭打むちうちつて駈け出した。道案内の徳川家の諸臣、まわりの旗本、諸大将以

下、行軍のものすべてを置去りにして、ただ一騎、十方碧落じっぽうへきらくのうちへその影は、一羽の小鳥の如く溶けて行つた。

「あッ」

「あれ」

驚いた人々は、口をあいたまま、あつけにとられていたが、しかしまだ平常の謹直と、かみしも袴を着た気持から解かれることなく、

「駈け続きましょうか」

「いや、それも」

などと徒らいたずらにこの周章うろたえを周章えまいと自重していた。

兎でも追っていたか、あなたこなた彼方此方を、自然の児となつて、縦横に

跳びまわっていた騎馬の小姓衆は、どこかで、

「おおおいッ……」

と呼ぶ声に、ふと、眸をその方へ放つてみると、自分らの仲間とも思われぬ絢爛美衣けんらんびいの一貴人が、鞭をあげてさしまねきながら、裾野を横に駈けてゆく。

「あッ。良い馬だな」

「誰だろ」

「迅はやいはず。馬も良いはず。お上かみだッ」

「なに。御主君か」

天そらを翔かけてゆくような鞍のうえから、信長は此方こなたへ向つて、遠い声を張りあげていた。

「小姓ども、小姓ども。追いついてみよ。われと思うものはつづ

いて来い」

聞くやいな、小姓たちは、

「なにくそ。馬は劣つても、手綱たづなにかけては、負けるものか」

草埃くさぼこりを蹴たてて、われがちに、信長一騎を追いかけて行つ

た。

上野ヶ原、井手野、富士の裾野の平らかな限りを、駈けに駈け、狂いに狂いして、馬も信長も、汗みずくに濡れた。

「ああ、爽やか」

燃えたつ汗の気とともに信長は空を仰いで云った。甲州在陣中、何か生理的に鬱うっくつ屈くつしていたものが、はじめて発散したように快適を覚えた。風邪かぜ気の微熱が除かれたように軽々した。

彼のからだの汗が肌に冷えて来たころになって、ようやく小姓衆は追いついて来た。信長は愉快そうに笑つて、

「遅いぞ、遅いぞ。もし戦場であつたら、汝らは、今日、またとなき大将首を取り逃がしたであろう」

と、戯れた。

すると小姓の一人、湯浅甚介じんすけが、

「ですから、以後は、わたくしども小姓組うまやの厩うまやにも、名馬を多くお備えおき下さいませ」

と、臆面おくめんなくいった。

その云い分が氣になつたとみえて、信長は、

「よしよし。申し出た順に、まずこの馬は、甚介にくれる。乗り

負けするな」

と、すぐ鞍を降りて、手ずから馬の口輪を甚介に渡した。

甚介も、朋輩ほうばいも、眼をまろくした。そこへ、厩中うまやちゆうげん間の

虎若とらわか、藤九郎、弥六、小熊、彦一などが大汗かいて駈けつけて

来る。

ほどなく蘭丸も追いつき、その他の近習も寄つて来た。

徳川家の士が、

「近くに、お茶屋の設けもございますゆえ、御休息遊ばして」
と、導いてゆく。

そこまで、信長は歩いた。

「汗におよぐれの御容子ごようす。お湯殿でおぬぐい遊ばして、御服ぎよふくを

召しかえられますように」

「風呂の用意もあるか」

「日中はおおかた御不用とはぞんじましたが、いつどこにても、お汗を洗うほどの設備はいたしおきました」

「さてさて、入念な」

徳川家の好遇には、不足を思うときがなかった。

湯を浴み^あ、衣服をあらため、ここで一^{いっこん}献を酌む。

そのあいだに、将士はみな弁当をつかう。徳川家から足輕のはしにまで、茶菓が頒^わたれる。

やがて出立。富士の人穴見物にゆく。

ここにも、お茶屋があり、一献進上となる。

ところへ、大宮神社の神官、社僧などが、大勢して、出迎えに見えた。信長は、

「みな、大儀だな。道の掃除まで行き届いたことに思う」

と、ねぎら犒つて、それぞれへ、杯を与えた。

神官達の案内で、よりと頼朝のかりくら狩倉のあとをただ質し、白糸の滝を見

物し、また、しばしうきしま浮島はらヶ原に馬を立てて、うすず春く富士にわか

れを告げながら、やがて大宮のしゆくえき宿駅へさしてこの行軍はゆる

やかに流れていた。

部落部落は、かがり篝火を焚いていた。高いところから見るとゆうがすみ夕霞

が赤く虹のように地を染めていた。山家の人々がいかに驚嘆したろうか想像も及ばないほどだったにちがいないが、信長の眼には

何里行つても掃き^{きよ}めた道の砂と、とざした草屋しか見えなかつた。

だが、一步大宮に入ると、軒^{のき}ごとに万^{まん}燈^{とう}をともし、幕をもつて壁をかこい、花を挿^いけ、金屏風^{きんびょうぶ}をすえ、人はみな晴衣^{はれぎ}を着て、町中、大祭のような賑いであつた。

それに、徳川家康は、自身、譜代^{ふだい}の家臣とともに、この大宮に待ちあわせて信長の迎えに出ていた。信長一行がここへ着いたのは、もうとつぷり暮れた宵であつたが、その明るさは昼をあざむくばかりだつた。

とうかいふうりゅうじん
東海風流陣

その夜の泊りは、大宮神社の社内だった。本殿、拝殿をのぞく以外は、すべて信長一行のために、旅舎として宛がわれた。

わけでも、信長の座所は、金銀珠簾しゅれんの結構をつくし、彼が一夜の休息のために、すべて新たに普請ふしんしたものと思われる。

とりわけ警固には万全を策した用意が窺うかがわれる。四方には木小屋を設け、信長の直属の旗本を配し、また三河武士の隊を、随所の木戸に置いて、座所にはいささかの不安も感ぜしめない。

「信長にたいし、かくまで、心を用いられ、御誠意のほど、奇特に存ずる」

容易に、満足を満足といわない信長も、その夜、家康の心から

の歓待には、こういわずにいられなかった。

「——それにひきかえ、北条氏政の仕方は、心のそこが見え透いておる。甲府から大宮までの道すがらにも、随所に氏政の手勢が働き様は、この眼で確しかと見て参った。かくせぬものは、人の心のまことうそと真」

信長は酔後について胸中の不満をもらした。

こんどの甲州入りには、徳川家も北条家も、ともに兵を出して、信長を扶たすけることになっていたが、北条勢の働いたのは、この大宮近傍から裾野の寒村あたりを焼き払っただけで、さして重要な所には少しも、戦果を挙げていないのである。要するに、真実を示していない。そして献上物や口先だけで、信長の歡心を取り結

ぼうとしたのだった。

が、そんな辞令や尋常な形式でごまかされる信長ではない。北条家からの献上の馬匹を、

（氣に入らぬ）

と突っ返したのは、すでに無言の表示だった。

今頃は定めし北条氏政も内心安からぬものを抱いていよう。信長の近習たちは、こんどの経過と、信長の口吻くちぶりから見て、そんな想像を持つのだった。

「夜も更ふけました。それに日ごと、山坂の御旅、おつかれにございましょう。いずれまた明朝」

家康は、頃をはかつて、退席しかけた。すると、信長は、蘭丸

に告げて、

「申しつけておいた品々を、徳川殿へ披露申せ」

と、いった。

蘭丸から目録をわたした。信長の嘉賞かしやうをあらわした礼物の品である。

一 おんわきざしよしみつのさく
御脇差吉光之作

一 おんなぎななくもんじ
御長刀作一文字

一 おんうまくろ
御馬黒ぶち

家康は篤あつく礼をのべて退った。名馬黒ぶちは、信長が常に離さ

ず伴つれている愛馬である。馬好きな信長としては何物にもかえ難
かろうに、それをしも割愛かつあいして贈ったのは、誠意にたいして誠

意を見せたものであろう。家康もまた、心ひそかに、満足を抱いた。

誂詐けつさけんぼう権謀を常道としているこの戦国に、二十年来、あざむかず、またあざむかれず、同盟のよしみを持ちつづけて来たものは、決して双方の利害だけによるものではない。信長も真実は知る人だった。家康も真実を尽した。氏政のようなごまかしをもつてこの動流変貌の烈しいときを渡ろうとするような、あぶない芸当はする気もなかった。

明ければ、十三日。

信長は、ふつぎよう弘ふつぎよう暁すでに、大宮を立つて、浮島ケ原から愛鷹あしたか山やまを左に見て進んでいた。旅行中も、寝るにはおそ晩く、起きるに

は夙^{はや}い信長だった。朝の食事嗽^{うが}いなどは暗いうちにすまし、宿舎を立ててから、一、二里も行つた頃、ようやく、日の出を見るのが、ほとんど毎朝の例であつた。

日々の行軍、日々の風流は、このときも随行していた信長の祐^ゆ筆^{うひつ}太田牛一が、その「信長公記」に克明に書いている。却つてその原文に見るほうが、髻^{ほうふつ}髻と当時を偲^{しの}ばしめるものがある。

四月十三日。払曉二大宮ヲ立タセラレ、愛鷹山ヲ左ニ御覽ジ、富士川ヲ乗越サセラレ、蒲^{カンバラ}原ニ御茶屋ヲ構へ、一献進上候也。

ココニ暫シ御馬ヲ立テラレ、吹^{フキアゲ}上ノ松、和歌ノ宮ノ仔細ナド御訊ネナサレ、向フ地ハ伊豆ノ浦^{メラ}目羅^{サキ}ヶ崎力ナドツラツラ

聞キ及バセラレ候。

高国寺、吉原、三枚橋、伊豆相模ノ境^{サカヒメ}目ニアル城ナドニモ、
 何カト訊^{タダ}ネ質シ給ヒ、由井ノ磯^{ユキ}浪袖ヌレテ、ココニ興津ノ^{イソナミソデ}
 白浪や、田子ノ浦浜、三保ヶ崎、三保ノ松原羽衣^{ハゴロモ}ノ名所名
 所ニ御心ヲツケラレ、江尻ノ南、久能^{クノウ}ノ城、御尋ネナサレテ、
 ソノ日ハ江尻ノ城ニ御泊。

天候は毎日よかった。

十日の夜、裾野の宿で、夜雨の音を聞いただけであつた。

本巢湖^{もとすこ}では、初時^{はつほととぎす}鳥を聞いた。この夜、江尻の城でも聞い

た。

「夏も近いな」

信長はつぶやいた。

新緑を思い、近づく夏を思うにつけ、心のなかに、何かもう次の事業の段階に、忙^{せわ}しいものが駆けめぐっている。

次の段階。もちろんそれは中国攻略への決定的な方策でなくてはならない。

——秀吉は如何に。

初時鳥の音に抱く彼の感慨は、詩でも歌でもなく、それであつた。

彼に、詩はない。しかし、彼のいまなしている日々のことは、そのまま大なる長^{ちようふ}賦の詩であつた。

四月十四日。夜ノ間二江尻ヲ立タセラレ、駿河府中二御茶屋^{オチヤヤ}

タテオキ
立置、一献進上申サル。

今川ノ古跡、千本桜ナド詳シク尋ネ聞シメサレ、阿倍川ヲ越

エ給ヒ、武田四郎勝頼ガ此地ニカカラレ候折ノ持舟ノ城ト

イフヲ問ハセラル。又、山中路次通り、鞠子ノ川端ニ山城

ヲ拵ヘ、防ギノ一城有。

名ニシオフ宇治ノ山辺ノ坂口ニ、御屋形ヲ立、ココニテ一献

進上。花沢ノ古城、コレハ昔、小笠原肥前ガタテ籠リシ折、

武田信玄、コノ城ヘ取懸リ、人数多討タセ、勝利ヲ失ヒシ

城也。

山崎ニハ虚空蔵マシマス。能ク尋ネ訊カセラレテ、ソノ日

ハ田中ノ城ニ御泊。

次の日の日誌を見ても、

十五日。田中、未明二御出立。

とある。

ほとんど毎朝、暗いうちの早立だった。

大井川は、馬で渉^{わた}った。

それも家康の心くばりで、万一があつてはならぬと、川の下に何百人という人間を並べ、その人垣の間を信長の馬が涉って行く。

大天龍には船橋が架けられてあつた。やがて浜松に入る。浜松は家康の居城ではあり、同盟国の城下なので、その歓迎には、領民もあげて祝意を表し、待遇も馳走も、善尽し美尽したものだっ

た。

次の日。吉田泊り。

吉田城の酒井忠次に送られて、池鯉鮒ちりふから鳴海なるみへ入った。これまでが徳川領、鳴海から先は織田領なので、ここには織田家の一門が凱旋の主君を出迎えに立っていた。で、徳川家の諸臣は、ようやくその大任を終って、各、ほっとした面持おももちで引つ返した。鳴海から清洲きよすへの道。それは十九日の旅だった。

この道、そこらの河、田畑、まろい山、麓わらやねの藁屋根、信長のひとみは、飽かず馬上から見まわしていた。

「変らぬものよ。……はや二十三年と経つに」

思い出は尽きない。永禄三年、時も今頃。

桶狭間おけはざまへ。桶狭間へ。

あの真昼、汗と土けむりをあげて、駈け出して行つた自分のすがたを。

「……若かつたなあ」

さしもの彼も、今にして顧みれば、自分の元氣にわれながら驚嘆を禁じ得ない。

よくもあれで勝てたと思う。まんまと今川よしもと義元の首を見るこ
とができたと思う。

いま沁しみ々、それを回顧すると、

（はて？ あれは一体、自分のしたことか。自分だけの力だったか）

と、あやしまれた。

ふと彼は、自己の驕慢きょうまんに気づいていた。天を怖れた。そう

だ、以来わずか二十三年に、これほどの業を成して来たのは、ただに自分だけの力ではない。またわが将士だけの力でもない。

大きくは、神明の加護、小さくは、父母の余徳を思つた。それあつての織田信長なるを今、みずからふかく考えた。

あつたのみや
熱田之宮に下馬して、口を嗽うがいし手を清め、まずは神前に額ぬかずいた。

その夜の泊りは、なつかしの清洲きよすであつた。

ふるさと
故郷。

実に、はからずも、彼はこよいを、故郷にすごすのだった。

——後に思いあわせれば、これこそ、産土うぶすなの導きか、尽きせぬ宿縁か、それとも天が不言のうち、彼の人生の名残を尽させたものだろうか。

こよい四月十九日から、わずか四十余日の後には、本能寺の猛火の中に、その肉体を一いっかい塊の灰となしていた信長だったのである。

知らない。知るよしもない。それから四十余日後の身の運命など、もとよりこのときの信長が、思い寄るわけもない。

だが、あだかも彼の霊は、すでにその時からそれを予知していたように、清洲の城のおくつきに詣では、久しぶりに父信秀のぶひでの墓前を掃き、そこから暮靄ぼあい遠く、政秀寺の方を眺めては、

「ああ、爺じいがいたら」

と、信長の眼に、うたた回顧ひらてなかつかさまさひでを起させていた。

まだ少年の頃、老臣の平手中務政秀は、手にもおえぬ少年信長を諫いさめるため、老腹おいばらを切つて死んだ。——信長の父信秀から、

（たのむぞ）

といわれた生前の一言を、ついに死をもつて尽したのである。

この老臣のことだけは、信長も一生胆きもに沁みこんでいたとみえ、何かよいことがあるとかならず、

（爺じいがいたら……）

と、よく口にもらしていた。

その供養に建てた政秀寺はここから近い。清洲の城から信長は今こそ、爺や、安心してくれよと、胸のうちで云っていたにちがいない。

政秀ばかりではない。その老臣に、懇々こんこん、亡きあとを頼んで逝いった信長の父も、おそらくは、

（あれが、成人しても、この清洲一城が、無事に保つてゆければよいが）

と、いまわの際きわまで、案じていたにちがいない。そしてその信長が、今日の如くあろうとは、夢にも思っていなかったであろう。二十日は、岐阜ぎふに着く。

稲葉山の新緑に、また、ここは信忠の城でもあるし、信長はも

うわが家に帰ったようなこことである。

だが、翌朝は、また早立。

ろくろの渡しでは、お座船ざふね飾りして、稲葉伊予いなばいよが、船中で一ちこん献進上する。

垂井たるいでは、ここにも休息の屋形をしつらえて、犬山の御坊——
 去年武田家の質子ちしから送り帰された信長の末子が——待ちもうけ、
 やはり一献進上の儀があり、今洲いますでも、佐和山さわやまでも、山崎でも、
 ほとんど一駅一駅に、茶屋屋形の設備と、織田領下の各臣が出迎
 えに出ていた。

その人々には。

丹羽五郎左衛門、山崎源太左衛門、不破彦三ふわ、菅屋九右衛門すがやな

どがある。

湖畔に出ると、近くの長浜城から、羽柴家の臣が、秀吉の留守とて、名代に出ていた。

「筑前の老母は息災か」
そくさい

と、信長はそれらの者に訊ね、振り顧つて、長浜の城を見ていた。

こうしていよいよ彼が安土へ着いたのは、黄昏れ早めの時刻であつたが、城下全体はこの日挙げて商いも休み、朝から凱旋軍の歓迎にあらゆる心をくだいていた。

さすがに、信長の騎馬、幕将たちが、城門に入るまでは、静粛、拝伏、ただ夕空に雲の紅々あかあかと燃ゆるのみだったが、長い長い軍

隊の列も、ようやく終りになろうとし、陽も没して、夜の灯火ともしびがつきかけるや、わあつと、どこからとなく沸きあがった歓呼から歓呼の波を喚よんで、そのまま街中は灯と踊りと酒と歌と音楽のるっぽ増埒ふさになった。

「城下は、たいへんな騒ぎらしいのう。踊っているな。踊っているな」

信長は、湯殿のうちに、旅の垢あかをながしながら、街の光景を、想像していた。

踊りの歌声や、それにつれる笛太鼓、鉦かねの音までが、お湯殿まで聞えてくる。

「夜食は、おおぎよう大仰おほぎようにすな」

湯からあがると、近習へいいわたししていた。十一日間の旅行中、いたるところの馳走攻めに、さすがの彼も、湯漬ゆづけに梅干一つぐらいな味が恋しかった。

さらさらと、それを一、二碗すますと、すぐであつた。

「信のぶ孝たかを通せ」

と、すぐ座をあらためていた。

神戸三七信のぶ孝たかが来てひかえていたのである。信孝は、四国攻

めの陣に派遣を命ぜられたので、人数その他のさしずを仰ぎ次第、直ちに出發するつもりで、これへ見えたものだった。

夕刻、城中に入ってから、まだ二ふた刻ときとも経っていないまに、

もう信長は、四国征伐の方策に没頭していた。

「征^いつて参ります」

三七信孝が退^{さが}ると、

「留守中の文書を出せ」

と、それを見る。

多くは、陣中でも見ていたが、なお残余の書状やら何かの文書は山のようにつかえていた。

とりわけ、彼の重大な関心は、中国陣に関するものだった。

これも、刻々甲州在陣中から、報告は手にしていたが、二月九日以来、征^{せいりよ}旅まさに七十日、そのあいだの状況の推移は、信長の予測をやや裏切つて、どうも捗^{はかばか}々しくない感がある。

静止を知らない彼の精力は、久しぶりに還^{かえ}つて、安土に坐ると、

そこに寛^{くつろ}ぐ心地にはならないで、忽ち、次の段階に対して、いかに戦うか、必勝を期すか、思索^{くぎん}苦吟、寝ても枕を耳に熱うしていた。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（六）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年6月11日第1刷発行

2010（平成22）年6月1日第20刷発行

初出：太閤記「読売新聞」

1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日

続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙

1949（昭和24）年

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2015年9月1日作成

2015年11月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第六分冊

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>